アドルフ・ヒトラー

続・わが闘争

生存圏と領土問題

角川文庫

Vorwort.

Im August 1925 legte ich anläßlich der Niederschrift des 2.Bandes ( Mein Kampf) in der durch die Verhältnisse gebotenen Kürze die Grundgedanken einer nationalsozialistischen deutschen Aussenpolitik nieder.Im Rahmen dieser Arbeit behandelte ich besonders das Südtiroler Problem,das für die Bewegung der Anlaß ebenso heftiger wie unmotivierter Angriffe war.Im Jahre 1926 sah ich mich gezwungen, diesen Teil des 2.Bandes als Sonderdruck erscheinen zu lassen. Ich glaubte nicht,dadurch jene Gegner zu bekehren,die in der Südtiroler Hetze ein erwünschtes Mittel des Kampfes gegen die verhasste nationalsoz.Bewegung überhaupt sahen. Diese Menschen können nicht eines Besseren belehrt werden,weil für sie nicht die Frage Wahrheit oder Irrtum, Recht oder Unrecht überhaupt eine Rolle spielt. Sowie eine Angelegenheit geeignet erscheint,für ihre zum Teil parteipolitischen,zum Teil sogar höchst persönlichen Interessen verwendet zu werden,scheidet für diese Menschen die Wahrhaftigkeit oder Richtigkeit einer solchen Sache vollständig aus. Dies ist umso mehr der Fall,wenn dadurch einer allgemeinen Erhebung unseres Volkes Abbruch getan werden kann. Denn die Männer der Vernichtung Deutschlands aus der Zeit des Zusammenbruchs sind seine heutigen Regenten und ihre Gesinnung von damals hat sich bis jetzt in nichts geändert.So wie sie damals kalten Herzens um parteidoktrinärer Vorstellungen oder eigener Vorteile wegen Deutschland opferten,so hassen sie heute jeden,der ihren Interessen widerspricht und mag er auch tausendmal alle Gründe eines deutschen Wiederaufstiegs für sich haben. Ja noch mehr , So wie sie glauben,eine Wiedererhebung unseres Volkes durch einen bestimmten Namen vertreten zu sehen,pflegen sie gegen alles Stellung zu nehmen,was von einem solchen Namen ausgehen könnte. Die nützlichsten Vorschläge,ja selbstverständliche Anregungen werden dann boykottiert,einfach nur deshalb,

アメリカの国立公文書館に保管されている"HITLER MANUSCRIPT"のマイクロフィルム(左)とそこに記録されている口述タイプ原稿(上は「序言」のページ)。本書は一次資料であるこのフィルムをもとに翻訳した。

ets so wählen, daß de
l. Denn man macht nich
darf
dern man muß nur manc
laß ein Volk leben kan

原稿にはタイピストによる訂正が多く残されているが、下拡大図は、ヒトラー自ら手書きで修正した唯一の箇所である(第1章参照)。

1938年9月29日ミュンヘンで行なわれた英仏独伊の四か国会談でヒトラーと握手をかわすイギリス首相チェンバレン。彼の宥和政策がヒトラーの戦意を高めた。

ニュルンベルクでの集会の初日のパレードを
観閲するヒトラー（1930年代）。


ベルリンの外でとられたヒトラーの最後の写真といわれるもの（1945年）。

総統官邸の瓦礫の中のヒトラー。生前の最後の写真といわれている。

1944年7月20日の暗殺未遂事件の爆発により血が飛び散った、ヒトラーのものとされる軍服。

# 続・わが闘争

## 生存圏と領土問題

アドルフ・ヒトラー
平野一郎=訳

角川文庫 13433

# 続・わが闘争　生存圏と領土問題　目次

# 凡例

一、草稿には書名は書かれていない。また章の始まりと終わりも明確でない。訳書名はヴァインベルク版（以下、W版と記す）および英訳版を参考にして訳者が決め、行の中央にハイフン列がタイプされている箇所を章の終わりとした。章のタイトルは、章の内容を顧慮して、訳者が付したものである。ただし「序言」だけは記されている。さらに本文中には行の途中で文章が終わり、その行の残りは空白であり、次行で字落ちされていない場合がある。そのような箇所では、本訳書では文脈を勘案して、新しいパラグラフを開始した。本訳書のパラグラフはW版とは異なっている場合もある。

二、草稿にはドイツの正書法に従った表記がなされていない単語がある。意味不明の外国語が使用されている箇所もある。そのような場合には、W版および英訳版を参考に訳出した。

三、訳文は草稿原文に忠実を期した。しかし原文のままでは訳文があまりにも生硬になったり、日本語として理解しにくい部分では、意訳したり、原文にない表現を加えたりして表現を和らげた。そのために訳語の選択において角川文庫版の『わが闘争』（平野一郎・将積茂訳）とは異なっている場合がある。

四、固有名詞の表記については、日本の読者になじんでいるものはそれに従った。他は各言語での発音にできるだけ忠実に表記した。

五、訳注は全て巻末に記した。

# 訳者序

本訳書はワシントンにあるアメリカ国立公文書館（National Archives）の「第二次世界大戦記録部門」（World War II Record Division）の「ドイツ」資料中にある「アドルフ・ヒトラー」のマイクロフィルム（整理番号 105/40）におさめられている三百二十四頁の未編集原稿（原稿名 HITLER MANUSCRIPT　以下「草稿」と記す）の全訳である。

本訳書が依拠した「草稿」および本訳書の編集について、若干の説明を加える。

草稿（マイクロフィルム）には次の英文の書類が添付されている。

「ミュンヘン　　目標番号　五八九

国家社会主義ドイツ労働者党中央出版局　　順位　三

ティールシュ通り　十一番地

注

一、本文書は補足報告である。ミュンヘン市ショイプナー・リヒター通り三十五番地在住の、党出版局前技術部長ヨーゼフ・ベルク氏がわれわれにいわゆるアドルフ・ヒトラー未刊文書原稿を提出した。当草稿は十五年以上前に作成され、金庫に保管されていた。ベルク氏は草稿を刊行したり、あるいは何人にも見せたりしないようにと厳命されていた。ベルク氏は当草稿に関して追加情報を述べる用意がある。

二、ベルク氏はさらに、出版局の書籍用緊急事態倉庫がアイヒシュテット近郊のヴィリバルツブルクに用意してあると述べた。

ポール・M・リーク

通信隊　陸軍大尉」

この添付書類に先立つ報告は発見されていない。国家社会主義ドイツ労働者党（ナチ）の中央出版局で書籍出版部を任されていたヨーゼフ・ベルクが一九四五年五月にこの補足報告をアメリカ軍将校に渡した。ベルクは、この文書は十五年以上前のヒトラーの著作であると明言した。この文書が押収された後にイギリス当局のために、この文書のマイクロフィルムが作成さ

れた。オリジナル文書は、他の文書とともにアメリカ合衆国に運ばれた。このマイクロフィルムが合衆国国立公文書館に保管されるに至った経緯は明らかでない。一九五一年頃から、ヒトラーの「ドイツ外交政策論」の原稿が残されている、という噂が流れ始めた。当時、調査をした研究者もいたが、発見されなかった。一九五八年夏、当時ミシガン大学歴史学準教授だったゲアハルト・ヴァインベルク博士がこの文書を確認し、一九六一年に『ヒトラーの第二の書　一九二八年の文書』と題して出版した（Gerhard　L.Weinberg (Hrsg.) :Hitlers Zweites Buch. Ein Dokument aus dem Jahr 1928. Quellen und Darstellungen zur Zeitgeschichte. Bd.7. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart 1961. 本訳書ではこれを「W版」と表記する)。W版には詳しい解説が付されている。その解説は草稿の理解には欠かせない。

編者のヴァインベルクは解説を執筆しただけでなく、草稿に補足を加えて読みやすくしている。例えば第七章の冒頭に「オリンピックの月桂冠をいくばくかはのっけられるわけだ」と訳した部分がある。この部分は草稿では「オリンピックをいくばくかはのっけられるわけだ」となっている。草稿のままでは理解しにくい。W版は「の月桂冠」を補足している。このように、明らかにW版の補足が妥当と判断される場合には、本訳書ではW版を参考にした。

草稿では一旦（いったん）タイプした単語や表現をハイフンで消した箇所があり、ハイフンで消した後に

別の単語や表現で書き直している箇所もある。例えば本訳書百二十頁に「一方は冷徹な合目的性を」と訳した部分がある。その部分は草稿では「一方は合目的理性を」と書き、「合目的理性」を消して訳のように書き直している。本訳書では、このような場合には、書き直した単語や表現に従って訳出してある。

W版では章の区分に編者の恣意性が認められる。あるところでは行全体にハイフンのみがタイプされている箇所を章の終わりと判断し、ある箇所では内容によって区分している。各章の分量のバランスを取るための対応と推測されるし、オリジナルの文言を勘案すれば、あながち根拠を欠いた編集上の暴挙とは言い切れない。しかし本訳書は、訳の原本が草稿である事実を尊重して、W版の章分けに従わず、ハイフンのみがタイプされている箇所を章の最後と判断した。それによって本訳書は各章の分量においてバランスを欠いているが、この処理は読者にも理解していただけると考えている。

二〇〇三年秋、W版の英訳が出版された（Krista Smith〔transl.〕:Hitler's Second Book. The Unpublished Sequel to Mein Kampf. Enigma Books, New York, 2003. 本訳書ではこれを「英訳書」と表記する）。この英訳書にはゲアハルト・ヴァインベルクが「序言」を寄せている。この英訳のためにヴァインベルクが改めて草稿を検討しており、スミスに提示した判

断がこの英訳に生かされているそうである。

W版には相当数の注が付されているが、英訳には英語圏の現在の読者の理解を深めるために、一般的な事項にも、またW版出版以降のナチズム研究書に基づく学術上の資料紹介のためにも、W版の数倍のもの注が付されている。本訳書では日本の平均的な読者を想定し、W版や英訳書の注を参照しながら訳注を付した。その中にはW版および英訳書の注にもとづいているものが多く、特に統計上の数値や記述に関してはほとんどW版や英訳書に負っている。

英訳者のスミスは、本書が「二十世紀の重要な人物の考えと性格を」知る手助けになるとしたうえで、原文に忠実な英訳と英語圏の読者に理解可能な訳文との間のバランスをとるのが困難であったが、当英訳はヨーロッパと世界の歴史にとって極めて重要であった時代の理解に寄与できるだろう、とその「訳者序」を結んでいる。また英訳書の序言を書いたヴァインベルクはW版出版の二年後フランスで翻訳書が出たことを挙げ、さらに「多くの点でW版の戯作的模倣」とイギリスの評論家O・J・ヘールが一九六二年出版の"Hitler's Secret Book, introduced by T. Taylor, translated by Salvator Attanasio :New York, Grove, 1962" について述べ「その翻訳はほとんど容認できず、軽率の徴候を示している」と批判していることを紹介している。最近テイラー解説のこの問題のある英訳書の邦訳が出版された。『ヒトラー第二の書』(テイラー解説、立木勝訳、戎甲書房)がそれである。

なお、本草稿の特質やヒトラーの著書、ヒトラーに関する研究書などについては「あとがき」を参照していただきたい。

草稿にはドイツ語圏、英語圏の研究者も解釈に迷う単語や表現が散見される。文体も複雑である。本訳書では正確で容易に分かる日本文に訳そうとしたが、なお妥当でない表現や誤解があるかとも思う。また、現代日本では不適切な表現も多く見られるが時代性と資料性に鑑(かんが)み、あえてそのまま訳出した。読者のご批判をいただきたい。

二〇〇四年七月

訳　者

# 序言



一九二五年八月（『わが闘争』）第二巻作成を機に、私は諸事情に合致した簡潔さで、国家社会主義のドイツの外交政策の基本思想を記した。そこでは特に、運動にとって激しくもあり、いわれのない攻撃の契機となっている南ティロール問題を論じた。一九二六年には、第二巻のこの部分を別冊として出版するのを余儀なくされていると考えていた。南ティロール問題を煽り立てて、そもそもからして好ましからざる国家社会主義運動に対する闘争の望ましい手段として利用しようとしていた敵対者の考えを、それによって変えさせようとは私は考えていなかった。これらの人々にとっては、真実か誤っているか、正当か不当であるか、という問題は、およそ何の意味も持っていないのであるから、彼らに誤りを承認させるのは不可能だ。ある問題が彼らの、部分的には党派政治的な、部分的には極めて個人的な利益に利用できると分かれば、これらの人々にとって当該問題の真実性や正当性は完全に消えてなくなる。それによってわれわれの民族全体の隆盛に損害を与えるような場合でも、これは変わらない。というのも、崩壊の時代からドイツを破壊した人物たちが現在の統治者であり、彼らの当時の志操は今日に至るまで、いささかの変更もないからだ。冷たい心をもって当時、政党に忠実な考えや自分の

利益のためにドイツを犠牲にした彼らが、今日になっても、ドイツの再建に十分な根拠、十分どころか十二分なる根拠をもって活動している者を、彼らの利益に反する者であるがゆえに憎んでいるのだ。それどころではない。われわれの民族の再隆盛が特定の名称によって代表されていると見るや、彼らはその名称に由来する全ての物事に反対するのを常とする。極めて有効なる提案、いや、自明なる申し入れでさえもボイコットされる。提案や申し入れをした者がその名称であれば、自分たちの政党政策的、個人的視界から消すべく戦わねばならないとする一般的基本思考と結びつくがゆえにである。そしてそれ以上の理由は何もない。そのような人間の意見を変えさせようというのは見込みもない。

だから私が一九二六年、その当時の南ティロール問題のパンフレットを印刷したときには、すでに彼らの一般的な世界観的、政治的立場の結果として私の中に不倶戴天（ふぐたいてん）の敵を見ていた者に一定の印象を及ぼそうなどとは、もちろん一瞬といえども考えていなかった。とはいえ、敵陣にはわれわれの国家社会主義の対外政策を根っから悪意をもって見ていたわけではない一部の者がおり、彼らはこの分野でのわれわれの見解を検証し、是非を判断するだろうという希望を捨ててはいなかった。この希望は、明らかに多くの場面でかなえられたのである。公的な政治の場にいる実に多くの人々がドイツの対外政策に抱いていたそれまでの態度を修正した点を、今日大いなる満足をもって指摘できるのである。彼らは個々の点ではわれわれの見地には立ち

得ると考えていなかったにしても、われわれを導いていた誠実な目的というものを認めてはくれたのであった。もちろんここ二年の間に私自身には、私の当時の本が本来的に早くも一般的な国家社会主義的見解を前提として成立していたにしても、なお多くのことが、但し迷いがあったからではなく、ある種の無理をかかえていたがゆえに、欠けていたのが明白となってきた。(1) 当時は種々の制限があり、われわれの国家社会主義的対外政策の正当性に対する実際の原則的というにふさわしい証明を与えることは不可能だった。私はこれを補うのは今だと考えている。というのも、ここ数年間に敵の攻撃が強まっただけでなく、無関心層がある程度まで彼らによって動員されているからである。ここ五年というもの、計画的にイタリアに対してなされてきた扇動が、次第に、ドイツ再生の希望が死滅し、破滅するという形で実を結びそうなのである。

他の事柄においてもかねてしばしば起こっているように、国家社会主義運動は、今日その対外政策において、ドイツ民族とその政治生命内で完全にばらばらにされ、孤立している。市民的な国民政党の先刻周知の愚昧(ぐまい)と不能、膨大な大衆の無関心、さらに強力な同盟者としては怯懦(きょうだ)が、内部における祖国とドイツ民族の全般的な敵たちの攻撃と手を結んでいる。この怯懦とは、その全存在からしてマルクシズムの害毒に対抗できず、それゆえにマルクシズムに対する闘争ほど危険でないとはいえ、ほとんど同類に見えるし、聞こえもする意見を、機会あるごとに周囲に表明するのを幸福にも喜んでいる連中に今日われわれが見出しているもの、まさにそ

れである。というのも今日、彼らが南ティロール問題の叫びをあげているときに、彼らは国民的闘争利益に役立っていると見えもするし、逆にそれによって間違いなく内部ドイツ国民の極めて邪悪な敵に対する全ての現実的な闘争を避けてもいるのである。これらの祖国的で、国民的で、ある部分では民族的でもある諸闘争にとって、マルクス主義の民族と国家への裏切り者たちの親切な後押しを受けて、肩を並べてヴィーンやミュンヘンでイタリアに反対する鬨の声をあげるのは、これらの裏切り者たちに真面目に戦いを挑むよりも本質的に常により簡単である。多くの事柄が今日明らかになっているように、これらの人々の国民的騒動も、すでに長い間の見せかけに過ぎない。彼ら自身が満足しているだけで、われわれの民族の大部分は見向きもしていないのだ。

国家社会主義運動が、支配的な好仏傾向に対して、断乎としてイタリアとの同盟に踏み込むことによって、さまざまな理由から南ティロール問題をドイツの対外政策の中心にすえようとするこの強力な連立に対して闘いを挑んだ。国家社会主義運動は、その政策にとって南ティロールはそれほどの障害になり得ないし、なってはいけないと主張するのである。それゆえにドイツの全世論と対立するのである。この立場がわれわれの今日の孤立と戦いの原因であるが、いずれはもちろんドイツ国民の再興の原因となるであろう。

この信頼に値する見解を詳細に説明し、理解してもらうために、私は本書を書いた。という

のも、私はドイツ民族の敵に理解してもらおうとは思っていないからであり、すでに国民中心でなければならないと知ってはいても誤った教育を受けたり、誤った道に連れ込まれているわれわれの民族の構成分子に真にドイツの対外政策の国家社会主義的基本思想を提示し、明示するのが、私の義務だと考えているからである。彼らの多くが本書に示されている見解を誠実に検討すれば、彼らの今までの立場を放棄し、ドイツ国民の国家社会主義的自由運動の列に加わる道を見出す、と私は信じている。それによって彼らは自分の民族の幸福に沿ってではなく、自分の党や自分自身の利益に従って考え行動している連中との対決を、時が来れば辞さないであろうほどの力をたくわえるのである。

# 第一章　生存闘争と平和的経済戦争

政治とは生成中の歴史である。歴史とはそれ自体、民族の生存闘争の過程を表したものである。ここで私がわざと「生存闘争」という言葉を持ち出したのは、日々の糧であるパンを求めての戦いは全て、まったくのところ平和な時代であろうが戦時であろうが、幾千もの障害を相手にして行う永遠の闘争だからであり、つまるところ生存自体が死に対する永遠の闘争だからである。とはいえ、なにゆえに生きているのか、という問いに答えられぬのは、この世に生を受けている他の生物と同様、われわれ人間とて同じことである。生命とはこれを維持しようとする渇望によってのみ成り立っているのだ。最も原始的な生物には、その個体の自己保存本能しかないが、これより高等な生物になってくると、この保存本能を自分だけでなく、女・子どもにも向けるようになり、さらにこれを上回る高等生物は種全体が保存できるよう考えを及ぼすようになる。人間というこの種全体の利益をはかろうとして、一人の個人が自分自身の保存

本能を放棄することが少なからずあるようだが、この人間はこの時点でなおかつ本当に人間という種にこの上もなく崇高に尽くしているといえるのだ。一人一人のこういう自己放棄にこそ、全体が生存していくことが保証される道がかくされているのはよくあることで、これが再び個人の生存へとはねかえってくることになるのである。母親が幼児を守ろうとして突然勇気を奮い起こしたり、自分の民族を守ろうとして男たちが英雄的精神を捧(ささ)げたりするのは、このためなのだ。自己保存本能の大きさは、生存していくうえでの巨大な二つの本能、すなわち飢餓と愛によって決まる。永遠に続く空腹が満たされることで自己保存が保証され、愛の欲求がかなえられるということで種族の繁殖が確立される。この二つの本能こそ、まさに生命の支配者なのだ。やせほそった唯美主義者がたとえこの主張に何千回となく異議を唱えたとしてもその唯美主義者がそうして生存していること自体、自らが唱える異議の中身を逆に否定してしまっているようなものに過ぎないのだ。血と肉からできているものは、その生成のもととなっている掟(おきて)を抜きにしては、決して考えられるものではない。この掟を超越した、と人間の精神が思った瞬間、その精神の担い手となっている実体、つまり人間を消滅させてしまうことになるのである。

　ところで一人一人の人間にあてはまることは、民族についてもあてはまる。民族体というものは所詮(しょせん)多かれ少なかれ似たような生物の集合体に過ぎない。民族体の強さとは、その民族体

を形づくっている個々の生物の価値それ自体で決まるのであり、またこれらの価値がどのような形で、またどの程度の規模で均一化しているかで決まるのである。それゆえそれぞれの生物の生存の仕方を決め、それを支配しているのと同じ掟が、民族自体に対してもまかり通るのだ。生命の維持と繁殖は、その生物の体が健康であることを欲求し続ける限り、ありとあらゆる営みへの偉大なる原動力となっているのである。それと同時にしかし民族に対するこの一般的生存法則の余波は、それが個人にとってごちゃまぜであるように、同じように混在している。

この地上におけるあらゆる生物の生命維持と種族繁殖という二つの目的を持つ自己保存本能が、極めて根源的な力となって表れ、それでいてその欲求がごく限られた範囲内でしか達成できないとするとしよう。この状態がもたらす論理的結末は、その生存が獲得できるか——いいかえれば自己保存本能がかなえられるかどうか、の可能性を求めて、ありとあらゆる形態の闘争が生ずることとなるのである。

この地上に生を受けている生物の種類は果てしなく多い。そしてそれぞれに、生命維持の本能、種族繁殖への渇望が限りなく多いのに対し、これら生物全体が生活を営む場には限りがあるのだ。この状態はまさに、正確に寸法を決められた球の表面上で、何十億もの生物がそれぞれに生きる糧を、そしてその後継者を得ようとして闘っている図にたとえることができるのだ。このように生存圏の広さに限りがあるということで、必然的に生存闘争が生まれるのであるが、

一方この生存闘争を行うことにこそ、生物が進化していくうえでの鍵がひそんでいるのである。まだ人類が登場する以前の時代の世界史とは、とにかく地質学上の出来事を表したものであった。それはまさに自然の脅威が互いに闘争しあい、この地球という惑星に生物が居住できる地表が形成され、地面と水とが分かれ、山脈が、大地が、大海が、生成される図であった。これがこの時代の世界史なのである。その後有機的な生物が登場するとともに、これらの生物が多種多様なる形態をとって、どう出来上がり、どう消えていったか、ということに人間の関心は集中した。そしてその後ようやく人類自体が登場し、これによって初めてきちんとした世界史の概念のもとで、本当の人類そのものの成り立ちの歴史がつづられるようになり、人類自体がどういう展開の仕方をしてきたのかが考えられるようになったのである。さてこの展開上に現れた特徴はといえば、これはまさに人間と獣たちとの永遠の闘争、そして人間同士の永遠の闘争そのものなのである。個々の人間が目に見えない無秩序状態から、やっと組織が、一族が、種族が、民族が、国家が生まれるわけだが、これらがどのように出来上がり、そして消えていったかを述べることは、まさに永遠なる生存闘争を再現することなのだ。

しかし政治というものが生成中の歴史であり、この歴史そのものが、人類および民族がおこしてきた自己保存と種族繁殖のための闘いの場であるとすれば、政治政策とはそれに関連して、実際には民族の生存闘争が行われることそのものである、といえるのである。しかし政治とい

うものは、ある民族の生存自体をめぐっての闘争であるにとどまらず、人間がこの闘争をいかに行うか、というわざでもあるわけだ。

歴史が今まで行われてきた諸民族の生存闘争を表したものであると同時に、その時々に行われた政治がそのままの形で再現されたものであるがゆえに、この歴史という代物は、われわれ自身がどのように政治を行うべきかを考えるうえで、格好の教師ともなるわけだ。

政治の持つ最高課題が、民族の生存を維持し、継承することであるとするならば、この生存とは、政治自体がこれと闘争し、もみ合い、このためにそしてこれによって決定される永遠なる命題となるわけなのだ。だから政治の課題とは、血と肉からなる実体を維持することなのだ。政治の成功とはこの維持を可能にすることを指す。そして政治の失敗とはこの実体を滅亡させてしまうこと、すなわち存在が失われてしまうことを指す。だからこそ政治とは常に生存闘争のうえでの先導者であり、統率者であり、組織者なのであり、この政治こそが、フォーマルにそう呼ばれているように、民族が生きるか死ぬかという決定をする作用をもたらすのだ。

そこで平和政策と戦争政策の両概念ともに即座に無に帰してしまう恐れがあるため、このことをはっきりと自覚しておく必要が出てくるのだ。というのは、政治によって勝ちとろうとされている命題は、とりもなおさず生存するということなのだから、成功するにせよ失敗するにせよ、政治を行ううえで、どのような手段によって民族の生存維持を成しとげようとしても、

その結果は常に同じことになるのである。すなわち、うまくいかない平和政策というものは、即座に民族の滅亡、つまり血と肉から成る実体の消滅につながるし、これでは不幸な結末に終わった戦争政策がもたらした結果と比べて何の変わりもありはしない。生存するうえでの前提条件を略奪することが、ある場合に民族が死に絶える原因になるというならば、他の場合においてもこれまた然り（しか）ということなのだ。そもそも民族は戦場で死に絶えるわけではなく、戦いに負けることによって生存を維持するすべを失うのだからであり、そこまでいかないとしても略奪の憂き目にあうか、これを逃れるすべが底をつくのがせいぜい関の山だからである。

戦争によって直接もたらされる損失は、ある民族が程度の低い不健康な生活を送ることによってもたらされる損失自体と比べたら、割合の小さいものである。[1] たかだか十年の間に静かに忍びよってきた飢えと悪習によってもたらされた死者の数は、過去一千年の間に勃発（ぼっぱつ）した戦争によって直接出た死者の数を上回るものである。だが最も恐るべき戦争とは、まさしく今日の人々の目にはこの上もなく平和であると映る闘い、つまり平和的経済戦争なのだ。この経済戦争こそ、最終的結末においては、世界大戦によってもたらされる犠牲者の数もおよばぬおびただしい数の犠牲を出すものなのだ。というのは、この経済戦争は、その時点で生きている人間の身だけにふりかかる事件ではすまされず、その影響は何よりもまず、将来生まれてくる人間についても及んでくるからである。ただの戦争は、せいぜい現在の何割かを消してしまうに過

ぎないだろうが、この経済戦争は未来を抹殺してしまうのだ。たった一年間でも全ヨーロッパで産児制限がとられたとしよう。これによっておこる人間の損失数は、フランス革命から現在に至るまでの間におこった世界大戦までをも含むあらゆる戦争による死者の数を合わせたよりも上回ることになるのだ。しかしこれが、現実のところ若干の国民が健全な発展を行えなくなるところまで、現在のヨーロッパを人口過剰へと追い込んでしまった平和的経済戦争のもたらす帰結なのである。

一般にさらに次のように述べることができよう。

政治政策の課題が、あらゆる手段を用いて、あらゆる可能性を求めて、その民族の存在を維持することである、ということを忘れ、そのあげく政治政策をある決まった活動様式で行ってしまおうとするやいなや、民族は、自由と日々の糧を求めて行う運命闘争をすすめるうえで民族を導くはずのわざの持つ内的意味を損なってしまう。

基本的に好戦的な性格を持つ政治を行えば、その民族を数々の悪習や疾病の徴候から遠ざけておくことができる。何世紀もの時の流れの中で、内的価値を変遷させずにいられるのは、こういう民族だけなのだ。戦争はそもそも長期にわたるようになると、内的危険をはらむようになる。この危険性はその民族体を構成している人種的な基本価値が均一でないと、それだけ表面化する割合が高くなる。このことは早くも古代においてわれわれがよく知っている国家にお

こった出来事についても言えることだし、また現在においても、とりわけすべてのヨーロッパ諸国にもあてはまることである。戦争は本質的にはそれとともに、何千もの細かい過程を通して、民族内の人種淘汰をひきおこすものであり、この淘汰によって、民族内の最上の分子が優先的に滅亡してしまうことになる。いろいろな個々の出来事が無数に生ずるうえで、勇気と闘志が求められ、その結果つまるところ人種的に見て最上かつ最も価値ある分子が特別の任務につくことを自らの自由意志で申し出たり、そうでなければこのような分子が特別編成の組織によって計画的に召集されることが再三再四おこるようになるからである。特別な義勇軍とか近衛連隊とか突撃隊という特定の精鋭部隊を編成するという考えは、いつの世にも戦争指導者のアイディアであった。ペルシアの宮殿警備隊、アレクサンドリアの精鋭部隊、ローマ帝国の親衛軍団、数知れずこの世を去っていったナポレオンやフリードリヒ大王の傭兵軍や近衛連隊、そして世界大戦での突撃大隊、Uボート乗組員、飛行隊。これらどれもが数多くの人間の中から特別の高等任務に適した高度の能力を有する男たちを選び出し、特別の編成を組ませてこれにあてようという、いずこも同じアイディア、そしていずこも同じ必要性によって組織されたものなのである。というのは、そもそも近衛兵とは教練を受けた部隊というのではなく、戦闘部隊なのだ。そのうえこういう共同体の一員であるという高い誉れが特別な団結心の形成をもたらし、この団結心がそうこうするうちにますます強固になり、つまるところ外面だけの問題

ではなくなってくるのである。しかしそれとともにこの種の編成が、最も悲惨な血にまみれた犠牲者を出すことがしばしばおこるようになるのだ。すなわちこの場合では、おびただしい数の人間からこの上もなく有能な人間が選び出され、凝縮集団の形で戦場へ派遣されたのに、民族の中で最も優秀な者が戦争の犠牲者となる率は非常に高くなり、一方ではその逆に最も俗悪なる人間の方が生きながらえる率が高まってくるわけである。つまり民族共同体のためとあれば、自らの命を喜んで犠牲にするこの上もなく極端に理想的な男たちがいるのに対し、自分自身のまったく私的な生活を維持することが人生至高の課題であると考えている無数の卑劣なエゴイストたちがいるのである。英雄は死に、犯罪者は生きながらえるのだ。だが自らを犠牲にするという行為は、英雄的な行動を好む時代、とりわけ理想主義を掲げる若者たちには、自明の行為と受け取られる。こういう行為は、今なお民族の価値というものが存在していることの証(あか)しとなるのだから、良いこととされる。しかしながら真の政治家たるものは、このような事実を憂慮し、その後もたらすものを計算に入れてとらえねばならない。実際一回の戦争で失ってしまったものは、たやすく諦(あきら)めることができるかもしれない。だがこれが百回続くとなれば、ペースは緩慢とはいえ、確実に民族の中で最良の、最も価値ある人々の大量出血ということになるのだ。確かにこのようにして勝利はかちとられたかもしれない。しかし結局はこれらの勝利に値するだけの民族はもうそこにはいないのである。このように、昔の成功物語の結果が、

とてつもなく不可解にしか見えようのない後代の悲惨な状況を生み出すということは、まれではないのである。

それとともに戦いにおける民族の賢明な政治的指導というものは、その民族の生存自体を目的とするのではなく、その生存を続けていくために必要となる手段だけを、視野におさめる必要がある。指導者はその民族が立派に一人前となるまでこれを育成し、さらに自らにまかされた人材を最大の誠実さをもって管理しなければならない。指導者たる者は民族の生存のためにはためらうことがあってはならず、危急の際には最高の人材にあえて血を流させる度量を持ち合わせ、なおかつその流した血に代わるだけの価値ある平和が、他日再びくるものであるかどうかということを、常に頭にとめておかねばならないのだ。流した血に値する平和がくることを民族全体にうけあうことができないような目的のために戦い抜いた戦争などは、民族体にとっての暴挙であり、民族の未来に対して犯した罪悪でしかあり得ぬ。

ところで、例えばごく一部の人間だけがその国家を維持し、とりわけ文化を創造する、とみなされているような状態にある民族、つまり人種的構成の面でのばらつきが極めて多い民族においては、果てしなく長期化した戦争は、たとえようもなく恐ろしい危険となることがある。そもそもヨーロッパ諸民族の文化は、何世紀もの時の流れの中で、北方民族の血が混入したことによって生じた基礎の上に築かれたものである。この北方民族の血の最後の名残が取り除か

れてしまうやいなや、ヨーロッパ文化はその顔を一変してしまうことになるし、その上諸国家の価値は、諸民族の価値が下がるのに応じて下落する憂き目を見ることになるであろう。

原則的な平和政策では、こういう事態に備えてまず最良の血統を持つ者たちを絶やさぬような努力が払われることだろう。しかしこういう政治政策も総体的にとらえれば、いつかはきっと民族全体を弱体化へと追い込むことだろうし、そうした民族が生存していくための前提条件もおびやかされてくるように見えることとなるだろう。よって次の手として日々の糧となるパンを求めて闘争する代わりに、むしろこのパン自体を小さくするとか、もっと現実的にいえばこのパンの個数を制限することが考えられてくる。こうしたやり方で来たるべき大危機を逃れようとするならば、平和的に国外移住を行うとか、産児制限を行うしかない。そうなればこんな原則的平和政策などは、民族にとって疫病神になり下がる。なにしろ片や延々と戦争を続け、片やその状態で移住の世話をやこうとするのだから。このような政策のために、民族は数々の計り知れぬ生命の危機を体験したうえに、あげくの果てには気づかぬうちに最良の血統保持者まで失うことになりかねない。しかしながらわれわれ全体の国家政策上の知恵者らが、まあ国外移住政策をとっても何の利益もないことが分かっているにせよ、せいぜいわが民族の人口減少を遺憾に思うか、よくてもいずれは他の国家にくれてやることになってしまう文化のこやしについて語っているのだ、ということを知るのは、まことに悲しむべきことである。それがき

ちんと分からない者などは最悪である。国外移住が地域的な区分けとか、年齢層による区分けによって行われるのでなく、このまま運命の摂理にその裁量をまかせておくと、わが民族からはいつも最も勇気のある、闘志にあふれた断乎たる決心の、何事にも抵抗力のある人間が出ていってしまうことになるであろう。約百五十年前にアメリカへ移住した若い農民たちは、故郷の村でもやはり決心の固い、大胆不敵な若者たちであったのだ。現在わが国からアルゼンチンへ移住する労働者も、これまた然りである。臆病者や弱小者は、無理に勇気を奮い起こして見知らぬ異国で日々の糧をかせぐよりも、故郷にとどまりその一生を終えたがるものだ。危機、災難、政治的圧迫、宗教的強制力が民衆にのしかかってきた場合もやはり同様、これに対してあえて抵抗を行おうとするのは、常に最も健康かつ抵抗力のある人間なのである。まっさきに屈服するのは常に弱小者なのだ。勝者にとって、このような弱小者たちの存在を維持することは、本国が残留組の面倒をみるのと同様、たいした利益はない。行動一般に関する法則が本国から植民地へそのままの形で移行することがありがちなのもそのためで、それは植民地では、すでにまったく自然な形で人間として高い価値をもつ集団が完成しているからなのである。だが、それとともに新領土にとってのはっきりした黒字は、もとの本国にとっては赤字となって出てくるのだ。ましてやこの国外移住が何世紀にもわたって進めば、民族はかつてない最良の、たくましい本来の勢力を失ってしまうことになるわけで、そうなればある危機がおとずれた際

ってしまう。そうであるからにはむしろ産児制限政策の方へ手が伸びることとなろう。この場合に、その運命に対して必要なだけの抵抗をする内部勢力を育てあげるのは、もはや困難となっでも単に人口の減少だけが問題なのではない。この産児制限によって、民族の中で非常に高い価値をもつ人物が生まれる可能性が、そもそも初めから抹殺されてしまうという恐ろしい事実が問題なのである。というのは民族の規模と将来は、その民族の人々の持つあらゆる部門において高い業績をあげるだけの能力ある者の総計によって決まるからである。しかしこの話は、あくまで人物の価値の話であって、長子権があり、それによって保護が行われているからといって、状況がよくなる話ではない。もし現在のわがドイツの文化生活、ドイツの経済、そう、わがドイツ全体の存在自体から、長子としてでなく生まれてきた男たちによって作り上げられたものをすべて取り去ったとするならば、一体どうなることであろうか。ドイツはおそらくかろうじて、バルカン国家と同程度たり得るに過ぎないのではなかろうか。ドイツ民族はもはや文化民族として評価されるだけの価値を失うのではなかろうか。長男として生まれ、なおかつ民族にとって偉大な事業をなしとげた男たち一人一人について、少なくともその先祖の一人でも長男ではなかったのではなかろうか、とまず調べてみる必要性を考えるがよい。何しろその男の先祖代々にわたり、一度でもその家系に長男でない人物がいたようならば、その事業をなしとげた男自身とて、われわれの先祖がこの長子相続の原則を本当に守ってきたのであれば、

生きてはいないはずの人間の部類に入ってしまうのだからである。[2] 民族の生存という問題に関しては、現在においては正義であるとされており、過去においては同じことが罪悪であった、などといういい加減なことは存在しないのである。

国外移住や産児制限という形の、民族体の損失を後世にもたらすような原則的平和政策というものは、人種構成面において価値がばらついている分子からなる民族での話になればなるほど、必ずや悲惨な結果を生み出すはずだ。何しろ片や国外移住によってまっさきに人種上最良の人材が出ていってしまうし、片や本国においては産児制限がとられ、皮肉にも人種的に価値が高いゆえに努力して出世をとげた上層階層がまっさきにこれに従うことになるからだ。そうこうするうちにこれらの価値の高い人間が欠けた穴は、次第に手におえない下等な一般大衆で埋められることになり、何世紀か経た後には、結局これが民族全体の価値をひき下げることになるのだ。そのような落ちぶれ果てた民族体では、実際に役立つ生存能力を、すでにもはや持ち合わせていないことが必至である。

それゆえに原則的平和政策というものは、戦争を唯一の武器と心得ている政策と同様、百害あって一利なし、荒廃へと導く政策でしかないのである。

民族の生存を求めて、そして民族の生存のために、政治は闘争を行うべきであり、そして政治はその際に、常に最高の意味でいう生存に貢献できるような闘争の武器を選択しなければな

らないのだ。というのは、政治政策は何も人間が死ぬことができるように行われるものではなく、ただ民族自体が生存していけるように、ほんの時々人間を死なせてもかまわない、(3)という話なのだからだ。その目標はあくまでも生存を維持させることなのであって、決して英雄的な死でもましてや臆病な諦め(あきら)でもないのである。

# 第二章　生存圏確保の理由とその方策

民族の生存闘争を決定するのは、何よりもまず次に述べる事実である。

生存に必要なあらゆるものの頂きにたつのは、まず第一に日々の糧であるパンを求めての闘争である。これはその民族の持つ文化的意義がいかに高いものであろうとも、それには関係なしにいつでもあてはまる話である。確かに天才的な民族指導者が偉大な目標を示して、民族の眼を物質的なものからそむけさせ、超越した精神的理想のためにその身を捧げさせることは可能である。そもそも物質的関心とは、理想的な精神的観点がどれくらいぼやけてしまっているかに応じて増えていくものだからである。精神生活面でプリミティヴであればあるほど人間は動物的になるもので、あげくの果ては食物摂取を人生唯一の目的とみなすようになる。確かに民族は、苦しさを負担できるだけの理想という代償がある限りにおいて、物質的なものには決められた範囲内の制約があるという事実に大変うまく耐えていけるのかもしれない。しかしな

がらこの理想とて、それが民族の破滅をひきおこさずにすんだとき初めて、物質的なものである食糧を犠牲にするような片寄った存在ではないと呼べるのであり、またそうして初めて民族体の健康をおびやかす存在ではないのだと思えるのである。というのは飢えた民族というものは、食糧不足の結果として肉体的に崩壊するか、さもなくばその状態を変えてしまうか、どちらか一つの道をたどるものだからである。しかし肉体的崩壊は遅かれ早かれ精神的崩壊を伴うものである。そしてその後にあらゆる理想が断念される。したがって理想といえども、民族の内的、普遍的な力を強める効果を挙げ、結局のところ生存闘争を行ううえであらためて役に立ってこそ、健全かつ正しいものといえるのである。こういう目的にそぐわぬ理想など、いくら外見上見映えがするものであっても、その外見にもかかわらず結局は災いとなるのである。何しろそういった理想は、生存していくという現実から、ひたすら民族を離れさせてしまうものであるからだ。

だがある民族が生存していくのに必要とするパンは、その民族が自由に使うことができる生存圏の大きさによって決められてしまう。少なくとも健全なる民族たるものは、必要なものは、自らが所有する自らの土地で調達しようとたえず試みるものだ。これ以外の方法などは、いくらそれで民族の食糧が何世紀にわたって確保されるとしても、不健全でまた危険である。国際貿易、国際経済、他国との交易その他もろもろのものは全て、所詮民族の食糧調達のための暫

定的手段である。これらの手段は、ある面では予測不可能な要因に、またある面ではその民族の力のおよぶ範囲外にある要因に左右される。民族が生存していくための最も確実な土台は、とにかくいつの時代でも、自ら所有する土地なのである。

さてしかし、次のことは頭に入れておかねばならない。

民族を構成する人員の数は不定要素である。民族が健全であるならば、この数は増加傾向をみせることとなるだろう。そうなのだ。人間が民族の将来を確実に推測できるのは、唯一この人口増加によってのみなのだ。とはいえ人口増大には決まって生活必需品への需要の増大がつきまとう。いわゆる国内生産が増大したとしても、たいていの場合、人間としての存在の向上を求めて生ずる需要の増大分を満たしてやるのがせいぜいのところで、とても人口増大によって生ずる需要を満たしてやることなどできはしない。これは特にヨーロッパ諸国についていえることなのだ。ここ数世紀——特に最近、ヨーロッパ諸民族の人口は、その必要性から非常に増大し、その結果、年ごとの農作物の出来高が非常に良好であるという場合を想定してもなおかつ、その出来高の伸びが一般生活必需品の需要増大にまったくついていけなくなるところまできてしまっているのだ。人口増加は、生存圏の増大すなわち生存圏の拡大によってのみ解決される、といえるのではなかろうか。ところでしかしながら、民族の人口は、確かに変わっていくものであり、逆に土地というものは、もともとあるだけしかないものである。いいかえて

みよう。民族人口の増加は自然のことであるがゆえ、自明の過程ともいえる。だから自明であるがゆえ、人口増加は異常現象としてとらえるべき性質のものではない。これに対し土地の増加は、世界中の領土の一般的区分けにより、また特別な革命行為により、そして異常現象によって左右される性質のものである。だから民族を扶養することの容易さというものは、生存圏を変化させることが異常に難しい、という事実に真っ向から対立する事柄なのである。[1]

民族の人口とその土地面積との均衡状態を調整することは、民族が生存していくことに関して決定的な意味を持つ。しかり、実際のところ民族の全生存闘争とは、増加しつつある人口に対し、その一般的食糧確保への前提条件であるそれに必要なだけの土地を確保することについてのみ成立する、といっても過言ではなかろう。何しろ民族の人口が絶え間なく増加する一方で、土地がずっとそのまんまの広さであったとすれば、次第に緊張感は高まらざるを得ないし、その緊張はある危機に触発され表面化してくるのだから、確かにある一定の長期間にわたって今以上に勤勉に労働したり、より独創的な生産方法をとり入れたり、また特別に節約にいそしんだりすれば、この緊張感は解消され得るものではあるが、しかしいつかこういう全てを尽くしてもこれをぬぐいされぬ日が来ることは明らかなのだ。その際、民族が生存闘争を行ううえでの指導部の課題というものは、この民族人口と領土との耐え難い不均衡状態を徹底的に取り除くこと、すなわちこの不均衡状態を再び通常の状態にもどすことであるといえる。

ところで民族が生存していくうえで、この人口と領土面積との不均衡状態を修正するには、幾つかの方法がある。最も自然なのは、増加する人口に合わせてその都度土地の広さを適合させていく方法である。これは闘争を行う決意と、血を投入することを必要とする。しかしまたこの血の投入こそ、その正当性を民族に認めさせることができる唯一の方法なのだ。何しろこれによってこそ、民族のこれからの人口増加に備えて必要となる生存圏が勝ちとられるのであり、戦場に差し向けられた人間の代わりは、もとより沢山いるからである。そして戦争という名の危機から、平和という名の日々の糧が生み出されてくるわけである。武力はもともと農耕への道を切り開く開拓者であったし、人権を語るうえで戦争はこの最高の権利に貢献した唯一のケースなのだ。戦争は民族に大地を与えてきたのだ。勤勉に、実直に自らの手で耕そうとする大地を、いつか子どもらに日々の糧を与えることができるように耕そうとする大地を、与えてきたのだ。というのはこの大地は誰に分配するというのでも、また誰に贈られるという性質のものでもなく、大地とは占有意欲を心に抱き、この大地を守る力を持ち、そしてこれを耕す勤勉さを持ち合わせた人々に、あらかじめその成果を見込んでの封土として与えられるものなのだからである。

それゆえ健全で素朴な民族は全て、土地を獲得することに罪の意識を持つことはなく、むしろこれを自然なことであるととらえている。だがこの神聖なる権利を否定する現代の平和主義

者らは、そうすることによって少なくとも過去の時代の不正によって暮らしを立てているのだ、と非難されるべきなのだ。しかしそれ以上にこのような大地のどんな小区画といえども、ある土地がある民族専用の居住地として永久的に定められていたという例は今までにないのである。何しろ何万年にもわたって自然の摂理は、人類を永遠の放浪、移動へと追いたてていたのであるからだ。だが結局、現在の領土配分は、すさまじい暴力を使って行われたものではなく、人間そのものによって行われてきたのだ。とはいえ、私とて今まで人間が講じてきた解決策に自己の安全を保障すると見込まれるほどの、そして未来における規範とまであがめられるほどの永遠の価値があるとは決して考えていない。地表が永遠に地質学上の変成を受けると考えられ、有機的生命が絶え間なく次々と新しい形態を求めてその形を変えていったのと同様、人間の居住地の境界もまた、絶え間ない変遷の波に洗われているのだ[2]。すなわちたとえある幾つかの民族がある時期、現在の領土配分が自分の利益にかなうがゆえに、不変のものとして将来もずっとこの配分を保とうとしていようとも、必ずこういう場合他の民族が一般の人間的なことを考えていて、今のところ状況が自分には不利に働いているゆえ、あらゆる人間の力をもってしてもこの状況を変えねばならない、と思っているに違いないのである。この永遠なる大地をめぐっての格闘を一掃してしまおうなどとすれば、人間同士の闘争もおそらく止んでしまい、それとともにそれだけで、人間が発展していくうえでの最大の原動力も失われてしまうことになる

のだ。すなわち市民生活での例にたとえれば、商売の規模を永遠に大きく保とうとして、そのために自由に資力を戦わせ、競争を行っている人間の財産を差し押さえてしまった場合と同じ効果が生じてしまうのである。このようなことをしても民族にとっては、所詮（しょせん）、不幸な結果を生みだすことにしかならないのだ。

今日の世界的規模での領土配分は、偏ったやり方をとっていて、ある幾つかの民族にとっては非常に有利な結果となっており、それに該当する民族が現在の領土分割をこれ以上変えぬ、という明白な利害関係を追求せざるを得ない状態になっている。よってこれらの民族の領土のもつ豊かさが、そうではない民族の貧しさとまったく対照的関係を成しており、その貧しさといえば、いくらたゆまず勤勉に働いたとしても、生きるための日々の糧であるパンの生産ができない状態にある、というお粗末さなのだ。しかしながらこれらの貧困な民族が、食糧を確保するための土地が欲しいという要求を掲げたとしたら、いかなる崇高な権利をもってしても、これを拒否できるものであろうか？

答えは否である。この世に生を受けた者の第一の権利は、それだけの力がある限り、生存権なのであるから。しかしながら実際、力のある民族はこの権利を拡大して、その領土を人口に合わせて拡大するための方法を見つけようとするのである。

だが弱小民族や、お粗末な指導部に率いられている民族は、増加しつつある人口と、逆に昔

のままの広さで留まっている領土との不均衡を、領土を拡大することで是正しようとはしない。こういう民族はまた別の方法を模索するのもやむを得ない。そのときには人口の方を領土の広さに合わすことになるのだ。

民族の人口を、食糧を確保するには不十分な広さの土地に合わせるというのは、そもそも自然の摂理なのである。この摂理が働くのを助けるのは、食糧難と困窮である。この作用を受けて、実際それ以上の人口増加が停止するほどに、民族が打撃を受けるというのは、あり得る話なのだ。が、こうして人口を土地の広さに合わせるという自然の摂理が働いた結果、いつも同一の現象が生ずるとはいいきれない。すなわち、まず非常に激烈な相互の生存闘争が生じ、この結果最も頑丈で抵抗力のある個々の存在だけが生きながらえることになるため、一方では乳児死亡率が高くなり、他方では寿命が延びるという現象がおきてくるわけだ。これは、それぞれの生命があまり顧みられないこのような時代に見られる顕著な特徴である。こういう状況下では、弱小者は全て食糧難と病気によってその命を奪われ、非常に健康な者だけが生きながらえることによって、一種の自然淘汰が行われる。この淘汰によって民族は人口の面では確かに制約を受けはするが、それにもかかわらず民族の内的価値は、そのままで保たれる。しかり、こういうところに内的高揚が生ずるのだ。とはいえ、こういう推移とてあまり長期にわたって継続させることはできない。何しろこの状態が続けば食糧難のもたらす効果が逆転して働くこ

とになってしまうからである。永久に食糧難が続くとなるとついには、特に人種面から見て価値にばらつきのある民族の場合、このような食糧難にただ忍従してしまうということになり、民族としての弾力が次第に衰え、やがては自然淘汰を助長する生存闘争がおきるかわりに、堕落の波が押し寄せてくることになり得るからである。この典型的な例が永久に続く食糧難を防止しようとして、もはや人口増加に重きをおかず、産児制限に着手しようとする場合である。というのはこうすることによって、その民族は自然の摂理とは逆行する道をとらんとしているからである。一方では自然の力が、この世に生を受けた多数の人間のうち、健康でもなく抵抗力もない人間を、生存闘争の中で生き残らせておいて、その一方で産児制限をし、なおかつ新しく生まれてきた子どもに関しては、実際上の価値や内面的品位があるのかについてはおかまいなしに、とにかく生き延びさせようとしているのである。(3) そのうえわれわれ人間の人道主義は単に虚弱者に尽くすばかりで、それとともに実際には人間の存在を破滅させる恐るべきものとなり果ててしまう。産児制限の結果生じるこのようないまわしい結末を迎えずに自らの手で人口を制限しようとするのならば、確かに今現在生を受けている者の存在を脅かす結果にはなるだろうが、出生件数に制限を設けるのは止めにして、これを自由に行わせるべきではなかろうか。かつてスパルタの人々がこの賢明なる措置をとったことは知られているけれども、今日のいつわりのセンティメンタルな市民的な愛国的素質をもつ輩(やから)は、この措置がとれないでいる

のだ。たかだか六千人のスパルタ人たちが三十五万人もの奴隷を支配していたという歴史的事実は、スパルタ人が人種的に高い価値を有する人々であったせいである、としか考えようがない。これはまさしくスパルタで、計画的に人種保存が実行された結果なのであり、このスパルタ国家にわれわれは民族主義の萌芽を見ることができるのである。スパルタでは病気を患っていたり、虚弱体質であったり、障害があったりした子どもを破棄すなわち処理してしまっていたわけだが、この手法は現在われわれが抱いているどうしようもない妄想に比べると、実際のところ、何千倍もヒューマンであるといえるのだ。われわれのやり方といえば、何しろその妄想のおかげで、病弱な人間などをそれこそあらゆる犠牲を払っても生きながらえさせようとし、片や産児制限をとったり、堕胎薬を使用したりして、何十万人もの健康に生まれてくるはずの子どもたちに、初めから命を与えないという有様なのだから。これでは病気を患って退化した種族が後々出現するように培養を行っているようなものである。

したがって一般的には次のように言うことができる。食糧難や人為的な補助策によって民族の人口を制限すれば、その民族が居住している狭い、不十分な生存圏に、ほぼ人口を合わせることにはなるだろうが、その結果、現在ある人材の価値というものは下がる一方となり、実際に最後には堕落をひきおこすことになる。

民族の人口をその領土の広さに合わせるための第二の策としては、国外移住があげられる。

が、これも人種別に移住を行うというのでない限り、やはり本国に残った人材の価値を引き下げるという結果をもたらす。

産児制限の実施は、最も高い価値を有する人間を消滅させ、国外移住は平均的人間の価値を破壊することになるのだ。

だが民族の人口とその領土との不均衡を解消するために民族が企てることができる方法がまだあと二つ残されている。まず第一の方法とは、いわゆる内地植民とは無関係に国内農産物を増大させること、そして第二の方法とは商品生産を高め、経済形態を国内志向経済から輸出志向経済に転換することである。

すでに一旦定められてしまっている国境内で、農産物を増大させようという考え方は、古くからある考え方である。人間が土地を開墾してきた歴史は、耕作法の絶え間ない進歩と改善の歴史であり、それによる収穫量の増大の歴史なのである。これらの進歩の第一部が、土地の開墾方法や栽培技術の確立の分野であったとすれば、その第二部は、その土地に欠如もしくは不足している栄養分を与えることによって、土地の地味自体を人為的に向上させる領域にあった。昔の鍬を用いての耕作から現代の蒸気鋤に至るまで、堆肥の使用から今日の化学肥料添加に至るまで、この方法で行われてきている。そしてこのために土地の作物産出能力が飛躍的に増大したのは疑いもない事実だ。そうはいうもののまた、どこかに必ず限界線が引かれている、と

いうのも疑問の余地のないところである。特にこの事実は、文化的人間の生活水準が極めて普遍的な性格を持ち、民族は自分で手に入れることができる物質の量に応じてそのレベルを決めるのではなく、近隣諸国の生活水準がどの程度のものかを見定めてこれでレベルを決める——逆に言えば他国の水準との相関関係によってこれを決める、ということを考えに入れると、決定的な意味を持つと言えるのである。事実ヨーロッパ人は今日、アメリカの状況下における生活水準と同じものを、ヨーロッパにおける可能性から同じように導き出して、そういう生活を送ることを夢見ているのである。諸民族間の国際交流は、確かに現代技術およびそれによって可能となった交通手段により、たやすく実現するようになり、かつより密接なものとなってきている。すなわちヨーロッパ人は、自分たちの状況が今どのようなものであるかをよく意識せずに、やみくもにアメリカの生活レベルを自分たちの基準値であると決め込んでしまい、アメリカにおける人口とアメリカ大陸という土地との関係が、これに相当するヨーロッパの諸民族の人口と生存圏との関係よりもそもそも段違いに有利な状況にあるという事実を忘れさってしまっているのだ。すなわちイタリアが、いやドイツといってもよいが、いくら自分たちの土地で内地植民を行おうが、また経済活動、技術活動を高め、その領土から採れる農産物を増大させたところで、所詮(しょせん)、アメリカ合衆国の人口と領土がよく均衡していることと見比べれば、われわれの国々での人口と領土の不均衡はいつまでも存在し続けるのである。それにもしドイツ

人やイタリア人がたゆまず勤勉に労働し、民族人口の増大が可能となる状況を作り出すのに成功したとしても、その時点ですでにアメリカ合衆国はその何倍もの人口増大を達成しているに違いないのである。またたとえこの両ヨーロッパ国での人口増大が最終的に無理だということになったとしても、なおかつアメリカ合衆国は何世紀も成長を続け、われわれが今かかえこんでいる問題をアメリカが背負い込むようになるその日まで、その人口は増大し続けることができるのである。

内地植民という考え方は、特に人間が考え出したこじつけの効果を狙って出てきた誤った推論に起因する。内地植民によって農産物の増大が、根本的に可能になるなどと考えているのは、まったくの誤りなのだ。例えばドイツ内において内地植民の路線に沿って土地の分配が行われたとしよう。それが大区画単位で分配されたにせよ、小区画単位にせよ、また農民の土地として分配されようが、移住者分譲地として分配されようが、結局のところ一平方キロメートルあたりの土地の上に平均百三十六名の人間がいる、という事実には所詮変わりはないのである。しかし一平方キロメートル当たり百三十六人とは、極めて不健康な状況である。この領土で、そしてこのままの条件では、われわれドイツ国民が食べていくことは不可能なのだ。そうだ、この内地植民というスローガンが一般大衆にうち出されたとしたならば、大衆は今の食糧難を救う手段が見つかったと、むやみに希望をつなぐばかりで、かえって混乱をひきおこすことに

なりかねない。何しろそもそもがこういう話ではないのだから。というのは今なぜ食糧難なのかといえば、別に土地の分配が誤った方法で行われていたせいなのではなく、そもそもわが民族が今日使用できる土地全体が、狭く不十分すぎるゆえに生じた結果なのだからだ。

しかしそれとともに確かに農産物の量が増大すれば、民族が営む生活の状況の苦しさは、ある期間緩和されるかもしれない。だが長期的に見れば、すでに手狭になっている民族の生存圏を、またもや増加しつつある人口に合わせねばならない日がやってくるわけで、これでは永久にこの義務から解放されたことにはならないのだ。内地植民程度では、せいぜいのところ社会的理性や社会的正当性という意味での改善が行われるのみであろう。民族全体の食糧確保という問題においては、この内地植民方策はまるで意味がないのだ。また国民の外交政策上の立場を考えてみた場合、この方策をとることは民族にはかない希望を抱かせ、現実的な考え方を失わせてしまうことになるため、結局かなりの損害を出すものと予想される。また尊敬すべき一般の市民たちは、勤勉実直に働き、きちんと土地が分配されたなら、わが家でも日々のパンを手に入れられるのだ、と本当に信じてしまうばかりで、新たなる生存圏を勝ち取るためには、民族の力を一国として結集しなければならない、という本当に必要な事実に気づかなくなってしまう恐れがあるからだ。

特に今日では、経済力を食糧難、不安、飢え、困窮からの救世主とみなしている者が多いよ

うだが、この経済力によって生存していくための可能性を民族が手に入れられるのは、確かにある特定の条件下においてのみの話であって、元来民族が所有する領土の話とは根本的に異質なものなのである。しかし経済力が民族を救えるという場合の特定の条件とは何かに、ここで少し触れてみることにしよう。

ここでいう経済力の意味することとは、民族がある特定の生活必需品を、民族自体としての需要を上回るだけ生産し、その余剰分を自国以外の経済圏に販売し、その売り上げで自分のところで不足している食糧とか原材料を購入するということである。だからこの種の経済のポイントは、生産するというよりも、むしろ多少とも販売するということにあるのだ。今のところは特に生産増大の話ばかりが多く話題にのぼっているが、いくらそうやって生産を増大したところで、それを購入する者がいなければ何の価値もない、ということがすっかり忘れられている。民族の経済生活圏内では、たとえ生産が増大しても一人一人が必要とする品物の数が増大するのでなければ、本当に有益なものとはならないのである。確かに理論上では、民族の工業生産が増大すれば、品物の価格は安くなり、それによって消費は高まり、その結果民族同胞一人一人がより多くの生活物質を所有することになる。だが実際の話をしてみれば、土地の広さが、不十分であることによっておこる民族の食糧不足という事実はゆるぎようもないのだ。というのは確かにある種の工業製品の生産を増大させる——そう、何倍にも拡大することはでき

るだろうが、食料品の生産はそうはいかないからである。民族がこういう食糧難をこうむっているからには、自国ではとれない食料品を輸入して補うために、工業的過剰生産物を外国に売って初めて、食糧難の歯止めとなり得るのだ。だが同時に単に生産増大といっても、このような目的達成のためには、それを購入する者、しかも外国の購入者がいて初めて本懐が遂げられるのである。だから販売できるかどうか、すなわち売れ行きがどうであるかが、われわれにとって非常に重要な問題となってくるのだ。

今日の世界における販売市場には限りがある。工業活動を行っている国家の数は、ひき続き増えつつある。現在ヨーロッパ諸民族のほとんどが、その領土と人口との不十分かつ不満足な均衡状態に苦しんでいるために、いずれの民族もが国際輸出志向の態勢をとっている。また最近これにアメリカ合衆国、そして極東の日本が加わった。というわけで、おのずと限りある販売市場を求めての闘争が始まり、このように工業活動を行う国家の数が増えれば増えるほど、そして逆にいえば、そうして販売市場が狭められれば狭められるほど、ますますこの闘争は激化するのである。というのも一方、国際市場を求めてもみ合う民族の数が増えていくと、ある面では自力での工業化がすすむため、またある面ではこういう諸国で純粋な資本主義的利益の面から、次第に数を増やしつつある海外拠点拡大事業システムが導入されるため、販売市場はおのずから次第に縮小していくからである。そこで次のように考える必要がある。例えばドイ

ツの造船所で中国向けの船を造る場合、ドイツ民族の利益は非常に沢山あることになる。これによってドイツ国籍を持つある数の人々の分の食糧を、すなわちわれわれの領土からは得られぬ食糧を手に入れる可能性がでてくるからである。しかしながら、ドイツの融資団体や企業が上海に、いわゆる造船所の支社を設置して、そこで中国人労働者を使い、外国産の鉄鋼を原材料として、中国のために造船をしてやっても、ドイツ民族にとっては何の利益もないのだ。たといその企業体が利子とか配当金とかという形で、ある額の一定の利益を得ているとしても、である。というのは逆にいえば、そのドイツの融資団体は何百億もの利益を得るという結果だけに終わり、反対にドイツ国民経済の立場から見れば、この分だけ造船の発注がこなくなるわけで、この融資団体が手にした利益の何倍もの額を損してしまう結果になるからである。

さて純資本主義的利益が現在の経済動向を決めはじめるほど、またなかでも一般の投資および商取引上での観点がこれに決定的な影響力を持てば持つほど、この海外拠点設置のシステムはますます広がるようになる。しかしこのせいで、既存の販売市場自体の工業化が人為的にすすめられるようになり、特にヨーロッパ本国からの輸出は困難になってしまうのである。こういう将来の展開についての見通しを笑う者がなおかつ多いようだが、このままの状態がより進行していけば彼らとて、三十年後ヨーロッパの置かれた状況に歯がみすることになるのである。販売上の困難が増えれば増えるほど、ますますこの余剰生産物をめぐっての闘争は深刻にな

っていく。さてこの闘争の第一の武器が互いに競争相手を負かそうとするための品物の価格設定と品質だとしても、しかし最後の武器はやはりここでも武力ということになる。よく経済的な平和的征服をとげるなどといいはするが、これとてこの世界が純粋の農耕民族ばかりでできていて、そこに工業活動を営む経済民族が一つだけある、という条件の下でのみ成り立つ話なのである。しかし現実に今となっては規模の大きい民族は、全て工業力を有しているのだから、よくいうところの経済的な平和的世界征服とは、実は強大な民族がこれを使用して、勝利を手に入れることができると思っている。しかしいいかえればそれでいて現実のところ、その平和的経済手段とやらを用いて他の民族を殺してしまうこともできる程度の、平和的な手段を用いて闘争を行うことに他ならないのだ。というのはある民族が経済的な平和的手段を用いて他の民族に打ち勝った結末は、実際のところ負けた方の民族の死を意味するのだからである。片方の民族は、経済的・平和的手段によって生存していくための可能性を手にし、もう一方の民族はこうして搾取されるのだ。この場合といえども、この戦いに投入されるのは、わが民族と称している血と肉という存在に変わりはないのである。

だがもし本当に力のある民族が、経済的・平和的手段では他民族を征服することはできないと思っていたとしよう。また反対に経済面で弱小民族が相手の食糧確保の道を少しずつ断って、強い民族に滅ぼされまいとしたとしよう。こんな場合、霧のような経済的・平和的なお題目は、

いずれにせよ必ずや突如消え去り、戦争が勃発することになる——すなわち今とは別の手段を用いる政治の落とし子が、これにとってかわるのだ。

だが狭義でいうところの経済活動が、民族に及ぼす危険性とは、まさしく民族の運命とは結局のところただ経済力によって決められるものだ、とたやすく思い込んでしまうことにある、といえる。そのため本当は二義的意味しか持たぬ経済力が、一義的立場に押し出され、本当についには国家の命運を決するものとまでみなされることとなり、そして民族と国家は最終的にはこの大地の上でのみその存在を保持していこうとするものなのだ、という民族の徳性と資質が失われてしまうこととなるのである[4]。

またある民族のいわゆる経済的平和的な政策が特に持った危険性とは、その政策のおかげで民族人口の増加がとりあえず可能となってしまい、あげくの果てに固有の領土からとれる生活の糧と人口とのバランスが、どうしてもとれなくなってしまうことにある。不十分な広さしかない生存圏内で人口が過剰になると、人々は各地の労働センターに集められ、あらゆる悪習、悪徳、疾病の巣となるように思える。そのセンターがやがて文化的要素から遠ざかり、むしろ民族体の膿となることによって、重度の社会的障害が生じることが少なくないのだ。そのうえ、まさにこういう場所は、混血と雑交うずまく血の溜り場となり、それによって人種の価値低下をひきおこすことが多く、またそのため、インターナショナルなユダヤ民族というウジをわか

せる。そして究極的には今後の崩壊を促進するあの膿にまみれた温床が出現してくるのである。

まさにこういうことによって、民族のもつ内的な力が、急速に消えうせ、人種上、道徳上、風習上の価値は全て、こうして滅亡へとおとしめられ、理想像はくだかれ、あげくの果てには国際市場を求めての戦いのうえで、民族が最後の最後までこれをやり遂げていくために必要な前提そのものが失われてしまうことによって、衰退が準備されるのだ。こういう民族は、破廉恥な平和主義の中で弱体化し、自ら生産した品物を売るために血をもってこれに尽くそうとする体制は衰えていってしまう。同様に、経済的平和的手段にとってかわって、あるより強い存在が、政治権力の実権を握るようになり、こうした民族は崩壊の一途をたどるのだ。さらに自ら犯した過失の報復が、こうした民族を襲ってくる。人口過剰になり、本当の前提条件が全て失われてしまった今、その民族にはもはや、あふれかえった大衆に十分な食糧を確保してやるすべもなく、敵の束縛を跳ね返す力もなく、わが身にふりかかった運命をきちんと忍んでいくだけの内的価値もなくなってしまっているのである。彼らはかつて暴力を否定する経済的平和的活動のおかげで生きていくことができると思い込んでいたのだ。この身にふりかかった運命によって、民族というものは、その人口と生存圏との均衡状態がある特定の自然な、健全な関係にあるときにのみ、存続していけるのだということを、身につまされて体得することだろう。さらにこの両者の均衡状態を時々に応じてチェックしていかねばならぬこと、そしてこの均衡

状態が領土の面について悪化してきたならば、人口に合わせるようにその分だけ領土を獲得せねばならぬということをもだ。

そのためにはもちろん、民族が必要とするものは武器である。というのは領土獲得は常に、武力をこれに投入することによって達成されるからである。

政治改革の課題が民族の生存闘争を実行することだとするならば、民族の生存闘争とは、結局のところその時々の人口に合わせて、その食糧を調達するのに必要なだけの場所を確保することになる。だがしかし、その過程全体が民族の力を投入するうえでの問題となるわけだ。したがって最終的には次のように定義することができる。

政治とは、ある民族がこの現世での存続を求めて行う生存闘争を実行していくうえでの技術である。

外交政策とは、その民族にその時々に必要なだけの生存圏を、大きさと質の両面から確保するうえでの技術である。

国内政治とは、かかる生存圏確保のために必要な、投入可能な力を、その人種面での価値および数量の両面から、民族に備えさせるうえでの技術である。

# 第三章　民族の価値と平和主義的民主主義

　ここで私は、力というと、たいていが国民の兵器保有量のことだけを頭に浮かべ、またおそらく少しは力イコール組織としての軍隊である、ともとらえているあの市民的な考え方と対決するのだ。もしこういうことを唱える人たちの物の見方があたっているのならば、すなわちこのように、民族の力が本当に民族の持つ兵器保有量と軍隊そのものであるとしたならば、もし何らかの理由でこの軍隊と兵器とが失われてしまったら、その時点でその民族は片付けられてしまうことになるはずである。だがこういうことを唱える市民的政治家たちとて、実際本当にそうなると思ってはいないのだ。しかし確かに自らそれを疑っているからこそ、兵器と軍隊組織とは所詮取り替えのきくものであること、したがって第一義的性質を持つものではなく、さらにこれらを超越し、同時に少なくともこれらの力の源泉ともなる何かが存在するということを、この者たちとて認めているわけなのだ。実際その通りなのだ。兵器と軍隊組織とはそもそ

も破壊され得るものであり、また取り替えのきくものなのだ。今のところは確かに兵器と軍隊の意義は非常に大きいものであると思われているが、長期的視野から見れば、その意義とて非常に狭く限られたものに過ぎない。民族が生きていくうえでは、結局のところ自らが有する自己保存の意志と活発なる活動力が、その全てを決めることになるのだ。兵器は錆び、隊形は時代遅れになる。だが意志だけはこの両者を何度でも復活させることができるし、この意志のおかげで、民族はその時点の危機に即応した形で兵器と隊形とを手にすることができるのである。われわれドイツ人は自らの兵器を引き渡さねばならなかったわけだが、物質的な面を見た限りでも、私に言わせれば、別にたいしたことではなかったのである。しかしながらわが市民的政治家諸君はこのことばかりを気にしている。兵器を引き渡してしまったために意気消沈するといっても、それはたかだか兵器引き渡しが行われる際に付随しておきた状態だとか、そのときに懐いた考えだとか、そのとき経験したみじめなやられ方だとかによるものに過ぎないのである。われわれの軍隊組織が破壊されたのも、これを上回ってひどいことのようにとらえられている。だがこの一件にしたとて、これによって生じた本当の不幸のポイントがどこにあるかと言えば、それは別に武器をとる人間の組織が一掃されてしまったことをどうこう言うのではなく、むしろわが民族を一人前に教育する機関——すなわちこの世でどの国家にもなかった、またどの国家よりもわがドイツ国家が切実に必要としていた機関が廃止されてしまった、という

ことにあるのである。わがドイツの旧軍隊が民族を一般に教化するうえで、あらゆる分野における好業績を挙げたその功績は、計り知れないものである。まさにわが民族では、内部の人種的分裂状態のために、ドイツ民族としての各種の特性、例えば、危急時における堅固な団結心というようなイギリス人を際立たせている特性が失われてしまったと言われているが、他民族では生まれつき、本能的に根付いているこういう素質の少なくとも一部が、軍隊による教育の過程において培われてきたものなのである。何かにつけて社会主義について語りたがる人間には、最高の社会主義的組織とは、何をさておきドイツ国民軍であったのだ、という事実が分かっていない者が多い。典型的な資本主義的素質を持つユダヤ民族が、地位や威厳や栄養すらも金銭ではなく功績によって与えられる組織、ある特定の業績をなした人に与えられている栄誉自体が、資力や財産を持っていることよりも高く評価される組織に対して、激しい憎しみを持つのも、これに関係していることなのだ。すなわちこれはユダヤ人にとっては縁がないと同時に、危険であるとも思われている考え方なのである。またこれが国民の持つ普遍的財宝であるならば、これは今後もおこるかもしれないユダヤ人がしでかす危険に対抗する、免疫力のある防御策を表すであろう。例えばもしも軍隊において、将校の地位が金で買えるとしたら、これはユダヤ民族にとってはよく分かる話となるのであろうが、まったく資力のない人間とか、他の人が受け取る収入のうちのほんの一握りにしかあたらぬ金しか稼がない人間を栄誉で包ん

でやる組織は、ユダヤ民族には分からないもの、しかり、ひどく不可解なものなのだ。こういう人間はユダヤ人組織では栄誉も与えられないし、評価もされないからである。だがまさにこの点に古来からの比類のない組織構造の強さの本質があるのだ。もっとも平和であったこの三十年間に、この強さは残念なことに次第に衰えてきているようであるが。特に貴族出身の独身将校がよりにもよってデパートのユダヤ女などと結婚するということが流行ったがために、おぞましい危険性が旧軍隊に生じたのだ。こんなことがもしそのまま同じように続いていたなら、邪悪な結末が生ずることとなっただろう。とにかくこんなことはカイザー・ヴィルヘルム一世の時代には理解される余地がなかったことなのだ。だがあらゆることをひっくるめても、とにかく世紀末にはドイツ軍は世界で最も壮大な組織となったし、それがドイツ国民にもたらした効果というものは、至福を上回るものがあったのである。ドイツ人の規律、ドイツ人の有能さ、筋の通った信念、堂々たる勇気、思いっきりのよい無鉄砲さ、芯の強い不屈の精神、石のごとく固い忠誠心、これらは全てここで養われたのだ。そして身分ある人々が持つ名誉を重んずる考え方が、ゆっくりとしかもそれとは気づかれぬように浸透し、次第に民族全体に共通した財宝となっていったのである。

この組織がヴェルサイユ条約によって破壊されてしまったということは、われらドイツ民族にとって非常に悪い影響をもたらした。何しろついには民族内にいる内なる敵がその邪悪なる

意図を自由に発揮できるようになってしまったし、また無能な市民たちではそもそも才能もなく、とりあえず役に立つ能力もないために、この組織を最もプリミティヴな形で肩代わりすることすらできなかったからだ。

そしてなおいうまでもなくドイツ民族は、兵器とそれを手にする軍人をも失ったのだ。だがそんなことは民族がたどる歴史の流れにおいては、数えきれぬほどおこる話であるのだ。もっとも今回の事態の根底にある理由を度外視しての話ではあるが。逆にいえば、剝奪(はくだつ)された兵器や、壊された組織形態を新たに作り出したり、編成し直したりすることほど、簡単に取り返しのきくことはないのである。取り返しがきかないのは、民族の血が腐敗してしまうことと、内的価値が滅びさってしまうことなのである。

ヴェルサイユ条約によってわれわれの民族は、兵力を喪失してしまった、というのが今日の市民的な考え方であるが、私は次のような理由からこれに異議を唱えることができる。すなわち、本当の意味での兵力喪失とは、われわれが平和主義的民主主義に毒されることをいうのであり、またわれわれの民族の持つ最高の力の源泉を破壊し、そこに毒を投げ込む国際主義に侵されることをさすのである。というのはわが民族の力の源泉は、全て保有する兵器でも軍隊組織でもなく、民族の内的価値、すなわち人種的意義、つまり民族自体が持つ人種的価値によって一人一人の持つ人格的価値が非常に高いことによって、また自己保存を考えるうえでの健全

なる意識によって代表される内的価値なのであるからだ。

われわれが国家社会主義者として、民族の本当の力とは何か、というこうした見解をひっさげて公の場に登場したならば、今日では世論全体がこれに反対するだろう、ということはよく分かっている。しかしながらこの点が実際、他の者たちと世界観を異にする、われわれの新しい教説の最も深く意味することなのだ。

同時にわれわれは、民族というものはそれぞれに違うものであり、また民族の価値というのもそれぞれの民族によって違うものだ、という原則から出発している。このように民族の価値がそれぞれに違うものということは、したがってそれぞれの民族は、総計した価値としての人口数とはまったく無関係に、特にその民族にしかない特有の価値、すなわちその民族だけがもっており、他の民族とまったく同一であることがない価値というものをもっているということである。この、その時々に現れる特別の民族の価値というものの成果にはさなざまな出かたがあるだろうし、またさまざまな分野で出てくるだろうが、しかしこれを総括してみれば、ある民族の普遍的評価の基準一般が、結果として生まれてくるのである。この普遍的評価が最終的に現れてくるものが、民族の歴史的文化像なのであり、そこには民族の血の価値を全て合わせたものが反映し、その民族の血の中に結合している人種上の価値が反映されるのである。

しかしこの特別なる民族の価値とは、まったく唯美的文化面における価値をさすのではなく、

普遍的な生命の価値そのものをさすのである。というのはこの生命の価値とは、そもそも民族の生存そのものを作り出しているものであるし、またそれを組み立て形作っているものであり、またそれゆえ民族の生存上の障害を克服していくのに必要なあらゆる力全てを生み出すものであるからだ。人間という立場から見れば、文化的と呼ばれる行為は実際のところ全て、今まであった野蛮行為を打ち負かすことであり、文化的と呼ばれる創造は全て、人間が今まで引かれていた境界線を踏みこえていくうえでの手助けとなり、まただからこそこうしようとする人間の立場を強めてやるものなのである。だから民族の持ついわゆる文化的価値の中にも、実際に生命維持への力があるといえるのだ。したがって民族の内的諸力がこういう方向へ伸びれば伸びるほど、それだけ生存闘争をしていくうえでのあらゆる分野において、生命を維持していくための無数の可能性も強化されていくのである。それゆえ、その民族の人種的価値が高ければ高いほど、その分だけ普遍的な生命の価値、すなわち他の民族と闘争したり、戦ったりする際に、自民族の生存に有利になるように働く生命の価値は、大きいということになるのである。

もちろん民族が持つ血の価値の意義とは、その民族がちゃんとこれを認識し、これをしかるべく評価し、しかるべく重んじて初めて、百パーセントその効力を発揮するようになるものである。だからこの価値を把握していない民族とか、先天的本能が不十分であるためにこれを感じとれなくなっている民族は、そのためにすぐさまその価値を失いはじめているといえるのだ。

混血や人種価値の低下とは、いうまでもなくそもそもいわゆる外国かぶれによって、実際のところこのように自民族の文化的価値を他民族の文化的価値とひき比べて、自分の方を低く見積もってしまうことによって、ひきおこされがちな結末なのである。もしも他民族の生存の表現にその目を向けようとするあまり、ある民族が自分の血そのものによって決まる民族固有の精神生活の文化的表現を認めようとしなくなったならば、またそれどころか恥であると思いはじめたら、この民族はこうすることで、その血のかもしだす調和の中にひそみ、そこから芽生える文化生活の中にある力そのものを放棄してしまうことになるのだ。こういう民族はやがてはバラバラになり、世界像を評価するのも自分の意見を述べるのも、おぼつかなくなり、自民族の目的をかなえていくための認識も感覚も失って、ついにはそのかわりに国際主義的な物の見方や観念の混乱の中へ、またそこから発生する文化の混沌の中へとその身を沈めることになるのである。ところがユダヤ人は、どのような形でも他民族の中に入りこんでいけるのだ。このインターナショナルな害毒と退廃の師は、その対象となった民族を徹底的に根絶やしにし、腐敗させるまで留まることを知らない。そして最後には、この狙われた民族の今まで統一のとれていたある特定の人種的価値は失われ、最終的な衰退が口をあけて待ち受けることになるのである。

それゆえまた、あらゆる人種的価値を保持している民族といえども、たとえ人種的価値がま

ったくおびやかされていないとしても、その民族がその価値を意識して、注意を向けることを怠ったり、極めて入念にこれを保護しなかったり、望むことは全てまずその価値を土台にし、その上に築きあげるようにしなければ、その価値は何の効果も発揮しないのだ。

だからこそ国際主義的根性は、この価値の天敵とみなされねばならないのだ。こんな国際主義的精神によるのではなく、自らの民族の価値をその信条とすることによって、民族がどう生存し、どう行動するか、を実現し、かつ決定していかねばならないのだ。

だが民族の価値といっても、そこでいくら民族の規模と意義とを決定する本当の永遠に通用する要因が求められたとて、その民族の眠れるエネルギー、眠れる才能が目を覚まさぬ限り、この価値の効力を全て発揮させることは難しい。

というのは、その民族内部の人間が均一化した平均値を持たず、バラバラな人種的価値の持ち主から成り立っているような場合、民族内部における個人としての価値が、他のメンバーの持つ価値と同一である確率は、それだけ減ってくるからである。民族の行う行為というもの——こういう行為は常にある一分野について行われることが多いが——は、全てあくまで個人が創造的に活動した結果であるのだ。普遍的願望というものは、その使命を遂行するために民族の中から特に選び出された人間がとる行動によって達成されるものであるからこそ、苦境というものは、それをこうむっている人間がそこからの解放を切望することによってのみ、取り除

かれるのである。そもそも多数者が創造的成果をあげたことなど、一度もなかったのだ。一遍として多数派が人類のためになる大発見をしたこともなかったのだ。個々の人間が常に人類の進歩を作り出したのだ。ここにある特定の内的な人種上の価値を持つ民族があり、この民族のあげた文化的もしくはその他の業績の中に、その民族の持つ価値一般が目に見えて表れているとしよう。こういう場合、この民族には、そもそも最初から個人の価値というものが存在していたに違いないといえるのだ。何しろ個人の価値が欠落していたり、創造的活動が行われていないのだとしたら、そんな民族の文化が描き出されることはないのだし、また描き出されなければ、そこからその民族の持つ内的価値がいかなるものであるか、帰納的に推論するすべもないはずであるからだ。ここで私は民族の持つ内的な人種上の価値について述べているわけであるが、私はこの価値を現在目の前にある業績全体から評価しているのであり、またそうすることによって同時に、それぞれの個人が持つ価値――すなわちその民族の人種上の価値を代表する者として行動し、そして文化像を作りあげてきた個人の持つ価値――というものがその中に存在している、ということを確認しているわけでもあるのだ。すなわちこうしてみると、人種の価値と個人の価値というものは、そもそも非常に結びついた形で表れるものであるのだ。何しろ人種的に価値のない民族では、少なくともその血筋からは重要な創造力を有する個人は求め得ないからである。ということは逆にいえば、創造力のある個人およびそういう個人があげ

た業績が欠落している状態では、今現在の人種上の価値など推論できるわけがない、ということなのだ。また反面、民族というものは、その組織や民族共同体や国家の構造形式の出来上がり方によっては、個人の価値が発揮されるのを促進したり、また少なくとも発揮しやすくさせてやったり、さもなくばこれを妨害することもできるものなのである。

もしある民族が、生存していくうえでの指導者の座を多数者の手に渡してしまったならば、すなわち現代の西欧の概念である民主主義を取り入れる限り、個人の考えが持つ意義が破壊されてしまうばかりでなく、個人がその価値を発揮しようとしても、横やりが入れられるばかりの状況が作り出されることになるであろう。このようになった民族は、その形式的構造をテコにして、創造力のある個々の人間が出現したり、何かを成し遂げたりするのを妨害するものなのだ。

というのはまさにこの点が、今日圧倒的な力を占めている民主主義、議会主義のシステムがもたらす二重の災いなのであるからだ。何しろこのシステムは、それ自体本当に創造性にあふれた業績をあげる能力を持たないというばかりでなく、平均的レベルを何らかの形ではるかに上回っている人間が成長し、またそれにより何かを成し遂げようとするのを妨害するものであるからだ。いつの世においても、一般的な愚かさ、不完全さ、臆病さの平均レベルを超えた大きさを持つ人間——そして横柄な言動という面でも平均を超えた大きさを持つ人間とは、多数

者にとっては、最も恐るべき存在に見えるものなのだ。またさらには、この民主主義の手にかかると、価値の乏しい人間がほとんど合法的な方法で指導者にならされてしまう恐れもあるわけだ。それゆえこんなシステムが何らかの制度に関して徹底的に利用されたならば、指導者集団全体の——その時点でそもそもこういうことを語ることができればの話だが——価値を失わせることになるのである。これはそもそも民主主義という概念が、責任の所在がないというところに根ざしているのだ。多数者とは、どういう形でも責任を背負い込ませようのない、何かこう把握しようのない存在なのである。この多数者によって擁立された指導者などは、所詮(しょせん)、多数者の意志を遂行する手先に過ぎないのだ。そういう指導者の行う職務といえば、独創的な計画や着想を生みだして、それを既存の行政機関をテコにして実施させようとする、というよりも、むしろある特定のもくろみを実行するのに必要な多数者を、その時々に集結させる程度の職務としかなりようがないのである。しかしそうした際には、多数者がその計画に顔を向けるよりも、計画が多数者の顔色をうかがうことの方が多いのである。すなわちたとえこのようにして行った行為の結果がどう出ようとも、これに対して誰が責任者であるのかがどうもはっきりつかみどころがない、という仕組みになっているのだ。これは実際決められたあらゆる決定事項が、いずれにせよ無数の妥協の産物であればあるほど、事態はますますつかみどころがなくなってしまうが、そうした妥協というものは、民主主義の性質上、またその中身上にも表

れているものなのである。こういうときはいったい誰に責任をとらせるべきだというのだろう。しかし純粋に個人レベルでの責任というものが一掃されてしまったならば、それと同時に強大なる指導的立場の発生を促す余儀なき理由がなくなってしまう。非常に広範囲にわたって、個々の人間の権威と責任とをその基礎として成り立っている軍隊組織と、今われわれがとっている民主主義的市民制度とを比べてみるがよい。またそれを特に双方の指導者がどの程度修養をつんだ人間であるかについて、比較してみるがよい。その違いに仰天するに違いないのだ。何しろ一方は勇気のある、進んで責任を取る気概のある、任務を遂行する能力のある男たちの組織であり、もう一方は、臆病で、責任を取ろうとしない能なしの集まりなのだから。実に四年半、ドイツの軍隊組織は強力なる敵集団に対し、いかなるときでも持ちこたえたのだ。だが民主主義にふやけきった民間の国内指導部は、たかだか数百人のルンペンと脱走兵がしかけてきた文字通りたったの一撃で、もろくも崩れてしまったではないか。(1)

ドイツ民族が本当に偉大な指導的政治家を欠いているということは、われらの公的生活をゆっくりとむしばんでいる民主主義的、議会主義的システムによって見られる無秩序な分解に最もはっきり表れている。

今こそ民族が決定すべきときなのだ。多数者をとるか、指導的政治家をとるか、なのだ。両方一緒というのはまったく矛盾する。確かにこの世における偉大なものを今まで創造し、今な

お創造しているのは、指導的政治家なのであり、そしてその創造の大半が多数者によってなんなく破滅させられてきたのだ。

民族が自分たちが持つ一般的な人種上の価値を基礎にして、まさに本物の指導的政治家を生みだすことができるのだ、というまっとうな希望を持つことはできよう。だがそうした場合、その民族は民族の持つ構造の出来上がり方によっては、人為的にではなく、そうだ、計画的にこういう指導的政治家が力を発揮しようとするのを妨げたり、愚かさの壁をこの人々の前に立ちはだからせたり、簡潔に言えば、活動させないようにしてしまう慣例を求めざるを得なくなってしまうのだ。

とにもかくにも民族の最も強力な力の源泉の一つがうめられてしまうのである。

民族の力を構成する第三の要素とは、その健全で自然な自己保存本能である。この自己保存本能からさらに、ある民族だけで生存闘争を続けようとする数々の雄々しい徳性が生ずるのである。だが民族の利益を代表する国家指導部といえども、その民族自体が臆病で貧弱なあまり、その利益のために自ら動こうとしなければ、あえて大成功をおさめようとはしない。が、どんな国家指導部であっても、特に指導部が民族の身につくようにしているわけでもない英雄的精神を、その民族が持つようになるのをただ待っているだけではいけないのだ。既存の民族の価値が、国際主義によって傷つけられ弱体化するように、また個人の持つ価値が民主主義によっ

て破壊されるように、民族が持つ自己保存本能という自然の力は、平和主義によってこのように麻痺させられていくのである。

この三つの要素、すなわち民族の価値そのもの、既存の個人の価値、そして健全なる自己保存本能、この三つこそ賢明で大胆な国内政策をとることによって、民族が自己主張をしていくのに必要となる武器を、たえずそこからくみあげることのできる力の源泉なのである。このようにしていけば、軍隊制度とか兵器技術の問題に関しても、また自由とパンを求めて行う苦しい闘争において、本当に民族の側に立った立場での解決策が常に生まれてくることになるであろう。

民族の内政を司る指導部が、この観点からはずれてしまっていたり、闘争を行うには、ひたすら兵器の面で、装備をととのえねばならないのだと思い込んでいたとすれば、こういう指導部は、とにかく勝手に目先の成功を追おうとすることだろう。だが実際こういう指導部を持った民族に、もう未来はない。だからこそこの世の真に偉大な立法者、政治家たるものの任務とは、戦争に備えてごく限られた範囲で準備をすすめることではなく、民族を内面的に鍛え上げ、教育し、人間のあらゆる理性を用いて民族の将来がほとんど法則的に確固たるものになるようにすることなのである。そうすれば個々の戦争の性格というものも、多かれ少なかれ暴力的な奇襲戦法的なものではなくなり、根本的な、基礎のしっかりした、また恒久的な民族の発展と

いう自然の、しかり、わかりきったシステムの中にとけこんでいくことになるであろう。
現在の国家の指導部がこういう見地を軽視しているのは、確かにある部分では民主主義、すなわちその指導部の今があるのもそのおかげ、という民主主義の本質にも原因があるのだが、もう一つ、国家というものが、ある特定の民族の利益を最大限にはかるものであらねばならぬところを、指導部を自己目的と見るというまったく形式的なメカニズムになり果ててしまっている、というところにも原因があるのだ。今や民族と国家とは別々の二つの概念となってしまっている。だからこそ国家社会主義の活動の責務は、今やこうしたドイツを根本的に変革することにあるのである。

# 第四章　ドイツ外交政策の批判と具体的提案

したがって国内政策の課題が——当然のことながらいわゆる日常の問題を充足させることだということはさておいて——民族の持つ内的価値を計画的に保護し、かつ高めることによって、民族統一体を鍛錬し強化することでなければならないとすれば、外交政策の課題とは、民族統一体を内部から訓練する作業を、外部に隠し、また生存の一般的前提条件を生み出し、かつこれを確立するのを手助けすることである。その場合健全な外交政策とは、民族の食糧確保に必要となる基本条件を入手することを、常に確固たる最終目標としてとらえるものでなければならない。つまり国内政策とは、民族の外交政策上の主張ができるよう民族に内的な力を確立し、外交政策とは、民族が国内政策を展開するために民族にその生活自体を確保するものなのだ。だから国内政策と外交政策とは、このうえもなく密接に互いにかかわりあっているどころか、互いに補足しあって作用すべきものである。人類の歴史という大いなる時の流れにおいては、

国内政策でも外交政策でも、今述べてきた以外の原則にそって行われた事実はあるが、それが正しかったという証明になるわけではなく、むしろそこではそういう行為が間違っていたということが、立証されるに過ぎないのだ。前に述べた基本的原則を守らなかったばかりに、われわれにとって警告的な例ともなる無数の民族や国家が滅亡したのである。生きている中で、人間が死の可能性について考えることがいかに少ないかということは、注目に値するものがある。また人間は個々のケースをとりあげてみても、生存について、無数の先人たちがずっと昔にやらねばならなかった、またどんな人間でもよく知っている経験に合わせて考えることが、いかに少なかったことか。こういうことを頭にとめ、その人格の価値によって、過去の経験を土台とした生活の掟を仲間の人間に守らせようとする者は、常に例外的存在でしかないのだ。こういう場合の注目すべき例として、結果的には民族の繁栄につながるのだが、一つ一つをとると煩わしい数多くの衛生上の措置の話をあげてみよう。こういう措置は、個々の人間の専制的意義の力で、公衆がこれを守るよう押しつけられるべきものなのだが、一旦個人という権威が民主主義という大衆の妄想にとってかわられるやいなや、すぐさまその場で立ち消えになってしまうのだ。平均的人間は死に対し最大限の恐怖感を持っているくせに、実際にはほとんど死ということ自体を考えていない。が、卓越した人間は、死ということに強烈に心を奪われているにもかかわらず、それを少しも恐れはしない。すなわち片方の者は、やみくもに無為に日々を

過ごし、そして罪をおかし、ある日突然、死という全ての征服者の前でくずおれるのだが、もう片方は死が訪れるのを注意深くとらえ、とにかくそれを受け入れ、これを静かに見つめるのである。

民族の生存という問題に関しても、それとまったく同じことがいえる。人間にはいかに歴史から学ぼうとする姿勢が欠けていることか。いかに無頓着に自らが愚かにも、自分にしてきた経験を、単にまたいで通り過ぎてしまっていることか。その過ちのせいで今までに幾つもの民族や国家が滅亡し、そのうえこの地上から消え去っていったかという事実をまるで頭にとめることなく、いかに軽率に過ちをおかしているかを知ろうとしないか、を見るとぞっとすることが一度や二度の話ではないのである。とにかく、なんと人類は、今われわれが歴史的に把握できるほんのわずかな時間帯においてさえ、幾つかの国家や民族が、往々にしてほとんど巨大ともいえる規模にまで発展したあげく、二千年後には跡形もなく消滅してしまっているという事実、幾つもの世界的強国が、文化圏を支配してはいたが、今となってはその巨大都市が廃墟と化したという伝説しか残っていないという事実、現在の人間にとっては、少なくともその本拠地を示す瓦礫の堆積がかろうじて残されているだけという事実に心をとめようとしないことか。だが、生ける個体としてこれらの出来事の担い手であり、犠牲者であった何百万人という人間一人一人が持っていた憂慮、辛苦、苦悩は、今やほとんどわれわれの考えからかけはなれてし

まっている。歴史上の無名の人々、無名戦士たちがそれである。そして実のところは今、いかに無関心であることか。永遠の楽観主義がいかに根拠のないことか。故意の無知、直視したがらぬ者、学習意欲なき者たちが、いかに破滅を呼ぶもととなることか。一般大衆次第であるならば、子どもの未知の火遊びはまた、このうえもなく広範囲にわたって絶え間なくくりかえされるであろう。だからこそ民族の教育者として招聘(しょうへい)されたと自覚する人間は、大衆の物の見方、理解の仕方、無知あるいはまた拒否には目もくれず、歴史から学びとりそしてその知識を今や実地に役立たせることを、その責務とすべきなのである。人間の偉大さとは、一般に広まっている有害な考えに対抗して、自分のもっとよい見識を一般の勝利へ導こうとする勇気が大きければ大きいほど、ますます意味のあるものとなるのだ。その勝利は、克服しなければならない抵抗が激しければ激しいほど、またその闘争が何よりもまず勝ち目がないと思われればそれだけ、ますます大きな勝利となって現れてくるのである。

国家社会主義運動が、もしこれに過去の経験から学ぶ勇気がなかったり、あらゆる抵抗をものともせずその経験の中に現れている生存の掟を、ドイツ民族に押しつけようとする勇気を奮い起こしていなかったとしたならば、この運動もドイツ民族生存上、真に偉大な出来事とみなされようとする権利をもち得なかったことだろう。さらにまた内部の改革運動が強力になるほど、ドイツ民族が食べていく分の食糧基盤を確保するための外交活動が成功しないならば、永

久にわが民族の真の再興はあり得ないのだということを、この場合国家社会主義運動は忘れてはならないのだ。だからこそ国家社会主義運動は、言葉の最高の意味での自由とパンを求める闘争者となったのである。自由とパンとは、言ってしまえばまことに単純極まるものだが、民族のために与えることのできる最も声を大にして叫ばれるべき外交政策上の合言葉なのである。すなわち自由とは、民族の生存をその利害に基づいて秩序だて、かつ調整することのできるものであり、パンとは、その民族がまず生存していくために必要なものなのである。

さらに私が今日、わがドイツ民族の過去および現在にわたる外交政策の導き方を、批評する者として所見を述べるうえでの話であるが、私が今気づいている政策上のミスは、やはり過去においても別の批評家の目によって、ミスであると判断されていたのだということは、私もよく分かっているつもりである。ただ今までの批評家はほとんどの場合、実際のところ最後をどうしたらよいかを考えずに、単に批評精神から気づいたことをいじくっているに過ぎなかったのだ。しかし私の場合は昔のドイツ国内および外交政策上のミスや、錯誤を洞察したところから、変更すべきところ、改良すべきところについての実際の案を出し、さらに他日この変更や改良を実行に移すことができる手段をも作りあげようと努力しているのである。おそらく私が過去の批評家たちと一線を画すのは、このところなのだ。

例えばヴィルヘルム時代(1)の外交政策を、多くの場合少なからぬドイツ人が、危険な政策だと

感じ、それゆえに不吉なものだと特色づけた。特に当時の全ドイツにちらばっている諸団体からは警告――その警告という言葉がこのうえもなくふさわしかったのだが――が数知れず発せられた。私自身としても、当時どのようにして、また何のせいで民族が没落していったか、またそれでいてどうするすべもなかったかを見るにつけ、このとき必死で警告を発していた人々が落ち込んでいた悲劇的雰囲気にひたりこむことができるほどである。まことにひどい外交政策がとられたこの戦前の最後の十年間、ドイツには議会、したがって民主主義があった。すなわち帝国の政治指導を司る人物を決めるだけの力もない民主主義があったのだ。確かにその当時は揺るぎもしないフォーマルな存在であった皇帝の権力というものも、まだ存在してはいた。しかしただ民主主義の及ぼす影響というやつだけが、やたら強くなっていて、皇帝の決定が特定の方向へ動くように、ほとんどお膳立ができてしまっていたように思えるのである。だからその効果たるや、まったく手のつけられぬものとなってしまった。すなわち国民的意識で当時警告を発していた人々は、ある面では声を大にして語られる民主主義の動きに対抗せんと、自ら責任の重い部署に就こうとしても、もはやそうできる見込みはすでに消え失せていたし、また逆から見れば、持ち前の愛国主義的精神からして、皇帝陛下に対して反対するという最後の手段を持ちだして、挑みかかるということは到底できることではなかったからである。戦前のドイツでは、ローマへ行進するという考えが出されたとしたら、まったくの馬鹿げたこととし

て扱われていたことであろう。かくも国粋主義的な反論を行うことは、このうえもなく最悪な状況にあった。とはいえ民主主義はまだ勝利を手中にしてはいなかった。だが民主主義は先刻君主主義国家観に対する猛烈なる闘争にその身を投じていたのである。民主主義が仕掛けてきたこの闘争に対し、君主国家が出した答えは、結局、その身を消滅させてしまうという決定ではなく、むしろ永遠に続く譲歩という形で表れたのであった。当時は、この民主政体と君主政体という二つの組織のどちらかに反対する立場をとった者も、この両者から襲撃を受ける危険を背負い込んでいたのだ。すなわち国粋的理由から皇帝の下した決定に反対する者は、愛国主義の立場から排斥をくらい、また民主主義の立場からも誹謗(ひぼう)された。逆に民主主義に反対する主張をする者は、民主主義から攻撃を受け、愛国主義者からも見捨てられることとなったのである。しかり、こうする者は皆、自ら犠牲になることによってエホバの御意にかなうことができ、そうしてしばらくの間はユダヤ・ジャーナリズムの暴徒の口をふさぐ、という涙ぐましい希望を持ちながら、ドイツ政権の手によってこのうえもなくひどい裏切りを受けるという危険をおかしていたのである。何しろ当時の状況たるやこのような有様だったため、民主主義の意図に反したり、皇帝陛下の御意に反しても、帝国指導部の責任ある役職に就くとか、またそうすることで外交政策の進路を変更できるとかいう見通しは、皆無となっていたのである。この結果、ドイツの外交政策に異論があれば、もっぱら新聞紙上で主張するしかないという事態が

おき、したがって外交政策の批評は皆同じようになり、長いものであればあるほどますますジャーナリスティックな性格を帯びざるを得ない、というところにまで立ち至ったのである。だがこういう風になってくると、どの批評も実現可能な要素が実際のところ乏しいために、積極的な提案は次第に重要視されなくなり、逆に純粋批評的な考察は、おびただしい非難のきっかけを与えるようになった。この非難たるや、こうして責任は重いくせにお粗末な内容の政府を崩壊させようと望んでいる人々の手によって、いっそう念入りな形で行われるようになっていった。だが結局、これらの当時の批評家も政府打倒にまでたどりつくことはできなかったのである。すなわち崩壊したのは当時の統治体ではなく、この統治体のせいでドイツ帝国、ひいてはドイツ民族が崩壊してしまったのである。当時の批評家が何十年もの間予言してきたことは、見事に的中したのだ。二十年もの長きにわたって崩壊を予言し続け、そしてその声を聞いてもらえもせずに、同時にどうすることもできないという運命を背負い込み、そのままわが民族の悲劇的破局をともに体験せねばならなかったこれらの人々のことを思うとき、深い共感を覚えずにはいられない。

年が経つにつれ次第に年老い、悲しみにやつれ、辛酸をなめはしたが、だがどうにかせねばならぬという意気に燃えて、皇帝の統治が倒れた後、これらの人々はドイツ民族再興のために、自分たちの力をこれに及ぼそうとした。いろいろな理由からこれも結局は、徒労に終わる憂き

目を見ることとなったのだが。

革命が皇帝の幹部を粉砕し、民主主義を王座につけたとき、当時の批評家たちには民主主義を打倒すべき武器——すなわちかつて民主主義が皇帝の政府に影響を及ぼし得たときほどの武器が、なかったのである。何十年も活動を続けてきた中で、問題をあまりにも純学術的に取扱うことに照準を合わせてきたため、これらの批評家たちには、街頭での叫びにのみ反応が示されるというような、情勢にそくした表現力を、自分たちの意見の中に取り入れる、という現実的な力を行使する手段が欠けていたばかりでなく、また彼らにはそれが有効に働く場合には、紙に書いた抗議の大波よりも力を発揮するに違いない力を表現する組織に近づく能力も失われてしまっていたのである。これらの批評家たちは皆、今までの古い政党の中に帝国が衰退するきざしとその原因がひそんでいるのを、すでに見取っていた。だが彼らの心の中の清浄な感情においては、政党ごっこをしたいという土台無理な要求は、敬遠せねばならなかったのである。確かに彼らは多数の人々から支持を受けるような可能性があるときだけ、自分たちの意見を実際に貫徹できたのである。彼らが諸政党を幾度も幾度も粉砕しようとすれば、他政党粉砕を目的とする政党を、あいかわらずまさしく自分たちの手で作らねばならなかったのである。これが結局実現にまで至らなかった理由は、しかしまだ他にもある。すなわちこれらの批評家たちの政治的抵抗が、一旦非常にジャーナリスティックに変化するようになればなっただけ、ますます

ます当時のシステムの弱点を全て暴き出し[2]、外交政策上の措置の失策を白日のもとにさらす、という批判活動に終始するようになってしまったのである。個人として責任を取る必要がないというだけで、積極的な提案を出すことはおろそかにされ、当然政治活動においてその表と裏とを持っている取引が存在しなくなったのである。そもそも完全に満足だとみなすことができる外交上の総合判断などありはしないのだ。当時そういう状態だったので、おしなべて無能とみなされている統治体を一掃することを主要課題とせざるを得なかった批評家は、こういう統治体のおこす行動を、批判的に役立つように考察することにしか、積極的提案をおこしていくきっかけがなかったのである。そしてこうした積極的提案など、この手の批評家にしみついている疑念のために、批判的解明を容易に引き受けることができたのだろう。つまり批評家というものは、批評に負かされてしまう恐れのある提案などを持ち出して、自分の批評そのものの持つ意義を弱めてしまうようなことを決してやりたがらないものなのだ。こうして当時の国民の抗議の代弁者らは、次第に純粋批判的思考をするのが血となり肉となってすっかり身についてしまい、そのせいで、今もなお国内政策でも外交政策でも批判的に考察したり、単に批判的に取り扱ったりしているのである。彼らの大半は、今日でもまた国内政策上にせよ、外交政策上の話にせよ、ある面では自分自身確信と決断がなく、またある面ではそうすることによって、敵方の行う批評そのものに安っぽい素材を提供することになるのではと危惧するために、簡潔

にして明瞭な積極的結論に達することができない評論家のままにとどまっている。だから多くのことに関して改善したいのはやまやまだが、とはいえそこへの一歩をどうしても踏み出す決心がつかないということになる。というのは、一歩を踏み出したら踏み出したで、完全に期待通りでない、疑わしい要素を持っている、要するに批評家自らも認め、それでいてその存在に脅かされている影の一面が、その一歩にはあるからである。だが、民族体に深く根づいた重い病を癒すときには、完全に無毒な処方箋を書くことが問題なのではなく、毒をもって毒を制することであることが少なくないのである。致命的と分かりきっている情況を一掃するために、なにがしかの危険をはらんだ決断をもあえて実行し、成就させる勇気を持たねばならない。批評家としての私には、外交政策上可能なことは全て実行してみる権利があり、そしてその外交政策上の疑わしい面や可能性を一つ一つ徹底的にもみくちゃにする権利がある。そして歴史を作り出そうとする政治的指導者としての私は、たとえ真面目な思慮の声が、その道にもある危険がつきまとうとか、その道を通ってもおそらく完全に満足のいく結果は得られないとか、いくらささやきかけようとも、ある一つの道を進むということを決心しなければならない。私はこれが百パーセント確実ではないからといって、そのためにむざむざ成功を諦めてしまうわけにはいかないのだ。私はそれがおそらく完全な一歩でないからといって、一歩踏み出すことを中止するなどということはしてはならないのだ。たとえ私の立っているその場所が、早くも次

の時代に私を死に至らしめることが一瞬確実に思われても、だ。ある政治的行動が、自分の民族の利益ばかりでなく他の民族の利益となってしまうからといって、その行動をおこすのを退けてはならない。しかり。たとえ他の民族にとっての利益が、自分の民族にもたらされる利益より大きいときに、もしその行動を思いとどまった場合、絶対確実にわが民族に不幸がおとずれるというのなら、何といったところで私はその行動にとりかかるのを拒否してはならないのである。

今日私のところには、多くの人のまさに純粋批判的考察法からとらえた非常に厄介な抵抗が押し寄せている。こういう人々は、言ってみればこれとそれとあれが善であり、正しいことなのだと認めているが、それにもかかわらずこれとそれとあれがいま一つ疑わしいものであるがために、それに加担していくことがないのである。つまりドイツとわれわれドイツ民族が滅んでいくのが分かっていながらも、それを救い出す行動に、何やかやと少しでも不備な点を見つけだしてしまうために、実際その行動に参加できずにいるのである。簡潔に言えば、ドイツが衰退していくのを知っていながらも、抵抗や行動をおこす際に、その行為自体に何か疑わしい部分はないものかと再三嗅ぎ出すがゆえに、この衰退現象を体を張ってくい止めようとする決断力を出さずにいるのである。

この悲しむべきメンタリティーのおかげで、さらに引き続いて災いが生まれてくる。今日あ

る特定の行為を保護したり、それどころか推奨したりしようと決断する際に、まずそれが成功する確率が何パーセントあるかを注意深く秤にかけ、それからそのパーセンテージに応じて、どの程度の規模のものをそれに投入するかを計算する輩が、かなりの人間、特にいわゆる教育を受けた人間にいるのだ。ということはすなわち、例えば国内政策とか外交政策で何らかの決断をする際に、それが完全に満足できるものでないとか、成功をおさめる保証が完全にはできないと思われるがゆえに、すべての力を目いっぱい注ぎ込み、余すところなくこの決断を支持することはまかりならないのである。逆に言えば、この手の不幸な考えの持ち主は、私が本当に必要であるとみなした決断が、成功するかどうかはいま一つ確実でないと思われるとか、成功しても部分的にしか期待に応えることができないものであった場合、この決断事項がなぜ多くのエネルギーを費やしてやりとげられねばならないものか、また成功する可能性のパーセンテージが低いのに、なぜこれを実行するためのエネルギーが支払われねばならないのか、ということがまったく理解できないのだ。かくしてつまるところ常に吟味しなければならない問題はただ一つである。ある特定の決断をすることが必要な状況にあるか、否か、ということなのだ。そしてそのような決断事項が本当に必要であると完全に確認され、認識されているのならば、たとえ最終的に不満足であるとか、改善の余地があるとかいう結果に再三再四なろうとも、あるいは成功する確率のパーセンテージが低いかもしれなくとも、この決断はもう思慮深さな

どかなぐり捨て、最大の力を投入して、実行に移していかねばならないものである。
　例えばある人が癌になり、死ぬのは必至という状況になったとする。ここで手術が確実に成功するパーセンテージが低いとか、また成功したとしてもなおかつ患者が百パーセント健康をとり戻すとは言い難いという理由で、手術を受けるのを拒否するというのは、馬鹿げたことであろう。しかしその医者自体が成功の見込みがあまりないからといって、自分の能力を出しきらなかったり、半分のエネルギーで手術をすませてしまうならば、それは一層馬鹿げている。ところがこの最も馬鹿げたことをするのを、こういう人々は、国内政策、外交政策の面で絶えず待ち受けているのである。彼らは成功するのが百パーセント確実でないからといって、あるいはその結果が余すところなく満足のいくものとはならないだろうという理由からして、政治上の手術を実行に移すのを止めてしまうばかりでなく、こういう場合でも労力を目いっぱい注ぎ込むのはよして、ただひたすら退却するための抜け道は開けておけるのではないか、というつつましやかな希望にしがみつき、出す力は手控えるにもかかわらず、この手術が行われるのを期待しているのである。これはまるで野戦で戦車攻撃を受け、抵抗しても成功の確信がないと考えて、最初から半分の力しか出さない兵士のようなものだ。そのうえこの兵士の抜け道は逃走であり、またその迎える結末は、確実にやってくる死なのである。
　いや、これではいけない。今日ドイツ民族は略奪欲に満ちた敵の暴徒によって、内側からも

外側からも襲いかかられている状態にある。この状態がこのまま続けば、それはわれわれの死を意味する。この状態を打開するどんな可能性も逃してはならない。たとえその結果にいくら弱点があろうとも、疑わしい面があろうとも、だ。[3] そしてその場合、そうした可能性は全て、エネルギーを出し切って最後までやりぬかねばならない。

ロイテンの戦い[4]の結果は別に確実なことではなかったが、だが戦闘は必要不可欠であった。フリードリヒ大王[5]が勝利をおさめたのは、別に勝利が確実でないからといって、半分の勢力だけで敵にたちむかったからではない。ただ結果が確実でなかったために大王自身が、独創性、大胆さ、指示を出すうえでの決断力を過度に発揮し、また彼の連隊が向こう見ずな不敵さを大いに発揮して、結果の不確実な分を補ったのである。

だがとにかく私が心配なのは、少なくとも何らかの成功をなしとげて、それでわれわれの行動の正当性が立証されない限り、市民的評論家たちに、私が分かってもらえないのではないか、ということである。民族の上に立つ人物には、良い助言者が要るものだ。昨今のインテリの小賢しさなどにとってかわって、こういう人こそが、その本能による確実性、またその心情からの信頼をもたらすのだ。

だがもし私がこういう事業において外交政策を担当したならば、そのときには私は評論家としてではなく、国家社会主義運動――私は他日、国家社会主義運動が歴史を創り出していくと

分かっている——の指導者としてこの責務を実行するのだ。それにもかかわらず、その時点でどうしても過去および現在の状況を批判的に考察せねばならなくなったとしても、それはあくまで私独自の積極的なやり方の理由づけをするためであり、また分かりやすくするための手段に過ぎないのだ。国家社会主義運動は国内政策上の面で単に批判だけをするのではなく、その主義独自の世界観に裏付けられた綱領を有しているわけであるが、またこの運動は、外交政策上の面でも他の者が間違って行った失策を、単に見つけだすのではなく、このような失策の内容を認識することから、この運動独自の行動を導き出していこうとしているのである。

それとともに、われわれが大成功をおさめたとしても、百パーセントの幸福までは生みだすことにはならない、ということも私はよく分かっているつもりだ。何しろ人材不足の面や、またそれによって制約される一般的事情により、最終的大成就などというものは、永遠に単に綱領上の理論のうえでの話となるに過ぎないのだからである。そうなのだ。味方の戦死者を一人も出さずに勝つことができないように、何も犠牲を払わずに成功を手に入れられるわけはないことも、私には一層よく分かっている。しかしいくら成功の度合いが完全ではないと分かっていても、すでに目に見えている完全な滅亡よりもその不完全な成功の方を私が選ぶことは、決して妨げ得ないであろう。さらに成功の確率が低いところや、成功の度合いが少ないところは、大英断を下すことによって相殺（そうさい）し、そしてその精神を私が指揮する運動に行き渡らせようとし、

そのために私は尽力するであろう。今日われわれは敵の前線と闘争をしているのだ。これは打破せねばならないし、またわれわれ自身が打破していくものなのだ。われわれは味方の犠牲の大きさを推測し、成功できる範囲をはかり、敵の前線が今日の戦線の十キロメートル手前で停止しようとも、千キロメートル手前で停止しようとも、まったく同じように改革を開始するのだ。なぜなら、われわれの成功が終局を迎えたところは、常にただ次の新たなる闘争の出発点となるに過ぎないからである。

# 第五章　国家社会主義ドイツ労働者党の国内・外交政策

私はドイツ国家主義者である。すなわち私はわが民族性を信奉する者である。私が考えることと、行動することはすべて、この民族性の一部なのである。私はまた社会主義者である。私には階級も地位も関係ない。私の目に入るのは、血で結ばれ、言語を同じくし、同じ普遍的運命の手に委ねられている人間たちがつくるあの共同体の姿なのだ。私はこの民族を愛している。が、その時その時の多数派だけは憎んでいるのだ。私は多数派の中にわが民族の崇高さの代表者も、幸福の代弁者もほとんど認めないからである。

今日私が率いている国家社会主義運動は、わが民族の内外における解放を目的においている。われわれの運動とは、内的な面では生存の本質に適合し、その本質の表れとして再び生存自体のために役立つことに生存の形を、民族にもたらそうとするものである。同時にこの運動はドイツ民族の本質を保持し、最高の人間、最良の徳を備えた人間を計画的に助けて育てるという

手段によって、より一層育もうとするものである。自由であって初めて民族の生存が自らの民族に貢献する形を見出すことができるがゆえに、この運動は、ドイツ民族の外的自由を得るためにおこったのである。この運動はドイツ民族の生存権のために戦う運動であるから、ドイツ民族の日々のパンを求めて闘争しているのである。この運動はドイツ民族の生存権を擁護する運動であるから、生存に必要な領土を求めて闘争しているのである。

それとともに国家社会主義運動は、「国内政策」という概念をわがドイツ民族の本質に適合し、その原則的な力を発揮させることのできる生存の形態と生存の法則を導入することによって、わが民族の存在を振興し、強化し、安定することと解している。

この運動は、外交政策とは、自由を獲得し、生存するのに必要な前提条件を満たすことによって、今述べた民族の発展を確実にすることだ、と考えている。

同時に外交政策面では、国家社会主義運動は、例えば次のようなところで、今までの市民的政党と一線を画しているのである。すなわち国家的市民社会の外交政策というものは、実際のところ、きまって国境回復政策でしかなかったのであるが、これに対し国家社会主義運動の外交政策は常に領土獲得政策となっているのである。ドイツの市民階級はその最も思い切った計画においても、おそらくドイツ国民連合までは達成できるであろうが、実際のところたいていは単なる稚拙な国境修正と化すことになろう。

これに対し国家社会主義運動は、外交政策を考えるうえで常に、わがドイツ民族が生存していくのに必要な領土を確保する必要性に鑑みて、決定を行っているのだ。この運動は、国民的市民階級の場合のような他民族のゲルマン化もしくはドイツ化には目もくれていないのであって、われらの民族の拡張のみを心得ている。国家社会主義運動は、征服された、いわゆるゲルマン化したチェコ人やポーランド人の場合に、国民的に、それどころか民族的に強化されたとは決して見ておらず、むしろ人種的弱体化を見ているのである。というのはこういう被征服民族の国民意識というものは、それまでの愛国主義的な国家観で決まるのではなく、むしろ民族的、人種的認識で決まってくるからである。それとともにこういう者たちの思考の出発点は、市民社会の思考の出発点とはそもそもまったく質を異にするものなのだ。だから国民的市民階級が過去および現在において政治的に成功したと思っている多くの事柄は、われわれの運動からみれば、失敗もしくは今後の災難の原因なのである。また逆に、われわれが自明であるとみなしている多くの事柄はドイツの市民階級にとっては、とらえどころのないもの、極めて嫌悪すべきものとうつるのである。

それにもかかわらず、とりわけ市民階級出身のドイツ青少年の一部には、私の主張を理解する者がいるようである。と同時に、現在活動している政治的・国民的市民階級から反対をもらうなどとは、私もまた国家社会主義運動も、一般に計算に入れてはいないのである。だが、青

少年の少なくともごく一部の者は、われわれの側にある道を見つけ出すだろうと、われわれは考えている。(1)

# 第六章　ドイツ統一と領土不足問題

民族のとるべき外交政策の問題は、ある部分ではその民族内部にある要因によって、またある部分ではそれを取り囲む環境によって与えられる要因によって、決まってくるものである。一般に言って内部要因とは、ある特定の外交政策をとるのが必要になる根拠であり、またその外交政策を実施していくうえで現存している力の大きさでもある。生存不可能な大地の上に住んでいる民族は原則的に言って、少なくとも健全な営みをしている限り、その大地、すなわち生存圏を拡張しようと常に努力するものである。もともとを見れば、単に食糧への心配に基礎を持つこの行為も、それまでこの問題を解決してくるうえで運よく、非常に恵まれた形で行われてきたため、このこと自体次第に成功の賞賛を博するようになったのである。すなわちその第一の理由がきちんと目的にかなったものであった領土拡大行為は、人間が発展していく過程において、英雄的行為にまで高められたのであって、そのためたとえこの領土拡張が、そもそ

もの前提やら誘因やらが欠如した状態で行われたとしても、なおかつそのようにあがめられるようになったのである。そもそも生存圏を民族の人口増加に合わせて拡張しようというこういう試みから、後には動機なき侵略戦争が、すなわち動機なきゆえにのちのち反撃を受ける可能性を秘めた侵略戦争がおこるようになったのだった。これに対する答えが平和主義なのである。この世である民族の食糧を確保するための土地を略奪するという意味をもはや失った戦争がおきるようになってから、平和主義という概念が出てきたのだ。それ以来、この平和主義は、こういう戦争に永遠についてまわる道連れとなっているのである。だから戦争が略奪や力に飢えた個人、もしくは民族の道具になることを止め、再びもとのように民族が日々のパンを求めて戦ううえでの最後の武器に立ち戻ったとき、この平和主義なる概念は、消え去ることとなるであろう。

ところがまた民族がパンを手に入れるために生存圏の拡張をするようになると、将来はいずれにせよ民族の力全体を必要とするようになる。国内政策の課題がこの力を投入すべきときに備えて準備することであるとすれば、外交政策の課題とはできるだけ大いなる成功を生むことが確実になるように思われることを行うことになるのである。こういうことはそもそもそうしようとしている当の民族の力だけではなく、それに対しておこる抵抗の力によっても制約を受けるものなのだ。このように土地を求めて互いに戦っている複数民族の力の不均衡状態により、

絶えず連合への道をとり、そこで自分が征服者的立場をとるか、もしくは力のまさった征服者に対し、自分が抵抗する形になるか、という試みがおきてくるのである。

これが同盟政策の発端なのだ。

一八七〇年から七一年にかけての戦争で大勝利をおさめて以来ドイツ民族は、[1]ヨーロッパにおいて極めて尊敬される地位を手中にした。今までは互いにごく弱い結びつきしかなかった、しかり、歴史上は敵対することさえ少なくなかったドイツ領邦諸国の多くが、ビスマルク[2]の政治手腕のおかげで、またプロイセン・ドイツ軍の功績によって、一つの帝国へと統一されたのである。一七〇年前に失われた旧ドイツ帝国の一地方、すなわち当時手っとり早い強奪という形で、とうとうフランスに併合されてしまっていた地方も、母国へ戻った。[3]それと同時に数のうえから言えば少なくともヨーロッパにおけるドイツ国民の大部分が、統一国家形成のために合一したのである。最終的にこの統一国家が――百万人のポーランド人およびフランス人となっていたエルザス・ロートリンゲン地方の人々――をも数に含めていたかどうかは疑わしい。[4]この統一国家の実態は、国民国家の理念にも民族国家の理念にも合致するものではなかった。そのうえ市民的概念の国民国家は、少なくとも国家としての言語の統一をはからねばならず、これをありとあらゆる学校、そしてありとあらゆる街頭の看板にまで、徹底させねばならなかった。また引き続き教育と生活の場において、こういう人々をドイツ的思考の型にはめ込み、

ドイツ的思考の担い手にまでせねばならなかったのだ。

人々はこんなことを一生懸命行おうとはしなかったし、またおそらく正直なところ絶対こんなことはやりたくなかった。そして実際にはまるで逆の結果が出た。

逆に言えば民族国家としてはいかなる状況であろうとも、ポーランド人をいつの日かドイツ人に仕立てあげようなどという意図をもって、ポーランドを併合してはならなかったのである。民族国家としては逆に自らのドイツ民族の血を再三再四弱めさせることがないようにするためにも、この人種的異分子を囲い込むか、こういう異分子をそもそも手っとり早く追放してしまって、それで空いた土地を自民族同胞に振り替えてやらねばならないか、決断を下さねばならなかったのである。[5]

市民的国民国家にはこういうことをする能力がなかった、ということは自明のことである。すなわち彼らはこんなことを考えもしなかったし、たとえ考えたとしても絶対実行に移さなかったことだろう。しかし当時このようにする意志がたとえあったとしたところで、これを実行する力は十分ではなかったことだろう。これは別に他の世界の反撥(はんぱつ)を恐れての話というわけではなく、独特のいわゆる国民的市民階級のおこす一連の行動の中に見られがちな徹底した無分別の賜物(たまもの)なのである。かつて市民社会は、封建制度は打倒できるものと思い込んでいたわけだが、これとて実際のところ封建制度はその欠陥を、市民的な豪商や法律家やジャーナリストら[6]

の手によって後押ししてもらっていたに過ぎない。市民社会には一度たりともそれ独自の理念など、あったためしがないのだ。あったのはやたら多くの妄想と金だけだったのである。

それとともにそれだけではどんな世界も打倒することはできないし、また別の世界を構築することとてできはしない。だから世界史における市民的治世の期間は、自ら短くなってくるし、またやたらみじめったらしいものとなってしまうのである。

それゆえ帝国が創られたとはいえ、その新しい国家には毒素も一緒に持ち込まれてしまったのだ。その毒素の破壊作用は、何と余計なことに市民的平等権を、自分たちの最も確実な突撃隊として使用する可能性をユダヤ人に与えてしまったときに、一層激しくなったのである。

それは別問題としても、帝国はたとえドイツ国民の大部分を掌握したとはいえ、実際に掌握できたのはその一部に過ぎなかった。この新国家がかねて民族的性格の偉大な外交政策の目標を持っていなかったのならば、せめていわゆる市民的国民国家として、そしてその外交政策面における目的として、最小限ドイツ国民の一層の統一と掌握を念頭に置いておかねばならなかったことは、自明のことであったろう。これは市民的、国民的なイタリア国家が決して忘れなかったことなのだ。(7)

このようにドイツ民族は国民国家を得はしたが、それは実際のところドイツ国民を余すところなく掌握していたのではなかったのである。

それに関連して国民政策的な面からすれば、このとき新しくひかれたドイツ帝国の国境は不完全なものだった。このときの国境は、ドイツ語圏を横切ってひかれていたし、いってみればたとえ非常にゆるい形態であろうとも、とにかく今まで少なくともドイツ連邦に属していた区域を、割るようにして延びていたのである。

さらに軍事的観点からしても、このとき新しくひかれた国境はなおそれ以上に不十分なものであった。どこもかしこも無防備なむき出しの地帯であり、そのうえ悪いことに、その地帯は、特に西方では、国境地帯ということ以上にドイツ経済にとって決定的意味を持つ地域であった。こういう国境を軍事政策的に見ると、攻撃的な外交政策上の目標を持ち、また軍事的にも大量の兵器を保有する幾つかの大国が、ドイツのまわりをぐるりと取り囲んでいればいるほどそれだけ状況は不利になってくるものだった。東にはロシアが、そして西にはフランスがある。この二大軍事国家が、一方では東および西プロイセンを虎視眈々（こしたんたん）とにらみ、他方では何百年にもわたる念願であるライン河に国境を設けようとする外交政策目標を飽くことを知らずに狙っていたのである。これに加えてさらに全世界で無敵を誇る海上支配権を握るイギリスがいた。このように東西におけるドイツの国境は距離が長くまた無防備であり逆に作戦根拠地として使えるところは不都合に窮屈であった。ドイツのUボートの戦いというものもやはりその出港地が場所的制約を受けて、狭隘（きょうあい）であることほど容易なことはなかった。北海沿岸の三角地帯は、U[8]

ボートを封鎖するのにも、これを監視するのにも、六百キロメートルも八百キロメートルもひろがった海岸で行う場合と比べたら、ずっとやりやすかった。要するに全体を眺めれば、この新しいドイツ帝国の国境は軍事的観点から見て少しも満足のいくものではなかった。何しろ自然の障害物も、また自然の避難所となるものも、まるでないのだからである。しかもその代りに、軍事的大発展を遂げた強力国家が、ドイツに敵対しようという外交政策上の下心を携えてそこらじゅうにいるのである。ビスマルクが、自分がつくったこの新帝国が存続していくためには、これをもう一度武器によって守らねばならない、と予見したのには、かくも深い理由があったのだ。ビスマルクの言葉は果たせるかな四十五年後に的中したのである。

このように新しいドイツ帝国国境は、国民政策面からも、軍事政策面からも、あまり十分なものではあり得なかったが、ドイツ民族の食糧確保という観点からこれを見た場合、それはさらに輪をかけて不十分なものであったのだ。

もともとドイツは常に人口過剰地域であった。この地域はある面では自然の関係で、中部ヨーロッパにおけるドイツ民族をクギづけにするところであるとともに、またある面ではここがドイツ民族の文化的なかつ事実上の意義をもった場所であり、そして極めて人間的に多産な場所でもあったからである。ドイツ民族は世界史上に登場して以来、常に領土不足の状態に置かれていた。しかり。ドイツ民族の政治的行動の第一歩は、こうした窮状に強いられたものであ

った。そして民族大移動が始まって以来、わがドイツ民族は一度たりともこの領土不足状態を解消することができず、たとえやったことがあるにしても、武力侵略とか、そうでなければ自民族の人口を減少させるという手段によるものであった。この人口減少は、食糧不足がおこるとすぐに、また国外移住が行われるとすぐに、また何度もの、いつまでも続く不幸なる戦争によってもたらされてきた。しかし最近では自由意志に基づく産児制限によって、この人口減少が行われているのである。

六四年、六六年および七〇年から七一年にかけての戦争(9)は、ドイツ民族の一部を国民政策的にまとめあげることと、そうすることによって国家政治的にドイツが分裂するのを窮極的に終結させることにおいて、意義があった。それゆえこのとき、新しくできたドイツ帝国の黒・白・赤の国旗には、世界観上の意味はまるでなく、ただ今までの国家政治的分散状態を克服したという意味で、ドイツ国民的意義があった。それと同時に黒・白・赤の旗は四散状態を克服したドイツ連邦国家のシンボルとなったのである。が、それにもかかわらず、またできて日が浅いのにもかかわらず、この旗がまさに偶像崇拝的尊敬をかちえたのは、いわばこの旗の洗礼の仕方、しかり、この旗が帝国の誕生自体を他の類似した出来事を超越した形で、永久に目立たせるようになったことによるものであった。赫赫たる勝利を得たこの三つの戦争——なかでも三番目におこった戦争ではドイツの政治、ドイツの用兵——さらにドイツの英雄的精神が形

を伴った奇跡となって現れたのだが——は、新しいドイツ帝国が成立する行為である。そしてついに帝国の発足を、最高位の帝国報道官による皇帝の布告の中で、当時の全世界に布告したとき、そのファンファーレの音楽の中にまさにパリ包囲前線の砲台の轟き（とどろき）がなりわたることになるのである。

このように帝国が声明を出したのは、未曾有（みぞう）のことであった。

しかしとにかくドイツ民族にとってこの黒・白・赤の国旗は、たぐいまれな出来事のシンボルと思えたのだった。ちょうど黒・赤・黄の旗が十一月革命のシンボルであり、またこれからもそうであり続けるように。

この国旗のもとにドイツの各領邦国家は互いにますます融合し合い、またこの新帝国自体も、この国の国家政治的有効性と、新帝国成立の承認を外部に対し不動のものにしはしたが、帝国の成立は、いちばんの危機、すなわちわれわれの民族にとっての領土不足状態についてはたいして変わるところはなかったのだ。われわれドイツ民族の最も偉大なる軍事政策的行為は、その中の土地で自給できるような国境をドイツ民族にもたらすことはできなかったのである。むしろ結果は逆であった。すなわち新帝国ができたことで、ドイツ国家の名声が上がったまさにその分だけ、国外に移住していた者には、そういう国家に背を向け続けるのが難しくなってきたし、また一方裏返してみれば、ある種の国民的誇りと、今日われわれにはほとんど理解し難

い子沢山の中にある生の喜びを負担と思わずに、むしろ幸福なことである、と思う風潮が出てきたのである。

かくして一八七〇、七一年以降、ドイツ民族の人口は、目に見えて早いペースで増加した。たゆまぬ勤勉と偉大なる科学的技量とによって、ドイツ民族の確定した領土の限界内で、ドイツ人が自らの田畑を耕すことで、この分の食糧を部分的には満たすことはできた。だがこうしてドイツの農産物の収穫高の上昇のうちの大部分とは言わないまでも、かなりの部分は、一般の生活要求が多少とも高まったことで、相殺されてしまっていたのである。この生活要求のレベルを引き上げてしまったのは、現にほかならぬ新国家の市民なのだ。フランス人が侮蔑をこめて叫ぶ「酢漬けのキャベツとじゃがいも食らいの民族」は、今やゆっくりとその生活水準を他の世界水準に合わせはじめていた。しかしそのためにドイツの農業が能率をよくした成果のごく一部しか、本当の人口増加分に利用できない程度に留まったのである。

実際、新しい帝国も、この食糧危機を打開するすべを何一つ知らなかったのだ。新しい帝国でも、何よりもまず国外移住を続けることで、民族人口と土地の広さとの均衡状態を可能な限りギリギリのところで保とうとしたのであった。民族人口と土地の広さとの均衡状態が、とてつもなく重要な意味を持つというわれわれの主張の正しさに対する決定的な証明が、実にここにある。すなわちまさに一八七〇、八〇、九〇年代のドイツにおいて、この両者が不均衡状態

にあった結果、食糧難が国外移住ばやりをひきおこし、その移住者の数たるや、なお九〇年代初頭の段階で、年間およそ百二十五万人にまでふくれあがったのである。[10]

しかしそれとともに今いる群衆のためのドイツ民族自身の食糧問題は、新帝国成立によっても解決されなかったのである。その後のドイツ国民の引き続いての増加は、結局そうした解決を行い得なかった。とにかく解決策がどのような結果を生みだそうと、どう転ぼうとも、その策は何が何でも見出されねばならなかった。一八七〇、七一年以降のドイツ外交政策の最重要問題は、かくして食糧問題の解決とならざるを得なかったのである。

# 第七章　ビスマルクの外交目標とビスマルク後の外交政策

ビスマルクが残した幾多の箴言(しんげん)のうち、「政治は可能なるものを求める術」であるという箴言ほど市民的な政治の世界で好んで引用されるものはない。この偉大なる人物の遺産をまかされた政治家たちが卑小であればあるほど、この表現の持つ魅力は大きかった。というのも、この箴言を口にすれば哀れな政治上の能なしでさえ格好がついたのだ。いや、正当化さえ可能であった。彼らは、政治は可能なるものを求める術であって、今の時点では自分の採用した方針以外は不可能であり、かつ自分はビスマルク的精神とビスマルク的感性によって行動していると、この非の打ち所のない偉人を引き合いに出して証明しようとした。それによって、かのシュトレーゼマン氏(1)のごとき人物でさえ、ビスマルクの頭脳に匹敵しないとはいえ、少なくともビスマルクに似て禿(は)げて見える頭にオリンピックの月桂冠をいくばくかはのっけられるわけだ。

ビスマルクは政治の目標を正確に規定し、かつ明確に示していた。もし、ビスマルクが生涯

の事業を達成したのは、自分の思いついた政治的目標を顧慮しながら個々の状況を克服したからではなく、個々の政治的可能性を積み上げたからに他ならないと主張する人がいれば、それは厚かましい言動である。ビスマルクの政治的目標とは血と鉄によってドイツ問題を解決し[2]、ハープスブルク家[3]とホーエンツォレルン家[4]との対立を除去し、プロイセン・ホーエンツォレルン家主導による新たなるドイツ帝国を形成し、外部に対してこの新たなる帝国の安全を最大限まで確保し、この帝国内の管理をプロイセンを模範として組織するところにあった。

この目標に向かってビスマルクはあらゆる可能性を利用した。外交術が成功を導く限りでは、それを最大限に駆使した。より大きな力のみが決定をもたらし得るときには、剣にものをいわせた。彼は政治の巨匠であった。ビスマルクにとって作戦を展開する場はサロンの広間から死者の血を飲みつくした戦いの地にまで及んでいた。

それは可能性の政治の巨匠であった。

彼の後継者たちはたった一つの政治的な目標も、政治的な思考のかけらさえ持ち合わせていない。それに対して今日から明日、明日から明後日へとだらだらと時間を過ごしているだけだ。ある部分は自分たち自身が、またある部分は自分たちの精神的な先行者たちがあの人物につらい戦いや憂慮すべき困難[5]をひきおこしていながら、自慢気に厚かましくもあの人物の名を口にし、自分たちの政治的には無意味にして目標も示さない危険な血迷いごとを、可能なるものを

求める術だなどと称しているのだ。

ビスマルクが三度の戦い[6]を、その天才的な政治活動で戦い、新たなる帝国を創ったのは、まずもってさしあたり達成され得る最高業績であった。しかし、それはわが民族の生存利益を守るための来るべきあらゆる政治的主張にとって逃れられない必然的な前提でもあった。なぜなら、新帝国の創設なしにはドイツ民族は力に相応する形態を知らなかったであろうし、この形態なしには運命の戦いは将来においても貫徹され得ないであろうからだ。同様に、新帝国がまず戦場において構築され、それから内部的に慣らされていかざるを得なかったのも、また明白であった。ドイツの諸国家を一つの連合に構築したとはいえ、これが一つの現実なる連合国家となるまでには、長い適合の年月を要した。それは重騎兵長靴の鉄血宰相[7]が尽きない分別と忍耐を持ち、賢明なる理解と驚嘆すべき感性をもって、プロイセンの主導権という圧力を信頼の力におき換えるために必要とした時間であった。戦場で作成された国家連合を感動的なる愛の力で結合している帝国に創った業績こそが、政治術が今までになした中で最大の業績の一つである。

ビスマルクがその仕事にまず集中したのは、彼の判断の賢明さを示すとともに、ドイツ国民にとっても幸運であった。新帝国の内部を平穏に仕上げる期間が必要であったのだ。もし人が征服熱に浮かされ、結果は確実でなくてもよいとか、広い地域を融合させる前提である均質性

を主導的勢力は国内自身においてさえ喪失させてもよいというのであれば、話は別だが。

ビスマルクはその生涯の目標を達した。彼はドイツ問題を解決した。ハープスブルク家とホーエンツォレルン家との対立を除去し、プロイセンをドイツの主導的地位にまで引き上げ、国民をそれに向けて統一した。当時可能であった領域内で新帝国を内部において固め、その後数十年間にわたった国内でのドイツ帝国創設の全過程を何者によっても乱されずに推進できるように軍事的安全策を展開したのである。

これによって白髪の老帝国宰相としてのビスマルクは彼の生涯の完結した成果を回顧できたが、この成果はドイツ国民の生存に決着をつけるものではなかった。ドイツ国民は国家としての形態を数世紀間にわたって失っており、ビスマルクの新たな帝国創設によって一種の有機的形式を再び見出した。そしてこの形式がドイツ民族を結合させただけでなく、この結合させられた人々に、それによって、理念的であり、かつ現実的な本性である力の表現を付与したのである。この民族の血と肉こそが、この世界で保持されなければならない本質であるから、新帝国においては、国民がその生存権を将来にわたって他の世界の範囲内に再確認し得る手段たる権力装置を成立させたのである。

ドイツ民族の本質を保持するためになされなければならない更なる方策に決意を固めるのが、ビスマルクの後に来る時代の課題であった。

この決断は原則的でなければならなかった。それゆえに新たなる目標設定を意味していた。それ以降の政治に関する個々の作業は、これに依存していた。ビスマルクは個人としては自分の政治的行動に一つの目標を設定した。この目標があったからこそ彼は目標達成のために場面ごとにあらゆる可能性に応じて対応できたのであった。それゆえまたビスマルク以降の時代においても同様であったはずだ。その達成をドイツ民族の利益が高圧的に求め、その達成に向けて、外交術から始まり戦争術に至るまで全ての可能性を使用できるような、明確にして必然的、かつ可能な目標を設定しなければならなかったのである。

しかし、この目標設定はなされなかった。

なされなかった理由の全てを詳論するのは必要ではないし、可能でもない。主因は真の天性にあふれた、優れた政治家が出なかった点にある。しかし重大な理由の幾つかは新帝国創設のあり方自身に存していた。ドイツは民主国家となった。帝国の統率は国王の決定にあるとはいえ、この決定自身が、あの世論という意見表明から脱するのは極めて困難であった。世論は、その特殊表現を議会制度に見出しており、世論を作り出しているのは政党と新聞であり、それら自身もほとんど姿を見せない黒幕から最終指令をもらっていた。世論によって国民の利益は特殊な、かつ特定グループの利益の後ろにどんどん追いやられた。世間では国民の現実的な利益についてはほとんど明らかにされないまま、逆に特定の政党や新聞界の利益がより具体的な

利益であった。というのも、ドイツは今や国民国家ではあったが、国民信条という概念はつまるところ単に国家的・愛国的・王室的概念に過ぎなかったのである。この概念は民族という認識とは何の関係も持っていなかった。それゆえに将来に関しても、将来の外交活動の目標方針に関しても、普遍的明確さを欠いていた。国民の視点からすれば、国家内部の建設が終われば国家の次の課題は国民統一の再提起と最終的実行であったはずである。当時の純粋に形式的な国民国家にとっての外交目標は、部分的にはすでにそれまでの歴史によってドイツ民族の、というばかりではなくドイツ帝国の自明なる構成部分であるべき、ヨーロッパ内のあのドイツ地域を併合する目標以外にあり得なかった。しかし、そのような明白なる目標は設定されなかった。なぜなら、他の抵抗は別にしても、自らがそのような進展に十分なる心構えを持つには、いわゆる国民概念があまりにも不明確であり、ほとんど検討されていなかったし、思考対象となっていなかったからである。かつての帝国東部辺境地域のドイツ人を、あらゆる手段を講じて編入することを次なる目標として視野に入れ、かつ実行するのは愛国的、王党派的考えに反していた、いや、十分には定義しがたい共感の感情にさえ反していた。

それによってあの「由緒ある」ハープスブルク家はもちろん王冠を失い、またそれによってビアホールでの愛国心は痛く傷ついたはずである。にもかかわらず、いわゆる国民国家の視点から新たなる帝国を建て得るのが次の唯一の理性的な課題であった。それによって帝国内のド

イッ人が本質的なる強さを数字のうえで知っただけでなく、その強さは本質的に軍事上にも現れていた。それによってのみ、現在人々がその損失を嘆いている当のものを失わずにすんだであろう。ドイツ自身がお粗末なハープスブルク国家の分割に関与していたら、いや、ドイツ自身が国民政策的理由からその分割を独自の政治目的として立てておれば、それによってヨーロッパのあらゆる展開は別の進路を目指しているであろう。ドイツは、もともと反ドイツを意図してはいない国々と対立するには至らず、南部においては帝国国境はブレンナー峠[8]を越えてはいまい。少なくとも南ティロールのドイツ人が多い部分は今日ではドイツ領となっていたであろう。

ところが、これらは妨害を受けて、なされなかった。理由は当時の国民理解が欠如していたからばかりではない。真の理由は、特定グループの特定利益にこそ存している。中央党のグループは、どんな場合でも、いわゆる「カトリック的」ハープスブルク国家を保持する政策を望み[9]、欺瞞的流儀で「一族の人々」について語った。ところがハープスブルク王政においてはこの一族の人々は少しずつ、しかし確実に脇に押しやられ、一族のつながりは失われていったのである。これはよく知られていた。ところが中央党にあっては、ドイツ内においてさえ、ドイツ的でない見地が幅を利かせていた。彼らには、ポーランド人やエルザスの裏切り者やフランス人の方が、そのような犯罪的な組織に与しようとは思いもしないドイツ人よりも好ましいの

である。カトリックの利益を代表するという口実のもとに、この党はすでに平和の中にあっても、実際のキリスト教的世界観の主要な砦であるドイツを何としてでも傷つけ、没落させるのに手をかしていた。その際に、この欺瞞に満ちた党は、それがドイツの国民国家に、ひいてはドイツ民族に害を及ぼすことができると見るやいなや、臆することなく、神の否定者を明言する者たちや無神論者や宗教侮蔑者と親密極まりない友情を結び、手に手をとって進むのである。

かくて中央党、敬虔なるキリスト教的・カトリック的中央党は、その愚かなるドイツの対外政策を確定するに際して、常にユダヤ的にして神を否定しているマルクシズムを心からの僚友として歓迎していたのである。[10]

というのも、中央党は反ハープスブルク政策に対して全力をもって抵抗していたからである。理由は異なるが、当時マルクシズム的世界観を代弁していた社会民主党も同様な方針を持っていた。[11] もちろん両党の最終目的は同一であった。すなわち、ドイツにでき得る限りの損害を与えるところにあった。国家が弱ければ弱いだけ、これらの党はより気ままに支配できた。それは、その指導者層にとっては、よりうまみのある支配である。

古い帝国が国民政策的視点からヨーロッパにおけるドイツ人の結合を再び受け入れようとしたのであれば、ヨーロッパ諸国独自のグループ化は、結合によって必然的にもたらされるハープスブルク家の国家複合体の解体と連動していたに違いない。もちろん、そのようなハープス

ブルク国家の解消は、利害を同じくする他の諸国への関係を無視しては考えられなかった。しかし、その目的達成にとって、および全ての可能性の帰結にとって自明ではあるが、それによって、ある種のヨーロッパ連合が成立しており、そしてその連合が少なくともその後数十年間のヨーロッパの運命を規定していたであろう。

もちろんまずは三国同盟[12]は事実上解消されなければならなかった。事実上と私がここで言うのは、解消が実際はすでに長い間実行されていたからである。

オーストリアとの同盟は、危険となればこの同盟によって権力を拡大できると想定できる限りにおいて、ドイツにとって現実的な意味を有していた。軍事的な権力拡大が、この同盟によってもたらされるドイツの軍事的負担よりも小さくなった時点で、この同盟は役に立たなくなった。それ自体とすれば、三国同盟は最初の日から、例えばこの同盟の結果として、あるいはこの同盟が原因で、ロシアがドイツの敵となった場合への対応であった。ビスマルクはそれをも緻密に検討していたので、またロシアともいわゆる再保障条約締結を意図したと見られる。[13]再保障条約の意義は、端的に、オーストリアとの同盟によってドイツがロシアとの抗争に至るならば、その際にオーストリアを没落させようとする点にあった。このように見れば、ビスマルクは当時すでに三国同盟の問題性を知っており、可能なるものを求める彼一流の術によって全ての場合に対応すべく必要なものをあらかじめ用意していたのである。

ところが彼の時代にあっては、この再保障条約がドイツにおける近代最大の政治家に失脚をもたらしてしまった。(14)

だが事実、オーストリア・ハンガリー帝国がボスニアを占領し、それを契機として激しく燃え上がった汎スラヴ運動の結果、ビスマルクの恐れていた事態がすでに九〇年代初頭にもちあがった。オーストリアとの同盟がロシアとの対立をもたらしたのである。(15)

ロシアとの対立があったので、マルクシズムは、たとえドイツの外交政策を擁護しなかったとはいえ、現実には全力をもって他の政策を採用できなかったのである。(16)

その際にもイタリアに対するオーストリアの関係は、それ自体として変化はなかった。かつてイタリアはフランスへの対策を考えて三国同盟に参加したのであって、オーストリアとの友好からではなかった。それとは逆に、ビスマルクは、口ではオーストリアとイタリアの間にはそもそも同盟か戦争かの二つの状態しか存在し得ないと言ってはいたが、ここでもオーストリア・イタリア関係の「内的友好性」を正当に認識していた。イタリアにおいては真の共感は、親フランスに熱狂する少数の連中を除けば、ドイツにのみ向けられていた。これは十分に納得できる事柄でもあった。しかるに国家法に基づく三国同盟を友好感情の領域に関連させて考え得ると信じる手合いがいた。これは、ドイツ民族および、特にドイツのいわゆる市民的・国民的知性の底知れぬ政治的無教養と無知を物語っている。それは、一度たりとも、ドイツとオー

ストリア間の事柄ではなかった。というのも、ここにおいても三国同盟、または、より正しく言えば、ドイツとの同盟は人間的に根付いたものではあるが、それはただ、オーストリアにおける比較的少数のドイツ人の心においてのみであった。もしハープスブルク壊滅国家を保持するのに他の手段があったのであれば、ハープスブルク家の人は決して三国同盟の道を選んでいなかったであろう。一八七〇年七月ドイツ民族がフランスの前代未聞の挑発を受け怒りに燃え上がり、ドイツのラインを防衛せんと古き戦いの場に駆けつけているとき、ヴィーンで人々はザドヴァ(17)への復讐のときが来たと望みを持った。甲が論じ乙が駁し、枢密院は入れ替わり、外交特使はあちこちに走った。そして最初の召集令が出されたとき、すでに戦場からは最初のニュースが伝えられていた。ヴィザンブールにヴルトが続き、ヴルトにグラヴロットが続き、メッス、マルス・ラ・ツール、そしてとうとうスダン(18)となって初めてハープスブルク家の人は、今や解放されたように急に叫び始めたドイツ人の新たなる意見に押されて、ちょうど自分たちのドイツ的心情を発見し始める体たらくであった。ドイツが最初の戦いに敗れていたら、ハープスブルク家は、そして彼らとともにオーストリアは、彼らが後になってイタリアをひどく非難した当の行動を、さらに彼らが世界戦争に際して二回目をもくろんだだけではなく、なしていたであろう。この国のために、この国に代わって、ドイツは極めて困難な血の苦しみを我が身に引

き受けた。そして、この国によって千にものぼる小さな裏切りだけでなく、最終的には代表者自身によって裏切られた[19]。これは明らかな事柄であり、真実である。われわれの市民的、国民的愛国主義はそれには沈黙したまま、今になってイタリアに対して批判の声を上げている。ハープスブルク家が後になって三国同盟に忍び込んできたのは、三国同盟がなければハープスブルク家はとっくの昔に今のような位置に押し込められていたであろうからである。しかしドイツ民族の歴史におけるこの王家の過誤を検討してみると、今回は神のひき臼がドイツ民族以外の力によって転がされていたという一点が私には残念である。

なお、ハープスブルク家の人には特にドイツとの同盟を望むべきあらゆる理由があった。この同盟は現実にはオーストリアにおけるドイツ人を放棄していたからである。帝国自身がそれに心情的な保護を加えていたからこそ、ハープスブルク家はオーストリアにおける自分たちの脱民族化政策、ドイツ人のチェコ化とスラヴ化が可能となったのである。なぜなら、ドイツ系オーストリア人にふさわしいと想定されているドイツ的民族意識の真髄を有していると帝国が保証している国家の政策に、ドイツ民族であるという理由から反対を唱える権利をもっているドイツ系オーストリア人がいるであろうか。そして逆にそもそもドイツとしても、ハープスブルク家自身が帝国の同盟者であるというのに、オーストリアでの緩慢な脱ドイツ人化を阻止すべく圧力を加えることができたであろうか。同盟相手国の内的関係を利用して同盟国に実にエ

ネルギッシュな影響を及ぼそうと試みる以外に他の方法はなかったことを知りたければ、帝国の政治指導部の弱点を認識しなければならない。それについては抜け目ないハープスブルク家は、ドイツも抜け目なく、狡猾だといっても、オーストリアの外交がいかほどにまでドイツの外交より抜きん出ているかを極めて正確に知っていた。そして逆に、このドイツ人は事態を把握できずに、自分の同盟相手国内部における状況や経過について何一つ知らなかったように見える。戦争が初めて多くの人の目を開かせたのであった。

しかしハープスブルク家のドイツに対する同盟友好関係は、この同盟の前提がハープスブルク家によって最終的に崩壊させられるほどにまで呪わしいものであった。というのも、ハープスブルク家がドイツからの干渉を心配せずに落ち着いてオーストリアでドイツ人を消滅させている間に、ドイツ自身にとってはこの同盟全体の価値はますます問題視されるに至らざるを得なかったのである。支配者一家が一度たりとも真面目に考えてこなかった同盟がドイツにとっていかなる意味を持つというのか。なぜなら、同盟関係はドイツの利益にとって適切とはみなされなかったのである。しかもこの同盟の唯一の正真なる友人たちは、同盟の作用によって、少しずつ脱ドイツ化されざるを得ない。なぜなら、オーストリアの他の地域にあっては同盟はせいぜい無関心をもって、ほとんどは内心では憎しみの目で受け取られていたからであった。

すでに首都ヴィーンの新聞は、戦争前の二十年間ほどは、親ドイツ的よりも親フランス的で

あった。それにしてもスラヴ地域の新聞は意識的に反ドイツ的であった。スラヴ人がハープスブルク家によってできるだけ文化的に保護され、それぞれの首都において独自の国民的文化の核心を保持している程度にまさしく対応して、ある種の特別な政治的意志の中心も幾つか存在していた。まずドイツ民族に向けられた国民性憎悪がある日オーストリア国家自身をのみ込んでしまうであろうと見抜けなかったのは、ハープスブルク家にとっては歴史から与えられた懲罰である。しかしオーストリアとの同盟がドイツにとって特に無意味と化したのは、民族背信的ドイツ系オーストリア人に広まったマルクシズムのせいで、いわゆる普通選挙法によってオーストリア国家におけるドイツ人の優勢が最終的に破綻(はたん)したときにであった。というのも、ツィスライターニエン[20]、すなわちオーストリア・ハンガリー国家のオーストリア帝国側の住民のうちドイツ人は三分の一に過ぎなかった。普通選挙法がオーストリア民族議会の基盤とされたとき、それによってドイツ人の地位は希望のない状態となった。カトリック系党派が国民的視点を意識的に代表する意欲を示さなかったときに、もちろんマルクシストはその視点をそもそも意識的に裏切ったのであるが、希望は一層失われた。この社会民主主義は今日では南ティロールのドイツ人について偽善的言辞を弄(ろう)しているが、かつてのオーストリアでは事あるごとにドイツ人を極めて厚かましくも裏切り、売り払い、常にわが民族の敵の側に立っていたのである。臆面のかけらさえない傲慢(ごうまん)なチェコはドイツのいわゆる社会民主主義の中に常に自分の代

弁者を見ていた。ドイツを抑圧する行動全てがドイツ社会民主主義からの認知を得ていたし、ドイツを抑圧する全てのプロセスがドイツ社会民主主義を協力者と見ていた。そのような状態にあってドイツは、政治指導部が、特に議会で見る限り、優に五分の四は意識的に、かつ意図的に反ドイツ的であった国家に何を期待できたというのであろうか。

現実にオーストリアとの同盟の利点は全てオーストリア側だけにあり、ドイツは不利に耐えなければならなかった。しかも無視してもよい程度の不利では決してなかった。

オーストリアの国家制度は、全ての周辺諸国がオーストリアの解体を自分たちの国民政策の目標とする事態をもたらした。というのも、ビスマルク後のドイツが持たなかったものをあの小さなバルカン諸国が手にしていたからであった。すなわち、外交政策上の特定目的である。彼らは全ての可能性をもって、かつ全ての可能性を求めてそれを実現しようとした。オーストリアと国境を接しながらも近頃やっと成立した幾つかの国民国家は自分の将来の最高政治課題を、民族的に彼らに属するにもかかわらずオーストリアの、ハープスブルク王室のもとに生活している民族同胞を「解放」するところに見た。この解放が軍事的勝利によってのみ実現されるのは自明であった。それがオーストリアの解体を導くのもまた明白であった。オーストリア自身の勢力はそれを防ぐほどには強力ではなく、まずは解放されるべき民族に属している人々を頼りとせざるを得なかったのである。オーストリアに対抗するロシア、ルーマニア、セルビ

アの同盟戦争ではまず北方および南方スラヴの部分がオーストリア防衛から脱落した。せいぜいのところドイツ人とマジャール人が主たる戦闘に残ったに過ぎない。経験から見ても、ある戦闘部隊が民族的視点を失えば、その戦線そのものは解体へ、同時に麻痺に至る。であればオーストリアが攻撃戦に出たとしても、現実として強力な攻撃にはならなかったであろう。これを知っていたのはロシアであり、セルビアであり、ルーマニアであった。オーストリアが持っていたのは強力な同盟国のみであった。それしか頼れなかったのである。そうなればごく自然の成り行きであるが、オーストリアに対抗している国の指導部の頭の中でも、世論においても今や、ヴィーンへの道はベルリン経由たらざるを得ない、と理解した。

諸国がオーストリアの遺産を求め、それが武器を手にしたドイツという友人のゆえに不可能であればあるほど、彼らはドイツ自身を敵と見なさざるを得なかった。

世紀の変わる頃にはすでに、オーストリアの存在が理由でドイツに憤慨している敵の力は、オーストリア自身がドイツに肩入れできる武器の幾倍にもなっていた。

しかし、それによってこの同盟政策の内的な意味はまさに逆転した。

事態は第三の同盟国であるイタリアによってなお困難さを増した。すでに述べたように、オーストリアに対するイタリアの関係は心情にかかわる問題ではなかった。いや、理性の問題でもなかった。本来的には強引な強制の出来事であり、結果に過ぎなかった。まずイタリア民族、

そしてイタリアの知識層はいつでもドイツへの共感を広げることができた。世紀の変わる頃にはすでに、ドイツ一国とイタリアとの同盟には十分な根拠があった。イタリアはそれ自体として同盟国として信頼に欠けるという意見は愚かで間が抜けている。われわれのいわゆる非政治的愛国的市民階級の床屋政談家の馬鹿げたおしゃべりである。すばらしい反証がある。イタリアが、オーストリアに対抗してではあるが、すでにドイツと同盟を結んでいた当時のドイツ民族の歴史である。[21]もちろん当時のドイツというのはビスマルクの天才によって指導されていたプロイセンを指しているのであり、ビスマルクの後に続いた香具師の無能な政治によって無残な姿となった帝国ではない。

確かに当時のイタリアは海でも陸でも戦いに敗れてはいたが、[22]同盟に基づく信義は誠実に守った。オーストリアはといえば、世界大戦において、ドイツがその世界大戦にオーストリアのせいで引きずり込まれたにもかかわらず、同盟義務を果たさなかった。というのも、イタリアは、その後達成した有利な条件をもって単独講和を提示されたのであるが、軍事的には敗北しているにもかかわらず、矜持を持ち昂然と拒否したのである。[23]オーストリアの政治指導部はそのような単独講和に迷っただけでなく、ドイツ全体を見放そうとさえした。[24]単独講和が成立しなかったのはオーストリア国家の意志の強固さにではなく、オーストリアが突きつけられた要求の本音が実際はオーストリアの解体を意味していたからであった。イタリアは一八六六年に

軍事的敗北を喫してはいたが、それは現実にはイタリアが同盟信義を守るつもりがなかった根拠とは考えられない。というのは、たとえ敗北でなく、勝利をかち得ていたとしても当時のイタリアは当時のドイツとは、ましてその後のドイツとも比べられないからである。ドイツがプロイセンにおいて有していた高度な軍事的結晶力がまさにイタリアには欠けていたのである。ドイツ同盟はプロイセンの兵力という基盤が欠けていたら、かつてのまだ諸国民に分解される以前のオーストリアが有していたような軍事力をもって攻撃されれば、イタリア同様に敗北していたであろう。しかし重要なのは、当時オーストリア軍の本質的な最大の部分を占めていたボヘミアにおいてイタリアが後のドイツ帝国に有利なような決定を下したところにある。ケーニヒグレーツでの戦闘[25]の危機的な状況を目のあたりにした人は誰でも、十四万のオーストリア軍がイタリアの協力を得てより多くをこの戦闘に投じていたら、それはドイツの運命にとって決して小さな事柄ではなかったと理解するだろう。

もちろん当時のイタリアがそのような同盟条約を結んだのは、ドイツ民族に国民統一をなさしめんがためにではなかった。イタリアでの統一を得んがためであった。これは疑いようがない。そこに非難、中傷の契機を見るのは、祖国お大事の同盟者にしみついた絵に描いたような政治的素朴さを示している。事前に成功あるいは利益を見込めるような同盟なら守るという意見は子どもじみた愚策である。というのは、イタリア人もまた、当時のプロイセンとビスマル

クは、イタリアへの愛からではなく自分の利益を求めて同盟を組んだ、と逆に非難する権利を有していたであろうからである。恥ずかしいことではあるが、残念ながら私は、この種の愚かさはアルペンの南にはなく、北にのみその姿を現すと言わざるを得ない。

そのような愚かさにお目にかかりたければ三国同盟を、より正確に言えば、ドイツとオーストリアとの同盟を、すなわち同盟関係から全てを引き出せる国オーストリアと、何一つ引き出せない国ドイツとのまことに珍しい同盟を見ればよい。これは、一方は種々の利益を、他方は「取るに足りない武器」を、[26]一方は冷徹な合目的性を、他方はニーベルンゲンの信義[27]を提供している同盟である。その規模においても、その方法においても、少なくともこれは世界史において初めての出来事ではあった。そしてドイツはこの種の政治的国家指導と同盟政策のために恐るべき損失を引き受けたのである。

それゆえにイタリアとの同盟が、イタリアに対するオーストリアとの関係が問題となる限りにおいて、初めから極めて怪しい価値を持っていたのは、例えばイタリアがまったく間違った相手を選んだのが問題だというような点に存しているのではなく、イタリアにとってはオーストリアとのこの同盟はまさに現実的な見返り価値を一つも約束していないからであった。

イタリアは国民国家であった。その将来は地中海周辺に依存せざるを得なかった。したがって、隣接する全ての国はこの国民国家の発展にとって、程度の違いはあれ、障害である。考え

てもみよ、オーストリア自身は八十万人以上のイタリア人を国境内に抱えている。ハープスブルク家は一方ではドイツ人をスラヴ化しようとし、他方ではスラヴ人とドイツ人とをイタリア人と対立させ、八十万のイタリア人を少しずつ脱民族化するところに全ての利益を見ている。そのような事情ではイタリア外交政策の将来課題は疑いようがなかった。親ドイツ的であっただけに、反オーストリア的たらざるを得なかった。この政策はイタリア市民の極めて活発な後ろ盾、いや、燃えるような熱狂的支援を得た。というのも、当時オーストリアを政治的に牛耳っていたハープスブルク家は、何世紀にもわたって、イタリアに悪事を働いており、イタリアから見れば、怒りの対象であった。イタリアにとってオーストリアは、何世紀にもわたってイタリア民族統一の障害であった。ハープスブルク政府は腐敗したイタリア王室を支援していた。しかも世紀末にはヴィーンでカトリック・キリスト教社会主義運動の党大会が開かれ、ローマをローマ教皇の手に戻す要請をしてやっと大会の幕をひいたのだ。それがオーストリア政権の仕事であると見られるのを隠そうともせず、他方では恥ずかしげもなく、オーストリアとの同盟はイタリア内で大きな熱狂をさえ呼ぶと期待していたのだ。オーストリアの政策は数百年間にわたってイタリアを決して丁重には扱わなかった。フランスがドイツに対して数世紀間にわたって振る舞ったように、数世紀にわたってオーストリアはイタリアに対して振る舞った。北イタリア低地は常にオーストリア国家がイタリアに対する友好政策を示す作戦場であった。ク

ロアチアの連隊とハンガリー歩兵はオーストリア文明の文化伝播者であり、担い手でもあった。それが部分的にはドイツの名前を引っさげていたとは残念なことである。今日はしばしばイタリアではドイツ文化に対するひどい蔑視、いや、軽蔑的中傷を耳にする。ドイツ民族はそれについてはあの国家に感謝しなければなるまい。この国家は外に向かっては一つのドイツ国家とカムフラージュしてはいるが、その内的な本質の在り方はイタリア人には「規律なき兵隊」と暴露されていたのである。オーストリア内自体では彼らは、自分たちが幸運を運んでやっているつもりになっていたのであるが、それを受け取っている当の人たちからは彼らは神からの正真正銘の祟りと見られていたのだ。オーストリア軍の戦場での名声は、ある部分イタリア人のはかない憎悪を永久に掻き立てる効果を果たしていたのである。

これを見抜けなかったのはドイツにとって不幸ではあった。逆に、直接的にではないにしても、間接的にサポートしたのは、これもまた不幸であった。というのも、ドイツは、かつてプロイセンにとって極めて信頼できる同盟者であったのと同様に将来も、幾多の事態が示しているので明らかであるが、われわれの忠実このうえない同盟者になったであろう国を失ってしまったのである。

オーストリアのイタリアに対する内的関係にとって特に決定的であったのは、イタリア・トルコ戦争[28]に際してオーストリアにおいて見られた幅広い世論の動向であった。イタリアがアル

バニアに足場を固めようとすればヴィーンが疑いの念を持つのは、事態の流れからして理解できる。オーストリアは自分の利益が害されると読むからだ。しかしイタリアがトリポリを狙っているからといって、イタリアに対する明らかに意図的に扇動された広く、かつ決定的な憤激がおこるのは解せない。その際のイタリア側の方向は自明であった。イタリア国家指導部が、すでにその状態からしてイタリアに与えられた植民地たらざるを得なかった地域にイタリア国旗を立てようとしたからといって、イタリアを悪く思える人はどこにいるというのか。若いイタリアの植民地主義者たちは古代ローマを手本にして進んだ。このイタリアのやり方はオーストリアとドイツにとってまさに、理由は異なるが、歓迎すべきである。それだけではない。イタリアが北アフリカに関与すればするほど、イタリアとフランスとの間のもともとの対立はいつかは拡大せざるを得なかった。優秀なるドイツ国家指導部であれば、少なくとも全力をもって、ヨーロッパの戦場におけるフランスの潜在的な軍事力を考慮して、北アフリカにおけるフランスの覇権の危険な拡大を、そもそも暗黒大陸におけるフランスの開拓を困難にする方策を試みるべきであった。というのも、フランス政府、特にフランス軍部は、アフリカの植民地はフランスにとってすでにフランス文化のデモンストレーション・プロジェクト以上の意味を持っていることに疑いを抱いていなかったからだ。すでに長いこと、そこを次のヨーロッパでの紛争に備えた兵士補給庫とみなしていた。そのような紛争がドイツとの間でのみおこり得るの

は、同様に明らかであった。そこに他の国が、しかも自分の同盟国が、割り込んでくるのをドイツからすれば大いに歓迎するより自然な事柄があるだろうか。しかもフランス民族は子どもを生めないし、発展性はなく、[29]自分の生存圏を拡大する必要はない。それに対してイタリア民族は、ドイツ民族と同じく、何らかの打開策を見つけなければならない。トルコでの強奪は問題だ、などとは言わないでいただきたい。全ての植民地はまさに強奪地である。ともかくヨーロッパ人は植民地なしでは生存できない。しかしわれわれは、トルコへのまったく非現実的な共感からイタリアとの関係を冷たくするつもりはないし、そのような気持ちを持ってもいけない。外交政策上の行動では、オーストリアとドイツはまさにその行動において疑いようもなくイタリアの後塵（こうじん）を拝さなければならない。当時オーストリアの新聞、いや、全世論がイタリアの振る舞いに反対していた様子は、その最終目的はオーストリア自身によるボスニアとヘルツェゴヴィナの併合への支持であったが、確かに醜悪ではあった。当時、憎悪が突然燃え上がった。その事実上の原因がはっきりとはしていなかったので、その憎悪はイタリアとオーストリア関係の現実の内的心情ともいうべきものをより明確に示していた。私は当時ヴィーンにいて、[30]当時の同盟国を裏切った愚かな、いや、恥ずべきやり方に心から怒りを感じた。そのような状況下で、信義をこの同盟国に求めるのは、少なくとも素朴に過ぎるし、理解しがたくもある。そのようなことをすれば、それはイタリアの自滅を導きかねなかった。

というのも、次のような事情も重なっていたからである。イタリアのおかれた自然の軍事地理学的状態からして、イタリア海軍およびその同盟海軍は、普通の人の目からすればとても歯がたちそうにない強力な海軍力を持つ国と対立するような政策を採用し得なかったのである。イギリスが疑いようもなく海上支配権を握っており、イタリアが同盟国と成算のある対立を仕掛け得ないまま、イギリスの優勢がなお地中海のフランス海軍によって補強され得る限り、イタリアは反イギリスの態度を明確にできない。しかし国家指導部によって他の国――その国からの見返りがまさにイタリア・トルコ戦争であるが――への単なる共感から自国を破滅に巻込むように要求をしてはいけない。イタリアの沿岸状況を一時的にしろ検証した者には、イタリアがイギリスと戦いを起こすのは、現状では見込み違いというだけでなく、馬鹿げていると、すぐさま確信するに違いない。それによってイタリアはドイツと極めて似た状態にあったのである。すなわち、ビスマルクはかつてオーストリアが原因でおこったロシアとの対立という危機をドイツにとって極めて深刻だと見ており、その窮地を、他に存在していた同盟事情を無視して、ロシアとの有名な再保障条約を締結して脱したのであった。同様に、イタリアにとってもオーストリアとの同盟は、それがイギリスを敵に回すようになるときには、保持しがたかったのであった。これを理解しない、または把握しようとしない者は政治的に考えることができない、しかしだからこそ彼らはドイツにおいて政治をなす能力を最高に有しているといえるの

ければならないのである。

オーストリアとの同盟の価値を最小にまで値切らなければならないのは、このような事情による。というのも、ドイツはオーストリアとの同盟のおかげでロシア、ルーマニア、セビリアはいうに及ばず、イタリアをも敵にまわさなければならないかもしれないのであった。すでに述べたように、理想的な共感や理想的な信義または理想的な感謝の立場から結ばれた同盟など存在しないのである。同盟から自分の利益を引き出せるという個々の当事者の希望が多ければ多いほど、同盟は強固となる。それ以外の基礎の上に盟約を築こうとするのは夢想である。私は、イタリアがドイツへの共感から、ドイツへの愛をもって、ドイツの利益になろうとしてドイツとの同盟を結ぶだろうとは決して期待しない。同じように私は他の国への愛から、他の国への共感、あるいはその国に役立とうとする憧憬から条約を結ぶつもりは毛頭ない。私が今日イタリアとドイツとの同盟に賛成するのは、それによって両国が有用なる利益を得ると信じているからに他ならない。条約によって両国はよい実務をするだろう。

しかし三国同盟の利益はただオーストリアの側にのみある。個々の国の政治における特定の要因からすでにオーストリアのみがこの同盟の利益受容者たり得たのである。なぜなら三国同盟は、その全本質からして、攻撃的傾向を持っていなかった。それは防衛的同盟であり、その

最良の場合にあっても、すでにその規定の内容に従って現状維持のみを保証していた。ドイツとイタリアは抱えている民族全体を養うのが不可能であるから、攻撃的政策を取らざるを得なかった。オーストリアのみが、それ自身としてすでに死んでしまって臭い始めた国家を何とか保持するところに幸福を見出していたのである。オーストリアの防衛力が十分であった例はないので、三国同盟によってドイツとイタリアの攻撃力がオーストリアの国家維持のために使用されたのである。ドイツはそれに縛られてあくせく働き、没落した。イタリアは飛び出て、救われた。それを非難するのは、民族の存在をあらゆる手段を講じて、あらゆる可能性を求めて保持する義務を政治と解さない者のみだ。

形式的国民国家としてのかつてのドイツはドイツ国民の広範な統一のみを外交政策の目的としていたとしても、三国同盟を即刻破棄、またはオーストリアとの関係を変更すべきであった。それによって、オーストリアの軍隊投入によりドイツと対立関係になってしまった国の数は減じていたであろう。

戦争前のドイツはその外交政策を純粋に形式的な国民の視点から規定し得なかったし、外交が民族に必要な目的に導かなかった。

戦争前からすでに、ドイツ民族の将来は食糧問題の打開という問題にあった。ドイツ民族は所有する領土から日々のパンを得ることはできなかった。耕作に汗水たらし、工夫を凝らし、

あらゆる科学的な手段を講じて、この困窮をせいぜい少しだけ緩和したのではあるが、この困窮を最終的に克服するには至っていなかった。大豊作の年ですら、わが国の食糧需要を完全に満たしてはいない。平年作または不作のときはかなりの部分を輸入に頼らなければならなかった。多くの産業が必要とする原料供給も極めて困難な状況に直面しており、外国からの供給を仰がざるを得なかった。

この困窮を克服する方法は種々あった。移住と産児制限は当時の国民国家の立場からさえ絶対的に拒否されることが必至であった。その際に決定的であったのは、生物学的結末への認識よりも数が減る不安であった。そうしてみると、民族の人口を制限せずに将来にわたって国民を保持するには、当時のドイツには事実上は二つの可能性しか残されていなかった。国土の不足を取り除く、すなわち新たなる土地を獲得するか、帝国を巨大な輸出企業に変えるかのどちらかである。すなわち輸出企業が特定の商品を国内消費量以上に生産し、輸出すれば、食糧および原料と交換できる。

ドイツ人の生存面積を広げる必要性については、当時は少なくとも部分的ではあったが、認識されてはいた。ドイツが大いなる植民地民族の列に加わるのが、この意味では、最適であると考えられていた。しかし実際は特に、この考えの形式において内的論理の破綻が明らかであった。というのも、健全なる土地政策の意義は民族の生存圏拡大にある。人口が増加した分を

新しい土地に入植させるのである。移住とはいえ、母国とは政治的にも国家的にも密接な関係を保たなければならない。これは、十九世紀末に入手可能であった植民地においては、むしろ当てはまらなかった。空間的な距離と特にその地域のおける風土状況が、イギリス人がアメリカの植民地において、オランダ人が南アフリカにおいて、またイギリス人がオーストラリアにおいてなしえたような入植を明らかに許さなかった。ドイツの植民地政策の内部制度のあり方全般が問題でもあった。ドイツ民族の普遍的利益とはほとんど関連のない会社利益が幅を利かし、入植政策は完全に背景に退いてしまっていた。かくてドイツは植民地の価値を当初から早くも特定の市場維持を可能にするところに見ていた。その市場は種々の植民地生産物、時には原料の供給者としてドイツ経済を外国に依存させてしまうのである。

この事情はある程度までは将来においても変わらないであろう。しかし、それによってドイツの人口増加問題は少しも解消されない。ところが、ドイツ民族の食糧を原則として輸出入経済の拡張によって確保すると決めたのである。もちろんドイツの植民地はより有利な原料供給によって、ついに、さまざまな産業に国際販売市場での比較的大きな競争力を確保することはできた。しかしそれによってドイツの植民地政策は、その最基底において、まさに土地政策ではなく、ドイツ経済政策の補助手段となってしまったのである。ドイツ国内の人口増加を植民地入植によって数のうえで直接解決しようとする方向は、事実上まったく無意味となった。

さらに現実的な領土政策に移行しようとしても、戦前から実施されていた植民地政策はドイツ人の人口過剰に対する目に見える解決に導くことができなかったのだ。(31) 逆にその政策は、通常の見通しによれば、それをいざ実行するとなれば真に有効な領土政策が最悪の場合求めるほどの血をいずれは流すのが必要となるくらいにまでナンセンスなものとなっていたのだ。ともかく、ドイツの植民地政策のあり方がうまく機能してドイツ経済の強化のみをもたらしている間に、それは、気がついてみると、イギリスとの腕ずくでの対立への一つの原因ともなっていた。なぜなら、ドイツの経済政策はイギリスとの決戦を回避できなかったからである。輸出産業、世界貿易、植民地、商船団、どれをとっても、その自己保存論からしてドイツ同様にその道に入ることを強制されるとずっと以前から見ていた当の国に対しては、剣によって守られていなければ、存在できなかったのである。だからイギリスが純粋な経済的手段でドイツという競争相手を没落させ得ると計算していた限り、その限りにおいてこの経済的で温和な闘争は日のあたる場所を求めての戦いであった。なぜならわれわれは陰にいて植民地収奪闘争に出ていかなかったからである。しかし、ドイツがこの経済的協調手段においてイギリスを押し返すのに成功したとき、経済的で温和な世界制覇という空想は銃剣の抵抗によって霧消させられるのが明白となった。

産業の生産力と国際的な世界市場での販売数によってドイツ民族に人口の増加を促すのが、

ともかく疑いもなく政治上の思想であった。この思想は民族的ではなかったが、当時支配的だった市民的・国民的世界の考えに合致してはいた。この方向はあらゆる場面で進められた。そのせいでドイツの外交政策にはほとんど選択の余地のない特定義務が課せられた。すなわちドイツの世界貿易政策はイギリスと戦争しないではすまなくしてしまったのである。そうであるとしたならドイツ外交政策の課題は、数百年間にわたる経験自体に立脚して支援国からの全般的動員におおさおさ怠りのない国との対立に、先見性のある同盟方針によって備えるところにあった。ドイツがイギリスに対してその産業政策、経済政策を守ろうとするなら、その最初の背面援護をロシアに求めなければならなかった。その頃ロシアは、価値ある同盟国として考慮の対象になる唯一の国であった。なぜならロシアは、少なくとも短期的には、ドイツとの本質的な対立を必要としない国であった。もちろん、このロシアとの同盟の購入価格は、事情が示すように、オーストリアとの同盟解消にのみかかっていた。というのは、オーストリアとの二国同盟は気の迷い、いや狂気そのものだったからである。ドイツがロシアによる完全な背面援護を得たときにのみ、決着の日を意識的に目指して、ドイツは海洋政策に移行できた。そうすれば艦隊の拡充に必要な出費を容易に調達できたのである。ドイツの艦隊はとりわけ速度と排水量において五年間の後れをとっていたのである。

しかしオーストリアとの同盟が重大な編み間違いとなり、その解決を見つけることができず、

したがって日露戦争後改めてたて直しに着手したロシアを決定的に突き放さざるを得なかった。それにより、ドイツの経済政策および植民地政策全体が危険な賭け以上の状態となった。事実、ドイツはイギリスとの決定的な対立を避けよう避けようとし、よって長年にわたって、敵を刺激しないという原則に従って行動してきたのであった。この原則がドイツの全ての決定を規定していた。経済政策および植民地政策を保護するのが必要であるかどうか、がドイツの方針を決定していたのである。一九一四年八月四日イギリスの宣戦布告によってドイツの悲しむべき無分別の時代が幕を下ろすまで。

当時のドイツが市民的・国民的視点よりも民族的視点に強く支配されていたら、ドイツの困窮を解決する他の道が、すなわち、ヨーロッパ自体における大規模な領土政策の方向性が、問題となっていたであろう。

ドイツの植民地政策は必然的にイギリスとの対立をもたらす羽目になり、その際フランスは常に敵の側に立つと見られた。世界政策上重要な位置を有していた他の植民地所有民族に比べ、われわれのヨーロッパにおける基盤は脆弱であったのだから、この植民地政策はドイツにとってとりわけ非常識であった。というのも植民地の運命は最終的にはもちろんヨーロッパにおいて決定されていたからである。したがってドイツの外交政策は、まずヨーロッパにおけるドイツの軍事的位置を確立し、安定させる点に存していた。その際、われわれはわが植民地から決

定的な支援を得られるとは期待できなかった。逆にわれわれのヨーロッパにおける領土基盤拡大自体がわれわれの位置強化を導くはずであった。ある民族が占有入植地を五十六万平方キロメートル持つか、百万平方キロメートル持つかは小さな違いではない。戦時となっても敵の影響を受けずに食糧を確保できるのであれば、さらに自領土での戦争を強いられるとはいえ、われわれの作戦がもともと諸条件に耐えることができれば、軍事的安全性はすでに領土の大きさ自体に存する。

一般に外国からの軽率な攻撃に対して自国を確実に守れるかどうかは、確かに国家領域の広さに存しているのである。

何よりもわれわれが、入植した人々を、その軍事的使用まで含めて、われわれの民族に確保し得るのは、ヨーロッパ内での領土政策によってのみである。ヨーロッパにおいて五十万平方キロメートルあれば[32]、数百万のドイツ農家に新たなる故郷を提供できる。すなわち、いよいよとなればドイツ民族に数百万の兵士を供給できる。

そのような土地政策にとってヨーロッパで問題になる唯一の地域はロシアであった。ドイツに接し、入植者の少ない[33]西部周辺領地はかつてドイツ人入植者を文化伝播者として受け入れていた。そこがドイツ国民の新たなるヨーロッパ土地政策にとっても問題となったのである。そうなれば、ドイツ外交政策の目的は疑いもなく、イギリスに背を向けていた方針を改め、逆に

ロシアをできるだけ孤立させるところを目指さなければならなかった。そうなれば、後顧の憂いなくわれわれの経済政策および世界貿易政策を放棄できたし、必要ならば、艦隊をことごとく断念し、国民の全勢力をかつてのように陸軍に集中できた。しかし、そのためにはまず初めにオーストリアとの同盟を放棄しなければならなかった。というのも、ドイツが某国の保護を保証しているのが、ロシアの孤立化に邪魔になっていたからである。ヨーロッパ中の諸国はその国の分割を望み、分割するにはロシアと手を組まなければならなかったのである。しかし諸国はドイツにオーストリア保持の強力な保護を認めていたので、ロシア孤立化には反対せねばならなかった。彼らは、ツァーの帝国はオーストリアを粉砕できる唯一の勢力と見ていたのであった。

しかし、これらの全ての国々は、ハープスブルク国家の最も強力な敵対国を犠牲にしてオーストリアの唯一の保護国の強大化を望めなかった。これは明白である。

この場合でもフランスはドイツの敵に与したであろうから、オーストリア国家をその運命の手に委ね、ドイツ諸領邦を帝国のために救済し、オーストリアとの同盟を少なくとも世紀末に最終的に整理する旨の決定はなされなかったときにも、反ドイツ連合の可能性は常に存在していたのである。

事態はそうは進まなかった。ドイツは世界平和を望んだ。それ自体として攻撃してのみ戦い

抜けるような領土政策を避け、行きつく目的のない経済政策と通商政策に最終的に取り組んだ。経済協調的手段で世界を征服できると考え、どの国をも保護しなかった。結果として政治的孤立が深まれば深まるほど、瀕死のハープスブルク国家に発作的にしがみつくのであった。ドイツ内部の大集団がそれを歓迎した。それはある部分は、真に政治を行う能力がなかったからであるし、誤った愛国的・合法的思考経過に立脚していたからでもあった。しかしつまるところは快からず思っていたホーエンツォレルン帝国がある日崩壊するかもしれないという希望を、口には出さずに育ててきていたからでもあった。

一九一四年八月二日、世界大戦が血に染められて急激に成長したとき、戦争前の同盟政策がその事実上の敗北をすでに了解済みとして受け入れていたのであった。ドイツはオーストリアを助けるために、自分自身の存在を危うくしかねない戦闘に押しやられたのである。ドイツが相手にしているのはその世界貿易上の対立者であり、ドイツのさまざまな影響力そもそもの敵対者であり、オーストリア没落の利益継承者たちであった。その味方はオーストリア・ハンガリー帝国という無能な国家組織と、永遠に病みかつ脆弱なトルコの二国のみであった。気弱な哲学者[34]や大法螺を吹くだけの熱狂的愛国者の代わりにビスマルクの天才がドイツを導いておれば、ドイツが実行したに違いない、いや、実行していたであろう対応をイタリアは実行した。ビスマルクは、イタリアとオーストリアとの間にはそもそもからして、二つの状態、同盟か戦

争しか存在しないと予言者的に見通していたが、最終的にはその見通しはかつての同盟国への攻撃という形で的中したのであった。

# 第八章　ドイツの再生と誤てる中立主義

一九一八年十一月十一日コンピエーニュの森[1]で停戦署名が行われた。運命はそのために、わが民族の没落に責任を有している主要な人物の一人を選んだ。諸説によればユダヤ人雇用者とお手伝いとの間に生まれた非嫡出子といわれている中央党[2]の代議士マティアス・エルツベルガー[3]である。この人物がドイツ側を代表して交渉し、四年半にわたるわが民族の英雄時代と比較考量すればドイツ崩壊を意図しているとしか考えられない文書に、自分の名前を書き込んだ。

マティアス・エルツベルガー自身は市民階級的な立場からの無名の併合政治家であった。すなわち開戦時には公的な戦争目的の欠如に自分のやり方で対応しようとした連中の一人であった。というのも、一九一四年八月にはドイツ民族全体が、この戦争には生死がかかっている、と本能的に感じていたのであるが、最初の感激の激情が去っていくと、渇望の的であった生も迫り来る死もあいまいになっていったのである。あれほど重大に考えていた敗北も、敗北の結

果も次第に小さいものに見えてきた。それをもたらしたのは、ドイツ内で自由に振る舞い、協商側の実際の戦争目的を巧妙に、かつ嘘を混ぜて曲解したり、それどころか否認したりするようなプロパガンダであった。[4] 開戦二年目、とりわけ三年目になると、ドイツ国民は敗戦の不安を感じなくなっていた。このプロパガンダが奏功して、敵の破壊目的の大きさをもはや信じなくなっていた。その影響は非常に大きく、将来の自己保持の利益のためにも、前代未聞の犠牲の代償としても最低限は確保しなければならないものについてもこの民族に教える方策が何も講じられなかったのである。[5] その結果、たいして責任を持っていないサークル内で想定可能な戦争目的についてあれこれと討論が行われ、それぞれのリーダーの考え方や政治的立場が表明されるだけだった。戦争が特定の目的を欠いていれば萎縮的効果をもたらすと知っていた狡猾なマルクシズムは戦争目的をそもそも認めず、さらに併合と賠償を伴わない和平回復のみを口にした。少なくとも市民的政治家の一部は投入された血の大きさと不意の襲撃にある種の対抗要求をもって対応しようとした。これらの市民的提案は全て単なる国境修正であり、領土政策上の思想とは何の関係もなかった。せいぜいのところ、緩衝国を作ることによって当時権利を失っていたドイツの公子たちの継承権を満足させようと考えたに過ぎない。このように、市民的世界には、例外もあったが、ポーランド人の国家設立さえ国民政策的に賢明な決定と見えたのであった。[6] あるグループは経済的観点を前面に押し出して、国境を決めようとした。ロンウ

ィーやブリエーという鉱山盆地を得る必要があるというわけだ。他のグループは作戦上の意見を主張した。ベルギーのマース川の要塞を手に入れるべき必要があるなどというわけだ。二十六か国[7]を相手にし、今までの歴史に例を見なかったほどの血を流し、国内では民族の全員が文字通りの飢えにさらされているのに、この戦争には目的がなかった。これははっきりさせるべきだ。戦争継続の必要性を根拠付けできなかったことが、不幸な結末を招く原因ともなったのだ。

このような事情だったので故国の破滅が現実となったときも、戦争目的についてまとまった考えは存在していなくて、以前から小さい声で主張していた者たちも、そうこうするうちにかつての要求から距離を取るようになった。それは無理からぬことではあった。というのも、ヘルベシュタール[8]を越えてではなく、リエージュをのり越えて国境を求め、あるいは、それとともにロシアのどこかの田舎にツァーリズムの司令官か総督の代わりにドイツの小公子を支配者として就けるために、今までになかったような規模の戦争を仕掛けようというのは、実に無責任で、埒を越えていると言わざるを得ない。そもそもドイツの戦争目的が話題とされる限り、いずれはその目的はひとつ残らず否定されてしまうというのが、自然の姿であった。というのも、そのような些細なことで一つの民族を一時間といえども徐々に地獄と化してしまった戦場をかかえた戦争の中に放置しておくのは許されざる事態であった。

このおびただしい血の投入にふさわしい唯一の戦争目的があるとすれば、それは、これこれの幾十万平方キロメートルの土地を戦線の戦闘員に財産として割り当てるとか、ドイツ人による植民地として自由にさせるなどの保証をドイツ兵士に与えるところにのみあり得たであろう。これによって戦争は皇帝の軍事行動であるという性格を直ちに失い、代わって、ドイツ民族の問題となっていたであろう。というのは、ドイツ歩兵が実際に血を流すのは、最終的には、ポーランドが国を保持したり、それと関連してドイツの公子がプラッシュ織りの王冠を戴くためにではなかったからである。

かくてドイツの極めて尊い血がまったく無意味に、目的もなく流された事態は一九一八年に終結を迎えた。

わが民族は英雄的精神、犠牲心、それだけではなく死を恐れぬ心、そして喜んで責任を引き受ける精神を絶えることなく発揮した後に、打ち破られ、弱まり、戦いから身を引かなければならなかった。千の戦場と戦闘において勝っていた。しかしそれにもかかわらず最後には敗者たちが勝った。開戦前および血を流して戦った四年半自体のドイツの内政、外交への不吉な前兆があたったのだ。

したがって敗北のあと、気がかりな問題が立ち上がってくる。わがドイツ民族はこの壊滅状態から何を学んだのか。以前から意識的に裏切ってきた連中がさらに続けてドイツの運命を決

めるのか。彼らは、さっそくこれまで見るも哀れなくらい役に立たなかった甘言を弄して将来を支配するのであろうか。わが民族は内政、外交に関する新しい思想を教えられ、それに従って自分たちの行動を切り換えるのであろうか。

というのは、わが民族の上に奇跡がおこらない限り、わが民族の道自体が最終的破滅の道であるからだ。

ドイツの今日の状態はどのようなものなのか。ドイツの将来の展望はどうか。その将来はどのようなものであろうか。

ここでもう一度強調しておきたいのであるが、ドイツ民族が一九一八年に蒙った破滅はドイツの軍隊組織の崩壊やその武器の損失に原因があるのではない。その頃明らかになりはじめ、今次第にその姿が明確になってきつつあるドイツの内的荒廃にある。この内的荒廃は自分たちの人種的価値の低下に、民族の偉大さを生み出し、民族の存立を守り、民族の将来を促進しているあの美徳の喪失に存しているのである。

血の価値、人格思想、自己保持本能がドイツ民族から次第に失われそうである。それに代わって国際主義が勝利を告げ、わが民族価値を破滅させている。民主主義が人格思想を窒息させ、広がっている。最後には悪しき平和主義の膿が勇敢なる自己保持の考え方を毒殺しようとしている。人間のこれらの悪徳が、その効果をわが民族の生活全般にわたって現れつつある。政治

分野においてだけではなく、いや、それどころではない、経済の諸分野でも、われわれの文化的生活においても、ある種の下降現象が明確になりつつある。今それにストップをかけておかなければ、それがわが民族を将来性のある国民の列から外してしまうであろう。

将来の内政上の大いなる課題は、わが民族を荒廃させているこのような一般的荒廃現象を排除するところにある。これが国家社会主義運動の使命である。この作業から現在の最も重大な害毒、すなわち市民階級もマルクシズムも同じ程度に責任を有しているあの階級分裂を克服する新たなる民族組織が生まれるに違いない。

国内政治でのこの改革作業の目的は最終的には、民族の生存闘争を完遂するためのわが民族の力の再獲得に、またそれと同時に外に向かって民族の生存利益を代表する力に求められなければならない。

それによってわれわれの外交政策にも生存利益を満たすという課題が課せられる。なぜなら、一方において内政は外交に民族的な力の装置を提供しなければならないし、他方において外交は、採用された行動と措置によってその装置の形成を促進し、支援しなければならないからである。

かつての市民的・国民的国家の外交政策が、民族的と解される高次の領土政策に邁進(まいしん)するために、さしあたりヨーロッパ内でドイツ国民に属する人々を広範に統一するのを課題としたの

であれば、第一次世界大戦の後の外交政策の課題はまず第一に内的権力装置促進策でなければならない。つまり戦前の外交意欲について言えば、民族的にはおそらくそれほど高くは評価されない国家であったが、この国家はすばらしい陸軍組織を使用できた。当時のドイツは、とっくにかつてのプロイセンが行っていたような軍事力増強を求めなかったゆえに、とりわけ陸軍の規模において他国にひけをとってはいたが、(9)かつての軍隊の内的優秀さは他の全ての類似組織を圧倒的に凌駕(りょうが)していた。国家の勇敢な外交政策の指導部は当時の最良の戦争技術を使用できたのである。この装置およびこれに付随する尊敬がもたらしていたわが民族の自由は、事実をもって検証されたわれわれの強さの成果だけではなかった。特異な陸軍装置のゆえに、ある部分はその他の模範的な清廉な国家装置のゆえにわれわれが手にした全般的な信用の成果でもあった。

今日のドイツ民族は、民族の利益を守るのに最も重要なこの装置をもはや持っていない。あるいは、まったく不十分な規模においてしか所有していないし、民族の以前の強さを生み出した基盤から遠くはなれている。

ドイツ民族は傭兵(ようへい)陸軍を得た。(10)この傭兵部隊はドイツで、特別な高度武器で装備された警察になりはてる危険にさらされている。(11)ドイツ傭兵軍をイギリスのそれと比較してみれば、ドイツが不利である。イギリスの傭兵軍は常に防御と攻撃の両面に関する軍隊思想とイギリス軍の

伝統を担っていた。イギリスはその傭兵部隊と独特な民兵システムの中に、海に囲まれた状況にあってイギリスの生存利益を勝ちとために十分な、いや、合致しているように見える軍組織を持っている。イギリスの闘争力という形で表現されている思想は、それによりイギリス民族の広範な血の投入を惜しもうとする臆病さから生まれたものではない。逆である。イギリスは、傭兵がイギリスの利益の擁護に益する限り、傭兵と共に戦った。戦闘がより多くの兵士を必要とするのが分かると、イギリスは義勇兵を募った。祖国の困難が必要とすれば、徴兵制を導入した。どのような組織形態をとろうとも、イギリスの闘争力は常にイギリスのための厳しい戦闘に投入され、軍隊組織は常にイギリスの利益を擁護する装置に過ぎず、必要となれば躊躇せずに全ての国民の血を求める意志に投入した。[12] さらにイギリスの利益が決定的に危険にさらされている事態となれば、イギリスはいずれにしても優位に立つすべを知っている。その優位は、純粋に技術的に見れば、二国標準主義の要求[13]にまでいきつくのである。そこに見られる計り知れない責任ある配慮を、戦前にドイツが、というより国民的、市民的ドイツがその軍備をないがしろにした軽率さと比べてみると、今日においてもなお深い悲しみにとらわれずにはいられない。自分の将来が、いや、自分の生存そのものが海軍力の強さに依存しているとイギリスが知っていたと同じように、市民的、国民的なドイツは、ドイツ帝国の存続と将来はわれわれの陸軍の強さに依存していると知らなければならなかったはずだ。海上の二国標準主義に対して

ドイツはヨーロッパにおける陸上の二国標準主義を対置すべきであった。イギリスは自国のたてた標準の侵害に対しては戦争をもいとわないと、ゆるぎない決断性をもって考えた。同じようにドイツも、ヨーロッパにおいてフランスやロシアが軍事的優位に立とうとした折に、それを軍事的決断によって阻止すべきであった。そのような決断は可能であったし、そのためのチャンスもあった。その場面でドイツの市民階級はビスマルクの言葉をこのうえなくナンセンスなやり方で誤用した。脆弱(ぜいじゃく)でエネルギーもなければ責任もとらない床屋政談家たちは、壊滅的な結果を導くに違いない自分たちの「全てを流れに任せる」政治を隠蔽(いんぺい)するためにビスマルクの、自分は予防戦争をおこすつもりはない、という意見をうれしそうに口にした。ビスマルクが行った三つの戦争は三つとも、少なくともこの予防戦争反対の平和哲学者たちに従えば、回避できたはずである。彼らは、これをさっぱりと忘れているのだ。考えてもいただきたい。今日のドイツ共和国だったらベネデッティ氏[14]に少しトーンを下げるようお願いするために、一八七〇年にナポレオン三世による侮辱を加えられたままでいなければならないであろう。ナポレオンでも、フランス民族全体でも今のドイツ共和国をしてスダンの戦いに引き込むのはできない相談だ。それとも、一八六六年の戦争は、ビスマルクが決断を望まなくても、阻止されなかった、とでも考えているのであろうか。しかし、ここに述べたのは明らかに予定された目的を持って進められた戦争であり、敵の攻撃を恐れて始まった戦争ではないと言いたてる連中もい

る。だがそれは実際は言葉遊びだ。ビスマルクはオーストリアとの戦闘は不可避と判断していたので、そのための準備を行い、プロイセンにとって最も有利なチャンスにそれを実行したのである。[15]ニエル元帥[16]によるフランス陸軍の改革は、明らかにフランスの政治とフランスの国粋主義に対ドイツ攻撃の効果的な武器を用意するのが目的であった。事実ビスマルクにとっては一八七〇年の対立の芽を平和的な調停に持ち込むのは疑いもなく可能であった。とはいえフランス陸軍がその効果を活用する前に対立を摘んでおくのが目的にかなっていた。さらに付言すれば、ビスマルクの意見をこのように解釈するのは、人は外交官ビスマルクと共和制的国会議員としてのビスマルクとを混同している、という彼の意見とは合致しない。そのような箴言をビスマルク自身がどのように判断していたかは、プロイセン・オーストリア戦争前に出されたある質問に対する彼の答えに如実に表れている。質問者は、ビスマルクがオーストリアに攻撃を仕掛けようと本当に考えているのかどうかを知りたがっていた。ビスマルクは、何を考えているか分からない表情で答えたものである、「いや。私にはオーストリアを攻撃する意図はない。攻撃しようと思っていたとしても、彼らにそれを告げる意図も持ってはいない[17]」。

さらに、プロイセンによって戦われた最も重大な戦争は予防戦争であった。フリードリヒ大王は彼のかつての敵たちの目的を一人の官僚を通して最終的に確認したとき、予防戦争拒否の原則を捨て、敵の攻撃を待たず、即刻攻撃に出た。

陸上での二国標準主義の侵害はドイツにとっては予防戦争への契機であったに違いない。なぜなら、答えは歴史から簡単に導けるではないか。ロシアが東アジアにしばりつけられていると見えた一九〇四年に予防戦争が行われていれば、フランスを圧倒していたであろう。それを逃した結果が、何倍もの血が流されたにもかかわらずわが民族をこのうえなく深い敗北に突き落とした今度の第一次世界大戦である。

イギリスには、そのような迷いはなかった。海上におけるイギリスの二国標準主義はイギリスの自主性を保つ前提のように見えた。イギリスは力を持っている限り、この状態に変更を加えようとはしなかった。だが世界大戦以降この二国標準主義は放棄されたが、それはイギリスの意図を上回る諸外国の圧力があったからに他ならない。アメリカ合衆国に、諸国間の今までの勢力秩序や階序を無効にしてしまうほどの新たなる武力要因が成立していたのである。

ともあれ、陸軍組織の形態がどのように見えようとも、イギリスを保持せんとする意志が諸決定を規定していたという説明に最も説得力を発揮する証明は、今までのところ、イギリス海軍であった。イギリスの傭兵軍は、他国の傭兵がしばしば指摘されているような悪い性質を持っていなかった。彼らはスポーツに感じる奉仕精神と特別装備で訓練された卓越した個人養成の戦闘集団、闘争集団である。この小さな兵士団が特別な意味を持っているのは、彼らを通してブリテン世界帝国の目に見える生存表現に直接触れられるからである。この傭兵軍は世界中

のほとんどの地域でイギリスの偉大さのために戦ったのであるが、それと同じくらい同時にイギリスの偉大さをも知った。彼らは、武器の使い方に精通した者として時には南アフリカで、時にはエジプトで、またインドでイギリスの利益を代表しており、それによってブリテン帝国の巨大な偉大さをぬぐいがたく印象付けていたのである。

今日のドイツの傭兵部隊に、このように望むのはまったく無駄である。それどころではない。平和主義的・民主主義的とは言いながら実際は民族を裏切り、国を裏切っている国会多数派に目をくらまされて、小さな軍隊自身このような精神に譲歩すべきだと思えば思うほど、軍隊は戦争の道具であることを放棄し、その代わりに市民の安寧と秩序のための、しかし実際は平和的忍従を保つ警察部隊へとどんどん成り果てているのである。軍隊存在の目的が戦争準備でない限り、それ特有の高い価値を持って軍隊を育てるのは不可能である。平和維持の軍隊のみというものは存在しない。戦争という闘争に勝利をもたらすように戦いぬく軍隊のみが軍隊として存在する。ドイツにおいては国防軍[19]をかつての陸軍の伝統から高めようとすればするほど、軍隊は伝統から離れていくのである。というのも、部隊の伝統的価値というものは国内での二、三のストライキ騒動をうまく克服したとか、食料略奪を防止したとかの効果に存するのではない。戦場で勝った実績から獲得した名声に存するのだ。しかしドイツ国防軍は現実には、国民的精神を代表するのをやめた。それに応じて、年々このような名声の伝統から遠ざかった。国

人材が順次遠ざけられ、その代わりに民主主義者と日々の課題をこなす者が幅を利かすようになるにつれ、国防軍は民族から離れていった。というのも、狡猾なる指導者にしても、わが民族の平和的、民主的部分への譲歩によって自分たちが民族との接点を共有できているとは想像できないからである。いいかえればドイツ民族のこれらの部分にとっては全ての軍隊的組織自体は、それがまさに軍隊であり、国際的・平和的株取引利益の見張り団体、防御組織でない限り、内的には嫌悪の対象であった。軍事的に意味のある軍隊が内的関係を有し得ている唯一の部分が、わが民族の国民意識的な核である。それは伝統に従って軍人らしく考えるだけではなく、名誉を守り、自由を守るために国民的愛のゆえに灰色の軍服をまとう準備をしている唯一の人たちなのである。とはいえ、困ったときには自分たちへ援軍を送ってくれる人に対して軍隊が内的な関係を持ち、いつでも自分たちを裏切る者たちに対しては何らの関係を持とうとはしないのも必然である。であるから、われわれのいわゆる国防軍の今日の指導者たちが民主的であればあるだけ、ドイツ民族への強い結びつきは達成できないであろう。なぜなら、民族的思考を好むドイツ民族は民主制の状態にはないからである。しかし特に、ドイツ国防軍の前任司令官、フォン・ゼークト将軍[21]が、強固に国家的心情を持っていた将校や指導者の解任に反対しなかっただけでなく、支援していたのであるから、彼らは、比較的軽い気持ちで彼を見放し

てもよい装置をとうとう手にしたのであった。

フォン・ゼークト将軍が退任[22]してからは、民主的・平和主義的影響が活発となり今日の国家の支配者たちにすばらしい理想と思えるものが、すなわち共和主義的・民主主義的な国会の見張り人がドイツ国防軍からさかんに作り出されているのである。

もちろん、そのような道具で外交政策を行うわけにはいかない。

それゆえに、今日のドイツ内政の課題はまず何よりも、国民の力の目的に沿った軍隊組織をドイツ民族に再度与えるところにある。ところが、今日の国防軍の形式はこの目的に沿っていないうえに、逆に外交上の要因に規定されているのであるから、ドイツ外交政策の課題は、ドイツ国民軍[23]の再軍備を許容するために、あらゆる可能性を探るところにある。というのも、ドイツの政治指導の断乎(だんこ)たる目標は、しかるべき時期に再び傭兵軍に代えて正真のドイツ国民軍を所有するところに置くべきだからである。

ドイツ国防軍の全般的な質は将来にわたってもそれほど高くは発展しないであろうが、純粋に技術的・軍事的に見れば現在の水準は極めて高い。これは疑いもなく、フォン・ゼークト将軍と国防軍の将校団自体の功績である。したがって、現実にドイツ国防軍は来るべきドイツ国民軍にとって基幹軍であり得る。そもそもドイツ国防軍自体はその課題を、国民的闘争を目指す教育を強調しながら、国民軍のために将校や軍曹クラスの大量育成に置くべきである。

この目標を確固たるものとして視野に入れておかなければならない。真に国民のことを考えるドイツ人であれば、これに異論を唱える者はいまい。しかしまた国家の外交政策が全般的に必要な諸前提を確保しておかなくては目的達成がおぼつかないのも、同じくらい明白である。

かくて、ドイツ外交政策の第一課題は、ドイツ軍の再生を可能ならしめる諸条件の確立にまずはある。というのも、そうなって初めてわが民族の生存要求が、それの実際の代表を見出すことができるからである。

ドイツ軍の再編を保証すべき政治行動は、それ自体ドイツにとって必要な将来の発展の枠組内になければならない。これもまたさらに原則として確認しておく。

ドイツの利益、ドイツの諸視点が現下の軍組織変更に有利である限り、現在の内政状態は別として、外交上の理由からは、その変更はあり得ないと強調しておく必要はあるまい。

世界最大の戦闘行為を解体し、その永久化にできるだけ多くの国の関心を引き付けておこうというのが、世界大戦の本質であったし、ドイツの主要敵国の意図でもあった。これが達成できるのは、国土分割システムによって互いの願望や目的が錯綜（さくそう）している国々自身が、ドイツの再強国化によってその都度被害を蒙（こうむ）るという不安に駆られて、一致してドイツに敵として当たるべく結びついているからである。というのは、従来の世界史の経験に反して、世界大戦が終結して十年経っても[24]戦勝国間に一種の連合が保持されているのは、わが祖国が二十六か国に勇

敵に立ち向かったあの戦いを思い出す、というドイツにとってはまことに名誉ある事実に基づいている。

これら諸国相互間での諸困難よりも、ドイツという強力な帝国の再興によって被害を受ける不安の方大きい限り、その連合は継続される。そうであれば、もちろんドイツ国民に軍備を認める意志はまたどこにも存在しない。「戦勝国」はそれを脅威と考えているからである。以下の諸点をはっきりと認識してみよう。まず、将来におけるドイツの生存利益の現実的な代表は不満足なドイツ国防軍ではなく、ドイツ国民軍である。次いで、ドイツ国民軍の形成は、現在ドイツへの外交的圧殺が軟化しない限り、不可能である。第三に、国民軍組織に対する外交上の反対意見が変更されるのは、そのような新組織が全体として脅威と受け取られなくなったときである。これらが認識されれば、現在のところドイツ外交にとっては以下の可能な諸事実が明らかである。

今日のドイツはその外交課題をどんなことがあっても決して形式的な国境政策の点から考察してはいけない。一九一四年時の国境の回復が外交の目標設定や原則とされるなら、ドイツは旧敵国間の固い結束に直面するだろう。そうなれば、講和条約によって規定されているわれわれの軍隊の形式に対して、われわれの利益に裨益（ひえき）する形式を対置する可能性は排除されてしまう。かくて、国境回復という外交標語は、それに必要な力が欠けており、実現は不可能なのだ

から、内容のない口先だけのモットーとなっている。
特筆すべきではあるが、いわゆるドイツ市民階級は、しかもここでも再びその先頭を切って愛国諸同盟が、この愚劣きわまりない外交目的に飛びついたのであった。彼らにはドイツが無力であると分かっていたはずである。さらには、われわれの国内での崩壊はまったく無視したとしても、われわれの国境回復には軍隊という権力手段が欠かせないのも知っていた。追加すれば、われわれは講和条約によってこのような手段は所有していないし、われわれの敵国の一致した戦線によってそれを保持することができないことも知っていた。それにもかかわらず彼らは、その最も内奥のあり方からして、実行に不可欠な力の手段を得る可能性を、われわれから永久に奪ってしまうような外交上のモットーを立てるのである。
市民階級の国政上の手腕というのはこのようなものである。もちろんそれによって、彼らを牛耳っている比類なき精神がわれわれの目の前に示されている。
当時[25]のプロイセンにとっては一八〇六年から一八一三年までの七年間で再起するのに十分であった。市民階級の経国術は同じ時間をかけて、マルクシズムと手を組んで、ドイツをロカルノ[26]まで連れてきたのであった。それが今日の市民的ビスマルク、すなわちシュトレーゼマン氏の目には大きな成果であるのだ。なぜなら、まさに先述のシュトレーゼマン氏が達成できたのが可能なるものであり、政治とは可能なるものを求める術であるからだ。自分の箴言(しんげん)がシュト

レーゼマン氏の政治家としての質を確定するような運命になるとビスマルクが知っていたら、彼はこの箴言をきっと残さなかったであろう。あるいは、小さな注でも付けて、シュトレーゼマン氏がこれを引用する権利を認めなかったであろう。[27]ドイツ国境の回復というスローガンを将来の外交目標とするのは愚かでもあり、危険でもある。それは現実において、そもそもいかなる意味でも有用なまたは追求に値する目標を内包していないからである。

一九一四年時のドイツ国境は、常に諸民族の境界がいつの時代でもそうであるように、ある種の未完成なものを示している境界であった。どの時代にあっても地球上の領土分割は完了することなく、しごく当たり前に継続している生成と闘争の一時的な成果である。民族の歴史の特定年に及んでいた境界を採用して、即座に政治目標そのものとして作りなすのは愚策である。すなわち一九一四年の国境を確定することができるのであれば、一六四八年のそれで決めてもいいし、一三一二年等々のそれでもよいではないか。同様に、一九一四年の国境は国民的にも、軍政上も、領土政策的に見ても満足しがたいものであった。それはわが民族の生存闘争における当時の一時的な状態に過ぎなかった。生存闘争は数千年にわたって繰り広げられていたのであり、世界大戦がおこっていなければ一九一四年に終結してはいなかったはずである。[28]ドイツ民族が一九一四年の国境を事実上回復したとしても、それにもかかわらず世界大戦の

犠牲は無駄となるだろう。わが民族の将来もそのような回復によって決して何一つ手にはしない。わが国民的市民階級が示している純粋に形式的な国境線政策は可能な最終結果として不十分であり、耐えがたく危険でもある。それはそもそもからして理屈の上でのモットーに過ぎず、実践的な可能性を破壊するのに役立つに過ぎない。それゆえに、このスローガンは可能性の術という格言とは何の関係もない。

事実、そのような外交目標は現実の批判的検証にも耐えることができない。それゆえにこの目標は「国家の名誉」を根拠とするならまだしも、論理的根拠をもって動機を説明するには無理がある。

国家の名誉がわれわれによる一九一四年の国境回復を求めている、国家の名誉を代表する連中が至るところで催すビアパーティーでの声高な意見表明はこれに尽きる。

第一に国家の名誉は、愚かにして不可能な外交政策を推進する義務とは何の関連もない。程度の低い外交は結果として民族の自由を奪い、奴隷状態をもたらすからである。その奴隷状態が国家の名誉ある状態とは断乎として考えられない。もちろん抑圧されていても国民はある程度の尊厳と名誉を保つことができる。ただ、これは絶叫や国民的モットーの問題ではない。逆に、民族が運命に耐えている上品な振る舞いの表現でこそある。

今日のドイツにあって、何よりも、国家の名誉について語るべきではあるまい。あるモット

ーを外に向かってほえたてれば国家の名誉が守れるかのごとき印象をかきたてるべきでもない。いやいや、国家の名誉などは守れない。それもそのはずである。そんなものはもはや存在していないのであるから。とはいえ、それはわれわれが戦争に負けたからではない。フランス人がエルザス・ロートリンゲン(29)を奪ったからでもないし、イタリア人が南ティロール(30)を取ったからでもない。ポーランド人がオーバーシュレージエンを奪ったからでもない。ドイツ民族がその生存闘争の最も困難な時期に志操もなく、恥知らずにも屈服し、犬のように這いつくばって尻尾を振りまくる、無恥としか言いようのない根性をさらけ出したからである。強制されたわけでもないのにみすぼらしく屈服したからである。わが民族の指導部は永遠の歴史的真実と民族の知見に反して、戦争責任を自国に引き受け、それによってわれわれ民族全体を苦しめているからである。そもそも敵が圧迫を加えてきたのは、わが民族の内部に何千という従順なる支援者を見出しているからである。逆にわが民族の偉大な行為の時代を恥ずかしげもなく侮蔑し、いつの時代にも尊敬を払うべき国旗を唾棄し、いや、思いっきり汚し、世界をふるえあがらせた帰還兵たちの名誉ある帽章を引きちぎり、旗をクソまみれにし、勲章や名誉章をもぎ取り、ドイツの最も偉大な時代への思い出自体を何千回となくおとしめる連中がいたからである。敵といえども、十一月詐欺(31)の代表者(32)が汚したほどにはドイツの軍隊を侮蔑しなかった。ドイツの軍指導者たちの偉大さを疑ったのは敵国ではなかった。新たなる国家理念を代表するルンペン

連中がそれを誹謗したのであった。わが民族にとって不名誉なのは敵国によるドイツ地域の占領であるのか。それとも、われわれの市民階級がヒモやかっぱらいや脱走兵や闇商人やインチキ新聞記者からなる組織にドイツ帝国を引き渡してしまった怯懦であるのか。一人前の人間であれば自分たちが面目のない支配に屈している限り、現在のドイツの名誉についておしゃべりはしたがるまい。内政が、かつての偉大な民族を襲った反国民的な、このうえない厚顔無恥を露呈しているというのに、国家の名誉の名において外交政策をなそうとする権利は誰にも認められない。

ドイツの名誉の名において今日行動しようとする者は、まず第一に、ドイツの名誉を悪魔のごとく汚す者たちに情容赦ない闘いを宣告しなければならない。だがそれはかつての敵たちにではない。十一月犯罪の代表者たちにである。わが民族を今日の無力状態に突き落としたマルクシズム的、民主主義的・平和主義的、中央党的売国奴たちの一団にである。

国家の名誉の名においてかつての敵をののしり、国内において敵と手を組んでいる下劣な同盟者たちを主人として迎えるのが、今日のいわゆる国民的市民階級の国民的尊厳にこそふさわしい。

私は率直に告白する。私は当時の敵の誰とでも和解できる。しかし、一連のわが民族の裏切り者に対する私の憎悪は将来にわたって和解を知らない。

われわれは敵から酷い、かつ深い辱めを受けた。しかし十一月犯罪の男たちが犯したのは、今までの中で一番に不名誉で、かつ低劣な犯罪であった。私は、これらのくだらない連中にいつか責任をとらせる状態を作り出そうと努力しているが、それによって私はドイツの名誉修復を支援しているのである。

わが民族に生存の自由と未来とを保証する責任以外の根拠がドイツの外交政策構築の基準となるような事態を、私は拒否せずにはいられない。

祖国的・市民階級的視点からの国民的な国境線政策がまったく意味を持たないのは、次の考察から明らかである。

ドイツ国民は、ドイツ語を母国語として認めている人々を根拠とすれば、(33)……百万人である。

そのうち母国にいるのは……百万人である。

すなわち、(34)［以下原稿欠如］

それで、現在の帝国領内には世界の全ドイツ人のうち……百万人だけが住んでいるに過ぎない。そもそもこれはわが民族全体のうちの……パーセントである。(35)

母国に統一されていないドイツ人のうち、諸事情のために緩慢なる喪失に委（ゆだ）ねられた民族同胞とみなされなければならない人々は(36)［以下原稿欠如］

すなわち概算で……百万人のドイツ人が、[37]いずれは脱ドイツ化される恐れの極めて大きな状況下で生活している。しかし彼らはいずれの場合においても、母国の運命闘争に、彼らの民族の文化発展に、ある種の決定的な形態では関与しがたいであろう。個々で見ると、北アメリカでずっとドイツ人が行っている事柄は、ドイツ民族自体には有利に働かない。アメリカ合衆国の文化大衆に帰属している。ここではどの局面においてもドイツ人は実際は他民族への文化肥料に過ぎない。実際多くの場合、そもそもこれら諸民族の偉大さはかなりの程度までドイツ人の貢献能力に依存している。

これほどまでに民族の損失が大きいと分かれば、市民社会によって支援されている国境線政策の意義の低さはすぐに推測してもらえるだろう。

ドイツの外交政策自体が一九一四年の国境を回復するならば、帝国内に住むドイツ人[38]は、すなわちわれわれの国家の国民のパーセンテージはそれでも……パーセントからやっと……パーセント[39]に高くなる。この事情から、このパーセンテージを本質的に高める可能性は、もはや無視してもよい。

外国にいるドイツ人が、それでもなお、国に忠実たろうとするならば、まずは言語的、文化的忠実さが問題となる。ドイツ国家という母国がわが民族を代表している尊厳さに即して、ドイツの名になお一層の名誉を与えれば与えるほど、この忠実さは帰属意識の意図的表明にまで

高まる。

それゆえにドイツ自身が世界の帝国として、ドイツ民族は偉大なりという印象を伝えれば伝えるほど、国家レベルでは最終的にドイツ人でなくなっているドイツ人も、少なくとも精神的にはこの民族に所属していることを誇りに思える。それに反し、母国自身がドイツ国家の利益を惨めな形で守り、したがって外に向かってはよくない印象を伝えれば伝えるほど、そのような民族に属する内的誘因はより一層弱まる。[40]

しかしドイツ民族はユダヤ人から構成されているわけではないので、ドイツ性は特にアングロサクソン諸国内では残念ながらそれにもかかわらず常にアングロサクソン化するだろう。そして思うに、実際的な仕事をする能率がわが民族から失われてしまったように、ドイツ性は精神的にも理念的にもわが民族から失われていくであろう。

世界大戦および講和条約という出来事によってドイツの民族体から切り離されてしまったドイツ人の命運を問題とする限り、その運命とその将来は母国の力を政治的に再獲得する問題と同列にあると言わざるを得ない。

失われた領土は抗議行動によって取り返せるものではない。剣による勝利によってである。今日、国家の名誉の名においていずれかの地域からの解放を願う者は、鉄と血によってこの解放に責任を果たす覚悟ができていなくてはならない。さもなければ、おしゃべり屋は口を慎ん

でもらいたい。そのためにはもちろん慎重に考えなければならない義務が生じる。まず第一に、そのような闘いを実行できる力を有しているか。第二に、望んでいる成果を求めて血を投入するか、または、血を投入できるか。第三に、得られた成果は投入される血にふさわしいか。

もちろん私は、最もうまくいったとして男性、女性、子ども合わせて二十五万人の国民を増やすために(41)二百万人の血を戦場で無理やり流すのには反対である。それを国家の名誉の義務とはみなさない。そこに見られるのは国家の名誉などではない。良心喪失か狂気の振る舞いである。どの民族にとっても正気を失った人に統治されるのは決して国民的名誉ではない。

しかし偉大な民族はそのたった一人の市民であってもきっと全力を投じて庇護(ひご)する。それを感情や名誉のせいにするのは誤りである。これは人間の経験および賢明さから得られた洞察である。個々の市民に不正が加えられているのを許しておけば、その民族はその地位を次第次第に弱めていく。それを許しておけば、自国の力への信頼は風化し、攻撃しようと狙っている敵の内的強化に手を貸す仕儀となる。些事(さじ)で譲歩をたびたび重ねた結果は歴史を見れば正確に分かる。大事における結果は明白であり、言うに及ばない。それゆえに配慮深い国家指導者は、動員によって受ける危険は敵側に大きく、自国には小さくしなければならないだけに、一層、些事極まりない事柄においても自国国民の利益をむしろ守るのである。今日どこかの国で一人のイギリス国民が不正な取り扱いを受け、イギリスがその市民の保護を引き受けるならば、一

人のイギリス人のために戦争に巻き込まれた際の損害はイギリスよりも、不正を加えたどこかの国の方が大きい。であるから、個々人の保護自体を尊重する国家制度の強固な態度は耐えがたく危険である、とは言えない。なぜなら他の国は、一人の個人に加えられた些細な不正を理由に開戦するのにたいした利益はないからである。強力な国家は国民一人を保護し全力で守るという原則が知られており、かつ千年間にわたって適用されてきたので、名誉性の一般的概念が形成されたのである。

この名誉性を多少とも妥当な事柄で例示するある種の実践が、ヨーロッパでの主導権の本質によって実現され、かつ時代の流れの中で、形成されてきた。そのような方法で個々のヨーロッパ諸国の尊敬は増加し、あるいは少なくとも長続きしてきたのである。弱小の、または強力な軍事力を持たない国でフランス人またはイギリス人に不正が加えられたならば、それが実証されていなくて見かけだけだったにしても、武器を使用して国民を守ろうとし始めたのである。すなわち二、三隻の軍艦が軍事演習を行い、最悪の場合は実弾での射撃演習さえした。時には遠征隊を上陸させ、不正を加えている勢力をこらしめた。そもそもそのような方法で介入のチャンスを得たいという希望がまれならず見られた。それがこの思想の生みの親であった。リベリアで血を流し報復するいざこざにイギリスが巻き込まれたが、それに関してアメリカと覚書を交わす。このような思いつきはイギリス人には決して浮かばないであろう。

すなわち強国にあっては純粋に目的に合致した理由から個人の保護を全力で引き受けるのであるが、完全に無防備にされた無力な帝国にあっては国家の名誉を理由として、最終的な将来展望そのものを破壊しかねないような外交上の進展を引き受けることはほとんど求めがたいのである。というのも、ドイツ民族が今日の、いわゆる国民サークルに代表される国境線政策をドイツの名誉を擁護する必要性から根拠付けるとするならば、結果はまさにドイツの名誉回復ではなく、ドイツの不名誉の恒久化である。すなわち、領土を失ったのが不名誉なのではない。自民族の完全な奴隷化を強制的に導くに違いない政策を行うのが不名誉なのである。まったく悪質なモットーに成り行きを任せ、行動を避けるためにだけ政治が為されているのである。というのも、そこで重要なのはモットーだけである。すなわち、国家の名誉の政治を実際に目的とするのであれば、少なくともその政治を、普遍的な名誉概念に照らして評価され得る人物に任せるべきである。しかしドイツ帝国の内政と外交が、自分にはドイツという名の祖国はない、とドイツ帝国議会で皮肉な笑みを浮かべながら説明する諸勢力によって処理されている限り、国民・市民的、祖国的なスローガンを叫ぶ連中の課題は、まず自分たちの内政を通してドイツにおける国家の名誉思想にまず最も簡明な評価を与えるところにあるはずだ。しかし彼らはそうしない。なぜ、彼らは逆に、これらのいわゆる国家の名誉を犠牲にして、先述した国の裏切り者たちと連合を組むのであろうか。そうしなければ困難な闘いが彼らを待っており、その結

果に彼らは自信がない、いや、その闘いが自分たちの存在の破滅を導きかねないからである。もちろん自分たちの個別存在、これが彼らにとっては内政における国民の栄誉防御よりも神聖なのである。彼らは二、三のスローガンと引きかえに国民全体の将来の存在を危険にさらすのを厭わないのである。

人々が現在の困窮や課題を超えて将来におけるわが民族の生存形態の必要性を考えるようになったときに初めて、国家的な国境線政策が無意味となる。われわれの市民的、愛国的、祖国的サークルの国境線政策がとりわけ無意味なのは、彼らが最大の血の投入を要求しながら、わが民族にとっては最小の将来展望しか持っていないからである。

ドイツ民族が自国の土地で自国民を養える条件は今日では平和であった時期(42)よりも低下している。土地収穫量そのものの増加、あるいは残された荒蕪地の開墾によりドイツの食糧生産は高まったのではあるが、種々の試みによってもわが民族を自国の土地で養えるには至っていない。しかも、ドイツで今日生きている民族の人口数はわれわれの土地からの収穫量では満足しない。収穫量が増大しても、わが民族の人口増には役立つまい。個人の生活需要が一般的に向上するので、それに使い果たされてしまい、残ってはいない。ドイツでは生活水準はまずはアメリカ合衆国での生活環境と暮らしを知り、それを模範として作られる。田舎での生活需要は、

大都市での生活が少しずつ知られ、その影響が広がって、向上する。同様に、民族全体の生活需要もより向上した豊かな国民の生活の影響下で向上する。三十年前には最高と考えられていた生活水準が、ある民族には不十分と受け取られているのも、まれではない。理由は簡単である。その間に他の民族の生活水準が知られたからである。八十年前には最上層社会で前代未聞の贅沢(ぜいたく)であった設備を、今日では最下層の人々でさえ当たり前のようにみなしている。近代技術、特に交通によって世界が狭くなり、諸民族が互いに接近してくればくるほど、それによって相互関係が強化されればされるほど、生活事情は互いに影響し合い、互いに相手に同化しようとする。特定の文化能力と事実上の文化的意義をも有している民族には知識や理想を訴えることによって、結局は他の一般的に通用する生活水準を適用できるという意見もあるが、これは誤っている。特に大衆はそれには理解を示さない。彼らは自分が苦しんでいると感じる。彼らの見地から見て、それに責任あり、と目された人々を、体制転覆運動の集団であり、民主国家における危険人物として非難する。あるいは大衆は、自分の知識範囲に合わせて、独自の見解から出発して独自の基準により生活に変更を加えようとする。子どもに対する闘いが始まる。他の人と同じような生活を望むが、それができない。その責任は子沢山にあるとし、子どもに喜びを感じないで、厄介な災いとしてできるだけ制限しようとしたとしても、無理もない。

この理由により、将来のドイツ民族は国内の土地の生産力を向上させれば人口増加を克服で

きると思うのは虚偽であると分かる。この場合成果として生じるものは、最もうまくいったとして、向上した生活需要そのものの満足である。しかし、この生活需要の向上は、民族の人口数においてはるかに恵まれた状態下にある他民族の生活水準に依拠しているのであるから、この民族は常に生活水準に関して将来においてもわれわれよりも進んでいる。それゆえ満足への動因は消え去らない。ある日、これらの諸民族と自分の土地によって十分にまかなえない民族の生活水準の間に距離が生じる。あるいは、後者は、人口を抑制するように強制される、または少なくともそのように強制されると思い込むだろう。

ドイツ民族の展望は絶望的である。今日の生存圏にしても、一九一四年の国境を回復して得られる生存圏にしても、アメリカ民族に匹敵する生活をわれわれに許すものではない。もしそれを望むのであれば、わが民族の土地が拡大されるか、ドイツ経済が、すでに戦前から知られていた方向を目指す以外にない。どちらを採用するにしても力が必要である。しかもまずは、わが民族の内的な活力の再獲得という意味で、次いで、この活力を軍事的に解するという意味においてである。

国家としての今日のドイツは国民的な課題の実現を限定的な国境線政策に見ているが、それによって国民の食糧問題が解消すると思い違いをしてはいけない。一九一四年の国境を回復する政策が成功を収めたとしても、一九一四年の経済環境をあらためて手に入れるだけである。

換言すれば、そのときになっても今日同様のまったく解決されなかったわが民族の食糧問題がわれわれを再び有無を言わせず世界経済の道に、世界輸出の方向に押し込む。ドイツの市民階級、およびそれと手を組んでいるいわゆる国民連合が実際上考えているのは経済政策のみである。生産、輸出、輸入。この標語が、これさえあれば将来の国民の幸福は約束されたと、手品のように目先を変えて繰り返し唱えられている。生産力が向上すれば輸出力が高まり、それによって輸入に必要なものも充足できると、人々は望んでいる。ところが、まったく忘れられている事柄がある。ドイツにとっての問題の全ては、すでに述べたように、生産力向上の問題ではなく、販売可能性の問題である。さらに輸出の難点はドイツの生産原価低下によって改善されるわけではない。わが市民階級の抜け目のない連中はこの点でも思い違いをしている。これは、われわれの国内市場を制限すれば部分的には可能ではある。しかし、われわれの社会立法およびそれに起因する義務や責務の解体が進み、生産コストが低くなり、ドイツの輸出商品に競争力ができてきたとしても、それは一九一四年八月四日(43)にわれわれが居た場所に戻るだけである。イギリスが自分にとって危険極まりないドイツとの競争に我慢するだろうとか、我慢し得るはずだと考えるのは、市民階級的国民的お人好しに過ぎない。そしてその当人たちは、ドイツは一九一四年に戦争を望んではいなかったのに、文字通りそれに突入させられたのであるし、純粋に競争心からヨーロッパ中の他の敵国をかき集めドイツに敵対させたのはイギリスで

ある、と十分に知っており、かつ常々強調しているのである。今日のどうしようもないドイツの空想経済家たちは、四年半にわたる恐ろしい世界大戦にその世界帝国の全存在を賭け、勝利者となったイギリスは今の時点でドイツの競争力を以前とは別な目で見ていると空想しているのである。あたかもイギリスがこれらの問題全体をスポーツのように考えているかのごとき前提に立っている。とんでもない。イギリスは開戦前の数十年間にわたってドイツの経済競争力を、拡大するドイツの海上貿易などを経済的対応策で打ち破ろうとしてきた。これでは成功はおぼつかない、逆にドイツは艦隊建造によって世界を平和的に占領するまで現実に経済戦争を続行するつもりである、と分かったときに初めて、イギリスは最後の手段として武力に訴えたのである。イギリスが勝利者になって、人々が新たな賭けを行うことができると考えている今になって、困ったことにドイツは、その内政、外交のおかげでいずれかの重要な勢力の要因を活用できないでいるのである。

われわれの生産力を向上させ、生産力を安売りしてわが民族の食糧を再び確保し守り抜こうとしても、それは最終的にはうまくいかない。剣の力が不足しているので、この戦いの最終結果を引き受けることができないからである。最後に残されるのは、ドイツの民族自給の崩壊、民族自給という全ての希望の破滅である。もちろん、輸出国として世界市場を狙っているヨーロッパ諸国にアメリカ合衆国が種々の分野における極めて厳しい競争相手として加わるのも見

越しておかなければならない。その国内市場は豊かで大きいので、生産指数と生産設備の拡大が可能であり、高い給与を払っているにもかかわらず無理と思えるほどにまで製品のコストを低減させているのである。ドイツにとって警告ともなる例としては自動車産業の発展が挙げられよう。例えばわれわれドイツ人は笑われるほどの給与をもらってアメリカとの競争にほんの少しだけでも勝って輸出を増やすのさえ難しいのに、自国内ではアメリカ車が恐ろしいほど広まっているではないか。(44) アメリカには大きな国内販売力、自動車産業を支える豊かな原料と購買力があり、それで、ヨーロッパで内部販売力が欠けていたために不可能であった工場生産方式が可能となり、それが結果的には国内販売指数を高めているのである。その帰結として、アメリカの自動車産業は巨大な輸出力を持っている。ここで問題となっている案件は、世界の全般的なモータリゼーションである。これは、計り知れないほどの将来的な意味を持っているのである。というのも、家畜の力や、人力をモーターで代替するのは今始まったばかりであり、その発展の終結を予測できる人はいないのである。いずれにしてもアメリカ合衆国にとっては、今日の自動車産業は全ての産業そのものの頂点にある。

他の多くの分野でも、あの大陸は今まで以上に攻撃的形式での経済要因として現れるであろう。そして、それによって販売市場をめぐる戦いを先鋭化させるだろう。全ての要因を勘案すれば、特にわれわれ自身の原料には限りがあり、それゆえに他国に依存する状態に直面して、

ドイツの将来は極めて暗く、悲しいものと見なければならない。

しかし、ドイツが全ての経済的困難を克服するとしても、ドイツは一九一四年八月四日に立っていた場所に立つに過ぎない。世界市場をめぐる戦いを最後の最後に決定するのは経済自身ではない。武力である。

しかし平和時にあってまさに国家市民の大部分が、経済政策によって武力を諦めることができると信じこんでいたのがわれわれのたたりであった。この意見の主たる信奉者は今日でも、多かれ少なかれ平和主義的なサークルに散見される。彼らは全ての英雄的民族美徳の反対者で、敵対者であり、経済に国家保持の、いや国家形成の力さえ見ようとするのである。しかし民族が、経済的・平和的な活動のみによって生存が保持できると信ずれば信ずるほど、その経済自身がまさに危機に直面させられるのである。というのは、経済は最終的には民族の生存における純粋に二次的要因であり、力強い国家という一次的存在の後ろに位置しているからである。農具の前に剣が置かれなければならない。経済の前に軍隊が立たなければならない。

そのような考えはドイツでは放棄できると信ずるようであれば、そのせいでわが民族の栄養はだめになるに違いない。

民族がそもそも生存に関して、経済的・平和的活動によってのみ日々の暮らしが可能となるという思想に満足していればいるほど、それが失敗した場合には、武器を手にした解決を考え

ない。逆に、まさに極めて安易な方法を提案する。あえて血を流さずに経済の失敗を除去しようとするのである。実際ドイツは現在すでにこの状態にある。わが民族体を救うために平和主義的経済政策とマルクシズム的国家観が吹聴する治療法の代表は移住と産児制限である。

この提案に従っていけば、その結末は、特にドイツにとっては命取りとなる。ドイツは人種的に極めて非等価値的基本要素から構成されているので、移住が継続されると、抵抗力、勇気、決断力のいずれをも比較的有している人間が必然的にわが民族体から引き抜かれていく。それらはとりわけ、かつてのヴァイキングたちがそうであったように、今日でも北方の血の持ち主であるだろう。わが民族がゆっくりと脱北方化すれば、それはわれわれの全般的な人種価値の低下に、それとともにわれわれの技術的、文化的、国政的、生産的諸力の弱体化に通じる。この弱体化の結果は次の事情に示されているように、未来にとって特に深刻である。世界史に積極的に行動する国として登場するのは、真にヨーロッパの植民地として数百年にわたってヨーロッパ最良の北方の力を移住という手段によって得た国である。その力は彼らの本源的な血の共通性によって、人種的に高度な価値を持つ新たな民族共同体を簡単に形成したのである。これを見れば、現在広範囲にわたり、部分的には信じられないくらい勇敢な工夫がなされている国はアメリカ合衆国である。これは偶然ではない。戦争と移住によってとめどなく計り知れないその最良の血を失ってしまった古いヨーロッパにアメリカが、今や人種的に選ばれた若い民

族として対立しているのである。ヨーロッパ、例えばクレータ島としておこう、における落ちぶれた近東人千人の仕事は人種的にはるかに価値のあるドイツ人やイギリス人千人の仕事とは等置できない。同じように人種的にいかがわしい千人のヨーロッパ人の仕事を人種的に価値の高い千人のアメリカ人の仕事の能力と等しく見るわけにはいかない。アメリカ民族に対するヨーロッパ民族の劣等価値ゆえにアメリカへの行動権を失う状態からヨーロッパ国家を救うのは、民族を意識した人種政策のみである。ドイツ民族がそれを採用せず、ユダヤ人によって行われている劣った人間との計画的交配、それによっておこる人種水準それ自身の低下、さらには模範ともなる個人の何十万にものぼる流出継続によりドイツが最も優れた血の所有者を捨て去るならば、ドイツ民族は劣等な、それとともに能力のない、価値の低い民族にゆっくりと没落してしまうだろう。危険が特に大きくなったのは、われわれがまったく関心を払っていない間に、アメリカ合衆国自身が、自国の民族研究者の所論に刺激されて、移住に特別な基準を設定して以来である。[45] アメリカへの入国は一方では個人自身の特定の人種上の条件と特定の身体的健康条件に依存しているが、ヨーロッパの最も優れた人たちの流出によるヨーロッパの疲弊はまさに法的必然性をもって規定されていたのである。これは、われわれのいわゆる国民的な市民的世間全体が、われわれの全ての経済政治家が、そもそも見るつもりもないし、聞くつもりもない事柄である。彼らには、それが不愉快であるし、幾つかの一般的な国民的なスローガンを叫

んでこれらから注意をそらしておく方がはるかに簡単だからである。

われわれの経済政策の結果として強行された移住は、わが民族が持つ普遍的価値を自然必然的に低下させるのであるが、それに二番目の損害として産児制限が加わる。私はすでに子どもへの闘いの結末については述べた。それは、生命を託されている個人の数が減少し、それ以上の選別は行われないところに示される。逆に、一旦生まれた者はどんなことがあっても育てようと努めるのである。能力や行動力などは第一子であるかどうかと結びついているわけではなく、生存闘争のプロセスの中で初めて個人の中に見えてくるものである。上のような視点に従えば、取捨選択の可能性を個人から奪っているのである。ゆえに民族は能力とエネルギーにおいて貧弱となる。繰り返すが、人種的基本要因の不均等が家族にまで達している国民にあっては事態は特に深刻である。というのはメンデルの分割法則に従えば、それぞれの家族で基本要因のある部分はある人種の側に、ある部分は他の人種の側にというような子どもの分割がおこるからである。だが人種価値の意味は民族によって異なっているので、家族の子どもの価値も無論人種的理由から見て同等ではないであろう。第一子が両親のうちの人種的価値の高い方の性質を有しているとは限らないのであるから、その後の生活の中で少なくとも子ども全体の中からより民族的に価値の高い子どもを生存闘争によって選ぶのが民族の利益である。生存闘争が国民を保持し、逆に国民をこのような人種的により価値の高い個人的作業のできる人に導い

ているのである。しかし多くの子どもを生むのが妨げられ、第一子、せいぜいのところ第二子までに制限されるならば、これらの子どもが人種的に価値の高い特徴を持っていなかったにしろ、国民としてまずはまさにこの人種的に価値の低い要因を保持するように努めるだろう。その際は人工の手を加えて自然の選別プロセスを妨げ、それによって力ある個人を民族から減少させるのに手を貸しているのである。民族の最高価値を破壊しているのである。

ドイツ民族はそれ自身としては、例えばイギリス民族のように、平均的価値を有していないので、特に個人的価値に頼るだろう。われわれがわが民族の生存においてすぐに気づく極端な事例は、われわれの血がより高い人種個別要素と、より低い人種個別要素とに分かれている結果の現象に過ぎない。イギリス人は一般的により高い平均値を有している。その有害性においては、わが民族が与えるそれほど深くはないであろうし、その優秀性においては、わが民族が与えるほどすばらしくはないであろう。それだから、その生存は平均線より上にあり、より大きな安定性に満たされているであろう。それに対してドイツ人の生存は全ての点で果てしなく不安定であり、揺れている。その重要性は極めて高度な事業によってのみ維持されるのではあるが、それがわが民族体の疑わしい側面をも見せつける仕儀ともなるのである。しかし人工的システムによってこの最高の事業から個人の担い手を取り除くのであれば、その事業そのものが日の目を見ない。わが民族は個人価値の継続的な貧窮化に、それとともに民族総体の文化的、

精神的な意義の低下に向かっている。

このような状態がまず数百年間にわたって続けば、少なくともわれわれドイツ民族はその全般的意義において弱体化し、世界民族と呼ばれる権利を要求できなくなる。いずれにしても、本質的により若くて、より健康なアメリカ民族の事業に歩調を合わせるのは不可能となる。そのときわれわれがさまざまな理由からわが身に経験するのは、かつての少なからざる文化民族がその歴史的発展において証明した事柄である。無思想に加えて悪徳が重なり、文化所有者、国家建設者として人種的に極めて価値の高い要因を持つ北方の血の所有者は次第に身を引き、それにあわせて行動法則はその手から奪われ、他のより若い、より健康な民族に移っていくほどにまで内的意義を失った人間混淆（こんこう）を遺（のこ）していったのである。

ヨーロッパ南東部、とりわけより古くを言えば、小アジアやペルシア、メソポタミア平原の文化国家がこのような経過説明の好例を提供している。

このように歴史は西洋の人種的により高い価値を持つ民族によってゆっくりと形成されたのと同じく、ヨーロッパでは人種的価値の低下がおこり、世界の新たな命運を北アメリカ大陸の民族に委（ゆだ）ねる危惧（きぐ）もあるのである。

この危険性が全ヨーロッパを脅かしている。これは、ともかく今日ではすでに誰でも知っている。ところが誰も、それがドイツにとって何を意味しているかを知ろうとはしない。わが民

族が従前同様将来にわたっても政治的に無思想のまま生き続けるなら、世界的価値を持つという主張は最終的に断念しなければならない。人種的に次第次第に衰え、過去の偉大さへの思いさえ持てないように退化した動物的肥満漢に堕してしまうだろう。来るべき世界国家階序の枠内での国家レベルで言えば、せいぜいのところ今までのヨーロッパでスイスやオランダが占めていた位置だ。

これが、その歴史が二千年間にわたり世界史であった民族の生存の最後である。

愚劣な国民的・市民的スローガンではその運命は変えられない。そのスローガンが実践に関しては何の意味も価値も有していないのは、今までの展開の結果によって証明されているではないか。人種的無思想に対して意識的認識を対置し、その認識からあらゆる結論を引き出すような新たなる改革運動のみがわが民族をこの深淵(しんえん)から引き上げるのである。

国家社会主義運動の課題は、人種論および人種論によって明らかにされた世界史に関する、今すでに存在している、あるいはなお生成している認識および科学的洞察を実践的に使用できる政策に移行させるところに存する。

ドイツの運命は経済的には今日のところアメリカに対しては、ある部分から言えばヨーロッパの他の諸国の運命でもあるから、アメリカ合衆国にヨーロッパ連合を対置させ、それによって北アメリカ大陸が世界を主導する危険性を予防しようとする一つの運動が、再び特にわが民

族において、再び多くの信奉者を獲得している。
これらの人々にとって汎ヨーロッパ運動は実際のところ、少なくとも初めのうちは、多くの魅力を持っているように見える。いや、世界史を経済的観点から判断できるのであれば、おそらくこの運動は的を射ている。機械的歴史家、およびそれに従った機械論的政治家にとって二は常に一以上である。しかし、民族の生存において決定的なのは数値ではない。価値である。アメリカ合衆国がこれほどまでに脅威ある位置まで上れたのは、そこでは……百万人(46)が一つの国を構成しているという事実に存しているのではない。……百万平方キロメートルという極めて豊かで、極めて生産力に富む土地に極めて高い人種価値を持つ……百万という人間が住んでいるという事実にある。彼らの生存地域の面積の広さにもかかわらず、これだけの人間が一つの国を形成しているのが、他の国にとっては重要な意味を持つ。すなわち、そのためには一つの包括的組織が存在しているのであり、そのおかげでまさに、これらの人々の人種的に制限された個別の価値が生存闘争の貫徹に向けてまとまって全力を投入できるからである。
これが誤っているというのであれば、アメリカ合衆国の意味は擁する人口数にのみ、あるいは面積の大きさにのみ、あるいは面積と人口との関係にのみ存するというのであろうか。そうであれば、ヨーロッパにとっては少なくともロシアは同じくらい危険であろう。今日のロシアは……百万平方キロメートルの面積に……百万の人口(47)を擁している。彼らも一つの国家組織に

包括されているし、その価値は、伝統的視点から見ると、アメリカ合衆国の価値よりも高いに違いあるまい。だが、それにもかかわらず、この理由から世界に対するロシアの主導権を恐れなければならないとは誰一人考えない。ロシア民族の数が多いとはいえ、世界の自由にとって危険となり得るほどの内的な価値は、そこにはない。ロシアが世界の平和に危険と映っているのは、少なくとも他の国を経済的、覇権的に支配するという意味ではない。せいぜいのところ、現在ロシアを発生源とする病原菌が大流行するのではないかという意味で恐れられているに過ぎない。

アメリカの主導権の位置が脅迫的である意味が一義的にはアメリカ民族の価値にあり、次いで、この民族に与えられた生存圏の大きさと、それによって有利になっている人口と面積との比率に依存していると考えられるのであれば、ヨーロッパ諸民族の内的価値がアメリカ合衆国のそれよりも高くない限り、純粋に数値的に見て形式的にヨーロッパ諸民族が連合しても、この主導権は排除できない。さもなければ、とりわけ今日のロシアが、いや、四億以上の人口を擁する中国が、アメリカ合衆国にとっては最大の危険と映っているに違いない。[48]

このように、まずは汎ヨーロッパ主義は、人間の価値は人間の数と引き換えにできるという根本的な誤りに立脚している。生存を形成する諸力の研究を回避し、それに代えて数値の大きさに人間文化の創造的源泉を、また形成的諸要素の歴史を見るのが純粋機械論的歴史観である。

この見解はわれわれの西洋民主主義の無意味さに、われわれの超経済サークルの臆病な平和主義にふさわしい。これが、全ての劣悪な、あるいは半人種的な雑種の理想であるのは明白である。まったく同様に、ユダヤ人がそのような見解を特に好んでいるので、この見解は、一貫して尊重される中で人種のカオスと混淆へ、文明人の雑種化と黒色人種化へ、それによって最終的には文明人の人種価値の低下へ、人種価値には重きを置かないヘブライ人を次第に世界の支配者にしてしまうほどの低下へ、導くのである。少なくともヘブライ人は、自分たちはいつかはこれらの無価値にさせられた人間たちの頭脳にまで成長できると思いこんでいる。

汎ヨーロッパ運動の根本的な誤謬は別にしても、困窮が迫っていると考えざるを得ない状況をヨーロッパ諸民族の合併によって脱出しようという思想は空想的な、歴史的に見ても不可能な子どもだましに過ぎない。私は、ユダヤ人を保護官とし、ユダヤのエンジンをつけた合併は初めから不可能だ、と言っているのではない。その結果は予定している希望には合致しないと言いたいのである。舞台で魔法使いを見せるのとは異なるのだ。そのようなヨーロッパ連合が外向けの目に見える力を発揮できるとは考えないでもらいたい。古くからの経験が教えるところでは、継続的な民族の合併が起こり得るのは、まずは人種的に見てそれ自身として同価値または近親的位置にある民族が当事者であり、次いで主導権争いのゆっくりした経過の中で合併が模索された場合である。かつてのローマはラテン人の国家を次々に征服し、世界帝国の結晶

点になるまで力を蓄えた。イギリスが世界帝国となる歴史も同様である。さらにプロイセンも同じような経過を経てドイツの国家分裂に終止符を打った。このようにしていつかは一つのヨーロッパが成立しまとまった国家形態で住民の利益を引き受けるようになるであろう。しかし、それは何百年間にわたる対決の結果である。数知れない伝統やしきたりが克服されなければならないし、すでに人種的に並外れてかけ離れている諸民族間の同化がなされなければならないからである。そのような形成物に統一的な国家言語を与える困難さを解消するのは、いずれにしても、数百年間ものプロセスを経てである。

これらはしかし、今日の汎ヨーロッパ思想の実現ではあるまい。ヨーロッパにおける最も力強い国家が生存闘争で示した結果に過ぎまい。そこに残るのは、ラテン諸国家の統一が汎ラテンではなかったように、汎ヨーロッパではあり得ない。当時数百年間にわたる闘争でこの統一プロセスを実行した権力が、形成物全体に永久に名前を与えたのである。そして今日ごく自然な方法で一つの汎ヨーロッパを創造する権力があったとしても、その権力は同時にその形成物から汎ヨーロッパという名称を奪うであろう。

その場合でも所期の成果は得られないであろう。今日のヨーロッパのいずれかの強国が、とはいっても、もちろんその民族性に応じて価値のある、それゆえに人種的に重要な強国の謂(いい)であるが、このような方法でヨーロッパに統一をもたらすとしても、この統一の最終的完成はそ

の創設者たちの人種的没落を意味している。それによって形成物全体から最終的な価値は奪われてしまう。アメリカ合衆国に負けないような国家形成物は創造できないであろう。[49]

将来アメリカ合衆国に立ち向かえるのは、内的なる生存の本性および外的な政治の意義の両者を通じてその民族性の価値を人種的に高め、国家レベルではその目的に合致した形式を与える術を知っている国家のみである。そのような解決が可能と思われるときに、実に多くの国民が関与するから、相対立する競争の結果として高度な鍛錬がなされ得るし、また、なされるであろう。

再び述べておきたい。この課題に向かって祖国自身を最大限に強化し準備をととのえるところに、国家社会主義運動の課題がある。[50]

数世紀にわたる闘争の中でヨーロッパの主導国に強制されてではなく、ヨーロッパ諸民族の純粋に形式的な合併によって汎ヨーロッパ思想を実現しようとする試みは、内部のライヴァル関係と対立によって全体の力とエネルギーが消耗されてしまうような形成物を生み出すに違いない。かつてのドイツ同盟におけるドイツ種族の力がよい例だ。プロイセンの優位によって初めてドイツの内的問題が最終的に解決され、国民の統一した力を外に向けて投入できた。しかし、経済的要因が最終的には生存の特定の要因にまで拡大したとしても、ヨーロッパとアメリカとの対立をなお経済的・平和的性質のものであると考えるのは軽率である。そもそもからし

て、アメリカが外交問題にまずはたいした関心を払えないのは、このアメリカ合衆国の成立の本性に存している。それは国家としての長い伝統がないからではない。アメリカ大陸内にあって、極めて広大な地域が人間の自然な拡大衝動にまかせられていたという事実に基づいている。それゆえにアメリカ合衆国の政治はヨーロッパの母国家から分離して以来つい最近まで、まずは内政であった。いや、独立戦争自身も基本的には、もっぱら内政的視点から考えた生存のために外交上の関連性を回避する方策以外のものではなかった。アメリカ民族が内地移民という課題を次第に完成させていくのに応じて、とりわけ若い民族に特有な自然な行動主義的衝動は外に向かう。世界は思いもよらない出来事を体験するであろうが、平和主義的、民主主義的、汎ヨーロッパ主義的混淆国家はそれに対する真面目な対抗措置をほとんど講じ得ないであろう。クーデンホーフ[51]の世界雑婚論に基づく汎ヨーロッパ主義は、かつては旧オーストリア国家がドイツやロシアに対して持っていた役割を、いずれはアメリカ合衆国や国家として目覚めた中国に対して果たす。

アメリカ合衆国では種々な民族出身の人間が混ざり合って一つになっているのだから、ヨーロッパでも同じように可能であるに違いない、という意見がある。これにあらためて詳しく反論する必要はあるまい。もちろんアメリカ合衆国はさまざまな民族に属する人間を一つの若い民族にまとめた。しかし少し近寄ってみればよく分かる。さまざまな民族所属者の圧倒的多数

は人種的には同種的または少なくとも同系的基本要因に属しているのだ。というのは、ヨーロッパにおける移住プロセスというものは有能な者を選択するプロセスであり、その有能さは全てのヨーロッパ民族の中ではまず北方の混血にあったので、アメリカ合衆国は事実上、それ自体としてはさまざまな民族の中から合衆国にばら撒かれた北方要素を引き抜いたのである。その際には、ある種の国家方向性の担い手ではなく、どのような伝統にもとらわれていない人たちが重要であった点に、さらには、全ての人が多少は持つであろう新世界の印象の大きさに思い至れば、わずか二百年の間に全ヨーロッパから来た人間から新たな国家民族が成立できた理由は理解してもらえるであろう。ヨーロッパの国民国家の国民として民族的に国家に結びついていると感じるばかりではなく、新たなる故郷の市民性よりも自分の国家の伝統を高く評価していたヨーロッパ人が困窮に迫られて北アメリカに渡る例が増加するのに対応して、融合のプロセスが前世紀には弱まっていたのは考慮されなければならない。さらにアメリカ合衆国でも、それぞれの国民感情や人種本能を持った血の遠い人間をはっきりと融合させるのは難しい。中国人の構成分子に対しても日本人の構成分子に対してもアメリカ合衆国の同化力は機能を発揮しない。人々はそれを正確に感じており、知っている。それゆえにこの外国人団体の流入をまっさきに排除したく思っている。しかしそうすれば、アメリカの移住政策自身が、今までの融合はまさに特定の均一な人種基盤を持つ人間を前提としてきたものであり、原則的に他種の人

間が対象となるとすぐに失敗するものだ、と認めた結果となる。アメリカ合衆国自身が自国を北方的なゲルマン的国家であり、国際的な民族のごたまぜではないと感じているのは、ヨーロッパ民族への移住数割り当てを見ても明白である。(52) スカンディナヴィア人、スウェーデン人とノルウェー人、それからデンマーク人、イギリス人、最後にドイツ人。これらが最大の割合を占めている。ラテン系とスラヴ系はわずかであり、日本人と中国人はできたら排除したい。このような人種的に支配的で優勢な北方国家に対して、モンゴル系、スラヴ系、ドイツ系、ラテン系などを構成員とするような、すなわちゲルマン系が支配するわけではないヨーロッパ連合または汎ヨーロッパを対立要因として対置するのは、ユートピアである。もちろん、多くのドイツ人が、再び困難な犠牲を払わなくても虹色の未来が見られる、と考えているとすれば、それは危険なユートピアである。このユートピアがよりによってオーストリアから生まれている(53)というのは、まったくコミックの世界である。この国家とその運命こそが、人工的につじつまを合わせた結果としての、しかしそれ自体では不自然な形成物に特有な莫大な力の生きた実例である。かつての帝国首都ヴィーン、東洋と西洋との混合都市の有する根なし草の精神がわれわれを誘い込んでいるのである。

今一度まとめて言っておく。その外交政策の目的が一九一四年の国境回復であるようなわれわれの市民的・国民的政策はナンセンス、いや、重大な誤りである。これは世界大戦に参加し

た全ての国との対立を必然的にひきおこす。われわれの息の根をゆっくりと止めようとしている戦勝国連合の更なる継続を保証するようなものだ。それはフランスでは好都合な世論を育て、他の国にあってはフランスの対独対応の是認を導く。国境回復がたとえうまくいっても、結果としてはドイツの将来に何の意味ももたらさない。それにもかかわらずわれわれを、血と鉄をもって戦いに駆り立てるであろう。これはわれわれの市民的・国民的政策は特にドイツ外交そのものの安定性を阻害する。

戦前のわれわれの政治は、優柔不断にして不可解な結論を出しているような印象を外部からの観察者に与えざるを得なかった。これはドイツ政治の一つの特徴であった。三国同盟にしても、その保持は外交上の目的ではなく、その目的への手段であった。戦前のわが民族の命運の指導に関してはしっかりした理念を見出すことはできない。これらは当然ながら理解しがたい。(54) 外交の目的をドイツ民族の利益のための戦いではなく、世界平和の保持であるとした瞬間に足元の地盤を失っていたのである。私は民族の利益をしっかりとデッサンし、それを確定し、個々のケースがその利益をどの点で代表するのかにかかわりなく、大いなる目標を常に視野に入れておくことができる。他の人も次第に、民族の特別で確固とした指導的な外交思想に関する全般的知識を持つだろう。それらがあいまって、諸関係を互いに永続的に調整する可能性が生まれる。それは、そのような国のよく知られた行動に対して意図的に対立するという意味で

あってもいいし、その対立に関する妥当な認識に至るという意味であってもよい。あるいは意志疎通の意味でもよい。自分たちの利益はおそらく共同手段で達成され得るものだからである。

外交政策の安定性についてはヨーロッパ諸国のほとんどの国で確認できる。ロシアはその長い発展時期の中で特定の外交目標を持ち、その全行動をその視点から制御している。フランスは数百年間もの間、外交意図に変更を加えていない。誰がパリでその時々に政治権力を握っていたかに関係なく、一つの外交意図に従っている。イギリスについては、単に伝統的外交の国家と呼ぶのではなく、まず何よりも、外交理念が伝統と化した国として論じなければならない。ドイツにおいては、そのような理念は一時的にプロイセン国家においてのみ認められる。ビスマルクの統治術が支配していた短期間にプロイセンはそのドイツ的使命を果たした。しかし、その統治術とともに、遠くまで見通していた外交目標も終焉を迎える。新しいドイツ帝国は、特にビスマルクの辞任以降、そのような目標をもはや持っていない。なぜなら、平和保持のモットー、すなわち与えられた状態を維持するというモットーは安定した内容や性格を持たないのである。そもそも全ての受動的モットーは現実では攻撃的モットーの玩具に堕してしまうのである。自分で行動しようとする者のみが自分の行動を自分の意志に従って規定できる。それゆえに、行動しようとしている三国協商は、行動の自己規定に存している全ての長所を手にしていたのに対し、三国同盟は気楽な平和保持方針によってまさに同じ程度まで不利な立場にい

た。戦争は開始においても時期においても特定の外交目的を有していた三国協商国によって決められた。逆に三国同盟締結国は万事が不利なときにびっくりさせられたわけである。ドイツが戦争の意図を少しでも持っていたのであれば、おざなりにでも実行され得た幾つかの対抗策によって、きっと戦争開始にまったく別の様相で臨めたであろう。しかしドイツは特定の外交政策を持っていなかった。その目標実現に向けた攻撃的な対応を考えていなかった。その結果として、事態にびっくりさせられたのである。

オーストリア・ハンガリー帝国に関して言えば、この死に体巨大国家の現実の内的性格を世界から隠すために、この朽ちた国家組織がどことも衝突しないようにヨーロッパ政治の危険をうまくすり抜ける以外の外交目標を望めなかった。

私がここで話題としているのはドイツの国民的市民階級である、なぜなら、国際主義マルクシズムが認識している目標は常にドイツの破壊にあるので、ドイツの市民階級は今日に至ってもなお過去から何一つ導き出していなかった。ドイツの将来に十分と見られ、かつそれによってかなりの長期間にわたってわれわれの外交努力にある種の安定性をもたらす外交目標を国民に与える必要性をいまだに感じていないからだ。というのも、そのような可能な外交目標の大筋が原則的に立てられていると思えるときになって初めて、個々の問題において成果を導ける可能性について語り合えるからだ。そのときになって初めて、政治は可能性の術という段階に

至る。しかし全政治活動そのものが主導的思想に支配されていない限り、個々の行動は、ある特定の成果そのものの達成に向けて全ての可能性を利用するという性格を持たない。単に、今日から明日にかけて目標も計画性も持たず、どうにかこうにかお茶をにごしてやっていく途中での一駅に過ぎまい。何よりも、大いなる目標を戦い取るには常に求められるあの堅忍さが消えうせる。すなわち、今日はこの外交上の可能性を探り、明日はあれを、明後日はそれを求める。それだけではない。今日のドイツを統治してはいるが、わが民族がなお再興されると実際には望んでいるわけではないあの権力の希望に、現在の明白な混乱が最終的に合致しないと分かると、外交は突然逆の方向に熱を上げる。その永遠に非理性的と見えるはねあがりによってあの明らかな計画を喪失させ、せいぜいのところ「いや、何がなされるべきかについては、われわれはもちろん知らない。何かがなされなければならないがゆえに、われわれは何かをなすのだ」と自分を正当化しているこのドイツ外交にナマの利益を持っているのは国際的ユダヤ人のみだ。いや、しばしば言われているように、この人間たちは自分たちの外交行為の内的意味自体についてほとんど知らないので、彼らにとって最高の行動動機は、他の人がより優れた事柄を知っているかどうかという問題設定だけだ。グスタフ・シュトレーゼマンのような人物がよって立つ国家術の基盤は、これである。

それに対してまさに今日必要なのは、ドイツ民族が、ドイツ民族の現実的内的要求に合致し

ているとともに、ひるがえってその外交行動にまずは明確に見通せるくらいの時間内で絶対的な安定性を保証するような外交目標をたてることである。というのは、わが民族がそのようにしてその利益を原則として規定し、それを根気強く守り通すときにこそ、われわれの最終的に確立された利益とは利害関係が対立しない、いや同等性が確立している幾つかの国を動かし、ドイツとのより緊密な関係に持ち込める希望が生じるのである。なぜなら国際連盟によってわが民族の困窮を解決しようとする考えはまったく根拠薄弱だからである。(55) フランクフルト連邦議会(56)にドイツ問題の決定を任せようという考えに根拠がなかったのと同様である。国際連盟を支配しているのは、経済的に充足した国家である。いや、国際連盟はそのような国家の道具に過ぎない。大勢として彼らは地球上の領土分割変更に、それが彼らの利益とならない限り、関心を示さない。彼らが小国の権利を云々(うんぬん)するのは、現実には大国の利益だけを視野に入れたうえでの話である。

ドイツが、心安らかにドイツ民族に日々の糧を与え得るために今一度真なる自由を手にしようとするならば、そのためにドイツはその方策をジュネーヴの国際連盟議会の外に求めなければならない。その場合には、自分の力はそれほど大きくはないのだから、ドイツとの共同歩調が自分の利益になると信じる同盟国を見つける必要がある。しかし、それらの民族にドイツの現実の外交目標が完全に明確とならない限り、そのような状況は生じない。何よりもドイツ自

身が、世界歴史の反対を除去するのに必要な根気強さをもてる力と内的強固さをそなえていない。それがなければ、生存に必要な目標を大事として最終的に達成し得るためには、小事においては我慢し、必要時には諦めもあることを学べない。なぜなら、同盟諸国間においても少しも波風の立たない関係はないからだ。相対立する関係という障害は常に現れる。一度たてた外交目標という大事に小さな不愉快事や対立を克服する力が存していなければ、その障害が危険をはらむ形式に至らないとも限らない。ここで模範となるのは戦前十数年間にわたるフランスの国家指導部といえる。ドイツの分別のつかない愛国者たちが小さな事件一つ一つにわめき散らし、不平を並べている間に、彼らは、ドイツに対する復讐戦争を組織する可能性を失わないために、極めてむごい出来事にも沈黙を守ったのだ。

明確な外交目標を掲げるのが特に重要だと思えるのは、そうでなければ自民族内にあって他の利益を代表する者たちが世論を混乱させ、小さな、部分的には挑発に過ぎない事件を外交政策上の意見を変えさせるチャンスに仕立て上げてしまう可能性が常に存するからである。かくてフランスは、事柄自身の流れからおこってきたり、人工的に作り上げたりした小さな確執から、現実的な生存利益の本性に従って互いに協力し、対フランスでは手を組まなければならない民族間に不協和をひきおこそうとするのである。このフランスの意図が成功するのは、確固たる外交目標がないために自国の政治行動が真なる安定性を有していなくて、それゆえに、自

国の政治目標実現に有益な対応を準備する根気さに欠けている場合である。

外交の伝統も目標も持っていないドイツ民族は、いとも簡単にユートピア的理念に熱中し、現実の生存利益をないがしろにしやすい。わが民族はこの百年間というもの何というおしゃべりを重ねてきたのか。トルコからギリシャを救い出そうとし[57]、そうかと思うとロシア人[58]やイタリア人[59]に対抗してトルコ人へ友情を注ぎ、翻ってはポーランドの自由闘士たちを賛美し[60]、次いでボーア人[61]に共感するなどなど。政治的に無能で話し好きなだけな連中のこのような愚昧談義はわが民族からどれほどのものを失わせてしまったことか。

オーストリアとの関係も、それが特別な矜持をもって語られていようとも、醒めた理性の関係ではない。純粋に内的な心情的盟約であった。当時、心情がではなく理性が語り、知性が決定を下していたなら、今日のドイツの窮状はなかったであろう。われわれは、自分の政治行動を現実的な理性的、知性的見地からの理由に従って規定することがあまりにも少ない民族である。われわれは決定に際して大いなる政治的伝統にまったく配慮できない。それゆえにわれわれは、少なくともわれわれの将来のために、わが民族に断乎たる外交目標を与えなければならない。その目標があってこそ、大衆に個々の問題において国家指導部の取る政治的対応を理解させることができるのだ。それで、何百万もの人間が、個別問題では多くの苦痛をもたらしかねない決定をも実行する国家指導部に信頼を寄せてもよいと予感するのである。これが民族と

国家指導部との間に相互理解をもたらす前提である。と同時にまた、国家指導部自身にある種の伝統を根付かせる前提でもある。個々のドイツの政権が外交的に彼ら独自の目標を持つべきだというのではない。方法をめぐって論争してもよい。議論されてもよい。しかし目標自体は常に変わらず確定されていなければならない。そのときに、政治が大いなる可能性の術となり得るのだ。すなわち、民族と帝国をその外交目標に近づける可能性をあらゆる場面で探るのが、個々の国家指導者の天才的能力に委ねられているのである。

今日のドイツには、そもそもこのような外交目標が存在しない。それゆえにわが民族の利益を擁護する仕方が不確実であり、揺れており、極端に走るのもうなずける。さらにはわれわれの世論が右往左往を繰り返しているのも、われわれの外交が信じられないくらいの気まぐれを重ねて、常に不幸に終わり、民族が責任ある人物に現実に責任を取らせる判断力をも有していないのも、上の理由から理解される。その通りだ。ドイツでは、人々は何をなすべきかを知らないのだ。

いや、もちろん今日少なからざる人々が、何もしてはならないのだと頭から信じている。今日のドイツは賢明に、慎重に振る舞わなければならない、何事にも積極的に参加すべきではない、事態の進展を注視し、自分から関与すべきでない、両者を戦わせておいて、旨いところだけ掠め取れる日がいずれは来る。まとめて言えば、彼らの意見はこうなる。

いや、はや。われわれの今日の市民政治家たちはかくも賢明であり、かくも聡明であられる。歴史上のどんな知識によっても曇らされていない政治的判断である。わが民族を賞賛せんがためのことわざが幾つかある。曰く「賢者は道を譲る」。曰く「馬子にも衣装」。曰く「礼儀正しければ、どこへ行っても無事ですむ」。「漁夫の利」ともいう。

少なくとも民族の生存に関する限り、最後のことわざは条件付きではあるがまったく事実に合致する。すなわち、一つの民族の中にあって二つのグループが見込みのない争いを続けておれば、民族の外にいる第三者が勝利者となる。しかし民族相互間の生存にあっては、意識的に争う民族が、最終的な成果を国家の形で手に入れる。なぜなら、闘争の中でのみ彼らの力は強化されるからである。世界の歴史上の出来事というものは、二つの視点から判断できないわけではない。一方には中立者がおり、他方には介入者がいる。そして一般的には常に中立者は貧乏くじを引き、介入者は、自分の勝負仲間が負けない限り、むしろ自分の成功を主張できる。

すなわち民族の生存における事情は次のようである。地球上で二つの強国が相争う。周辺の小国にも大国にもできるのは、多少ともこの闘いに関与するか、その闘いに近づかないかのどちらかである。関与すれば、味方した国が勝った時には利得にありつける。中立者を待っているのは、どちらの国が勝っても、戦勝国と対立するという運命である。地球上の偉大な国のいずれを見ても、中立を政治行動原理として今までに隆盛した国はない。闘争によってのみ隆盛

する。もともと地上に抜きん出た強国があれば、小さな民族の取れる手段は二つしかない。そもそも将来を諦めるか、都合よい同盟を組んで、その保護のもとで自国の力を強化するかである。なぜなら、漁夫の役割は、第三者としてすでに力を有しているのでなければ、果たせないからである。常に中立でいる者は決して権力を握れない。というのはまた、ある民族の力は民族の内的価値にも存し、その力の最終的な表現は、戦場における民族の戦闘力という、この内的価値の意志によって作られた組織形式に見出されるからである。しかしこの形式は、時々実践的テストが課されていないと、成立しない。民族の永遠の価値は世界史という鍛冶屋のハンマーの下でのみ、歴史を作るあの鋼や鉄となる。戦闘を避ける者は、戦いを挑む力を決して得られない。戦いを挑まない者は、剣を持った闘いで互いに対決する人々の遺産相続人たり得ない。というのは、世界史の今までの相続人は臆病な中立的見解を持つ民族ではなく、よりよき剣の使い手たる若い民族であったからである。継続的な闘いが存在していないところで強国が成立した例は、古代にも、中世にも、近代においても、ない。今までの歴史を相続した民族は常に力の国家であった。民族の生存においては、二国が争って第三者が相続者となる例もあり得ないわけではない。しかしその場合、当の第三国は、意図的に他の二国を争わせ、その後にたいした犠牲を払わずにその二国を決定的に打ち負かせるほどの力を初めから持っていたのである。しかしそれによって中立は、出来事に受動的で関与しないという性格を失う。それに代

わって、意識的な政治作戦という性格を引き受ける。もちろん賢明な国家指導部であれば、自力の投入がどれくらい可能であるかを評価し、敵の大きさと比較しないで戦闘を始めるわけがない。特定の国と闘うのが不可能と分かれば、その国と手を組んで闘わざるを得ない場合も生じるだろう。というのは、今までの弱小国にとってはこの共同戦闘から成長して、必要となればその国に対して自国の生存利益を主張する力をいずれは獲得できるからである。どの国だって、いずれは危険になるかもしれないような国とは同盟を結ぶはずがないなどとは考えないでもらいたい。同盟とは政治目的を示しているのではない。その目的への手段を示しているに過ぎない。明日の発展次第では敵になるかもしれないと千パーセント分かっていたとしても、今日の同盟を利用しなければならない。永久に続く同盟はあり得ない。互いの利益がまったく離れているので、ある時期は同盟関係にあり、それが終結しても対立関係に入らずにすんだ二つの民族があれば、幸いなる哉(かな)である。しかし特に力と偉大さを手にしようと思う弱小国は常に世界史の全般的な政治的な出来事に積極的な行動をもって関与しようとしなければならない。

プロイセンがシュレージエン戦争(62)を開始したとき、それは、当時すでに大きな流れとなっていた英仏間の軍事的衝突(63)に関連した副次的現象であった。人々は、フリードリヒ大王がイギリスという栗を火中から拾ったとして彼を非難するかもしれない。もし当時ホーエンツォレルン家の王冠を戴(いただ)く者が世界史の来るべき偉大なる出来事を知りながらプロイセンを敬虔(れいけん)なる中立

の位置に置いていたとするならば、ビスマルクが作りなした新たなるドイツ帝国の前身たるあのプロイセンは成立していたであろうか。三度のシュレージエン戦争がプロイセンにシュレージエン以上のものをもたらした。後にヴィサンブールとヴルトからスダンまでドイツの旗を掲げ、ヴェルサイユ宮殿の鏡の間で新しい帝国の新しい皇帝を歓迎[64]したあの連隊は、これらの戦場から育っていったのである。まことに当時のプロイセンは小国であった。領土の広さからいっても、人口からいってもたいして重要な国ではなかった。この小国が世界史の大いなる行動の真中に飛び込んでいって、後のドイツ帝国を築く資格を得たのである。

一度だけだが、このプロイセンの国家で中立主義者が勝ちをおさめた時期があった。ナポレオン一世の時代である。当時は、さしあたりプロイセンは中立を保てる、と考えられていたのであるが、後になって手痛い敗北でその報いを受けた。[65]一八一二年には二つの論が鋭く対立していた。一方は中立を主張し、他方は帝国男爵フォン・シュタイン[66]を代表として介入に賛成した。一八一二年には中立主義者が勝ち、プロイセンとドイツに終わることのない血を流させ、終わることのない苦しみをもたらした。一八一三年になってとうとう介入主義者が優勢となり、それがプロイセンを救った。

第三勢力として用心深く中立を保持しておれば政治的成果が得られる、という意見に極めて明確な答えを与えたのが世界大戦である。世界大戦の中立国が実際に得たのは一体何だったと

いうのか。ほくそ笑みながら漁夫の利を得たのであろうか。同じような状況に出合ったらドイツは別の役割を果たせると信じているのであろうか。世界大戦の強国のみが戦争に責任を有していたと考えないでもらいたい。とんでもない。将来の戦争は全て、大国が関与する限り、極めて大規模な民族戦争である。ドイツが中立を保つのであれば、ヨーロッパにおいて将来何らかの対立がおこったときにドイツの占める位置は、世界大戦時のオランダ、スイス、またはデンマークなどのそれである。相闘っているどちらかと同盟して一つの役割を果たす勇気を持てなかったのに、事態が収束をみた後になれば、残った勝者に向かってその役割を演じられる力を無から引き出せる、とそれでもなお信じられるであろうか。

いずれにしても世界大戦は明確に証明した。すなわち大いなる世界史的対立に際して中立を保つ者は、おそらくまずはほんの小さなビジネスに参加させてはもらえるが、強国政策的に見れば世界の命運の決定に際しては徹底的に排除される。

もしアメリカ合衆国が世界大戦で中立だったら、勝者がイギリスだったとしても、ドイツが勝っていたとしても、アメリカ合衆国は今日では第二流の強国と見られているであろう。戦闘への介入(67)がアメリカ合衆国を海上権ではイギリスの対抗国にまで高め、世界政治的には決定的な重要性を持った強国として認知させたのだ。世界大戦参戦以降のアメリカ合衆国の評価は完全に別のものとなった。一つの状態が数年前にはどのような一般的評価を得ていたかは、少し

時間が経てばもう誰も知らない。これが人間の忘却の本性である。われわれは、今日では外国の多くの政治家がその話柄の中でドイツのかつての偉大さに関しては完全に無視しているのを知っている。逆にわれわれは、世界大戦参加以降のアメリカ合衆国がわれわれの判断の中で高めてきた価値成長の程度というものを、過小に評価するわけにはいかない。

イタリアは参戦して、かつての同盟国に敵対した。政治家としてこれに理由付けせざるを得ないが、事情は同じである。イタリアがその第一歩を踏み出していなければ、今日のイタリアは、賽の目がどちらに出ていたにしても、スペインと役割を共有しているだろう。世界大戦への積極的関与に向けて極めて不評な一歩を進めたのが、イタリアにその位置の向上と地位の強化をもたらした。今やファシズムにその最終的な栄えある表現が見出せるのである。参戦がなければ、ファシズムはまったく想定できない現象である。

それに対してドイツ人は暗い顔で不機嫌に対応しても、明るい顔で受け入れてもよい。重要なのは歴史から学ぶところにある。歴史の教訓が説得力をもってわれわれに語りかけるときは、特にそうである。

ヨーロッパまたは他の地域で増大する対決に対して慎重で用心深く中立を守っておけば、ある日その成果を第三者としてほくそ笑みながら手に入れられるという考えは誤っており、馬鹿げてもいる。そもそもからして、自由は物乞いやいかさまによって得られるのではない。また

労働や熱意によってでもない。もっぱら闘争によって、しかも自分の闘争によってである。それに際しては大いにあり得る事柄ではあるが、意志の方が行為よりも重視される。賢明な同盟政策を進めたおかげで、武器で得た成功とは比べられないくらいの成功をおさめた民族は、決してまれではない。しかし、勇敢に力を尽くす民族の運命を左右するのは常に行為の規模ではなく、非常にしばしば意志の大きさである。その例として、十九世紀のイタリア統一の歴史は注目に値する。世界大戦を見ても分かるように、多くの国はその軍事的な作業においてよりも、味方した国の大胆なる勇気によって、それらの国が示した根気強さによって極めて大きな政治的成功を達成できるのである。

ドイツが万難を排してそもそも忍従のときを終結させようと欲するならば、どのような事情にあっても、強国連合に積極的に食い込み、強国政治的に、ヨーロッパでの生存の将来の形成に活動的に関与しようと試みなければならない。

そのような関与は困難な危機を内に抱え込む、と異議を唱える向きもあるだろう。これはまったく正しい。だが危機を引き受けなくして、そもそも自由を獲得できると考えているのであろうか。それとも、危機と結びついていない世界史上の行為が存在すると信じているのであろうか。例えば最初のシュレージエン戦争をフリードリヒ大王が決心したとき、それは危険と裏表の関係になかったというのか。ビスマルクによるドイツ統一は危険がなかったのか。否であ

る。何度でも言おう、否である。人間の生誕から死に至るまで、全ては疑問だらけである。確実と見えるのは、ただ死のみである。まさにそれゆえに、最後の出撃が最も困難なる出撃ではない。いずれにせよその出撃が求められるのである。

成果が最も多い事業を配備先として選ぶのは国家の賢さの問題である。しくじるかもしれないという不安から、そもそも手を出さないのは、民族の将来を諦めるのと同義である。そんな行為はのるかそるかの大勝負のようなものだという批判に対しては、今までの歴史的経験を持ち出せば簡単に反論できる。のるかそるかの大勝負とは、勝運の可能性が前々から偶然に委ねられている勝負の謂である。政治においては、そのような場合はあり得ない。なぜなら、最終的な決定は将来の闇の中にあるのではあるが、成功する、しないの確信は人間の認識可能な要因に基づいているからである。これらの要因を比較考量するのが、民族の政治指導部の任務である。[68] 検討の結果が一つの決定を導くに違いない。この決定は己自身の洞察から生じており、その洞察に基づけば成功は可能であるという信頼に支えられている。この理由により私は、ある政治的決定行為の結果が百パーセント確実でないからといって、その行為をのるかそるかの大勝負と呼ぶつもりはない。医者によって行われる手術であれば、その結果が絶対に成功と決まってはいなくても、私はその手術を受け入れてもよい。必要性自体が明らかであり、諸関係を十分に検討してみても特定の行為がまさに問われているとなれば、幾分か疑わしく、かつ確

実に成功するとはいえない行為であっても最大限のエネルギーをつぎ込んで実行する、これが昔から偉大な人物の本性である。

行動的人物が自分の民族を観察した後に、失敗でさえ国民の生存力を破壊し得ないと確信できればできるほど、諸民族の対決の中にあって幾つもの大いなる決定を下す責任感の喜びは一層大きくなる。なぜなら、内的に頑健な民族は戦場での敗北によって消滅させられるものではないからである。それゆえに、民族が十分な人種的な意義を有しているという前提のもとにあって内的健康を保持しているならば、作戦の失敗はそのような民族の没落を意味してはいないだろう。だから難しい作戦を採用する勇気は[69]、他を圧倒する勇気であり得るだろう。クラウゼヴィッツ[70]はその『告白』の中で、健康な民族にあってはそのような敗北は常に再びその後の隆盛に導いていけるし、逆に臆病（おくびょう）に服従すれば、すなわち闘わずして命運に忍従すれば、最終的なる破壊が導かれると断定している。これはまったく正しい。中立が今日のところわが民族に唯一可能な行為として推奨されているが、これは、事実上他国の武力が規定する運命への無意志的忍従以外の何物でもない。そこにのみわれわれの衰亡の可能性と兆候がある。それに対してわが民族自身が、今まで欠けていた自由への試みに着手したのであれば、そのような心情を表明する中にすでに、わが民族の生存力にとって有益なる要因が見られるであろう。なぜなら、そのような対応には慎重であるのが国政上の賢明さというものであるなどとは言ってもらいた

くないからである。そうではない。それは哀れな怯懦と無思慮である。この場合もそうであるが、歴史においてもしばしば賢明さとこれとを見誤る手合いが多い。もちろん事情によっては、民族は外国武力の圧迫のもとで何年間も外国の圧制を我が身に引き受けざるを得ない。しかし、超強大国に対して外面的にある真摯なるものを達成するのは決して容易ではない。それと同じ程度に、民族の内的生活は自由を求めるであろうし、民族の全力を投入して一時的に与えられている状態をいつの日か変えるために、あらゆる手段を尽くすであろう。外国の征服者のくびきに耐えてはいるが、こぶしを握り締め、歯を食いしばり、暴君から解放される最初の可能性の時を狙い待つのである。困難な諸状況の下にあって、これが可能となるのである。しかし今日、国政上の賢明な政策として示されているものは、実は自分から服従する精神であり、全ての反抗を志なく諦めている心情である。その反抗を模索し、民族の再興に有益な作業を意図的に進めている者たちを恥ずかしげもなく追放しようとする精神である。自己収縮の思想であり、この民族と国家の再生にとっていずれは有益となる全ての内面的要因を破壊する精神である。まことにこの精神は、賢明な国策と自慢できる代物ではない。それは実際は国家を破滅させる破廉恥行為であるからだ。

この思想はもちろん、来るべきヨーロッパの変化にわが民族が行動をもって関与する全ての試みを憎悪するに違いない。それに協力するように試みるだけでも、すでにこの精神との戦い

が必要となるのであるから。

しかし、国家指導部が精神のこの堕落によって腐食していると見えるときには、民族の現実的生存諸力を認め、擁護し、それとともに代表される反対勢力の課題は、国民高揚のための、それによって国家の名誉のための闘いを旗印とするところにある。反対勢力の側としては、外交は責任ある国家指導部の課題であるという主張に怖気(おじけ)づく必要はさらさらない。なぜなら、そのような責任ある指導部はもはや長い間存在していないし、逆に指導部は、民族共同体の存続のために周知の必要事をなすように民族の全構成員に課す永遠の義務が、個々の政権の形式的権利を超えて存しているという意見に賛意を表さざるを得ないからである。[71] これは劣悪で、かつ無能な政権の見解とは千度にわたって対立しようとも、気にする必要はない。

それゆえに今日では、まさにドイツにおいては、わが民族の指導部がその名にふさわしくないのであるから、外交上の明確な目標を設定し、わが民族をこの思想実現に向け準備させ、教育するという高度な義務を、いわゆる国民反対勢力が持っているのである。それにはまず第一に、国際連盟と協力してわれわれの運命に何らかの変更を加えることが可能であるという今日広く流布している希望に対する厳しい戦いを予告しておかなければならない。われわれの今日の不幸に興味を寄せている連中の寄り合いである諸機関にドイツの現状改善を期待してはいけない、とわが民族が次第に認識するに至るように、そもそもこの反対勢力は努力しなければな

らない。さらに、ドイツの自由が再獲得されない限り、全ての社会的希望は現実価値を伴わないユートピア的約束に過ぎないという確信を深めなければならない。さらに、この自由はいずれにせよ自分たちの力を投入して初めて問題となるのだと、わが民族の内的力が成長し、増加するのを実現する内政と外交がわれわれの全政策でなければならないと、わが民族に知らしめなければならない。そして最後に、この力の投入は真に価値のある目標になされなければならないし、この目的ゆえに運命に一人では立ち向かえないので、同盟国が必要とされるのだ、とわが民族を教導しなければならない。

# 第九章　ドイツの領土政策の目的

ドイツ外交の将来の形態の問題にとっては、わが民族の内的な力ならびに、民族特有の強さと判断は別として、その軍事的動員力および周辺諸国の軍事的手段と自国のそれとの関係が決定的な意味を持つ。

私は本書で、今日のわが民族がかかえている内的な道徳的弱点についてこれ以上吐露する必要はあるまい。われわれの一般的な弱点は、ある部分はその血に基づいているし、ある部分はわれわれの今日の国家組織の本質に存しているし、あるいはわれわれの劣悪なる指導部の活動のせいであるに違いない。これらをよく知っているのは、残念ながら、ドイツの世論よりもドイツ以外の世界である。われわれを抑圧している者が採用している措置の大部分はこれらの弱点の認識に基づいている。現状を認識するに際して、この同じ民族が僅々(きんきん)十年前には歴史上比類を見ない仕事を成し遂げていたのを決して忘れてはならない。(1) 目下のところ悲しむべき印象

を与えているドイツ民族ではあるが、それにもかかわらず世界史においてはその力強い価値を一再ならず示している。世界大戦自体が、わが民族の英雄心と犠牲をいとわぬ心情を、その死を恐れぬ規律を、さらに生存組織の全領域にわたる天才的な能力を証明している。その純軍事的指揮においては不滅の成果が得られていた。ただ、政治上の指導がなっていなかった。当時の政治はすでに今日のなお一段と低レベルな政治指導部の前身であった。

わが民族の国内での水準は現下のところ極めて、千度繰り返してもよいが、不満足ではあるが、一撃が加えられれば他のあり方を示し得るであろう。今他の拳(こぶし)があれば、わが民族を現在の衰微から再び救い出す幾つかの事態の手綱を握れるであろう。

わが民族のまさに驚異的な変容力はわれわれの歴史が示している。一八〇六年のプロイセンと一八一三年のプロイセンである。何という大きな違いであるか。一八〇六年は降伏の悲しみが国中に満ち溢(あふ)れ、市民的心情は前代未聞の低劣さにあった。一八一三年はどうであったか。外国支配に対する湧き上がる憎悪、自民族への愛国的犠牲心、自由のための英雄的な闘争意志、これらに満ちた国であった。当時変わったのは真実のところ何であったのか。民族であるのか。否である。内的な本性は旧来のままであった。民族の指導が別の手に握られたからに過ぎない。フリードリヒ大王後の時代での脆弱(ぜいじゃく)なプロイセン国家指導部に、軍隊の旧弊に満ち、かつ硬直した運営の持っていた弱点に、今や新たなる精神が続いたのである。男爵フォン・シュタイン

とグナイゼナウ、[2] シャルンホルスト、[3] クラウゼヴィッツ、ブリュヒャー。[4] これらが新たなるプロイセンの代表者たちの名前である。世界は、このプロイセンが七年前にはあのイェーナを経験したのだとは二、三か月したら思い出しもしなかった。[5]

新たなる帝国建設の前は事情が異なっていたのか。ドイツの力と栄光を力強く体現していると多くの人の目に映った新たなる帝国がドイツの衰退と不統一、そして全般的に破廉恥な政治から出現するのには十年弱で十分だった。一つの卓越した頭脳が、凡庸なる多数派に対する闘いの中で、ドイツの天性にドイツ発展の自由を再び付与したのである。われわれの歴史からビスマルクを取り去ってみたまえ。わが民族にとって数世紀間で最も栄光に満ちたあの時代が哀れむべき凡庸さで埋め尽くされるであろう。

ドイツ民族はその前代未聞の偉大なる数年間を経た後、その凡庸なる運営によって今日のこの混乱に突き落とされたわけであるから、同じようにドイツ民族はその鉄の拳をもって再び興隆し得る。そのときは、ドイツの内的価値は全世界にはっきりと目に見える形で現れ、そのようなドイツが存在しているという現実が、その事実への配慮と評価とをひきおこすに違いない。

その価値が未(いま)だまどろみの中にあるときこそ、ドイツがその瞬間に所有している力の本当の価値に明確な形を与えることがまさに必要なのである。

私はすでにドイツの現代の軍事力装置、すなわちドイツ国防軍の簡潔な像を描いておいた。

ここではドイツの一般的軍事状況を周辺世界との関係で素描してみよう。

ドイツは現在三つの兵力要因、あるいは三つの強国グループに取り囲まれている。

イギリス、ロシア、フランスが現下のところ、ドイツにとって軍事的脅威となる隣国である。その中でもフランスの力は、パリからワルシャワに、[6] プラハからベオグラード[7]にまで及ぶヨーロッパ同盟システムによって強化されているように見える。

ドイツはこれらの国の間にあって国境は開かれたままで、身動きできない。特に脅威なのは、帝国の西部国境がドイツにとっての大工業地帯と平行に走っている点にある。西部国境は長く、防御に役立つ自然の障害物に欠けている。軍事力が極端に制限されている国家がこれを守りきれる可能性は低い。ライン河も軍事的に効果のある防御ラインとしては考えられない。ドイツは講和条約によって、これに必要な技術的準備ができないばかりでなく、[8] この河自体は近代的に装備された軍隊の移動をほとんど防ぎ得ない。それ以上に、少ないドイツ防衛力を長い戦線にわたって無駄にばらまかねばならない。さらに、この河はドイツ最大の工業地帯を流れているので、この周辺での戦闘はただちに国家的防衛にとって技術的にこのうえもなく重要な工業地区と工場の破壊を意味している。

独仏対立のあおりを受けてチェコスロヴァキアがドイツの敵に回れば、戦争遂行への工業的な支えとなるドイツ第二の大工業地帯、すなわちザクセンで戦闘が行われることが問題となる。

ここでも国境は自然に阻まれているとは言いがたく、バイエルンに至るまで、長くはあるが、障害はない。防御が成功する見込みは薄い。この戦闘にポーランドも参加するとなれば、東部国境全体が、幾つかの役に立たない要塞を別にすれば、防御のすべもなく、攻撃にさらされる。[9]

ドイツの国境は一方では長距離にわたって軍事的に無防備のまま開かれており、敵に取り囲まれている。とりわけわれわれの北海海岸は小さく狭い。それを防御する海軍力は噴飯ものであり、それ自身としてはまったく価値のない軍事力である。今日われわれが「われわれ自身の」と称している軍艦は、われわれのいわゆる戦艦からして、せいぜいのところ敵の射撃練習の標的でしかない。数隻の新造巡洋艦にしても、それ自身としては近代的で軽くできてはいるが、目に見えるような決定的な価値は認められない。[10] われわれが権利内で持てる艦隊力はバルト海用にだけでも不十分である。要するにわれわれの艦隊に価値があるとすれば、せいぜいのところ浮かぶ射撃学校の価値でしかない。

それに関連して、いずれかの海軍と衝突する事態となれば、ドイツの貿易はその瞬間に終息するだけでなく、敵の上陸の危険性もあるのだ。

われわれの軍事情勢がまったく不利なのは、次の諸点を見ても明らかである。

帝国の首都ベルリンはポーランド国境からわずか百七十五キロしか離れていない。次いでチェコの国境からはかろうじて百九十キロ、ヴィスマールやシュテッティーンまでの最短距離も

ほぼ同じ。すなわちベルリンからこれらの国境までは新型飛行機で一時間とかからないのである。ライン河から東に六十キロに沿って南北に線を引けば、西部ドイツの工業地帯はことごとくその範囲内に入ってしまう。フランクフルトからドルトムントまで、知られているドイツの工業地区でこの地域内に入らない都市はない。フランスがライン河左岸の一部を占領する限り、(11)飛行機を使えば三十分とかからずにわれわれの西部ドイツ工業地帯の心臓部に進撃できるのである。チェコの国境からミュンヘンに至る距離はポーランドやチェコの国境からベルリンに至る距離にほぼ等しい。チェコの軍用機がミュンヘンに来るのに約六十分とはかからない。ニュルンベルクには四十分、レーゲンスブルクなら三十分。アウクスブルクでさえチェコ国境からは直線距離で二百キロだから、今日の飛行機であれば一時間はかからない。アウクスブルクとフランス国境との距離は、アウクスブルクとチェコ国境との直線距離にほぼ等しい。アウクスブルクからストラスブールまで直線で二百三十キロ、一番近いフランス国境は二百十キロである。敵の飛行機はアウクスブルクまで一時間で来られる。いや、ドイツの国境をこのような視点から眺めてみると、西部ドイツの工業地帯は、オスナーブリュック、ビーレフェルト、カッセル、ヴュルツブルク、シュトゥットガルト、ウルム、アウクスブルクまで入れてすべて、国境から飛行時間一時間の範囲内にある。東部で見るとミュンヘン、アウクスブルク、ヴュルツブルク、マクデブルク、ベルリン、シュテッティーンがそうである。換言すれば、ドイツ国境

の現状では、ドイツは一時間とかからないうちに敵機の来襲を受けないですむのは、ほんの僅かな、数平方キロメートルにも満たない地域に過ぎない。

その際最も危険な敵としてはフランスが考えられる。フランスはその諸同盟のおかげで戦闘勃発一時間でほとんどドイツ全土を飛行機で脅かせる位置にある。

飛行機という武器が使用された場合、ドイツの取れる軍事的対抗手段は、今のところ、要するにゼロである。

これを見ただけでも、ドイツが身一つでフランスと対立した場合にすぐさま陥る絶望的な状況というものが明白である。戦場で敵機空襲の効果のすごさに何度もさらされた経験を持つ者は、そこから引き出せる教訓的な効果をとりわけ最もよく評価できる。

ハンブルクやブレーメンなどのわれわれの港湾都市といえども全て、今日になれば同じ運命にある。大海軍は航空母艦を有している。浮かぶ着陸場を海岸近くに運び込めるようなものなのである。(12)

今日のドイツが技術的に効果の高い武器に十分に対抗できないのは空からの飛行機攻撃に対してばかりではない。われわれの脆弱な国防軍の純粋に技術的な装備はわれわれの敵のそれに絶望的なほど劣っている。重火器が不足してはいるが、それは戦車に対して現実に十分効果のある撃退手段が欠けているのに比べれば、それほど深刻ではない。もし今日のドイツが、少な

くとも必要な防御準備を事前に講じることができないまま、フランスとその同盟国を敵にまわす戦争になったとしたら、純粋に技術的にみてわれわれの敵が優勢であるから、数日を経ずして結果は明らかとなろう。そのような敵の攻撃を防御するのに必要な措置を、戦闘をしながら準備するのは不可能と言わざるを得ない。

出来合いの戦力で少なくとも少しの間は対抗できる、という意見もある。これは誤っている。なぜなら出来合いにしてもとにかく揃えるのに、かなりの時間を必要とする。戦闘がおこったのちに、そのような時間を確保する余裕はないからだ。というのも、事態は一旦(いったん)動き始めると、対抗策を組織する時間はないほど早く進行し、既成事実を生み出すものだからである。

それゆえにわれわれはまた外交の可能性をどのような側面からも考察できるのではあるが、ドイツにとって原則的にしてはならない事柄がある。すなわち、現在ヨーロッパで動員されている諸戦力に自軍の軍事力にのみ基づいて対応するわけにはいかない。この理由から、事前に基本的な準備の可能性がないままフランス、イギリス、ポーランド、チェコスロヴァキアなどとの戦闘をドイツにもたらすような組み合わせは排除される。

この認識の重要さを強調しておきたいのは、わがドイツは今日になってもなお、ロシアと共同歩調を取るべきだと本気で考えているからだ(13)。

確かに純粋に軍事的に見ただけでも、その考えはすでに実行不可能であり、ドイツにとって

不幸をもたらすものだ。

一九一四年以前においても、現在においても、われわれに絶対的に確固とした立場がある。ドイツを巻き込むあらゆる対立において、いかなる理由から見ても、いかなる動機からしても、フランスが常にわれわれの敵であるだろう。将来のヨーロッパでいかなる組み合わせが浮上したとしても、常にフランスはドイツとは対立する組み合わせにおいて動く。これが伝統に基づいたフランス外交の考え方である。戦争終結によって幾分かは事情が変わったと考えるのは誤りである。逆である。フランスにとっては、世界大戦はフランスが考えている戦争目的をまだ完全には満たしていない。というのはその目的はエルザス・ロートリンゲンの再割譲だけではなかった。まったく逆である。エルザス・ロートリンゲン自体はフランスの目指す外交目的における小さな進行を示しているに過ぎない。ドイツに対するフランス政治の攻撃的傾向がエルザス・ロートリンゲン占領によって終結していないのは、フランスがエルザス・ロートリンゲンを占領した時期にもフランス外交の立場は反ドイツの方針を持ち続けていた事実から見て決定的に明らかである。一九一四年よりも一八七〇年の方が、フランスが心底で何をたくらんでいるかをより明確に示していた。一八七〇年にはフランス外交の攻撃的性格をカムフラージュする理由がなかったからである。一九一四年には、経験によって利口にもなっていたし、イギリスの影響もあって、一方では人間の本格的な普遍的な理念を立て、他方では目的をエルザ

ス・ロートリンゲンに限定するのが賢明だと考えたのである。しかし、これは策略的配慮であって、フランス外交のかつての目的が内的に変更されたわけでは決してない。フランス外交のカムフラージュに過ぎない。今も昔もフランス外交の基調はライン地方の獲得にある。そのためにはドイツをできるだけ結束性を持たずに相互に独立している個別国家に細分化しておくのが、最良の方策である。これによりヨーロッパにおけるフランスの安全は確保されるのだから、それがより大きな世界政治の目的実現に役立っているはずだと言っても、フランスの大陸政治的意図はドイツにとっては生死の問題であることには何の変化ももたらさない。
事実、ドイツの利益を促進するかもしれないような組み合わせには、フランスは決して加わっていない。一八七〇年までの三百年の間に、ドイツはフランスからの攻撃を二十九回受けている。ビスマルクをして、スダン会戦の夕暮れ時に降伏条件の緩和を画策するフランスのウィンペン将軍に対して厳しく糾弾したのは、この事実である。フランスがドイツの好意を決して忘れずに、将来にわたって感謝の意を持ち続けるだろうという意見に激怒し、フランスはこの三百年間に、政府のシステムは異なっていようとも、ドイツに度重なる攻撃を仕掛けてきており、「降伏の形式がどのようであれ、フランスは自力で、または同盟軍の支援を得てドイツを攻撃する力があると判断すれば、すぐさまそれを実行すると自分は見ている」と言って、歴史の厳粛で粉飾できない事実をもって、フランス交渉団に応酬したのは、ビスマルクであった。

これを見ても分かるように、現在ドイツのわれわれの政治指導部よりもビスマルクの方がフランスのメンタリティーを正しく判断していた。彼にそれができたのは、彼自身が政治目標を明確に有し、他国の政治目的をも内的に理解できていたからであった。ビスマルクにとってフランスの外交政策の意図は明確であった。われわれの現在のいわゆる政治家連中はそれを少しも理解できない。彼らには明確な政治思想一つさえないからである。

さらに言えば、フランスが世界大戦参戦に際して、その目的をエルザス・ロートリンゲンの再保有にのみ見ていたとすれば、フランスの戦争遂行のエネルギーは実際とは異なっていたであろう。特に政治力は、世界大戦の諸状況において驚異的とも見えた決断力を発揮してはいなかったであろう。いつの時代でもそうであるが、戦争に関与した諸国民自身の内部利益が極めて大きな対立をきたしているのであれば、全ての希望をくまなく実現するのは不可能である。これが比較的大きな連合戦争の本質である。フランスの意図はヨーロッパにおけるドイツの完全な消滅にある。イギリスの願望はフランスの絶対的主導権をも、ドイツのそれをも防ぐところにあり、フランスの意図とは常に対立する。

フランスの戦争意図縮小に重要なのは、ドイツ崩壊が、その破滅の大きさが世間の人々の意識にまずはっきりとは上らないような形で、おこったことであった。人々はフランスでの、ドイツ歩兵の戦いぶりを知っていて、フランスが自国の最終的な政治目標の実現のみを持ち込む

ように導いているのではないかと疑惑の目で見ることができると分かった。その後になって、ドイツは内的に敗北しているという印象が誰の目にも明らかとなってきており、そのような疑惑が明確になったとき、他の世界の戦争心理状態はすでに、大きな最終目的を目指したフランスの単独行動を、それまでの同盟国側からの反論なしには実行させ得ない事態に立ち至っていたのである。

とはいえ、フランスがその目標を諦めたわけではない。逆である。フランスは、以前にもまして現実が拒んでいるものを将来に実現しようと執拗にたくらんでいる。フランスは自力で、または同盟国の支援を得て可能と見れば、明日にでもドイツを解体させようとつとめ、ライン河畔を占領しようとするだろう。そうなればフランスはその力を他方面に、背後の憂いなく投入できる。ドイツの政権形態が変わってもフランス民族自身がその時々の体制に関係なくその外交理念を信奉しているのであるから、フランスはその目的にみじんも戸惑いを見せないのも十分に理解できる。時の実権が共和制であろうと君主制であろうと、市民的民主制であろうとジャコバン党的恐怖政治であろうと、それには何の影響もうけず、常に特定の外交目的を追求してきた民族であってみれば、他の民族が政権形態を変えたから自分自身の外交目標を変えるという考えなど持ちようがない。それゆえに、ドイツで国民を代表しているのが帝国であろうと共和国であろうと、社会主義のテロがこの国家を支配しているとしても、フランスのドイツ

に対する立場は何一つ変わらない。

もちろんであるが、フランスはドイツの国内での経過に関心を払わずに対応しているのではない。フランスの態度はしかし、より大きな成果を求めるところにのみ、すなわちドイツの特定の政権形態によって自国の外交行動を軽減する点にのみ規定されている。フランスは、ドイツを破壊しようとしてもほとんど異議を唱えない政権がドイツに成立するよう望んでいる。であるから、ドイツ共和国が自分の価値の特性としてフランスとの友好を挙げようとしているが、それは現実には共和国の徹底的な無能の証明である。なぜなら、共和国は、ドイツにとっての価値はないとフランスに評価されてこそパリで歓迎されるからである。かつてわれわれの国家としての存立が脆弱であったときと違う対応を、フランスがこのドイツ共和国に採用しているなどと考えてはいけない。セーヌ河畔で愛されているのはドイツの弱さである。ドイツの強さではない。ドイツが弱ければ、フランスの外交活動はいとも易々と成功を収められるからである。

フランス民族には領土が不足しているわけではない。これは事実ではあるが、フランスの傾向に変化はない。というのは、数世紀にわたってフランスでは政治は純粋な経済的困難によってではなく、むしろ感情要因によって決定されていたからである。健全なる土地占領政策の意義が簡単に逆転し、民族的な諸原則は規定的役割を果たさず、それに代わっていわゆる国家

的・国民的諸原則が幅を利かす。フランスは、このような国の典型的実例である。フランスの国民的国粋主義は民族的視点からはほど遠く、ただ純粋に権力欲を満足させるために、ひとえに「偉大なる国家」の名称を数値的に維持するために、自分の血を黒色人種化するのもいとわないのである。それゆえに、この民族への決定的にして基本的な懲罰が加えられない限り、フランスは長期間にわたって世界の平安妨害者であり続けるだろう。フランスの虚栄心を述べるに際して、ショーペンハウアー(14)の寸言に勝るものはない、すなわち「アフリカにはサルがいて、ヨーロッパにはフランス人がいる」。

虚栄心と誇大妄想とが混ざり合って、フランスの外交政策はいつもその内的エネルギーを保持してきた。フランスの全般的な黒色人種化によってフランスは理性的で明晰（めいせき）な思考からますます遠のいているというのに、いつかはフランスの反ドイツ的志操と意図が変化すると期待したり、また希望したりするドイツ人がいるだろうか。

否である。ヨーロッパが次にどのような発展をたどろうとも、フランスは常に、そのときのドイツの弱点や自国に利用できる外交的、軍事的可能性を活用してわれわれに損害を与えようとする。わが民族を分割し、最終的にはわが民族を完全に消滅させようとするだろう。

当然ながらこの理由によって、フランスに対してある種の束縛をもたらさないようなヨーロッパ連合はドイツにとっては問題とならない。

独露協調を信じ込んでいるとしても、ロシアにおいて、ボルシェヴィズムという害毒をドイツに及ぼすのを唯一の努力目的とする支配がのさばっている限り、その信念それ自体空想である。共産主義者たちが独露同盟を渇望しているのもうなずける。彼らが、ドイツをボルシェヴィズム化しようとするのは理にかなっている。ところが国民的ドイツ人までもが、当の国民的ドイツの崩壊に最大の利益を見ているような国との合意達成を信じ込んでいるのは理解できない。今日そのような同盟が最終的に成立すれば、その結果は、ロシア同様、ドイツにおけるユダヤ人の完膚なきまでの支配である。これは明白である。ロシアと手を携えて西ヨーロッパの資本主義世界に対して戦うという意見も、同じく理解できない。というのも、まず第一に、現在のロシアは反資本主義国家ではない。ロシアは、自国の国民経済を破滅させ、国際的金融資本に絶対的支配権の可能性を容認している国である。[15] そうでないのであれば、第二にドイツでまさに資本主義の世人がそのような同盟に賛成するであろうか。ドイツにおいて独露同盟を支持しているのは、株式利益を有しているユダヤ新聞機関なのは明白である。ベルリン日報[16]やフランクフルト新聞[17]、さらにはあれこれの絵入り新聞[18]が多少ともオープンな形でボルシェヴィズムのロシアを支持しているのは、ロシアが反資本主義国家だからなのだ、と実際に人々は信じているのであろうか。政治の世界では思考の父は願望である、これが、いつもながら、災いのもとである。

もちろん、ロシアの国民的要素がユダヤ的要素を排除し得るのであれば、ロシア自体でもボルシェヴィズム世界内部での内的変化がおこると想定できないわけではない。そうなれば、今日の現実としてはユダヤ的・資本主義的ボルシェヴィズム・ロシアが国民的・反資本主義的傾向を強めていかないとも限らない。とはいえそれは多くの点で多分に指摘されているように見えるのであるが、そうなると、もちろん西ヨーロッパの資本主義は本気でロシア対抗策を講じると考えられる。とはいえ、そのロシアとドイツとの同盟関係はまったくの妄念に等しい。というのはその同盟関係を何らかの方法で内密に保てるという見解は、軍事的衝突に備えてひそかに軍備増強を行うという希望と同じくらい根拠を欠いているからである。

現実には、この問題への可能性は二つしかない。反ロシアの態度を表明している西ヨーロッパ世界がこの同盟を危険と見るかどうかである。危険と見るとすれば、少なくとも最初の二十四時間以内に破滅しないですむだけの軍備を調える時間がわれわれに残されていると真面目に信じている人がいるであろうか。私は、そういう人を知らない。それとも、われわれがわれわれの空軍と戦車とを整備するまでフランスが待ってくれると、実際に真面目に信じているのであろうか。あるいは、裏切りは破廉恥な行為ではなく賞賛すべき勇気ある振る舞いと解されているこの国にあって、秘密裏に行えると信じている人がいるのであろうか[19]。否である。今日ドイツがロシアと反西ヨーロッパ同盟を結ぼうとすれば、明日になればドイツは再び歴史的な戦

場となっているだろう。そしてロシアが何らかの方法で、といってもそれが何であるか私には分からないが、ドイツ支援に来てくれるという想像こそ稀有なる空想である。そのような行為の唯一の成果は、ロシアの破滅が数時間遅れるところにある。何といっても破滅はまずドイツに襲いかかるのだから。これより分かりやすい対ドイツ戦闘の理由付けは、特に西側国家においては、ありえまい。ドイツが、本当に反資本主義的ロシアと同盟を結ぶと想像してもらいたい。そして、この民主的な世界のユダヤ新聞が他国民の全本能を反ドイツに動員する様を、特にフランスでは即座に、フランスの国民的国粋主義とユダヤ的・株仲買人的新聞の間で完全な意見一致が見られる様を思い描いてもらいたい。というのも、当時の白ロシアの将軍たちの対ボルシェヴィズム闘争とこのプロセスとを混同してもらいたくないからである。一九年、二〇年に国民的白ロシア(20)が闘ったのはユダヤ的・株仲買人的な、本当のところはまぎれもなく国際的・資本主義的な赤色革命に対してであった。しかし今日では、国民的となった反資本主義的ボルシェヴィズムが世界ユダヤ性と闘っているそうだ。新聞によるプロパガンダの意味を、それが際限なく民族を駆り立て、人間を愚昧にしている意味を知っている者は、ヨーロッパの西側諸国が反ドイツの憎悪と興奮の狂宴にかり立てられていく様子を理解する。というのも、そうなればドイツが手を組むのは、偉大にして注目に値し、倫理的にして勇敢なる理念を持つロシアとではなく、人間文化の冒瀆者とである。

フランス政府が自国内の困難を克服しようとすれば、そのような場合にまったく危険性のない対ドイツ戦争を敢行するのが何よりも最良の方法である。新たなる世界連合に保護されて最終的な戦争目的実現に本質的に一歩でも近づけるというのであれば、フランスの国民的国粋主義は一層満足するだろう。というのも、独露同盟がどのような種類のものであろうとも、軍事的に見れば、極めて強力な攻撃に耐えなければならないのはドイツのみであるからだ。ロシアとドイツは直接国境を接していないし、ポーランドという国を越えなければならないのは自明のこととして認めなければならない。さらに、ロシアがポーランドをねじ伏せたと仮定しても、ロシアの支援がドイツ地域に達するのは、最もうまくいったとして、ドイツが消滅した後となるだろう。ロシア師団がドイツのどこかに上陸してくれるという考えは、イギリスとフランスがバルト海の制海権を握っている限り、まったく荒唐無稽(むけい)である。さらに、ロシア軍のドイツ上陸は技術力の点からしてももともと成功はおぼつかない。

将来独露同盟が現実問題となってこなければならないとしても、そして同盟とはそもそも戦争を念頭において初めて現実味を帯びるものではあるが、ドイツは、少しはましな自力での対抗措置は何一つ取り得ないまま、全西ヨーロッパからの同心円的攻撃にさらされるであろう。

だが問題は残る。独露同盟はそもそもいかなる意味を持てというのか。たった一つ、ロシアは破滅から守られ、その代わりにドイツが犠牲とされるためだけである。その同盟がどのよう

な形で終結を迎えようとも、ドイツは最終的な外交目標には達しない。それによって、基本的な生存の問題に関して、わが民族の生存困窮に関しては何一つ変わらないのだ。逆にドイツはそれのせいで唯一の合理的な土地政策から切り離され、その将来を瑣末な国境線策定をめぐるつかみ合いに費やさざるを得ない。というのも、ヨーロッパの西部においても南部においてもわが民族の領土問題は解消されないからである。

ドイツの多くの国民的政治家はなお独露同盟へ希望をつないでいるのであるが、その希望は他の理由からしても実に疑わしい。

ユダヤ的・ボルシェヴィズム的ロシアとはうまく同盟関係を保てない。なぜなら、どの観点から見ても結果はドイツ自身のボルシェヴィズム化だからである。百人が百人とも、これを望んでいないことは明白である。これが、一般的に言えば国民的グループ内では自明の見解と見える。彼らが希望をもっているのは、いつかはロシアでボルシェヴィズムのユダヤ的な、それゆえに深い意味で国際資本主義的な性格に国民的な世界反資本主義的共産主義が取って代わるであろうという予想にである。再び国民的傾向に満たされたロシアがドイツと同盟関係に入る局面に立たされるのではあるまいかということである。

これは大きな間違いである。スラヴ的民族精神の心理を少しも知らないところから生まれている考え違いである。と言えば訝る向きもあるかもしれないが、政治的問題を論ずるドイツが

かつての同盟国の心理状態についていかほどの知識を持っているかを考えてみれば、納得してもらえるだろう。少しでも知っておれば、そんなに深く間違わなかったであろうに。親ロシアの国家的政治家たちがビスマルクの対ロシア方針を参考にしているというのであれば、彼らは、当時は親ロシア方針を支えていたとはいえ、今日では反ロシアを示している多くの重要要素を見逃している。

ビスマルクが知っていたロシアは、少なくともロシアの政治管理に関して言えば、典型的なスラヴ国家ではなかった。一般的に言えば、スラヴ人自身には国家形成能力が欠けている。特にロシアでは国家形成は常に外国からの要因によってなされた。ピョートル大帝の時代以降、ロシア国家の骨格と頭脳を形成したのは何よりも多くのドイツ人(バルト三国の人[21])であった。数世紀間に多数のドイツ人がロシア化された。われわれの市民階級、われわれの国民的な市民がポーランド人やチェコ人をドイツ化またはゲルマン化させようとしているのと同じである。この場合、成り上がりの「ドイツ人」は実際はドイツ語を話すポーランド人やチェコ人に過ぎないが、同様に新造ロシア人はその血においてもその能力においてもドイツ人であったし、よりゲルマン的であった。ロシアがその国家を存続できたのは、いや、幾らかの文化的価値を示し得たのは、これらのゲルマン人指導層のおかげである。このような実際はドイツ人による指導層や知識階級がなければ大ロシアは成立していなかったであろうし、保持されてもいなかっ

たであろう。ロシアが専制的な統治形態の国家であった時代には、実際は決してロシア人でない指導層が巨大帝国の政治生命にも決定的な影響を与えていた。このロシアの現実を少なくとも部分的にはビスマルクも知っていた。ドイツの政治の巨匠はこのロシアと政治的な取引をしたのである。しかしすでに彼の生前に、ロシア政治の内外に向けての安定性と信頼性が揺らぎ始め、部分的には予測不能となっていた。その原因はゲルマン指導層が次第に押し込められていったところにあった。ロシア知識階級の変化のこのプロセスは部分的には、何度もの戦争によって、本書ですでに見たように戦争がまず第一に人種的に価値ある勢力を激減させるのであるが、ともかく戦争によってロシアの民族体が出血を重ねた結果である。事実、特に将校は、その出身からいえば、多くはスラヴ系ではない。ともかくロシアの血ではない。加うるに、上層知識階級自体が増加しなかった。そして最終的には、現実の血に対応したロシア性というものが学校による人工的な拵え物であった。新たなるロシアの知識階級自体が国家保持の価値を高く評価していないのはその血に根拠を有していたし、それはロシアの大学におけるニヒリズム[22]に多分に極めて先鋭的に表れている。しかし根底においては、このニヒリズムは、人種的に外国から来ている指導層に対する現実的にロシア的なるものの血に従った反対行動以外の何物でもないと解される。

ロシアのゲルマン人による国家形成での指導層が人種的には純粋なロシア系の市民層によっ

て消滅させられていく程度に応じて、ロシアの国家思想には汎スラヴ的理念が入り込んでいった。これはその誕生の瞬間から民族的・スラヴ的であり、反ドイツ的であった。

新たに生成しているロシア、特にいわゆる知識層に見られる反ドイツ的心情は、しかしロシアにおけるそれまでの専制的な外国指導層に対する、例えば政治的な自由思想傾向からの、純粋な反省運動だけではなかった。最も内的な意味において、スラヴ的本性からのドイツ的本性に対する抗議でもあった。二つの民族精神はほとんど共通点を持っていない。このように共通点が少ないのは、ロシア民族をもドイツ民族をも構成しているように見える人種の個別要因が錯綜しているところに原因が求められないかどうかを確定する必要があるかもしれない。すなわち、われわれドイツ人とロシア人に共通する点は、ドイツ的特性にもロシア的特性にも対応していない。東部のスラヴ的要素をドイツに持ち込み、北方的・ドイツ的要素をロシアに持ち込んだわれわれの混血ゆえの共通性である。

両者の精神の性向を調べるために一方に純粋な北方的ドイツ人を、仮にヴェストファーレンの人としておこう、他方に純粋なスラヴ的ロシア人を選んでみよう。両民族の代表者の間には深い溝が口を開けているであろう。事実、スラヴ・ロシア民族はこれを常に感じていたので、ドイツ人に対する本能的嫌悪を持っていたのである。厳しい徹底性、冷たい論理性、冷静な思考。本当のロシア人はこれらには内的に共感できないし、ある部分は理解できない。われわれ

の秩序感覚は賛成してもらえないだけではなく、常に嫌悪感を呼び起こす。われわれが自明として受け取る事柄は、ロシア人には苦痛である。彼らはそれを、他のあり方をしているとはいえ、自然な精神生活と本能生活に対する制限と解するのである。それゆえにスラヴ・ロシアはいつもフランスにより親近感を持つ。しかもフランスでフランケン的・北方的要素が衰退すればするほど、親近感は深まるのである。フランスの軽快で表面的な、多少とも女性的な生活がスラヴ人をよりひきつけるのである。スラヴ人は、厳しいわがドイツ的生存闘争よりこちらに内的な親近性を感じたのだ。また汎スラヴ的ロシアが政治的にフランスに心酔し、スラヴ系のロシア知識人がパリに自分の文明が要請するメッカを見たのも、決して偶然ではない。

ロシアで国民的市民階級が興隆するプロセスは同時に新しいロシアのドイツに対する内的疎遠をひきおこしていた。ドイツは人種的に近縁なロシア指導層を組織できなかった。

事実、民族的・汎スラヴ的思考の代表者が抱いている反ドイツの見解はすでに世紀末には強まっていたし、ロシア政治へのその影響力も増大していたので、日露戦争に際しロシアに対してドイツは申し分のない対応をしたにもかかわらず[23]、両国間の距離が次第に開いていくのをくいとめることができなかった。そこに、汎スラヴ熱に煽り立てられた世界大戦がおこったのである。以前の指導層によって代表されていたのでは、現実の国家としてロシアにもはや発言の機会はなかったのである。

そのとき世界大戦自体がロシアにおける北方的・ドイツ的要素の広範な流出を招き、残っていた部分は革命とボルシェヴィズムにより最終的に根絶された。それまでの非ロシア的指導層を根絶する闘争を意識的に実行したのはスラヴ的人種本能であるかのごとく考えられている。しかしそれはそうではない。その闘争はこの間に新たなる指導者を戴いていた。ユダヤ人を、である。指導層に、同時に上級指導部に入り込んでいたユダヤ人は、スラヴの人種本能に支援されて、それまでの外国指導層を根絶した。ボルシェヴィズム革命ではユダヤ人がロシアの生活のあらゆる分野で指導権を得た。これは自明な経過であった。というのは、自明のうえにも自明なことではあるが、スラヴ人にはそもそも自力で組織する能力というものが、それと同時に国家を形成し、国家を保持する力が欠けているのである。スラヴ人から純粋にスラヴ的ではない要素を取り去って見れば分かる。スラヴは国家としてはすぐに壊滅するだろう。もちろん原則的に言えば、国家形成はその最も内的な契機をより高位の秩序とより低位の秩序を持つ諸民族の衝突に有している。その際に、より高い血の価値を保有している方が、自己保存の理由から、特定の共同体精神を育て、その精神があって初めて彼らはより低価値の民族を支配し組織するのが可能となる。共通課題の克服のみが組織という形式を強いるのである。しかしながら国家形成的要因と非国家形成的要因との違いはどこに存するのであろうか。非国家形成的存在は、他の存在に対して自己の存続を保証する組織形態を自力では見出せない。国家形成的存

在は他の存在に対して自分のあり方を保持するための組織を形態化するのが可能なのである。

かくて、今日のロシアは、より正確に言えば、ロシア国籍を持つ今日のスラヴ人は、女主人としてユダヤ人を手に入れ、ユダヤ人がそれまでの指導層を排除して、今や自分の国家形成力を証明しているのである。ユダヤ人の体質は最終的には破滅的に作用するものであるが、ここでも歴史的な「分解酵素」[24]としてのみ作用するであろう。ロシアは助けてもらおうと悪霊たちを呼び出したのではあるが、自分自身ではそれを追い払えまい。そして、内部においては反国家的な汎スラヴ思想はボルシェヴィズム的ユダヤの国家理念に対して戦いを起こすであろう。その戦いはユダヤ人の絶滅をもって終結するはずである。しかしそこに残るものはロシアではあるが、そこには国家としての権力はほとんど存在せず、反ドイツ的な立場が深く根をおろしているだろう。この国家が、いかような形であれ確固たる国家を保持する指導層を持たないことで、それは不安定と不確実が永遠に続く源泉となる。そうなれば、巨大な領土は変転極まりない運命にさらされ、地球上の安定した国家関係に代わって不安定な変化の時期が始まるのである。

この事態の最初の段階では、世界中のさまざまな国民が、このようなやり方で自国の地位と諸目標の強化を求めてこの強力な複合国家体と友好関係を結ぼうと試み始める。諸国のそのような試みは、しかし常に、精神的、組織的に自国の影響をロシアに及ぼそうとする努力と結び

ついている。

ドイツは、事態がそのように進むのに疑問をさしはさむべきではない。今日や今後のロシアのメンタリティーは全てドイツとは相容(あいい)れない。冷徹な目的性の視点から見ても、人間的な同属性の視点からしても、ロシアとドイツとの同盟は将来にわたってドイツには何の意義もない。逆である。先述の事態が出現すれば将来の幸福事である。なぜならそれによって、ドイツ外交の目標を唯一にして単独で可能な場所に求めるのを妨げていた束縛が打ち破られるからである。その場所とは、東部での領土である。

# 第十章　ドイツ外交の基本原則

来るべきドイツの外交の形態は、ドイツの軍事情勢に見通しのない現状を考えれば、以下の諸点を考慮しなければならない。

一、ドイツは、軍事力によらない限り、自力でドイツの現在の状態に変化をもたらせない。

二、ドイツは、国際連盟の決定権代表者たちが同時にドイツ壊滅の利益享受者である限り、この機関の措置によってドイツの状況に変化がおこるという希望を持てない。

三、ドイツは、ドイツを包囲するフランスの同盟システムと対立しているドイツの現状が、同盟義務発生時にはすぐさま成功の見通しをもって軍事的に行動できるようにドイツの純粋な軍事的無力を除去する可能性が事前に見出されていない状態で、諸国間の組み合わせによって変わるという希望を持てない。

四、ドイツは、ドイツの最終的外交目的が明確に確立されたと見えるようになり、それによ

って、それがドイツとの同盟を考慮する諸国の利益に対立しないどころか、それに役立つように見えるようにならない限り、前記の諸国間の組み合わせを見出すという希望を持てない。

五、ドイツは、これらの諸国を国際連盟加盟国以外の国に求め得るという希望を持てない。逆にドイツの唯一の希望は、ドイツが今までの戦勝国連合に亀裂を生じさせ、そこから個別の国を引き出し、国際連盟がその使命からして導きえない新たなる目的を有する新たな利益集団を形成するのに成功する点に求めなければならない。[1]

六、ドイツは、上記の方針によってそれまでの不安定な日和見政策に終止符を打ち、それに代えて原則的には一つの方向性を決定し、かつ全ての帰結を引き受け、持ちこたえるときにのみ、成果を手にするという希望を持てる。

七、ドイツは、過去の敗戦によってその軍事的価値がすでに分かっていたり、その一般的な民族価値が低い民族との同盟によって世界史を形成していけるという希望を持つべきでない。なぜなら、ドイツが自由を再獲得する闘争はそれに関連してドイツの歴史を再び世界の歴史にまで高めるからである。

八、ドイツは、自分の運命をどのように、またはどのような方法によって変えようと考えようとも、フランスはドイツの敵であるし、ドイツに敵対する諸国の連携は当初からフランスを自分たちの味方に数えておけるという事実を一瞬たりとも忘れるべきではない。

# 第十一章　ドイツの領土政策——東方における生存圏確保

ドイツ自身は何を望んでいるのか、ドイツ自身がその将来をどのように形成していこうと考えているのか、これがまずは明確に規定されていなければ、ドイツ外交の可能性は検討できない。さらに、戦勝国連合の一員として世界強国の位置を占めているヨーロッパ列強の外交目標を明確にしておかなければならない。

私は本書においてすでにドイツのさまざまな外交可能性について論じてきた。さらに今一度、可能な外交目標を短く掲げておきたい。それにより、これらの個々の外交目標と他のヨーロッパ諸国の外交目標とを批判的に検証する基礎材料が明らかとなる。

一、ドイツは、外交上の原則的な目標設定そのものを諦めてもよい。すなわち現実問題としてドイツは全ての目標のどれを採用するのも可であり、どれかに縛られる必要もない。ドイツはそれによって過去三十年の政治を、事情を異にしてはいるが、将来においても継続するだろ

う。世界が同じように政治目的を持たない国ばかりから構成されているのであれば、それはドイツにとっても、長くは是認しないにしても、少なくとも耐えられないわけではない。ところが事態は、まさにそうではない。通常の生活においては、どのような逆境にあっても達成すべく努力する特定の目標を持っている人間が他の目標を持たない人間を常に圧倒する。民族の生存においても同様である。とはいえ、まず何よりも、政治目的を持たない国は政治目的がおそらくもたらすであろう危険から身を守ることができるというわけでは決してない。なぜなら、自分の政治目標を有しなければ活動的行為をしないですむようには見えるが、その受動性のゆえに易々と他国の政治目標の餌食になり得る。というのも、国家の行為というものは、自国の意志によってのみではなく、他国の意志によっても規定されているからだ。もちろん両者間に違いはある。一方では国家が行為自体の法則を規定できるが、他の場合には自国に行為の法則が強要される。平和的心情から戦争を望まないというのは、戦争を避け得るという意味ではない。万難を排して戦争を避けようと欲したとしても、それは、死を前にした生の救済を意味してはいない。

ヨーロッパにおける今日のドイツの状況では、独自の政治目標を有していないから静謐に向かっていけるとは望めない。そのような可能性は、ヨーロッパの心臓部に位置している民族にはない。ドイツのとる途は、生存形成に積極的に参画しようとするか、他民族の生存形成の受

動的対象であるかのどちらかである。かつては、不干渉の旨を広く明言すれば民族を歴史の危険性から拾い上げられると思い込んでいたが、それは常に怯懦(きょうだ)にして愚かなる誤謬(ごびゅう)であるのが明らかとなってきた。ハンマーたろうとしない者は、歴史においては鉄床となる。われわれドイツ民族は過去の発展においていつもこの二つの可能性の間で選択せざるを得なかった。ドイツが自分自身で歴史を作ろうと欲し、それに従って喜びに満ちて勇敢に自己に肩入れするときには、ドイツは常にハンマーであった。生存闘争への参加義務はないと考えたとき、ドイツはそのうえで他の民族がその生存闘争を戦う鉄床であるか、または他国の食い物として利用された。

ドイツが生き続けようと欲すれば、生存の防衛をわが身に引き受けざるを得ない。ここでも常に、攻撃が最大の防御であった。ドイツが、ドイツの生存闘争を他民族との利にさとい利害関係に持ち込むにふさわしく見えるような明確な外交目標を立てようとしないのであれば、ドイツが自分の生存形態に何かをなせると希望を抱くのが、そもそも笑止千万である。

これをしないのであれば、無目標は概して個々の事柄における無計画をひきおこす。この無計画性はわれわれをヨーロッパにおいて次第に第二のポーランドにしていく。われわれの一般的な政治的敗北主義のゆえにわれわれ独自の諸力が弱体化し、われわれの生存の唯一の活動が単に内政においてのみ発揮されていくのに応じて、世界史上の出来事の活動力は他民族の生存

であろう。

さらに、自分の将来に明確な決断を下せず、したがって世界発展の勝負に喜んで関与できないような民族は、勝負への参加者たちからは勝負妨害者と解され、それに応じて憎まれる。いや、普遍的な外交目標の欠如から導かれた個々の政治的場面での無計画性は、逆にまったく巧妙にしくまれた不透明な勝負とみなされ、それに従った対応を呼び起こす事態に至る。これこそが、われわれが戦前に体験した不幸であった。当時のドイツ帝国政府の外交決定が理解されないがゆえに不透明であっただけに、より疑惑の目をもって見られ、極めて愚かな処置をとったときでさえ危険な考えが潜んでいるのではないかと、ますますかんぐられたのであった。

このようにドイツが今日明確な政治目標を決定しないのであれば、それによって実際にひきおこされる様相は、将来の大きな危険を最小限に抑えようとして、われわれの現在の運命を修正する可能性を実際に放擲（ほうてき）するのと同義である。

一、ドイツは以前と同じように、経済和平的にドイツ民族の食糧確保を実行しようとしている。したがって将来にわたっても世界産業、世界輸出、世界貿易に徹頭徹尾参加するつもりである。それとともに大きな商業船隊を再び所有し、他の世界に石炭基地と支援拠点を築き、最終的には国際的な販売市場だけではなく、可能であれば、植民地形式で独自の天然資源生産を

持とうとしている。そのような将来の発展は必然的に特に海軍力によって支援されなければならないであろう。

この将来の政治目標は、事前にイギリスが力を失っているとみなされない限り、夢物語である。イギリスは一九一四年に世界大戦になだれ込んだ理由を復活させる。この方法で過去を再建しようとするドイツの全ての試みはイギリスの徹底した敵愾心を招き、それにはフランスは確実に荷担すると初めから考えておくがよい。

この外交目標は、民族的視点に立てば災いを呼ぶし、力の政治から見れば馬鹿げている。

三、ドイツは外交目標として一九一四年の国境回復を決めている。

この目標は国民的視点からいえば不十分であり、軍事的に見れば不満足であり、将来にわたる民族的観点に立てば不可能であり、結果に関すれば常軌を逸している。この政策によってドイツは以前の戦勝国連合全体を、将来にわたっても、敵の一致した前線として迎えなければならない。われわれの現下の軍事状況は年ごとに劣悪化している。いかにしてそれでかつての国境を回復しようというのか。回復の具体的な方法は、われわれの国民的・市民的、祖国愛的政治家の、誰も覗き込めない秘密である。

四、ドイツは、将来を見通した明確な領土政策への移行を決断する。それとともに世界産業上および世界貿易政策上の方向を変更し、それに代えて、十分な生存圏の割当によって次の百

年のためにも一つの生存法をわが民族に指示するのに全力を集中する。この領土は東部にのみ存するので、海軍への義務は後退する。ドイツは、決定的な陸軍養成法によりあらためてその利益を獲得しようとする。

この目標は最高の国民的要求にも、民族的要請にも合致している。その実現には同じく大きな軍事力を前提としてはいるが、必ずしもドイツをヨーロッパの全列強との対立に無条件に巻き込むわけではない。この政策によってもフランスは確実にドイツの敵になるであろうが、この外交目標の性質からしてイギリス、とりわけイタリアにとっては世界大戦時の対立に固執する理由は見出せない。

# 第十二章　民族価値と政治目標

まさにここで展開している可能性をより詳細に理解するために、他のヨーロッパ諸国の大きな外交目標を述べるのも無駄ではあるまい。これらの目標はある部分は諸国の今までの活動や行動から知られているものであり、ある部分はずばりと方針などに記載されている。他方、それらの目標は生存必然性に基づいている。生存必然性は明確に認められるもので、たとえ一時的に他の道を進んでいたとしても、厳しい現実に強いられて、国はこの目的に帰ってこざるを得ない。

イギリスは明確な外交目標を有している。この巨大帝国が成立し、存在している事実が、それを証明している。明確な意志を持たずにこれほどの世界帝国がいつか作り出されるなどとは考えないでもらいたい。自明のことではあるが、この民族の一人一人が大いなる外交目標を胸に抱いて毎日仕事に励んでいるわけではない。しかしまったく自然の成り行きで、民族全体が

ゆっくりとそのような一つの目標にとらえられていき、個人の無意識的行為さえこの目標の共通の線上に並び、事実上その目標に貢献するのである。いや、その民族の本質の内部自身に、ゆっくりとではあるが、共通の政治目標が刻印されるのである。今日のイギリス人の誇りは古代ローマ人の誇りとまったく同じである。世界帝国の成立は偶然のおかげであるとか、少なくとも帝国の建設をもたらした出来事は、その民族にいつも幸運をもたらす結果に導くような偶然の歴史的経過であったとか主張する向きもあるが、これは誤った見方である。古代ローマにしても、現在のイギリスにしてもまったく同じであるが、その偉大さのよって来るところを考え、長期的に見れば幸運はひとり有能なる者にのみある、というモルトケ(1)の箴言の正しさに思い至る。しかし、民族のこの有能さは人種的な価値にのみ存するのではない。それらの価値を扱う能力と手腕にも存する。古代ローマや現下のグレート・ブリテンという大いなる世界帝国は常に、最高の民族価値と極めて明確な政治目標とが結びついた結果である。この二つの要素のうちの一つでも欠け始めると、まず弱体化が始まり、最終的にはおそらく没落が生ずる。

今日のイギリスの目標を規定しているのはアングロサクソンという民族価値自体とその島嶼性である。アングロサクソンの民族価値は、領土を求めるところに認められる。この衝動はその充足を必然的に現在のヨーロッパ外にのみ見出すことができた。とはいえ、それはイギリス人がヨーロッパにおいてもときおりその拡張欲に基盤を与えようとしなかったからではなかっ

た。当時にあっては少なくともかなりの人種的有能さを持っていた諸国がイギリス人に立ち向かっていた事実があって、イギリス人の試みが全て挫折したのである。その後のいわゆる植民地におけるイギリスの拡張策は、当初からイギリスに海外での極端な拡大をもたらした。最初は人間を輸出していたイギリスが最終的には商品輸出に移行し、同時に自国の農業衰退さえ招いた様子を検証するのも興味深い視点ではある。今日のイギリス民族の大部分、いや平均そのものがドイツの最高価値よりも下位にあるにもかかわらず、数世紀にわたる伝統がこの民族にあっては第二の天性となっており、われわれドイツ民族に対する実質的な政治的優位を有するに至っている。今日の地球はイギリスという世界帝国を有しているが、現在のところ、全般的な国政の特性と平均的な政治的賢明さゆえに世界帝国への能力を有していると判断して差支えない民族は他には存在しない。

イギリスの植民地政策を支配していた基本思想は、一方ではイギリスの人的資源を売りこめる地域を見出し、母国への国家関係の中でその地域を確保する点にあり、他方ではイギリス経済の販売市場と天然資源供給を保証する点にあった。イギリス人は、ドイツ人には植民地は無理だと考えている。これは理解できる。まったく同様にドイツ人は、イギリス人には植民地は無理だと信じている。これも理解できる。両民族とも植民能力の判断においては異なった立脚点に立っている。イギリスの観点は実際的で冷静な観点であり、ドイツのそれはよりロマンテ

ィックな観点であった。ドイツが初めて海外に植民地を求めようとしたとき、ドイツはすでにヨーロッパ内では軍事国家であり、第一級の強国であった。人間的文化の全領域および軍事能力の分野における不朽の業績によってドイツは世界強国の名を得ていた。奇異なことではあるが、特に十九世紀ヨーロッパでは全ての民族が植民地獲得への途を進んだ。そして、そのときには本来の主導理念はすでに完全に消滅していたのである。例を挙げれば、ドイツではドイツ文化を広げる能力と願望が植民地要求の動機であった。これ自身はナンセンスである。というのは文化はその民族の全般的な生の表現であり、それをまったく異なった精神を前提としている他の民族に伝えるのは不可能であるからだ。ベートーヴェンの交響曲に代表される文化とジャズのような、いわゆるインターナショナル文明を比べてみれば、よく分かる。この件は論じないとしても、イギリス植民地創設時期のイギリス人には、自分の行動に自分が持ち込む現実的で冷静な利益以外の動機が存するなどとは思いもしなかったであろう。後になってイギリスは海の自由や抑圧された国民の自由のためだと言っているが、それは植民地活動を根拠づけるためではなく、邪魔な競争相手どもをやっつける口実に過ぎない。イギリスの植民地活動もまたある部分は、当然な根拠ゆえに大きな成果を得たに違いないのだ。というのも、イギリス人がイギリスの文化や習慣を未開人に押し付けようと考えなければ考えないほど、その統治が文化に飢えているわけではない未開人にはますます共感を呼んだに違いないからだ。もちろん、

それに加えてムチもあった。文化的使命に逆行する危険がないだけに一層、それは盛んに使用されていた。イギリスはイギリス製品のための販売市場と天然資源を必要としていた。そしてその市場を強国政策で確保した。イギリスはそこに植民地政策の意味を見ている。それにもかかわらずイギリスが後になってから文化という単語を口にするのは、純粋にアジテーターの観点から、かくも冷徹な自分の行為を少しは道義的に飾りたてようとしてである。現実としては、イギリス人は未開人の精神生活の現状に、未開人がイギリス人の生活事情自身に触れようとしない限り、長い間しかも広範囲にわたって完全に無関心であった。後に大インド植民地と、威信を保つための他の政策思考が結びついていったのは理解できる。しかし、インドの利益がイギリスの生活状況を規定しているのではなく、イギリスの利益がインドの生活事情を規定している。これを疑う人はいない。イギリス人はインドでも、現地人がイギリス文化に触れるチャンスを増やすために文化施設を作るわけではない。せいぜいのところその植民地からより多くの利益を引き出すだけである。これもまた疑いようがない。イギリスがインドに鉄道を敷設したのはインド人にヨーロッパ流の輸送力向上をもたらすためであり、鉄道敷設によって植民地搾取を効率化し、支配をより効果的に進めるためではなかった、と言っても、誰が信じようか。イギリスは今日ではエジプトでファラオの後をたどり、ナイルに巨大なダムを築いて貯水を進めている。[2] それは貧しいアラブの農民に地上での生活を快適に過ごさせるためではない。イギ

リスの綿産業をアメリカの独占から守るために過ぎない。これがまさに、その植民地政策においてドイツが公然と考えようとした観点である。[3] イギリス人はイギリスの利益のために現地人を教育した。ドイツ人は教師に過ぎなかった。現地人は最後には、おそらくイギリス人のところにいるよりもわれわれのところにいる方が幸福と感じたであろうが、通常のイギリス人にあっては、納得できる植民地政策はわれわれのやり方ではなく、イギリスのやり方であるだろう。

経済的な力と政治的な権力とが常に手を携えて世界征服をゆっくりと進めるイギリスの政策が、他国に対するイギリスの位置を特徴づけていた。イギリスがその植民地での世界強国の位置を達すれば達するほど、制海権をますます必要とした。制海権を持てば持つほど、その結果としてますます植民地大国となり、最終的にはイギリスに海上支配と植民地獲得でどの国も異議を唱えようとはしないよう監視するほどにまで妬み深くなった。

ドイツでは、イギリスがすぐさまヨーロッパでの全面的覇権を求めるだろうという筋違いな見解が広まっている。これは事実に反している。イギリスは、ヨーロッパでの諸関係から、イギリスの海上支配と植民地支配をいつの日か妨げるに違いないような世界競争上の脅威が現れてこない限り、もともとそれに関心を持っていなかった。

イギリスにとっては、イギリスの貿易利益や海上利益を保護しなくともすめば、ヨーロッパ内の対立というものは存在しなかった。スペインやオランダ、後年ではフランスとの戦争は、[4]

これらの国々の軍事力自体が脅威となったからひきおこされたのではない。それらの国の成立や影響のあり方に戦争の原因はあった。スペインが海上強国でなく、したがってイギリスの競争相手国でなかったなら、多分イギリスはスペインにたいした注意を払わなかったであろう。対オランダにしても事情は同じである。時代が下ってイギリスはフランスと大規模な対立に至るが、それはナポレオンの大陸国家フランスに対してではなかった。ナポレオンのフランスは大陸政策を一段上の、大陸を越えた目標を目指した跳躍台であり基礎であるとみなしていたからである。そもそもイギリスに脅威となる国は、その地理的条件から見れば、フランスである。ある国が大陸である程度の発展を遂げ、それがイギリスの将来にとって危険性をはらむとなれば、フランス以外にはない。ところがイギリスは世界大戦でフランスと組むように決めてしまった。これはなお一層注目に値するし、われわれドイツにとっては教訓ともなる。教訓になるというのは、イギリス外交の偉大なる基本思想を十全に確定するには、その時その時に存在している可能性を常に計算しておかなければならないし、近いか遠いかのいずれにしても、将来はそこからイギリスの脅威が姿を現すかもしれないがゆえにこそ、簡単にその可能性を捨ててはいけないと証明されているからである。「神よ、イギリスを罰し給え[5]」と唱え続けるわれわれドイツの政治家は、将来におけるイギリスとの良好な関係は挫折するに違いない、それはイギリスが、いずれは危険な国として立ち向かうようになるドイツと同盟関係を結ぼうとは真面

目に考えていないからである、と言っている。ドイツ振興のためにドイツと同盟を結ぶ人がイギリスにいるはずがない。ブリテンの利益を促進するためでしかない。しかし今までの例を見ると、イギリスは自分の利益擁護と他の民族の利益擁護をしばしば連動させているし、同盟にまで導いている。とはいえ、ほぼ確実に後にはそれは敵意に変わらざるを得ないのである。というのは、政治の婚姻は最終的には早期離婚か晩期離婚かに終わるのである。政治婚姻というものが、両者に共通する利益擁護には役立たず、両国のそれ自体としては異なる、しかしそのときには相対立していない諸利益を共通の手段で守ったり、促進する意図でのみ成立しているのであるから、無理もない。

軍事的に優れた意味を持つヨーロッパの大国が外交目標を意図的に純粋に大陸的本質においている限り、イギリスは原則的にその国に敵対しようとしない。プロイセンに対するイギリスの対応が、それを示している。それとも、フリードリヒ大王の時代のプロイセンがヨーロッパ最強の軍事国家ではなかったと言う人がいるであろうか。イギリスが当時のこのプロイセンと戦わなかったのは[6]、プロイセンは軍事的には主導権を持っていたにしても、ヨーロッパでの領土が狭いせいで、小国に数えられなければならなかったからであるなどとは考えないでもらいたい。まったく違う。イギリスはオランダと戦った。当時オランダの国土はフリードリヒ大王後のプロイセンよりもはるかに小さかった。ヨーロッパにおけるオランダの軍事的脅威や優位

性を言いたてる人はどこにもいなかった。それにもかかわらずイギリスはオランダと何十年も対立を続けた。その理由はただイギリスの海上支配と貿易支配をオランダが邪魔していた点とオランダ人の植民地活動全般に存した。しかし、プロイセン国家が純粋に大陸的目標に専念していなかったとしても、プロイセンは、ヨーロッパにおいてプロイセンが主導権を握る危険性や純粋にプロイセンの軍事力の大きさには関係なく、常にイギリスを最大の敵としていたであろうなどと、思い違いしてもらっても困る。われわれの思慮の足りない国民的・愛国的政治家連中は、大選帝侯[7]がプロイセンの海外所領に息吹を吹き込んだのに大選帝侯の子孫はそれをないがしろに[8]、いや、放棄し、ブランデンブルク・プロイセン艦隊の保持や増強への関心を示さなかった、と言ってプロイセンを非難している。現実の政策進行がプロイセンにとっても、後のドイツにとっても幸運であった。

フリードリヒ・ヴィルヘルム一世[9]は緊縮財政によって限りなく限定された小プロイセン国の財源を専ら陸軍増強に集中したのではあるが、これは卓越した政治的手腕、彼の賢明さを物語っているわけではない。この小国はそれによって一つの武器で優位を保持できたので、イギリスの敵意を免れたに過ぎない。しかしプロイセンがオランダの後を追っていたら、背にイギリスを敵として三度のシュレージエン戦争は戦えなかったであろう。小プロイセン国が現実に制海権の獲得を試みたとしても、母国の領土基盤は制限されており、軍事的にも恵まれていたわ

けではない。イギリス人にとっては、広く連合を組んでヨーロッパの危険な競争相手をやっつけるのはすでに当時から児戯にも等しかった。小さなブランデンブルク侯国から後のプロイセン王国が生まれ、そのプロイセンから新しいドイツ帝国が出現できたのは、当時のプロイセンが現実的な力関係と可能性に関して賢明なる洞察力を有していたからでしかない。これには感謝しなければなるまい。これに従い、ホーエンツォレルン家はビスマルク時代まではほとんど集中的に陸軍強化に邁進した。それが唯一明確に筋を通した政治であった。ドイツ・プロイセン、そして後にはドイツ全体が将来に向かおうとしたとき、それは、イギリスが海において有している優位に対応して、陸で優位を有してのみ確保され得たのであった。この認識が次第に薄れ、陸上軍備の手を抜き、中途半端な結果に終わる艦隊政策に移行したのがドイツの不幸であった。ビスマルク後のドイツでも、陸と海での軍備を同時に強力に進め、保持するほどの贅沢はできなかった。いつの時代にあっても、最も重要な原則の一つは、民族が自分の生存保持に絶対に欠かせない武器は何であるかを認識し、全手段を投入してそれをとことんまで推進するところにある。イギリスはこれを知っており、守り通した。というのも、事実イギリスにとっては海上支配はその生存にかけがえのないものであったからである。陸での軍事行動が脚光を浴びていた時期にも、名声に満ちた戦争、比類のない軍事的決断ですら、陸軍をイギリスにとって最終的には副次的なものとみなし、国民の全力を海上支配優位の維持に集中するイギリ

ス人を動かせなかった。ところがドイツでは、多分に古きハンザ同盟[10]へのロマンティックな思いに駆られて、十九世紀の大いなる植民地熱に熱狂させられ、経済和平的政治に翻弄され、陸軍増強を後回しにし、艦隊建造を採用した。この政策を最終的に示しているのが、まったく倒錯しているうえに、斯くも呪わしい「われわれの将来は海にある」という命題である[11]。そうではない、逆である。ヨーロッパでのわれわれの将来は陸にあったし、現在も陸にある。われわれが没落したとしても、その原因は純粋に大陸的性格に、すなわちわれわれの不幸なる領土的、軍事地理的に酷い状態にある。

プロイセンがその外交意欲を純粋にヨーロッパ的目標に限定している限り、プロイセンはイギリスの危険を本気に恐れる必要はなかった。一八七〇年と七一年にイギリスは親仏気分に支配されていたではないかと反論する向きもあるだろう。この反論は正確でないし、どんな場合にも何も言っていないに等しい。なぜなら、まったく同じ頃イギリスには親独の意見もあったのである。それだけではない。英国国教会においてでさえ説教壇からフランスの振る舞いが不埒だと断罪されていたのである。とはいえ決定するのは、事実上採用された公的態度である。というのも、自明なことではあるが、イギリスのような重要な国にあってはフランスへの広い共感を呼び起こすであろう。特に、その国の新聞へ外国資本の影響がまれならず見られるときには、一層そのような傾向が指摘できる。フランスは自分への共感を動員する術を常に心得て

いた。いつの時代にあってもパリというカードがこのうえなく卓抜な支援の役割を果たした。それが見られたのはイギリスにおいてだけではない。ドイツにおいてさえ見られた。七〇年から七一年にかけて戦争のさなか、ベルリンの社交界には、それどころかベルリンの宮廷にさえ、その親仏の共感を隠しもせず、パリ攻撃をことあるごとにかなりの期間ひきのばした少なからざるグループがあったくらいである。[12] その他イギリス人にはドイツの武器の優秀さを複雑な歓喜の目で見ていたグループもあった。これは人間的には理解できる。しかし、それらはイギリス政府の公的な態度を動かして然るべき対応をひきおこすまでには至らなかった。それはビスマルクが確保していたロシアの背面援護のせいである、という意見もある。これは納得できない。なぜなら、その背面援護はまずは対オーストリアを想定していたからである。しかし、当時イギリスがその中立を放棄していたならば、ロシアの背面援護も広大な砲火を阻止し得なかったであろう。なぜなら、そうすればオーストリアが黙ってはいなかったからだ。それが広がれば、一八七一年の成功はあり得なかったかもしれないからである。事実ビスマルクは戦争中だけでなく、講和条約の交渉中にも他国からの干渉をひそかに恐れていた。というのは、数年後ロシアに対して何が起こったであろうか。他国の介入である。[13] 介入は、イギリスによってドイツに対しても仕組まれかねなかったのである。

ドイツに対するイギリスの対応変化は正確に追跡できる。変化はわれわれの海上発展と機を

同じくして始まり、われわれの植民地活動の進展とともに明らかな嫌悪が高まり、最終的にはわれわれの艦隊政治とともに明らかな憎悪に至った。しかしイギリスではドイツ民族のような有能な民族の発展の中に将来への危険をかぎつける。これは実際に配慮の行きとどいた国家指導部としては決して災いとされる事柄ではない。われわれドイツの政治指導部の怠慢の罪を他国の行動を判断する際の基準としてはいけない。ビスマルク後のドイツは軽率に振る舞い、ヨーロッパにおける覇権の位置をフランスとロシアに脅かされ、それに対して何の対抗策も取れなかった。しかし他の諸国が同様の振る舞いをすると予測したり、諸外国がその民族の生存利益をしっかりと看取しているからといって、それらの国に対して道徳的に怒り、非難を加えるのは許されない。

戦前のドイツが、命とりとなるような反作用を予測できた世界和平政策と経済政策に代えて、プロイセンによって採用済みのかつての大陸政策を継続していたならば、ドイツはまず第一にその陸軍力を、プロイセンがかつて持っていた位置にまで実際に向上させることができたし、そうなれば、第二にイギリスとの絶対的な敵対関係を恐れる必要がなかった。なぜなら、ドイツが艦隊に無駄に注入した膨大な資金を陸軍補強に回していたならば[14]、その利益は、少なくともヨーロッパの決定的な戦場では、他の進め方で回収していたであろう。海軍は少なくとも決定的影響を与え得る戦闘部隊を港で錆びるにまかせ、最後には屈辱的な明け渡しでその存在に

終止符を打たなければならないというのに、部分的には不十分とさえもいえない軍備しか持っていない陸軍が圧倒的な世界連合に対してゆっくりと血を流し続けるのを国民が目の当たりにする運命からは免れていたであろう。軍の指揮者を口実にしないでもらいたい。これはわれわれ自身のための武器の本質に依存していたのだと告白する勇気を持ってほしい。なぜなら、同じ頃野戦軍は、どれくらいの損害を受けるかとか、どれくらいの困難があるのかには一切関係なく、ある戦場からは追い出され、他の戦場に投げ込まれていたのである。事実、陸軍は百年の伝統を持つドイツの武器であった。しかし、われわれの艦隊は最終的には単なるロマンティックなお遊びでしかなかった。ドイツのために作られ、ドイツのためには出動されなかったお飾りだった。それがわれわれにもたらした利益は、それがわれわれに呼び込んだ強大な敵意に比べるとケシの粒ほどでしかなかった。

ドイツがこの進展方向を採用していなければ、世紀末には、当時はまだ折り合う用意のあったイギリスとある種の合意に達することは可能であった。両者間の合意にわれわれの外交目標の原則的変更が伴っていたのであれば、それは長期間にわたって保持されていたであろう。なお世紀末のドイツには、プロイセンの旧来からの大陸政策を復活させ、イギリスとともに世界史の発展に手本をみせるのも不可能ではなかった。われわれのきりのない優柔不断な輩や疑い深い連中は、それは確実さに欠けると異議を差し挟むのであるが、その異議は個人的な意見の

域を出ていない。それに対する反論はイギリスの今までの歴史が雄弁に物語っている。疑い深い連中はどのような権利があって、日本が果たしたと同じ役割をドイツが果たせないと推測するのだろうか。ドイツはイギリスのために火中の栗を拾い上げた、と彼らは愚劣な決まり文句を繰り返すが、それをフリードリヒ大王の功績に向かっても言い出せる者がいるであろうか。ヨーロッパの戦場において、ヨーロッパ外でのフランスとイギリスの対立を、彼は最終的には軽減しているではないか。そうであってもイギリスはいつかは反ドイツになる、という異議もある。この意見は愚かとしか言いようがない。というのも、たとえその場合でもロシア屈服後のヨーロッパにおいてはドイツの位置は世界大戦開始時よりはましだろう。逆に日露戦争がヨーロッパで独露間で戦われていたならば、ドイツは純粋に内的な強国成長を保持して、平和を破り対ドイツ連合に血道を上げるようなヨーロッパの国を三十年間にわたって凌駕（りょうが）していたであろう。その他、これに類する全ての異議は、反対勢力としては全てを知ってはいたが何一つ手をつけなかった戦前ドイツのメンタリティーから生まれている。

当時はイギリスの方からドイツにすりよっていた[16]。これが一つの事実。ドイツ側からはいつまでもぐずぐずし続ける優柔不断なメンタリティーゆえに明確な立場表明を決断できなかった。これが二つ目の事実。当時ドイツが拒否した事柄に日本が手を回し[17]、世界強国の名声をかなり格安な方法で手に入れた。

ドイツがどんなことがあってもそれに手をつけようとしなかったのであれば、まさに反対側と手を組まざるを得まい。一九〇四、五年はフランスとの対立に費やしてもよかった。背後にロシアを持っていた。この優柔不断な輩や疑い深い連中とはいえ、これは望むところではなかった。用心深く、疑い深く、知識だけは持っている彼らは、自分たちが元来望んでいる事柄を一瞬たりとも認めることができなかった。イギリスで統治していたのは、行動に踏み切れない頭でっかちの連中ではなかった。政治を可能性の術と心得ており、全ての可能性を逃さず、現実にそれを駆使して極めて自然な思考をする人物であった。この点でイギリスの政治指導部は優れていたのである。(18)

すでに述べたように、もしベルリンが明確な大陸政策的領土目標を採用しておれば、イギリスとのかなり長期的な合意が可能であったであろう。ドイツがそれを避けている間にイギリスは、イギリスの海上支配の利益を脅かす者に対する世界的な対抗勢力を組織し始めた。

世界大戦自体は、イギリスでさえ想像していなかったわが民族の軍事的能力によって、当初喧伝(けんでん)されていたような経過を取らなかった。ドイツが最終的に敗退したのは、アメリカ合衆国が戦場に姿を現し、ドイツ内部の崩壊によりドイツが最終的に故国の後方支援を失った後の出来事であった。(19)ところがそれによってイギリスの本来の戦争目的が達成されたわけではなかった。というのも、イギリスの海上支配に対するドイツからの脅威は排除されたのは確かである

が、基本的により強固な基盤を有するアメリカの脅威が代わって現れてきたからである。将来のイギリスの強敵はそもそももはやヨーロッパにはない。北アメリカにある。ヨーロッパ自体においては、イギリスにとって現在のところ極めて危険な国はフランスである。フランスがイギリスに有している地理的条件からして、フランスの軍事的覇権はイギリスにとっては特に脅威である。イギリスの生活の中心地として重要な地域の大部分がフランスからの航空機攻撃にはほとんど無防備にさらされているだけではない。都市の幾つかはフランス沿岸からの長距離砲の射程範囲内にある。いや、技術が進み、重長距離砲の射程距離がなお広がれば、フランス本土からのロンドン砲撃さえ可能である。[20]より重要であるが、イギリスに対するフランスの潜水艦戦争は、かつての世界大戦中のドイツ潜水艦戦争とはまったく異なった基盤を有している。封鎖作戦は出口の少ない北海沿岸の三角地帯では効果的であるが、二つの海に面した広範囲なフランスの基地布陣では実行しがたい。

今日のヨーロッパでイギリスの当然たる敵を探してみれば、すぐ分かる。常にフランスが、そして多分、ロシアが挙げられる。フランスは大陸に向けた政治目標を持っている大国である。その目標の内実は、はるか遠くに設定している包括的な世界政治目標のための背面援護に過ぎない。ロシアはインドで脅威であるし、油田も有している。油田の今日的意味は、前世紀に鉄鉱山や炭鉱が持っていた重要性と同じである。

イギリスがその大いなる世界政治上の目標に忠実であろうとするならば、イギリスのヨーロッパにおける潜在的敵対国はフランスとロシアである。将来を見渡して他の世界をも視野に入れるならば、それは特にアメリカ合衆国である。

それに対して、イギリスが永続的にドイツと対立する根拠は存在しない。そうでないというのであれば、イギリス外交は今やとんでもない動機によって規定されていることになる。とんでもない動機とは、全ての現実的論理から離れ、それによっておそらくドイツの教授の頭の中に住みつき、諸民族相互の政治状況規定に決定的影響を与えることのできるあの動機である。いや、将来のイギリスは、過去の三百年間がそうであったように、純粋な合目的視点に立って真面目に考えて、その態度を決定するだろう。そして、三百年間というものイギリスの同盟国が敵になり、敵が同盟国になったと同じように、一般的なまたは特殊な必然性がある限り、将来においても事態は変わらない。しかしドイツがイギリスの海上利益と貿易利益には対立せず、大陸的な目標に全力投入するような原則的な政策新方針に至るのであれば、イギリスの敵意は、敵意のための敵意でしかなくなり、消滅する。[21] なぜなら、イギリスがヨーロッパでの均衡に関心を持っているのは、その均衡がイギリスにとって脅威となる世界貿易国や海軍力の成長を防いでくれる限りにおいてである。イギリスの外交作業よりも生存から遊離した原則に規定されていない外交作業というものはない。世界帝国はセンティメンタルな、または純粋に理論的な

政治からは生まれない。

それゆえに将来においてもイギリス外交を規定するのはブリテンの利益に対する冷静な判断である。この利益を妨げる者は、将来においてもイギリスの敵である。それに抵触しない者には、イギリスは関心を向けない。ときによってはイギリスの利益に役立つ者は、昔は敵であったとか、将来再び敵になるだろうということはお構いなしに、イギリスの横の席に招かれる。

時間がたてば敵になるからといって役に立つ同盟を拒否するのは、ドイツの市民的・国民的政治家だけだ。イギリス人にそれを要求するのは、この民族の政治的本能に対する侮辱である。

ドイツがそもそも政治目標というものを持とうとせず、以前に変わらず主導的思想なしに無計画に今日から明日へだらだらと日を過ごしていくのであれば、あるいは、一九一四年当時の国境と所有領土の再獲得を目標に掲げ、それに従ってわれわれの世界貿易植民地政策と海軍大国政策に行き着くのであれば、われわれに対するイギリスの敵意は将来においても、もちろん確実に存在し続ける。そうなればドイツは経済的にはドーズ案[22]の負担で窒息し[23]、政治的にはロカルノ条約で零落し、人種的には弱体化し、最終的にはその生存をヨーロッパでの第二のオランダ、第二のスイスとして終える。われわれの市民的・国民的そして愛国的床屋政談家たちはすぐにでもそれを達成できる。今日のスローガン絶叫を続けるだけでよい。口で抗議を重ねて全ヨーロッパと戦いをいどみ、行動が必要となると穴に逃げ込めばよいのだ。ドイツ再興国家

市民的・愛国的政治と呼ばれているのが、これである。われわれの市民階級はほぼ六十年の間、国民的、国家的という概念の尊厳をおとしめ、傷つける業を発揮した。同じように愛国的というすばらしい概念を、そのグループ内で単なるスローガンのレベルに落としてしまい、没落させ、破壊した。

もちろん、ドイツに対するイギリスの態度には他の重要な要因も明らかになっている。すなわちイギリスで決定的な影響力を有している世界ユダヤ人である。イギリス人自身はいずれはドイツに対する戦争心理を克服できる。これは確実である。しかし、世界ユダヤ人は古くからの敵意を捨てようとはしないし、ヨーロッパ全体が不安定で混乱しているうちにボルシェヴィズムの破壊傾向に息を吹きこもうとして、ヨーロッパに満足をもたらそうとはしない。これもまた確実である。

この恐るべき力を計算に入れずに世界政治については語れない。それゆえに私は本書でも、なおこの問題について特に論ずるつもりである。(24)

# 第十三章　ドイツとイタリアの利害の共通性

イギリスはドイツに対して戦争する敵意をいつまでも持ち続けるための原則的な理由を持っているわけではない。そのような理由はましてイタリアにはほとんどない。ヨーロッパ内でドイツと対立する必然性のない、いや、その外交目標がドイツと敵対しない二番目の国はイタリアである。逆である。イタリア以上にドイツと共通利益を有している国はない。イタリアにとっても事情は同じである。(1)

ドイツが新たな国家統一を求めていた時期に類似したプロセスがイタリアでも起こっていた。(2) 確かにイタリアには、生成するドイツにおいてプロイセンが果たしていた役割、すなわち、ゆっくりと生成しながらも最終的には突出した意味を担う中心権力が欠けていた。共通点もあった。ドイツ統一にはまずフランスとオーストリアが現実の敵として立ちはだかったように、イタリアの統一運動もこの両国に多く悩まされた。とりわけハープスブルク国家はイタリアの内

部分裂の持続に生存利益を持たざるを得なかったし、また有してもいた。大オーストリア・ハンガリーは国家としては直接海へ至る地点を必要としていた。唯一それと想定される地域の都市部はイタリア人の町であった。イタリア国民国家が成立すればこの地域を手放さなければならなくなる事態を恐れて、オーストリアは統一イタリア国家の成立に否定的たらざるを得なかった。当時のイタリア民族の最も思いきった政治目標自体はイタリア国民統一のみにあった。これが外交方針を縛らざるを得なかった。それゆえに、イタリア統一が次第に形を整えつつある頃、イタリアの天才的大政治家カヴール[3]は、この特殊目標に役立つ可能性を全て利用し尽くした。イタリア統一の可能性は極めて賢明に選択した同盟政策に基づいている。まずは、統一の主要敵対者オーストリア・ハンガリー帝国の停滞をひきおこし、最終的には北イタリア地域からこの勢力を一掃する。これが常にイタリアの目標であった。それによって暫定的イタリア統一の契約の締結後もオーストリア・ハンガリー帝国内に八十万人のイタリア人が住んでいた。イタリア国籍者を広く包括するという国民的目標は、当然ながら、当面は留保せざるを得なかった。はじめて伊仏間の雲行きが怪しくなってきたからである。イタリアはとりわけ内部安定時間を稼ぐために、三国同盟締結に同意した。

世界大戦はとうとうイタリアを、すでに述べた理由から、協商の陣営に接近させた。イタリア統一はそれによって強力に前進したのではあるが、今日に至ってもまだ完結してはいない。

しかし、イタリア国家にとって最大の成果は憎きハープスブルク帝国の排除である。その代わりに南スラヴ国家ができるだろう。[4] むろん一般的な国民的視点から言えば、これもイタリアにとって大きな危険ではないわけではない。

常に純粋に国境を論じるドイツの市民的・国民的な見解は、長期的に見れば、わが民族の生存要請には十分な成果をあげていない。同様に、イタリア国家の純粋に市民的・国民的統一政策もイタリア民族には十分な成果をあげたわけではない。

イタリア民族は、ドイツ民族同様、あまりにも狭隘な、かつ部分的にはやせた土地に住んでいる。人口が多く、すでに何十年間に、いや、何百年にもわたって人間を輸出せざるを得なかった。[5] 仮に移住者の大部分が季節労働が終わるとイタリアに帰ってきて、つましく生活するとしても、これがまさに状況の更なる緊張を招いた。これによって人口問題は解消されるのではなく、先鋭化したのである。ドイツはその商品輸出によって他国と他地方の受け入れ能力、受け入れ可能性、受け入れ意志に依存するようになったが、イタリアは人間輸出によって同じ状況になった。両国とも、何らかの事情が重なり受け入れ市場がストップしたら、国内が壊滅的影響を受けざるを得なかった。

イタリアは産業活動を向上させることによって食糧問題解消を狙ったが、最終的には成功しなかった。イタリアの母国には自然資源が少なく、初めから必要な競争能力が整備できなかっ

たからである。

イタリアでは形式的な市民的国民政策の見解が克服され、それに代わって民族的な責任感情が登場しているのと同じく、この国も今までの政治方針を放棄して、大規模な領土政策に向かわざるを得ない。

イタリア拡張の地域は、自然条件から地中海沿岸各地となるし、またそうであった。今日のイタリアが今までの国民的な統一政策に別れを告げ、帝国主義的政策に向けば向くほど、古きローマの道を進むだろう。それは力のうぬぼれからではなく、内的な深い必然性があってである。[6] ドイツが今日ヨーロッパ東部に土地を求めるのは、権力欲拡張のサインではない。土地不足の結果に過ぎない。今日イタリアが地中海周辺に影響力を拡大し、最終的に植民地を作ろうとするのは、当然な利益擁護を苦境の中でも追求しようとする行動である。[7] 戦前のドイツ政治が目先がきいていたならば、そのときにはこの行動を全力で支援し推進していたに違いない。それが同盟国の当然の補強となるばかりではなく、場合によってはそれによりアドリア海でのイタリアの利害をとりのぞき、オーストリア・ハンガリー帝国との摩擦を回避する可能性があったからである。おまけに、その政策は、自然に生まれてくるはずである伊仏間の対立を固定化し、それにより三国同盟強化に極めて有利な作用を及ぼしたであろう。

当時の帝国指導部がはっきりと無能だったのみでなく、何よりも世論が、誤ったドイツの国

民的愛国者と外交空想家に導かれ、反イタリア方針を採用したのがドイツの不幸であった。特に、オーストリアがトリポリにおけるイタリアの行動にある種の非友好なものを見つけていたからである。われわれの国民的市民階級の当時の政治的英知はヴィーン外交の愚行と卑劣さを覆い隠すところにあった、いや、もし可能であれば、この心からの同盟の内的調和と緊密さを世界にアピールできるなら、それらをわが身に引き受けさえするところにあった。

今やオーストリア・ハンガリー帝国は解体された。しかしドイツは以前にもまして、イタリアの発展に心を痛める理由はない。というのはイタリアの発展は必然的にいずれはフランスに負担をもたらすに違いないからだ。なぜなら、現在のイタリアがその最高の民族的課題に思い至れば至るほど、それに従って、ローマを思わせる領土政策に移行すればするほど、地中海における厳しい競争相手、すなわちフランスと対立せざるを得ないからである。フランスは、イタリアが地中海における覇権を握るのを指をくわえて見てはいないだろう。自力でか、同盟システムを利用してか、いずれにしても阻止しようとする。イタリアの発展に可能な限りの妨害を企てるであろうし、最終的には武力使用も辞さない。両国はラテン系で、いわゆる親類関係にある。この事情も大きな影響はあたえまい。というのも、それはイギリスとドイツ間の親類関係よりも近いわけではないのだから。[8]

さらに、フランスはフランス独自の民族力において弱体化しているのに対応して、この国は

その黒い人間補給に力を注いでいる。想像できない大規模な危険がそれによってヨーロッパに近づいている。ライン地方のフランスの黒色人種がドイツに対する文化監視人として白い血を毒し続けるという考えは、数十年前にはまったく思いもしない恐ろしい思想である。この血液汚染によってフランス自身が大きな損害を受けるのは確実である。それも他のヨーロッパの諸国民が自分たちの白い人種の価値を自覚している限りでの話である。純粋に軍事的に見れば、フランスはそのヨーロッパ部隊を補塡し、効果的に投入できる。世界大戦がそれを証明している。つまるところ、まったく非フランス的なこの黒色人種軍はしかも共産主義的示威運動に対するある種の防御となる。なぜなら、どんな条件下でも守られる絶対服従はフランス民族とは血のつながりを何も持たない軍隊において一層簡単に維持されるであろうからである。この進展は、その極めて大きな危険性をまずイタリアに及ぼす。イタリア民族がその将来を自分独自の利益に従って形成しようとすれば、フランスによって動員された黒色人種部隊といずれは対峙する。その際、ドイツに対する敵意を持つのはイタリアの利益にならない。その敵意は、どんなにうまく機能したとしても、イタリアの将来の生存形成にとって役立つものを何ももたらさない。逆である。ある国が最終的に戦争の敵意を放棄できるなら、それはイタリアである。イタリアとドイツの両国がその将来の最も自然な課題を追求するのであれば、イタリアはドイツに対する今後の更なる抑圧に何の利益も持たない。

ビスマルクはすでにこの幸運なる連携を認識していた。彼は一再ならずドイツとイタリアとの完全な類似性を断言している。将来のイタリアはその発展を地中海周辺に求めるに違いないと示唆しているのは、彼である。[9] さらに、フランスはイタリアの生存形成を妨害しようと考えるが、ドイツはドイツの視点からそれを歓迎するに違いないと強調して、イタリアの利益とドイツの利益の調和を確言するのも彼である。彼は、長い将来にわたってイタリアとドイツとは敵対はいうに及ばず、疎遠になる必然的な要因はないという。戦前ドイツの運命をベトマン＝ホルヴェーク[10]ではなくビスマルクが導いていたなら、オーストリアに関してだけであれほどの敵対関係には至らなかったであろう。

ドイツが北ヨーロッパにおいて領土膨張をしても脅威にならないし、ドイツと疎遠になる理由を持っていないのが明瞭なのは、イギリスにおけるよりもイタリアにとってである。逆に、ヨーロッパにおけるフランスの主導権拡張に反対するのがイタリアにとっては極めて自然な利益である。

しかして、ドイツとの同盟関係にとってはイタリアがまず問題となる。

イタリアにおいてファシズムが新しい国家思想を、それとともにイタリア民族の生活に新たな意志をもたらしてからというもの、フランスの敵意はすでに明らかとなっている。全同盟システムを動員してイタリアとの想定される対立に備えようとしているだけではない。イタリア

の潜在的友好国をも締め付け、破滅させようとしている。フランスの目的は明白である。パリからワルシャワ、プラハ、ヴィーンを通ってベオグラードに至るフランス的国家システムを構築しようとしているのである。オーストリアをこのシステムに組み込もうとするのは、見た目ほど見込み違いの構想ではない[11]。人口六百万のオーストリアの中で二百万都市ヴィーンが持っている支配的性格からして、この国の政治は常にまずヴィーンによって規定されている。この十年間でより顕著になってきたヴィーンのコスモポリタン的本質に照らしてみると、それ自体としてはパリとの連携の方がイタリアとのそれよりも容易に想定できる。ヴィーンの新聞によって保証されている世論の方向はすでにそちらを向いている。特に新聞が、南ティロールでの騒ぎをてこにまったく本能を欠いた市民的・国民的地方を反イタリア感情に煽り立てるのに成功して以来、この活動は効果を手にしようとしている。これによって計り知れないほどの大きな危険が近づいている。なぜなら、新聞が何年間か騒げば、信じられないほどの、いや、現実にはまことに自殺行為に等しい決断を易々と下す民族はドイツ民族以外には見当たらないからである。

しかしフランスがオーストリアをその「友好国」の仲間に取り込めたら、イタリアはいずれは二正面戦争に追い込まれる。そうでなければ、イタリア民族の利益の現実的な擁護を再び諦めなければならない。どちらになってもドイツには危険である。ドイツにとって長期にわたっ

て結ぶのが可能であるはずの同盟が最終的に消え去り、それと同時にフランスがますますヨーロッパの運命の支配者になるのである。

これがドイツにとって何をもたらすかについて思い違いをしてはいけない。われわれの市民的・国民的国境線政治家や愛国的同盟抗議常連たちは、自分たちの視野の広い政策のおかげでフランスから受けざるを得ない酷(ひど)い仕打ちの痕(あと)を国家の名誉の名でたびたび排除するのに忙殺されるようになる。

国家社会主義運動が外交思想に携わるようになって以降、私は前述した目標を考慮して、この運動を明確な外交目標の担い手に育て上げようと努めてきた。ドイツが何であるかも知らないし、このドイツの幸福な将来を望んですらいない政党に丸抱えされた政府を持つこの国で、不当にも、これはまず第一に政府の課題であるという非難がおこった。十一月の犯罪に責任を持つ輩(やから)が政権を担うようになって以来、擁護されているのはドイツ国民の利益ではない。国民に酷い仕打ちを加えている政党の利益である。そもそも、祖国や国民を自分たちの目的に導く手段としてしか見ていないし、必要となれば、厚かましくも自分たちの利益のために犠牲にするような連中にはドイツの生存必然性の推進を期待することはできない。そうなのだ。この連中とその政党がしばしば見せる自己保存本能は実際は単にドイツ民族再高揚反対を語っているに過ぎない。なぜなら、ドイツの名誉のための自由戦争には、必然的に今までドイツの名誉を

汚してきた連中を没落させ、殲滅せざるを得ない諸勢力が動員されるからだ。全般的な国家再高揚をもたらさない自由闘争は存在しない。それまで名誉が剝奪されていた責任を不問に付したままで、国民の良心および名誉が高揚されるとは考えられない。裸の自己保存本能はこの堕落した要素と、それを支える政党を動員して、わが民族を現実的再生に導くあらゆる進展を妨害させるであろう。わが民族のヘロストラート[12]たちの多くの行動は表面的には妄念と見えるかもしれないが、その内的な動機を見れば分かるように、強引であさましいとはいえ、計画的にうまく仕組んだ振舞なのである。

公的生活がそのような政党から構成され、卑しい性格の個人によって代表されている時代にあって、将来いつか人間的理性と展望に依拠すれば祖国の成功と幸運を導くに違いない独自の外交方針を進めるのが、国家改造運動の義務である。共産党、民主党、中央党サイドは、公的な外交に合致しない政策を進めると非難しているが、そのような非難こそが軽蔑されるだけだ。市民的・国民的グループ、さらにはいわゆる愛国的なサークルも、この非難に加わっているのを見ると、この非難の内容がよく分かる。他の運動は、われわれがいずれは権力を握るつもりで、それを前提としてすでに現在その権力に必要な教育に手をつけるという揺るがぬ意志を持っていることを真面目に理解できないで、ただ異議を唱えているような組織かぶれの連中の単なる感情表現であり、心情シンボルに過ぎない。

一九二〇年以降、私は粘り強く、かつあらゆる手段を講じて、国家社会主義運動をドイツとイタリアとイギリス間での同盟締結という思想に馴致させようと努めてきた。それは極めて困難であった。特に戦後数年間は、「イギリスへの神罰」論がわが民族から外交分野での明確で冷静な思考を奪い、遮断していたので、特に困難であった。

イタリアに対する態度に関しても、この若い運動の状況は計り知れず困難であった。特に天才政治家ベニト・ムッソリーニ(13)指導のもとにイタリア民族の前代未聞の再編成が始まり、その再編成のゆえに世界フリーメーソン(14)の支配下にある国々の抗議を一身に受けるようになって以来は、困難であった。というのは、一九二二年まではドイツの世論製造元は彼らの犯罪行為によってドイツから引き離されたドイツ民族の苦しみに一行の報告も割かなかったのに(15)、急に南ティロールに注目するようになったからである。抜け目ないジャーナリズムと欺瞞に満ちた言い草によって南ティロール問題はとんでもない意味を持った重大事に仕立て上げられた。その結果ドイツとオーストリアではイタリアは、どの戦勝国も受けていないような追放の身分にされてしまったのである。国家社会主義運動は、その外交的使命の絶対的必然性に基づいてこれを真摯に擁護するつもりだったので、虚偽と混乱をもたらすシステムに対する闘争を差し控えてはならなかった。その際、同盟国を計算に入れてはいなかった。安直な人気取りは諦めて、周知の真実、目の前にある必然性と自分自身の良心の声に応じて行動するという思想に従って

いた。それによって敗北するとしても、明らかな犯罪に手を染めるよりも、それは名誉ある行為である。

私が一九二〇年にイタリアとの将来の共同歩調の可能性を示唆したとき、少なくとも当分はそのための前提は実際上何一つ存在しないように思えた。イタリアは戦勝国の花輪の中にあり、それがもたらす事実上の、または見かけ上の利点を得ていた。[16] 一九一九年と二〇年には近い将来に協商側の内的結束が壊れる兆候はなかった。強力な世界連合は自分たち自身で勝利と、したがって平和とが保証されていると証明することに全力を挙げていた。すでに講和条約作成時から幾つもの問題点は明らかではあったが、巧妙な管理がなされ、少なくとも外部に向かっては常に完全な合意という印象を保っていたので、広く知られるには至らなかった。[17] このような合意行動は、世論が同種の全般的戦争プロパガンダに目を奪われていたからでもあるし、ドイツという強国に言い知れぬ不安を抱いていたからでもある。しかし、ドイツ国内での大きな壊滅状態が次第に外界に知られるようになった。そのようにしておけば分け前の分割にもありつけるという個別戦勝国の願望も外見上の一枚岩を支えていた。ところが、当時ある国が手を引いていたとしてもドイツの運命は同様の道をたどっていたであろうという不安が生まれてきた。すなわち、われわれの崩壊から利益を得るのはおそらくフランス一国であったのではないか。というのも、戦争中に採用していた対ドイツ対応を変更しようとは、パリでは誰も考えていな

かったからである。白髪の老クレマンソー[18]は「私にとって平和は戦争の続行である」と述べている。[19] ここにフランス民族の実際の意図が示されている。

戦勝国連合は、なお後までもドイツの完全な破壊を目指すというフランスに吹き込まれた確乎たる目的に従って、少なくとも見かけ上は、結束していた。これはドイツの意図がまったく無計画であったのとはよい対照をなしている。自国ドイツ内においては真実と知識に反して責任を全て戦争に帰し、卑劣にもそこから敵の強要を正当化しようとする連中の厚かましさが一方にあり、他方には、破滅の後に過去をできるだけ詳しく再現して国民に役立とうとする腰の引けた、不安定な国民サイドがあった。われわれが戦争に負けたのは、われわれの敵に対する国民的激情が不足していたからである。だから一層、災いをもたらすこの不足を埋めあわせなければならないし、和平が保たれているうちにかつての敵国への憎悪を確実にしておかなければならない。これが国民的諸サークルの意見であった。ところが奇妙なことに、この憎悪はフランスに対してよりも当初はイギリスに対して、後にはイタリアに対して向けられたのである。イギリスに向けられたのは、ベトマン＝ホルヴェークの居眠り政治のおかげで、人々は最後の瞬間までイギリスとの戦争になるとは思っていなかったし、それゆえにイギリスが参戦したのを信頼と信義にもとる極めて破廉恥な犯罪と解したからである。イタリアに対する憎悪は、わがドイツ民族の政治的無思想性を考えていないと、理解できない。三国同盟の本質を理解しな

いまま、政権周辺から、イタリアが介入しないのはオーストリア・ハンガリー帝国とドイツに対する信義違反と解すべしと教え込まれていたのである。だから、後になってイタリア民族がわれわれの敵に与したとき、これに極めて大きな信義違反を見たのである。これらの憎悪はけ口を見つけた。わが親愛なる神は強い者、決然としている者、さらには賢い者の味方だったので、「神よ、イギリスを罰し給え」というまさに市民的・国民的な怒号、戦争標語に、そのはけ口を見つけた。わが親愛なる神は強い者、決然としている者、さらには賢い者の味方だったので、神はこの罰を明白に拒絶した。しかし、少なくとも戦時中はわれわれの国民感情の激昂はあらゆる手段を尽くして許容されていたばかりではなく、明らかに煽られもしていた。このような激情はそれほど大きくはなかったにもかかわらず、真に現実的な事柄への視点が喪失したのは憂慮すべきであった。政治に、ユスタメント主義[20]はない。それゆえにすでに戦争中においても、イタリアが世界連合に参加したからといって怒りや憤激を燃え上がらせる以外の対応を引き出せなかったのは誤りであった。というのも、逆に、危機に瀕しているドイツ国民の救済に役立つ結論を得るために、状況の可能性をなお一層再検討する義務はなかったであろうか。なぜなら、協商側の前線にイタリアが参加して、並はずれた戦況悪化が避け得なかったからである。それは、協商側の所有する武器が増加したからというだけではない[21]。その国の参加によって世界連合形成サイドにとって、特にフランスにとって、もたらされた内的強化のゆえであった。当時の国家の政治指導部は、コストはいくらかかろうとも、二正面、または三正面作戦を避け

る決断を下すべきであった。堕落し、荒廃したオーストリア国家を守る責任はドイツにはなかった。ドイツの兵士はハープスブルク大公家の王権政治のために闘っていたのではない。それが大事だったのは、せいぜいのところ、戦争万歳を叫ぶわれわれの口先政治家に過ぎない。前線で血を流している兵士には何の意味もなかった。ドイツ歩兵の困窮と苦労はすでに一九一五年には計り知れないほどであった。人々がこのように苦労したのはわれわれドイツ民族の存続と将来のためであって、ハープスブルク家の大国妄想を救済するためではなかった。何世紀もの間反ドイツこそが自分たちのこの上ない王朝利益であった王家の国家を守るため、何百万というドイツ兵に見込みのない戦争で血を流させるとは、なんという恐ろしい考えだったのか。この妄想の全体的広がりを完全に理解できるのは、最良なるドイツの血は、ハープスブルク家が、うまくいけば和平時に、ドイツ民族を脱民族化する可能性を手にするために、流さなければならなかったのだと分かるときだ。このぞっとするような狂気のために二つの前線でおびただしい血を投入させられただけではない。いや、裏切りと堕落がご立派な同盟国の前線に刻み込んだ割れ目をドイツ人の血と肉とでいつまでもいつまでも埋める義務をさえ引き受けたのであった。全てを犠牲にして自分たちのために戦っている同盟国をいつでも見殺しにしようと首を長くして待っていた宮廷のためにこの犠牲を捧げた。そして、のちに実際その通りとなった。われわれの市民的・国民的祖国愛国者たちは、この裏切りについては口をつぐんでしまう。わ

れわれと同盟関係にあったオーストリアの戦争民族の裏切りについては、あれほど饒舌に語るのに。この戦争民族とはスラヴ人のことだ。彼らは連隊には連隊で、旅団には旅団で敵に立ち向かい[22]、彼らの国家の行動のゆえにこの驚くべき不幸に投げ込まれた人々に対する戦いに、独自の部隊で最終的に参加したのであった[23]。オーストリア・ハンガリー帝国はドイツが関与した戦争に自分からは決して参加しなかったであろう。三国同盟では相互保護を義務付けている、としかるべきところでは信じられていた、とドイツでは一般的に広まっていたのは、オーストリアの事情をまったく知らない言い草に過ぎない。もし世界大戦がドイツを契機として発生していたなら、ドイツにとっては最悪の幻滅が待っていたであろう。国民の多数を占めるスラヴ人と支配しているハープスブルク家の両方が原則的に反ドイツ的、帝国敵対的であるようなオーストリア国家がドイツ支援と保護のために全世界を敵に回して武器を取ったはずがない。それは愚かなドイツのすることである。事実ドイツはオーストリア・ハンガリー帝国に対して唯一の義務を果たさなければならなかった。すなわち、この国のドイツ人をあらゆる手段を講じて救い出し、それまでドイツ民族が耐えてきたこの堕落した最も罪深い王室を抹殺しなければならなかったのである。

イタリアの世界大戦参戦はドイツにとっては、オーストリア・ハンガリー帝国に対する態度を原則的に修正する契機であったに違いない。そのような場面で怒りを抑えつけてみたり、な

すすべもなく憤激してみせたりするのは政治的行動ではないし、抜け目なさと能力を備えた政治指導部の取る手立てではない。そのような振る舞いはすでに個人生活においてもほとんどの場合有利には働かない。まして政治の場面では犯罪以上にぶざまである。愚行である。

それまでのドイツの立場を変更しようとする試みがうまくいかなかったとしても、国家の政治指導は少なくとも、何もしなかったという責任からは免れる。いずれにしてもドイツはイタリアの世界大戦参戦後に二正面戦争を終結させるべきであった。ロシアとの単独講和を、それまでに東部においてドイツの武器によって戦い取られた成果の活用を諦めなければならない時点においてではなく、必要であれば、オーストリア・ハンガリー帝国を犠牲にできる時点において、探るべきであった。ドイツの政治が、オーストリア国家を救済するという課題を完全に捨て、ドイツ人を支援する課題に集中していたならば、勝利の可能性が見えていた。

さらに、オーストリア・ハンガリー帝国崩壊時に九百万人のドイツ系オーストリア人を帝国自体に編入できたのであれば[24]、評価のはっきりしないフランスの炭鉱や鉱山を幾つか[25]獲得するよりもわが民族の歴史において、同じく将来にとってははるかに価値ある成果であった。ドイツの市民的・国民的外交の課題はハープスブルク国家の保持にあったのではない。専らドイツ国民の、オーストリアに住んでいる九百万のドイツ人を加えてであるが、救済に存した。それ以外では決してない。これは常に強調されなければならない。

イタリアの世界大戦参戦によって生じた新事態にドイツ帝国政権がとった反応は、周知のように、他の対応であった。ドイツの血をさらに注入し、故国ではかつての不実な同盟国に天の復讐を誓い、離反しようとするスラヴ同盟をかかえているオーストリアという国をなお一層救おうとしたのであった。二正面戦争終結の可能性を封印するために、抜け目のない要領に長けたヴィーンの外交団はポーランド国家建設を持ち出したのである。オーストリア・ハンガリー帝国を犠牲にしてロシアとの合意を目指そうという希望は、狡猾なハープスブルク家によってものの見事に粉砕された。バイエルン、ポンメルン、ヴェストファーレン、テューリンゲン、東プロイセン、さらにはブランデンブルク、ザクセン、ラインから集まったドイツ兵士は、世界歴史の恐ろしいくらい多くの血が求められた戦場において何十万という命を捧げたという名誉を与えられた。しかしそれは、例えばドイツ国民を救うためではなかった。世界大戦が有利に進んでいけばハープスブルク家によって代表権が保障され、ドイツにとっては永遠の敵国になるであろうポーランド人国家形成のためであった。

市民的・国民的国政。イタリア参戦に対する戦争中の反応は許しがたいほどの全くのナンセンスではあった。しかし、戦争後にもイタリア参戦に対する情緒的反応が持続されたのはより大きな、重大な愚行であった。

イタリアは戦後も戦勝国連合に加わり、したがってフランスの側にいた。これは疑いようが

ない。しかし、イタリアが参戦したのは親仏感情のゆえではなかった。これも自明であった。イタリア民族をそれに導いた決定的要因は専らオーストリアに対する敵意であり、そこにイタリアの利益が目に見えていたからである。これがイタリアの行動の理由であった。ある種の空想的な親仏感情ではない。百年間も憎み続けていた相手が没落したあと、イタリアがそこから更なる利益を引き出すといって、深い苦痛を感じるドイツ人もいないわけではなかろうが、健康な理性感覚を失ってはいけない。命運は変転している。かつてはオーストリアが八十万のイタリア人を抱えていた。今は二十万のオーストリア人がイタリア支配の下にいた。これはわれわれに利益をもたらす二十万のドイツ国民である。これこそがわれわれの苦悩の原因である。

極めて長い間潜在していたオーストリアとイタリアとの対立が解消しても、イタリア政治の国民的、民族的に考えられた将来目標が実現するわけではない。逆である。戦争によって、特にファシズムによって、イタリア民族の自己意識と権力意識は巨大な高揚を迎え、より大きな目標追求の力を高めるであろう。しかしそれによって、伊仏間の自然な利害対立はいよいよ顕在化してくる。すでに一九二〇年頃には、それを見通したり、見込んだりすることはできた。事実、すでにその頃、両国間の内的不協和音の兆候が現れていた。オーストリアのドイツ人の更なる減少に直面して、南スラヴの本能がフランスからの完全な共感を確信した一方では、スラヴからケルンテンを解放したときにすでに(26)イタリアの態度は、ドイツ人に対しては少なくと

度にも、特にオーバーシュレージエンでの戦いにおいて鮮明に、示されていた。[27] いずれにしても当時すでに、二つのラテン国家間の、当初は軽微な内的離反の開始が見られたのである。今までの歴史上の経験則および通常人の論理と理性に従えば、この離反はますます広がり、いずれは明らかな戦争で終止符を打つに違いない。イタリアは、望む望まないにかかわらず、自分の国の将来と生存をかけて、ドイツ自体同様に、フランスと戦わざるを得ない。フランスがその際常に行動の正面に立っているかどうかは必要ではない。おそらくフランスは、賢明に幾つもの国を自国への経済的、軍事的依存関係に引きずり込むか、フランスと利害をともにすると信じ込ませるであろう。そして、これらの国に後ろから指図をするであろう。最終的には伊仏対立はバルカンで始まり、ロンバルディア平原で終結を迎えるであろう。

いずれは生じるイタリアとフランス間の対立関係の可能性を前にして、すでに一九二〇年にドイツの将来の同盟国としてまず浮かんでいたのはイタリアであるように見えた。ファシズムが、最終的には国際的な流れに屈服するほどにまで弱体化していたイタリア政府を圧倒し、政権を握り、イタリアの利益の排他的擁護をその旗に標語として確定したとき、この可能性が現実のものとなった。脆弱なイタリア的・民主主義的・市民的政府であれば、おそらく現実のイタリアの将来の課題を度外視して細工をこらした対フランス関係を維持することはできた。し

かし、国家を意識するとともに責任感の強いイタリア政権には、それはできなかった。束桿斧[28]がイタリアの国標となった日に、イタリア民族の将来に向けての第三のローマの戦いがその歴史的宣言を発した。それによって、両ラテン国家の一方は地中海での地位を明け渡さなければならないし、他方はこの戦いの賞品として覇権を確保するであろう。

国家を意識しており、かつ理性をもって思考しているドイツ人として私は、後者の国は決してフランスではなく、イタリアであれ、という確定した希望と強固な願望を持っている。したがって、イタリアに対する私の態度は将来に向けての喜ばしい諸要因によって規定されているのであって、戦争への不毛な回想によって左右されているのではない。「宣戦布告受領」は部隊移動の際の鉄道車両標識としては唯一[29]古い軍隊の勝利を確信した信頼の良き印ではあった。しかし、政治的告白としては常軌を逸しているようにみえる愚行であった。だがそれ以上になお愚かなのは、世界大戦時に敵側に立ち、われわれの不利とは逆に世界大戦の利益に関与した国との同盟関係はドイツにとって問題にならない、と今日に至っても固執する立場である。共産党員、民主党員、中央党員がそのような思想を彼らの政治行動の主導軸に据えている。それは、これらの堕落した連合がそもそもドイツ国民の再高揚を望んでいないのであるから、明白である。ところが、国民的・市民的・愛国的サークルがそのような思想を受け入れているとなれば、万事休すだ。なぜならば、われわれを犠牲にしたり、また当時の

われわれの同盟国の犠牲のうえで領土を増やしたわけでなくて、かつヨーロッパにおいて同盟を組めそうな国の名を挙げてもらいたい。まずフランスは外される。エルザス・ロートリンゲンを奪ったし、ラインラントを狙っているからである。ベルギーも外される。オイペンとマルメディを所有したではないか。イギリスも外される。われわれの植民地の大部分を所有しているわけではないが、少なくとも相当部分を、国際連盟と称して管理している。これは子どもでも知っている。デンマークはノルトシュレースヴィヒを所有した。ポーランドは東プロイセンの一部、西プロイセンとオーバーシュレージエンを所有している。チェコスロヴァキアは四百万人に近いドイツ人を抑圧している。ルーマニアは同様に百万人以上のドイツ人を自国民にした。ユーゴスラヴィアは約六十万のドイツ人を抱えている。[30] イタリアは今日では南ティロールを自領と称している。

こうしてみるとわれわれの国民的・市民的、そして愛国的サークルにとってはヨーロッパで同盟を組める可能性を持つ国はことごとく姿を消す。いや、いや。彼らはそれを必要としていない。というのは彼らは大声で抗議し、口先談義で騒ぎたて、他の世界の人々の反対を部分的には窒息させ、部分的には壊滅させてしまえる。同盟国どころか武器も持たずに、自分たちの毅然(きぜん)たる抗議態度のみを頼りに、略奪された領土を取り戻し、次いで親愛なる神にイギリスを罰してもらい、イタリアを懲罰したうえで、全世界のしかるべき軽蔑(けいべつ)にさらされる。もっとも

彼らが、自分たちが現下の外交同盟者、すなわちボルシェヴィズム的にしてマルクシズム的なユダヤ人、によって街頭の柱にぶら下げられなければの話ではある。

ところが、市民的、愛国的由来を持つわれわれの国民的サークルは、自分たちの外交方針が共産党員、民主党員、中央党員の支持を得ている、そもそもとりわけユダヤ人に支持されている点に、その外交方針の誤謬（ごびゅう）は最も端的に証明されている、と意識していない。驚くべき事態である。この理由をただちに理解するにはわれわれドイツ人の市民性を知らなくてはならない。彼らは、ドイツ民族の想像上の同意が形成されているように見える論点を少なくとも一つは見出した。彼ら全部がこれにより限りなく幸福なのである。ここには愚昧（ぐまい）以外の問題はあり得ない。それにもかかわらず勇気あふれた市民的、愛国的政治家にとっては、国民的闘争トーンでしゃべれるし、次の演説者である共産主義者からこき下ろされる心配をしなくてもすむのが限りなく心地よいのである。彼らがその幸福に浸れるのは、彼らの政治的見解がユダヤ的・マルクシズム的には高価値であり、国民には不毛だからである。これが彼らには分かっていないか、誰も心奥深く秘密にしていて、口には出さない。われわれは、虚言と怯懦（きょうだ）という堕落に途方もなく深く侵されているのだ。

私が一九二〇年にこの運動の対イタリア外交方針を明らかにしたとき、最初は国民的サークルからはもとより、いわゆる愛国的サイドからも理解してもらえなかった。単純に言えば、抗

議を義務のように続けるのではなく、実践的に考えて、世界大戦の敵意を内的に解消する政治思考に至るにはどのようにすべきか、これが彼らには理解できなかったのである。私は国民行動の主眼点は、ミュンヘンの軍司令官ホールの前かどこかで、時にはパリに反対し、時にはロンドンに抵抗し、はたまたローマを敵視してただむなしく青い空に呼びかける抗議行動にではなく、むしろ、ドイツ内にあってとりもなおさず崩壊に責任を有する者の排除に置かれていることを知ろうとした。国民的グループには、これがそもそも理解できなかったのである。パリの指令に際してミュンヘンでは反パリ抗議運動の機運が燃え上がった。クレマンソー氏はそれに対してもちろん何の対応も考えていなかったが、私は、この抗議騒ぎに対置される国家社会主義的態度表明を最も先鋭な形で作り出すよう指示した。フランスは、ドイツ人が知り得た、そして知らなければならなかった事柄のみ行った。私がもしフランス人だったら、もちろんクレマンソー氏の後に立たされているだろう。強い敵に遠くからいつまでも吠え続けるのは、愚かであるし、意味もない。したがって、ベルリンでのわれわれの崩壊という恐ろしい破滅に責任を有しており、罪を負っている者たちに抵抗するのが、これらの愛国的サークルの国民的反対勢力の仕事でなければならないはずだ。実情を見れば、実現の可能性もない呪いをパリに向けて投げつけるのは、行動的にベルリンに乗り込むよりは、もちろん気持ちがすっきりするだろう。

同じことが、自分たちが今まで挙げてきた成果の事実を通して自分たちの才能のあり方を十分に知らされているあのバイエルンの国政代表者にも特に当てはまる。というのも、常々バイエルンの主権を守ると口にして、外交関与権保持に目を配っているお偉方にとっては、大きな視点から現実的に把握されたドイツ内国民的反対勢力の指導を、必然的にバイエルンが保持できる外交政策を積極的に擁護するのがまずは責務というものである。(31) 帝国政府のここに極まれりという感の支離滅裂さ、手を伸ばせば手に入る成果を意図的に等閑視し続ける対応を目の前にして、バイエルン政府こそが、ドイツの孤立をある日必ず打破するに違いない外交政策の主導者となるべきであった。

しかし、このようなサークルもイタリアとの共同歩調を擁護する私の外交方針に対しては、完全に無思想にして愚かにも、そっぽを向いていた。ドイツ国民の高度な将来利益の主導者にして擁護者として堂々と名乗り出る代わりに、時々目をそばめてパリを眺め、盛んになる勢力があれば帝国に忠実を誓い、北にボルシェヴィズムが燃え上がればバイエルンを救う決意を表明した。いや、はや。バイエルン国家がその主権擁護をまかせた相手とは、このようなまったく特殊にして偉大なる精神現象であった。

最初のうちは多くの人々がそのような心情で、私の外交方針をダイレクトに拒否しないにしても、少なくとも理解したとは見えなかった。これは不思議ではない。率直に言えば、私自身

も当時はそれを予測していた。加えて、一般的な戦争心理をも計算し、自分の運動に冷静な外交思想を教え込むのにひたすら力を注いだ。

私は当時自分のイタリア政策のゆえに外からの攻撃を受けたわけではなかった。理由の一つは、それがまったく無害なものと受け取られていたからであり、二つ目は、イタリア自身が国際的影響に支配される政府を持っていたからである。いや、多くの人は心の中ではおそらく、このイタリアがボルシェヴィズムの病に罹(かか)ればよいのに、と望んでいた。そうなれば、同盟国としては、少なくともわれわれの左翼側にとっては、大歓迎であった。

さらにその頃は左翼は戦争敵視解消に明確に反対できなかった。この陣営においては醜悪で低劣で、かつドイツにとってはかくも不当な戦争憎悪感情の根絶をいずれにしても絶えず求めていたからである。このサークルが外交方針を理由にして私を非難するのは簡単ではなかったであろう。私の方針が実現する前提として、少なくとも独伊間の戦争憎悪解消がもたらされるからである。

今一度強調しておくが、私の考えにそれほど大きな反対がおきなかった主要理由は、私の敵対者たちが、私の行動は無害で、実行可能性がなく、よって危険性はないと想像していたからである。

この情勢は、ムッソリーニのローマ進軍以降、一変した。この瞬間から、まるで呪文(じゅもん)にかけ

られたように、イタリアに対する中傷、毒舌の大合唱がユダヤ系新聞全体から押し寄せた。そして一九二二年になって初めて南ティロール問題が浮上し、南ティロールの住民が望むか望まないかにかかわらず、これが独伊関係の難問となった。これは長くは続かなかった。マルクシズムまでが国民的反対運動の擁護者となったのである。かくて、ユダヤ人とドイツ民族主義者が、社会民主党と愛国同盟が、共産主義者と国民市民階級が手に手をとって精神的にブレンナー峠を越えるという盛大な催し物が姿を現した。今や戦闘によって、といってもこの際は血を流さない戦いではあるが、この地域の再占領を実行しようというのである。ところが、バイエルン国家主権を擁護しようというこのバイエルン原理主義者たちは、自分たちの精神的祖先が百年も前にフランス人に引渡し射殺させた善良なるアンドレーアス・ホーファー[32]を偲んで、アンドレーアス・ホーファーの州解放闘争に大いに執心したのであった。この勇敢なる国民戦線は全く特殊な形でこれに鼓舞されたのであった。

ユダヤの新聞ゴロとそれに追随する国家的・市民的そして愛国的石頭連中が南ティロール問題をドイツ国民の生存課題の位置にまでまつり上げてしまったので、私はこの問題への対応を詳しく述べる必要を感じているのである。

すでに述べたように、旧オーストリア国家はその領内に八十五万[33]を少し上回るイタリア人を抱えていた。正確に言えば、オーストリアの人口調査から得られた国籍事情では、これと異な

っている。個々人の国籍を数えたのではなく、当人申告による言語使用者数に過ぎない。これでは明確な数値は得られないことが、明白である。実際の状況を自分自身の目から隠してしまうのは、国民的市民の弱点といえる。事柄をしっかり知らない限り、少なくとも、事柄について明確に語らない限り、その事柄そのものが存在しない。そのようなやり方に基づいて算出されたイタリア人、換言すればイタリア語を話す人間が、ティロールの広範囲にわたって生活している。一九一〇年の人口調査によれば、ティロールの人口は……万人であり、イタリア語人口は……パーセント。残りはドイツ語を、部分的にはラディン語をしゃべる。したがってティロール大公爵領内には約……万のイタリア人が住んでいる。この全員が今日イタリア人によって占有されている地域にいるので、ティロールのイタリア占有地区全体でのイタリア人とドイツ人との割合は、ドイツ人……対イタリア人……となる。[34][35]

これを確認しておくのは、ぜひとも必要である。なぜなら、ドイツでは少なからざる人間がわれわれの嘘つき新聞のおかげで、ティロールと考えられている地域の三分の二にイタリア人が、三分の一にドイツ人が事実上生活しているとは知らないからである。南ティロール再占領を真面目に口にする者は、イタリア人支配下での二十万ドイツ人という事情がドイツ支配下での四十万イタリア人と変わるのを覚悟しなければなるまい。

もちろん南ティロールでのドイツ人は主として北部に集中しており、イタリア人は南部に多

い。それゆえに、国民に合った解決を目指すのであれば、まず南ティロールという概念を一般的な議論から完全に除外して考えなければならない。なぜなら、四十万人のイタリア人と並んで、ドイツ人も二十万住んでいる地域をイタリア人が取っているからといって、道義的理由からたっぷりとイタリア人を非難するわけにはいかない。逆に、その不正を排除するために、その地域を再びドイツに獲得しようとしたらどうであろうか。純粋に道義的視点からして、ドイツはイタリアよりもより大きな不正を犯す事態に陥る。(36)

このように、現在のところ南ティロール再占領論にも、南ティロールのイタリア支配にも同種の道義的弱点が指摘できる。これによって、この論理はその道徳的正当性をも失う。となれば南ティロール全体の再獲得を求める他の視点が有効性を有するに至るのではあるまいか。一般的に道徳的に是認される感情から言えば、せいぜいのところ、事実上ドイツ人住民が現実に多数を占めている地域の再獲得は可能であろう。それは僅々……平方キロメートルに過ぎない。(37)そこには約十九万人のドイツ人、六万四千人のイタリア人とラディール人、(38)それ以外の民族が二万四千人である。完全なドイツ地区内に住んでいるドイツ人は十六万人に過ぎない。

現在の国境(39)において、南ティロールにおけるようにドイツ人を母国から遮断していない国境は、ほとんどない。ヨーロッパだけで総計……百万人のドイツ人が帝国から離れて生活している。そのうちの……百万人は明らかに外国人支配下にある。……百万人だけがドイツ系オース

トリアとスイスにいて、少なくとも当分は国籍を脅かされない条件下にある。[40]そこではさまざまなケースがあり、人口数から見ても南ティロールと比べられないわが民族のまったく別の困難さがある。

この事態はドイツ民族にとっていやなものであり、それに責任を負うべきなのは今日南ティロール問題を叫んでいる連中である。それだけに一層、純粋に市民的な国境線政策を引き受けるにしても、なお残っている帝国の運命をこのような失われた地域の利害やそれらの個々の地域の願望にまかせるわけにはいかない。

というのも、ある点がまずは厳しく指弾されなければならないからだ。すなわち、南ティロールに神聖なるドイツ民族がいるのではない。愛国同盟は御託を並べているだけだ。ドイツの民族にとっては、ドイツ民族に数えられる全ての人が同じように神聖でなければならない。南ティロール住民を、ポーランド支配のもとで奴隷にされている西プロイセン住民や東プロイセン人やシュレージエン人よりも高く評価するいわれはない。チェコスロヴァキアのドイツ人を、ザール地方やエルザス・ロートリンゲンでのドイツ人よりも高く評価するのも妥当でない。切り離された地域のドイツ人を特別な価値で分類する権利を主張できるのは、せいぜいのところ、それぞれの決定的で支配的な人種的基礎価値を分析的に検証してからである。しかし、イタリアに対して声高に抗議している団体がその基準をたてるわけではない。その基準は今日の割譲

されている諸地域において、例えば東プロイセン人または西プロイセン人よりもティロール人に高位の価値要素を絶対に認めないだろう[41]。

それ自体として考えれば、ドイツ民族の外交課題を、帝国から分離された地域のうちの一つだけの地域の利益によっては規定することはできない。というのは、母国の力が取り戻されていない限り実際の支援は得られないのであるから、現実には当の利益は確保されないからである。かくて、外交的態度表明にとって重要となる唯一の視点は、国家レベルで集計されている国民の残存部分の独立と自由を迅速に、可及的速やかに再獲得する視点以外にあり得ない。

換言すれば、もしドイツ外交が「南ティロールにいる神聖なる民族」、すなわちそこで問題となる十九万人のドイツ人の救済以外の目標を持たないという場合でさえ、まずその前提はドイツの政治上の独立獲得と軍事力確立である。なぜなら、オーストリアという抗議国家がイタリア人に南ティロールを分け与えないのはほぼ明らかであるからだ。同じく、もしドイツ外交に南ティロールの事実上の解放以外の目標がないというのであれば、ドイツ外交はなお一層その行動を、政治的、軍事的権力手段を奪還できる前提を保証する視点と要素によって規定されざるを得ないのも明白である。同時にますます南ティロールを外交問題の中心にしてはいけない。むしろ逆に、より一層、対ドイツ方針に固執している現下の世界連合の打破を許容する思想が指導力を発揮しなければならない。というのも、ドイツによるドイツ人への南ティロール

の返還は、抗議と軍備縮小をチベットでの祈りのように繰り返して最終的に得られるのではない。剣の投入によってである。

ドイツがこの目的を放棄しないのであれば、ドイツは常に、そしてなお一層、ドイツの権力獲得に手を貸してくれる同盟国を探さなければなるまい。フランスも選択肢の一つになるかもしれないという人も出てこよう。そのときはもちろん私は国家社会主義者としてそれには断乎たる反対を貫く。

フランスが、ドイツを友好民族として反イタリアの共同行進に組み込む、と進んで宣言する可能性もある。そのうえわれわれの流した血の犠牲を称え、われわれの受けた傷を癒すすずめの涙ほどの膏薬として南ティロールをわれわれに認める可能性もないわけではあるまい。しかし、そのような勝利がドイツにとっては何を意味するというのか。南ティロールのドイツ人二十万人を加えたから、わが民族は生存できるというのか。フランスは、まず地中海のラテン系競争相手をドイツの武器を借りて倒し、次いで一層強硬にドイツに対応するのが目に見えているではないか。いずれにしても、ドイツ解散という従来からの目標をフランスはいっそう追求するのではなかろうか。

その通りだ。もしドイツにフランスとイタリアのどちらを選ぶのかという選択がそもそもあるのなら、ドイツにとっては、一も二もなく、イタリアである。というのはフランスと組んで

イタリアに勝てば、われわれは南ティロールを手に入れる。加えて、より強大になったフランスという次の敵をも持つ。イタリアの支援を得てフランスに勝てば、ドイツには少なくともエルザス・ロートリンゲンが、うまくいけば大規模で現実的な領土政策を実行できる自由がもたらされる。[42] それによってのみドイツは将来にわたって長期的に生存できる。決して南ティロールによってではない。しかし、ドイツの嘆かわしい非理性的愛国者を一時的に満足させようとして、割譲されている全地域のうちから特定の、または生存に重要とはみなされない地域を選び出し、七千万民族の全利益とを秤に掛けよう、いや、ドイツの将来を諦めよう、というのは不可能である。もしそういう者がいたら、それは正真正銘の空想家である。なぜなら、そうなれば実際のところ、南ティロールは今と同じくらいの支援しか受けられないのであるから。

国家社会主義運動はドイツ民族をして自分の生存形成のために血を惜しむことのないように教育しなければならない。と同時にわが民族は、そのような血は来るべき歴史において決して空想のために流されてはならないように教育されなければならない。

われわれの抗議愛国者と愛国同盟にはしかし、武器による南ティロール再占領は考えていない、といい加減はっきりと言ってもらいたい。彼らには名誉を懸けてはっきりしてもらいたい。ある日イタリアが抗議運動とおしゃべりに負けて、南ティロールを引き渡すと信じているのか。国家意識を持った国が四年間かけて戦い取った領土を武器決定に困って再び犠牲に供するだろ

う と信じているのか。われわれが、または私が南ティロールを諦めたのだと口にしないでいただきたい。(43) この幼稚な嘘つきたちは、少なくとも私個人に関して言えば、南ティロールの運命が決定されるときには前線で戦っていたと知っているはずだ。(44) 今日の抗議連盟者のうちの誰もが避けていた状態を私は引き受けていたのだ。ところが、まさにそのとき、今になってわれわれの愛国同盟やわれわれの国家市民主義者と手を組んで今日の共通の外交政策を行い、イタリア反対を扇動している連中はまさにそのときに、あらゆる手段で勝利をサボっていたのだ。その結果として、国際マルクシズムと民主主義と中央党が平和の中でわが民族の主要力を衰弱させ麻痺(まひ)させてしまい、ついに戦争中にドイツという祖国とドイツ軍の没落を招いてしまった革命を組織したのだ。

この連中の活動が成果をあげ、われわれの今日の市民的な抗議熟練者たちの呪うべき無力と弱体が加わり、南ティロールもドイツ民族の手から失われたのである。これらのいわゆる国家的愛国者たちが今になって南ティロール放棄について言辞を弄(ろう)しているのは彼らの哀れむべき偽装である。いや、諸君らにはまっとうな言葉から目を逸(そ)らさないでいただきたい。今は南ティロール占領のみが問題である、というような意気地なしであってもらいたくない。というのも国民抗議同盟の諸氏よ、諸君らの今日の親密なる同盟者たちであるかつてのマルクシストの祖国裏切者たちがその放棄を国法に則(のっと)って万全に執行していたからである。国民同盟および素

人市民政治家の諸氏よ、当時この犯罪に対して明確な態度表明をする勇気を持っていたのは、諸君らではなかった。それを行ったのは小さな国家社会主義運動であったし、何よりも私自身であった。その通り。諸君ら(45)は口をつぐんでいたので、ドイツで諸君らの存在を知っている人は誰一人いなかった。諸君らは自分の穴にひっそりともぐり込んでいた。その頃一九一九年、一九二〇年に私は講和条約署名という不名誉に反対を表明していた。しかも、壁の後ろでひそひそと囁いていたのではない。公然と表明していたのだ。諸君らはなお当時卑劣であり、われわれの集会に来る勇気さえ持ち合わせていなかった。諸君らの今日の外交同盟者、すなわちマルクシスト的浮浪者、にたたかれるのが怖かったのである。

サン・ジェルマン講和条約(46)の署名者も、ヴェルサイユ条約(47)署名者も国家社会主義者ではない。彼らは数十年間にわたる祖国裏切り行為にこの署名によって最後の仕上げを画す政党関係者であった。今日南ティロールの運命を少しでも変えようと望む者は、今日の抗議者たちがすでに一度放棄しているわけだから、再び放棄できるわけがない。せいぜいのところできるのは再占領くらいのものだろう。

もちろん私は、それに全力で反対する。私はそのような試みに強硬に対抗する。予告しておく。私は、わが民族をこのような愚かなうえに血を求める冒険に引きずり込もうとする面々に対しては燃え上がる憎悪をもって闘う。私は戦争の内実をレストランでの話題を聞きかじって

知っているのではない。私は、戦争で何かを命令したり、指示したりするような連中の一人ではなかった。私は、四年半にわたって命令され、それにもかかわらずその義務を忠実に真摯(しんし)に果たし終えた平凡な兵士であった。それによって幸運にも私は戦争を、戦争はどのようなものであるか、そして、どれほどまでに見たくもない実態であるか、を知った。私はこの戦争の最後の瞬間まで一兵卒であった。それゆえに戦争の、勝利にわが民族の救いがあると信じていた戦争の、陰の面をも知った。しかし今は、陰でこそこそと仕組まれた平和の中にいる。私は、ドイツ民族には役に立たず、わが民族の流した血の犠牲をすでに不埒(ふらち)にも自分たちの利益のために売り渡す連中のためにだけ役立っている戦争には、絶対に反対する。私は確信している、いずれはこの私に、必要となればドイツ民族の血の投入にも責任を取る決断が求められるだろう。しかし私は、一人のドイツ人だけが戦場に引っ張り出され、その血をもって愚者や犯罪者だけは自分たちの計画を太らせるような事態には抵抗する。近代戦争のもたらす驚愕(きょうがく)と苦痛の前代未聞の恐ろしさを知り、民族の精神力が無残に酷使される様子を検討している人は、血の投入に匹敵しない成果のためにそのような犠牲を求める考えには二の足を踏まざるを得ない。南ティロールの民族が、ドイツ人だけでもよいが、一つの場所に集められ、彼らのための戦いにわが民族が支払った十万以上の死者が現れるシーンを想像してもみよ。三十万の手は拒絶の意を示して天に向けられるであろうし、国家社会主義の外交政策は是認されるであろう。

ところがとんでもなく恐ろしいことには、このような驚くべき可能性をもてあそんでいるのは、何も南ティロールを救おうとだけ考えてのうえではないのである。

今日の南ティロールをめぐる闘争を主導しているのは、かつて全ドイツを腐敗するにまかせた連中であるが、南ティロールは彼らにとっては、彼らの低劣な、かつ言葉の最高の意味で反ドイツ的な本能を満足させるために良心のかけらさえ見せずに冷酷に追求している目的に至る手段以上なのだ。それは今日の国家意識的イタリアへの嫌悪である。何よりもこの国の新たな国家理念への憎悪である。イタリアの政治家[48]、すなわち彼らに南ティロールの助けを借りてドイツ世論を煽(あお)り立てる契機を与えている、このイタリアの傑出した政治家に対する憎しみである。なぜなら、実はこの連中にとってはドイツ民族はどうでもよいのだ。彼らは目にワニの涙を浮かべて南ティロールの運命を嘆いてみせている一方で、全ドイツを、割譲された地域よりもなお惨めな運命に追い立てているのである。国民文化の名でイタリアに抗議しながら、ドイツ国民の文化を内部において冒し、われわれの文化感覚全体を破壊し、わが民族の本能を毒殺し、過去の業績さえ破滅させているのだ。その内部でわれわれの演劇、われわれの文学、そしてわれわれの造形芸術をブタの水準にまでおとしめている時代が文化の名で今日のイタリアに反対したり、その水準からドイツ文化を守るような道徳的権利を有しているはずがない。バイエルン民族党、ドイツ国民党はいうに及ばずマルクシズムの文化侮辱者の連中すら南ティロー

ル住民のドイツ文化の心配はしているが、彼らは内容のない駄作で故国の文化を心ゆくまで侮辱し、ドイツの舞台を「ジョニーが演奏する」ごときドイツ人種侮蔑に明け渡している。[49] 南ティロールでドイツ文化の存続が圧迫されていると偽善的に嘆いてみせる一方で、故国では、ドイツ文化を意識的、かつ意図的な破壊から防ごうとしている人たちを極めて冷酷に迫害している。当地のバイエルン民族党は、わが民族への卑劣な侮辱に対して抗議している人々を取り締まれと検察にけしかけている。南ティロールでのドイツ文化守護者たちが、ドイツ自体の内部ではドイツ文化保持に向けて何をしているというのか。劇場を売春宿の水準に、人種恥辱の見本市におとしめている。映画館を、慎みと良俗をあざける場とし、われわれの民族生活の全要因を破壊し、キュービズムとダダイズムでわれわれの造形芸術が愚劣になっていくのを黙認し、彼ら自身がその卑劣な欺瞞と誤謬の生産者を保護し、ドイツ文学をガラクタと泥土にまみれさせ、わが民族の全精神生活を国際的ユダヤ人に引き渡している。この同じ哀れなろくでなしどもが、厚かましくも南ティロールのドイツ文化を擁護しようというのである。ごく自然の成り行きではあるが、彼らの頭に浮かんでいる目標は二つの文化民族を扇動して、最終的には彼らを自分たちの文化的でない悲惨な水準に易々と引きずりこむところにある。

　全てがこういうわけだ。

彼らは南ティロールでのドイツ人迫害を嘆く。その同じ人間がドイツでは、国民的であると

は自分の民族をユダヤ人と黒色人種による梅毒化に無防備に引き渡すのとは違うのだと理解している人間を極めて冷酷に攻撃している。南ティロールでのドイツ人の良心の自由を叫んでいる連中が、ドイツ内自体では良心の自由をこのうえもなく卑劣に抑圧している。よりにもよって南ティロールで良心の正当性と国民の自由のために尽力していると言いふらしている嘘つき政党ゴロに支配されているドイツほど、国民の国家的心情を表明する自由が制限されているところはない。彼らは南ティロールで一人のドイツ人に加えられている不正を嘆くが、このドイツで毎月毎月マルクシストの浮浪者どもが国家的人材に加えている殺人については沈黙しているのだ。彼ら同様にまったくご立派な国家的市民も愛国的抗議者も口をつぐんだままだ。まだ五か月しか経っていない今年なのに、国家社会主義運動側からは、部分的には残酷な付随事態のもとで九名が命をなくし、六百名以上が負傷した。(50)嘘つき連中はこれについては一言もしゃべらない。同種のファシズム行為が一つでも南ティロールのドイツ人に加えられたのであれば、彼らはどれほど大騒ぎをしでかすか、想像に余りある。南ティロールで、たとえ一人でもドイツ人が同じような事態でファシストによって命を落としたとしたら、彼らは全世界に反乱を呼びかけかねまい。ご立派な連中の怒りをドイツ民族救済に呼びかけずに、マルクシズムの殺人者のならず者をドイツで利用しようとするのである。南ティロールでの官憲によるドイツ人迫害に仰々しく抗議している当の人間が、自分たちに目障りなドイツ人を帝国内自体で迫害して

いたのだ。ドイツでは、勇敢なUボート乗組員から始まって、[51]オーバーシュレージエンの解放者に至るまで、[52]自分の血をドイツのために流した人間が鎖に繋がれ、裁判に立たされ、最後には懲役刑に科された。哀れな抗議ゴロがひっそりと人目につかないようにどこかに逃げ込んでいる間に、彼らは燃える祖国愛から自分たちの生命を百回も二百回も捧げただけではないか。国家意識のある国では最高の勲章で報いられたであろう行為がドイツでは懲役刑を覚悟しておかなければならない。[53]今日の南ティロールでイタリアが一人でもドイツ人を逮捕したら、全ドイツの国家的、マルクシズム的新聞どもはすぐさまがなりたてる。密告しただけで数か月の投獄である。家宅捜査、信書の秘密違反、電話盗聴、市民権によって保障されている個人の自由に対する憲法違反、これらはこの国では日常茶飯事である。彼らはこれらをまったく無視し続けている。[54]われわれのいわゆる国民政党も、これらが許されているのはマルクシズムに支配されたプロイセンのみだと言い出せない。一つには、彼らは今日これらのマルクシストと外交政策において手を組んでいるからである。二つ目には、これらの国民政党は真に自己意識的な国家主義を抑圧するのに手を貸しているからである。「国家的バイエルン」内では、死の床についていたディートリヒ・エッカルトを、[55]医者の証明書を提示したにもかかわらず、何の罪もないのに、たかだかそのゆるぎない国民的心情を表明したというだけで保護拘束し、いよいよ病状が悪化しても拘束を続け、釈放したのは息を引き取る二日前であった。[56]バイエルン最大の詩

人が受けた仕打ちがこれであった。もちろん彼は国家主義的ドイツ人であったし、「ジョニーが演奏する」のごときを犯すわけもないし、したがって、国民的文化擁護者に批判的であった。国家的愛国者たちはまず彼を殺しておいて、今になっても彼の作品を黙殺する。その理由は一つしかない。彼はまさにドイツ人であり、さらに善良なバイエルン人であり、彼はドイツを汚す国際的ユダヤ人でなかったからである。そう考えれば、彼は愛国者同盟にとっては神聖な存在のはずであるのに、彼らはその国家的・市民的心情に従ってミュンヘン警察で繰り広げられている「くたばれ、国家主義のブタ」という呼びかけに応じて行動したのであった。しかし、イタリアでたった一人のドイツ人が愚行によって勾留されても、世間を怒りに駆り立てるのは、同じドイツ人気取りの連中であった。

南ティロールで数人のドイツ人が追放されたとき、この連中は全ドイツ民族を大きな怒りに煽った。しかし彼らは、ドイツ自体の内部でドイツ人が追い回されていたのに言及するのをすっかり忘れているのだ。市民的国民政権下の「国家的バイエルン」では、その非妥協的国家主義が怠慢な支配市民層には政治的に合わないという理由だけで、何十人というドイツ人が追放されている。ドイツ系オーストリア人への兄弟種族意識を突然忘れ、彼らは外国人に過ぎなくなったのである。いわゆる外国系ドイツ人追放の問題ではない。そうではない。ドイツ人が南ティロールから他の地方へ追放されたからといってイタリアに対して抗議を燃え上がらせてい

る市民的・国家的偽善家たちは、バイエルンから、ドイツ軍で四年半にわたってドイツのために戦い、傷つき、最高の勲章を持っているドイツ国籍ドイツ人を何十人もバイエルンから追放したのである。[57] この市民的・国家的偽善者たちはイタリアに対しては怒っていながら、自民族内では恥の上に恥を重ねていたのである。

彼らはイタリアでの脱民族化を嘆き、自国ではドイツ民族を脱民族化させている。わが民族の血液毒化に立ち向かっている人たちに対して闘いを挑んでいるのだ。いや、彼らは、大都市で彼らによって実施され、奨励されているわが民族の脱ドイツ化、黒色人種化、ユダヤ化に反対しているドイツ人を、恥ずかしげもなく、かつ少しの容赦もなく迫害しているのである。さらに、宗教施設破壊という虚偽の口実で投獄しようとしているのである。[58]

メランでイタリアの政治的跳ね上がりがエリザベス女王記念碑を傷つけたとき、彼らは野蛮にも騒ぎ立てた。しかもイタリアの裁判所が犯人に二か月の禁錮刑を科しても静まらなかった。ドイツ内自体でもわが民族の偉人を称える記念碑や記念物が汚されている。ところが彼らは、それには何の関心も払わない。フランスでは、エルザス・ロートリンゲン内のドイツに関する全てのモニュメントが破壊されている。ポーランドではドイツ名を持つあらゆる物が計画的に荒れるにまかされている。彼らはそれらを気にも留めない。いや、まさに今日ブローンベルク[59]ではビスマルク塔が正式に公式に破砕された。[60] これら全てが彼らの、わが民族の国家的名誉を

守る勇士たちの血を騒がせない。もしこれが南ティロールでの出来事であったなら、何という災いであるだろう。なぜなら、彼らにとっては、突然そこが聖地と化していたからである。祖国自体は、故国は、地獄へ落ちていくのである。

南ティロールでもイタリア側に無思慮な行為があったのは確かである。ドイツ人を計画的に脱民族化しようとする試みは愚劣であるし、その成果においても疑わしい。しかるに部分的ではあるがそれに荷担し、他方においては自民族の国家的名誉というものを事実としては何一つ知らない連中は、それに反対する権利を持っていない。その権利を持てるのは、それまでにドイツの利益とドイツの名誉のために事実上の闘いを繰り返してきた人たちのみである。それはドイツにおいては国家社会主義運動以外にはあり得なかった。

反イタリアの扇動がどれほどまでに内的欺瞞に満ちているかは、フランス人、ポーランド人、ベルギー人、チェコ人、ルーマニア人、南スラヴ人がドイツ人に加えてきた行動とイタリア人の振る舞いを比べてみれば、一目瞭然(りょうぜん)である。フランスはエルザス・ロートリンゲンから二十五万人以上のドイツ人を追放した[61]。南ティロール全体の人口より多い人間をである。彼らにとっては、それはたいしたことではない。フランス人は今になってもエルザス・ロートリンゲンでのドイツ人の足跡を根絶しようとしているし、冷たい平手打ちがパリの回答であるのにも懲りずに、相変わらずフランスを兄弟国として受け入れようとしている。ベルギーは比類なく狂

信的にドイツ人を迫害している。ポーランド人は一万七千人以上のドイツ人を、部分的にはまさに残酷な付随事態のもとで殺戮した。[62] これも、とやかくいうほどの事柄ではない、というわけだ。数万人が家屋敷から追い出され、着の身着のままで国境外に追い出される。これに対してもわれわれの市民的、愛国的抗議詐欺師たちはご立腹されない。これらの連中の本当の心を知りたい人は、当時人々が避難民をどのように迎えたかを思い出すだけでよい。何万人という追放された不幸な人が自分たちの大切な故国の土を、部分的には形だけの強制収容所[63]で味わい、ジプシーのようにあちらこちらと引き回されているときに、彼らの心は何の痛痒も感じていなかった。そして現在も、感じていない。私は今も、ルールからの最初の避難民がドイツに来て、まるで重犯罪人であるかのように警察署から警察署へ引き回されていた時代を覚えている。南ティロールの国民であるドイツ人の擁護者で保護者である彼らは、それなのに胸を痛めなかった。しかし南ティロールで一人でもドイツ人がイタリア人によって迫害されたり、不正が加えられたりすると、彼らはまさに、世界が今まで経験した最大の野蛮行為にして類を見ない文化破壊が行われたと言って、身を震わせて激昂するのである。「ドイツ人が今まで、この国において行われているような暴君的で戦慄すべき方法で抑圧された例はない」とおっしゃるのである。いや、例外が一つだけある。すなわちドイツの内部自体である。そして、諸君ら自身が暴君なのである。

南ティロール、より正確に言えば南ティロールのドイツ人はドイツ民族に受け入れられなければならない。しかし、市民的愛国的抗議詐欺師たちはドイツの内部自体で国際的金融支配者への従属、全般的な腐敗、非国民的な不名誉といういかがわしい政治によって、南ティロールでのドイツ住民数の二倍に上るドイツ人を年ごとに殺しているのだ。彼らの破滅政策のおかげで、ここ数年間に毎年一万七千から二万二千の人間が自殺している。[64] ここ十年間で、子どもを加えたら、南ティロールのドイツ人の数に匹敵するだろう。この事実についても、彼らは沈黙したままである。彼らは移住を勧める。シュトレーゼマン氏のごとき国民的市民は移住率の向上を外交政策の顕著な成果と考えている。そうなるとドイツは、南ティロールのドイツ住民数ほどの人数を四年ごとに失うわけである。彼らは避妊と堕胎によって、南ティロール内でのドイツ人に倍する人間を毎年殺している。[65] その連中が、外国でのドイツ人の利益を語る道徳的権利は自分にある、と自認しているのである。

言いかえるとこの国民的で公的なドイツが南ティロールでのわれわれの言語の脱ドイツ化に苦しんでいるのに、ドイツの内部自体ではあらゆる公的なやり方でチェコスロヴァキアやエルザス・ロートリンゲンなどでのドイツ名の脱ドイツ化を進めている。ドイツ内でのわれわれのドイツ都市名をチェコ人に合うようにチェコ語的に読み替えている公的な旅行案内書さえ出版されている。そのような事態になっていても、ドイツでは波風は立たずにきていた。ところが、

イタリア人が聖なる名前であるブレンナーをイタリア流にブレネーロと変えたとき、激しい抵抗が起こった。これを見てもよく分かるように、市民的愛国者は、全てが喜劇であると分かっているところで激昂するのである。われわれの情熱のない、怠慢な市民が国民的情熱を装うのは、年老いた売春婦が愛を媚びるのに似ている。全てが下手な芝居だ。その芝居の発祥地がオーストリアであると、なおさら醜いものとなる。かつてはティロールのドイツ人の関心を引くこともなかった黒色と黄色の正統派[66]が今では国民の神聖なる怒りを共にしている。かくのごとく、特にユダヤ人も一緒だと分かったときには、小市民連中は狂喜する。すなわち、今回は例外的に自分たちの国民心情を声高に叫んでも新聞を牛耳るユダヤ人によってほんの片隅に押しやられてしまわずにすむ、と分かっているときだけ、彼らは抗議の声を上げるのである。いや、いや、今回は特別である。心正しき国民的・市民的紳士諸氏にとっては実にめでたいことに、国民的闘いを呼びかけたのでイッチヒ・ファイテル・アブラハムゾーンによって賞賛されたではないか。それどころではない。ユダヤの赤新聞も叫びたて、クロトシン[67]からヴィーンを越えてインスブルックに至る市民的国民的ドイツ統一戦線が現実に初めて形成された。そして政治的には極めて愚昧なるわがドイツ民族はこの騒ぎに巻き込まれている。かつてドイツ外交もわがドイツ民族もハープスブルク家に丸め込まれ悪用されたのと同じようにである。

かつてのドイツ外交は専らオーストリアの利益に左右されていた。そのツケは甚大であった。

ドイツの若い国家主義がその将来方針を腐敗した市民層の芝居がかったおしゃべり騒ぎやマルクシズムのドイツ敵対者たちに規定させるような事態となれば、それは苦しみである。さらにこの国家主義が、ヴィーンでのオーストリア国家の現実の主導力を完全に誤認し、自分たちへの指令をそこから得るような事態になれば、それも苦しみである。この芝居騒ぎに終止符を打ち、来るべきドイツ外交の軸を冷静なる理性に移す、これが国家社会主義運動の課題である。

今回の一連の事態の責任の一端はもちろんイタリアにもある。しかし私は、イタリアがオーストリア崩壊を機に国境をブレンナー峠まで広げたのを捉えてイタリアを批判するのは、愚かであるし、政治的には児戯に等しいと思っている。その際イタリアを支配していた動機は市民的併合主義者の抱いた動機より卑劣というわけではなかった。彼らは、シュトレーゼマン氏やエルツベルガー氏を含めて、ドイツ国境をベルギーのマース要塞に定めようとしていた。いつの時代にあっても、戦術的にみて当然、かつ確実な国境策定を目指すのは、責任をもって考え行動する国家統治者の責務である。イタリアは、二、三十万人のドイツ人が欲しくて南ティロールを併合したのではない。この地域にドイツ人の代わりにイタリア人だけが住んでおればイタリア人にとっては好都合ではあっただろう。というのも、ブレンナー峠を越えて国境を引くようにさせたのは、まず事実上イタリアの戦略観点ではなかった。[68] 同じ状況に置かれたら、どの国も別の行動は取らなかったであろう。加えて、最終的にはどの国もその当然の国境を自分

の利益に合わせて決めているのであった。決して他国の利益によって決めているわけではないのであるから、この国境形成自体を非難するのは無意味である。ブレンナー峠占有は軍事的利益、戦略的目的に極めて有用ではあるが、国家民族が四千二百万人あり[69]、現実の軍事的脅威がこの国境には存しないのであるから、戦略的には確定され、かつ安全な国境内に二十万人住んでいようが住んでいまいが、たいして重要ではない。そのような動機に従っている限り、経験則に従えばほとんど価値ある成果をもたらさないような心情を力ずくでこの二十万人のドイツ人に押し付けるよりも、彼らを個々の強制から守る方が賢明というものである。人が望もうが望むまいが、どのような方法を取ろうとも、一つの民族を二十年、三十年の間に根絶するのは不可能である。イタリア側の回答は自明である。そんなことを初めからするつもりはないが、周囲のオーストリアやドイツからイタリア内部問題へ干渉する挑発が継続的に存し、それが原因で南ティロール住民自身からおこった反作用の結果として自ずから必然的に生起したのだ、と当たり前だと言わんばかりに答えるだろう。そう言われたとしても、無理のない面もある。というのも、まずイタリア人は南ティロールではドイツ人をきちんと公平に扱っていた。しかしイタリアでファシズムが高まってくると、ドイツやオーストリアで主義主張の理由からイタリアに対する中傷が始まり、相互のいらいらが激化し、その結果南ティロールで、われわれが今日見るように、周知の結果を招かざるを得なかったのである。その際、何よりも不幸だった

のはアンドレーアス・ホーファー同盟の活動である。[70] すなわち、ドイツとイタリアの間に橋をかけるのが南ティロールのドイツ人の使命であると彼らにはっきりと知らせ、それを勧めればよかったのに、南ティロール住民に実現の見込みもない希望を吹き込んだのである。人々はそれにそそのかされ、その結果として予想外の進行に従わざるを得なかったのである。事態が激化した責任は、何よりもこの同盟にある。私のように、この団体の中心人物と個人的に意見を交わす機会を持った者は、この同盟が実際の活動家をそれほど抱えているわけではないのに不幸な出来事をしでかしてしまう無責任さに驚かざるを得ない。というのも、私は彼らを、特にミュンヘンの警察中枢のポジションに座っている一人の人物を思い浮かべ、自分の血と肉を危険にさらさない人間たちが血を流さなければ終結し得ないような出来事の当事者となっているのを考えるとき、胸糞（むなくそ）が悪くなるのだ。

イタリア中傷の本当の黒幕たちの間に南ティロールに関する意見の一致はあり得ない。これは間違いない。なぜなら、これらの連中にとっては南ティロール自体はどうでもよいのだ。そもそもドイツに対してさえ関心を持っていない。彼らにとって重要なのは混乱を招き、ドイツにおける対イタリア世論を硬化させる手段が、問題なのである。なぜなら、支配するには、それが重要なのであるから。彼らにとっては南ティロールでのドイツ人の扱いなどはどうでもよいのであって、ただイタリア憎しのゆえに中傷に役立つものであれば何でも探し出している、

とイタリアは反論している。この反論は明確な根拠を有している。今日ではドイツにもイタリアにも、両国民の共同歩調をあらゆる手段を講じてでも妨害するのに利益を有している分子がいる。それゆえに、彼らから可能な手段を奪うのが智恵者の義務である。もちろん彼らは決して諦めず、たびたび試みる。これは覚悟しておかなければならない。逆の事態が意味を持つのは、これらの誹謗に効果があって、共同歩調を口にするほどの勇気の持ち主がドイツからいなくなる場合である。現実には、そのような事態にはならない。逆である。今日のイタリアが賢明ならざる小競り合いを自ら避けようとすればするほど、ドイツ内でのイタリアの友人は、ドイツでの中傷者を暴き、彼らの述べる根拠の偽善性を暴露し、民族を害する彼らの行為を中止に追い込むのがますます容易となるだろう。外国の組織が要求し、騒ぎ立てているからといっても、それを聞くのはまるで降伏のように見えるし、連中の傲慢さをつけあがらせるだけなのだから、それらにまっとうには対応できないのだとイタリアが本当に信じてくれるなら、その対応を基本的にあるグループに任せる方策の有効性が明らかとなる。そのグループとは、そのような中傷に関与しないばかりでなく、逆に伊独間合意自体の賛同者として、ドイツにおける世論毒殺者に対して戦闘を進める人である。(71)

国家社会主義運動の外交目標は経済政策とも市民的国境線政策とも関係ない。わが民族の領土目標はドイツ民族に将来の発展を確保するのであるが、決してイタリアとの対立をもたらす

ものではない。われわれはわが民族の血を犠牲にするのを惜しみはしないが、それは国境をわずかに修正するためにではない。わが民族の更なる拡張と食糧のために領土を獲得するためである。この目的のためにわれわれは東部を目指す。イタリアにとっての地中海は、ドイツにとってはバルト海の東海岸である。わが帝国が発展する際の、いや、帝国統一を保持する際のドイツの宿敵はフランスである。同じくフランスはイタリアにとっても不倶戴天(ふぐたいてん)の敵である。国家社会主義運動は浅薄な万歳の叫びに堕しはしない。武力でおどかすつもりもさらさらない。指揮官は全て戦争の現実と真相を十分に知っていた。それゆえに、この運動は、わが民族の全体的将来発展には役にも立たない目的のために血を流すつもりはない。だからヨーロッパにおけるドイツの細分化からみれば取るに足りない国境線修正のためにイタリアに戦争を挑む理由はない。逆である。長い将来のために、南方への呪われたるゲルマン進軍を終結させる。そしてわが民族にその領土困窮の解決が可能と思える方向でわれわれの利益を擁護する。われわれがドイツを今日の奴隷化と隷属の時代から救済するときに、それによってわれわれは最高度にドイツの名誉再建のために、そして同時にドイツの名誉の意味において闘うのである。

今日のイタリアが、南ティロールでの諸措置変更を外国介入への降伏と解し、最終的には共同歩調は実現しない、と考えているのであれば、イタリアにあっては専らドイツにいる友人のためにイタリアの方向を転換する計画を立ててほしいし、その根拠を堂々と明示してもらいた

い。ドイツの友人は、ドイツ内にあってイタリアとの共同歩調を擁護しているのであり、その作業を誹謗する者と同一視されるのを拒否するだけでなく、長年にわたってそのような分子に対して厳しい戦いを挑んでいるのであり、イタリア国家の主権的統治権を自明なものとして認知しているのである。

イタリアを友人にするかどうかは、ドイツにとって等閑視してもよい事柄ではない。イタリアにとっても事情は同じである。ファシズムがイタリア民族に新たなる価値を与えた。同じことはドイツにおいてもいえる。将来に対するドイツ民族の価値はその一時的な生存状態によって過小評価されてはならない。ドイツが今までの歴史においてしばしば証明してきており、おそらく明日にも再び発揮するであろう力によって評価されなければならない。

ドイツにとってイタリアとの友情は犠牲を払っても保持する価値がある。イタリアにとってもドイツとの友好は同じくらいの価値がある。これを両国内で認識している勢力が合意できるのであれば、両民族にとって幸運となるだろう。

ドイツ内でのイタリア誹謗に大きな責任を有しているのは、不幸にも生じてしまった敵愾心(てきがいしん)である。とはいえ、この中傷行動に対して闘っている勢力がドイツの内部自体にも存している事実にもかかわらず、イタリアが敵意を煽(あお)り立てる連中から自分の手でその手段をもぎ取らないのであれば、イタリア側にも大きな責任が生じてくる。

ファシズム統治体が英知をもって六千五百万人のドイツ人をある日イタリアの友人とすることができれば、二十万人を出来の悪いイタリア人に教育し直すよりもはるかに価値がある。

同様の理由により、ドイツへのオーストリア併合禁止にイタリアが加わるのは正しくない。(72)フランスがこの禁止に一番に賛成している事実からしてすでに、ローマでは反対の立場に立たざるを得なかったはずである。なぜなら、フランスがそうするのはイタリアの利益を図ってではない。むしろ、それによってイタリアに損害を与えることができるという願望に基づいている。何はさておきフランスが併合禁止をごり押しする理由は二つある。ドイツの強国化を阻止するのが一つである。オーストリアを近いうちにフランス・ヨーロッパ同盟の一員として残しておけると考えているのが二つ目である。ローマにあっては、ヴィーンではフランスの影響がドイツの影響よりも本質的に決定的であるという錯覚に迷い込んでもらいたくない。ここではイタリアの影響については言わない。フランスは国際連盟をヴィーンに移そうとしている。(73)その計画が生まれてくる意図は、この都市のそれ自身コスモポリタン的である性格を強化し、その本質と文化とが今日のヴィーンの雰囲気に、ドイツ帝国の本質よりもより強い影響を与えている国と結びつけようとするところにある。

そのうえオーストリアのさまざまな地方ではもともと併合の方針は真面目に受け取られていたのであるが、ヴィーンではそうではなかった。逆であった。ヴィーンで実際に併合の意見を

表明する人がいるとすれば、それは何らかの意味で経済的な問題を解決するためであった。なぜなら、フランスはむしろこの小さな借金国家を助けに駆けつける用意ができていたからである。しかし、オーストリア連邦の内的強化が進み、ヴィーンがその完全な支配的位置を回復するのに比例して、併合思想は次第にしぼんでいく。さらに加えて、ヴィーンの政治はますます反イタリア的、特に反ファシズム的になる。オーストリア派マルクシズムは以前にもましてフランスへの強い共感を明確にしていたのである。

当時、併合が好都合にも部分的にはイタリアの支援を得て不成功に終わったのはフランスにとって、将来の同盟システムにおいてプラハとユーゴスラヴィアの間の欠けた部分を埋める可能性を残している。

イタリアにとってはドイツへのオーストリア併合妨害は心理的理由から見ても、誤っていた。分割されたオーストリア国家が小さなままであればあるほど、もちろんその外交目標はより制限されていた。僅々……平方キロメートルの領土と……百万人の人口しか持たない国家が[74]領土政策上の大きな目標を持つとは想定できない。もしドイツ系オーストリアが一九一九年、二〇年にドイツに編入されていたならば、その政治思想の傾向もドイツの、ほとんど七千万を擁する民族の大いなる、少なくとも可能なる政治目標に次第に規定されるようになっていたであろう。当時はそれが妨げられて実現しなかった。それにより、より大きな目的に支えられた外交

思想の方向さえ排除され、人々はちまちました旧オーストリア再建思想に閉じ込められた。それだからこそ南ティロール問題はこのような重要位置にまでそもそも高められたのである。というのは、オーストリア国家自体は小さい。しかし、その小ささに合わせて、少なくとも反対にゆっくりと全ドイツの政治思想を毒していけるような外交思想の担い手になれるほどには、この国は大きいのである。オーストリア国家の政治思想がその領土的制限によって限定されればされるほど、この政治思想は、自国には意味を持つが、ドイツ国民にはドイツ外交の形成に決定的とはみなされない諸問題に最終的にはますます入り込むのである。

イタリアは、ヨーロッパにおけるフランスの同盟システムにストップをかけるために、ドイツによるオーストリア併合に賛成せざるを得ない。両国が一つの大帝国へ合併した結果としてドイツの国境線政策の一部に他の課題を提示するためにも、そうせざるを得まい。

さらに、かつてイタリアが併合に反対した諸理由は極めて不明瞭であった。今日のオーストリアも、今日のドイツも現下のイタリアにとっては軍事的脅威とはなり得ない。フランスが画策して、オーストリアもドイツも参加する反イタリアの総体的同盟をヨーロッパに形成すれば、オーストリアが独立していてもドイツ側にいても軍事状況には、変化は生じない。さらに人々は、そのような小さな国の実際上の独立については事実上話題にさえしない。なぜなら国家としての常にどこかの大国の腰に引っ付いている。スイスは反証とはならない。

スイスは、国際間交通を根拠としてではあるが、独自の生存可能性を常に保持しているからである。それがオーストリアにはできない。この国では首都に人口が集まり過ぎていてバランスを欠いているからである。このオーストリアがイタリアに対してどのような態度をとろうとも、すでにそれが存続しているという事実がチェコスロヴァキアの軍事的戦略状況を軽減している。そしてチェコスロヴァキアは、いずれ時がくればそれ自身至極当然ながらイタリアの同盟国になるハンガリーと対立せざるを得ないのである。

軍事的、政治的な二つの理由からみて、イタリア人は併合禁止を[75]合目的としてではなくても、少なくとも無意味とみなす方針を採用するのが得策である。[76]

# 第十四章　南ティロール問題の本質、ドイツ外交の醜態

そもそも南ティロール問題が生じたのは実際は誰のせいであるのか。これを詳しく論じないで、本章を閉じるわけにはいかない。

われわれ国家社会主義者にとって決定は国法によって下される。少なくとも私は、何百万ものドイツ人を戦場に駆り立て、しかも流された血の犠牲に見合った成果がドイツにはもたらされず、フランスの利益に帰すような事態には断乎として反対する。私はなお、国家の名誉の立場をここで決定的に認知しようとも思わない。なぜならこの視点に基づけば、フランスに進軍せざるを得なくなるからだ。フランスはドイツの名誉を、イタリアとはまったく正反対に、その全行為によっておとしめているからだ。私はすでに本書の「序言」[1]において、国家の名誉という概念を外交の基礎とする可能性について述べた。だからここであらためてさらに立場を明確にする必要はない。われわれの抗議専門連盟は、われわれの態度が南ティロールを裏切った

り、あるいは断念したりしていると言おうとしている。われわれの行動がなければ南ティロールはそもそも失われなかったとか、近いうちに他のティロールに返還されそうであるというのであれば、その言い草も間違っているわけではない。

それゆえに私は、南ティロールを裏切ったのは誰であるか、誰の対応のせいでそれはドイツにとって失われたのか、をここで今一度詳しく検討しておかなければならない。

一、南ティロールが裏切られ、失われていったのは、長い平和の中で、ヨーロッパにおけるドイツの主張に必要なドイツ民族の軍備を縮小したり、完全に拒否し、それにより決定的な時期にドイツ民族から勝利に、それとともに南ティロール保持に必要な力を奪った諸政党の活動によってであった。

二、これらの政党は長い平和の中でわが民族の道徳的、道義的根底を掘り崩し、何よりも自己防衛権への信頼を破壊した。

三、いわゆる国家保持的、国民的政党としてこれらの行動に関心を払わず、あるいは少なくとも真摯（しんし）な対抗策を提示せず、傍観を決め込んだ政党もともに南ティロールを裏切った。彼らは、間接的ではあるが、わが民族の軍備縮小に共同責任がある。

四、南ティロールが裏切られ、失われていったのは、ドイツ民族をハープスブルクの大国理念の小間使いにおとしめてしまった政党の活動によってであった。彼らはドイツ外交にわが民

族の国民統一という目標を提示するかわりに、オーストリア国家保持をドイツ国民の課題と考えたのであった。それによってすでに平和時に数十年間にわたってハープスブルクの計画的脱ドイツ化を傍観、いや助長していた。それにより彼らは、オーストリア問題をドイツ自身の手で、あるいは少なくともドイツの決定的参画の下で解決する行動を逸した。この点で共同責任を有している。そうでなければ南ティロールは確実にドイツ民族の手に残っていただろう。

五、ドイツの外交政策は全般的目標や計画を欠いていた。その欠陥は一九一四年においても合理的な戦争目標の確定にまで及んでいた、あるいはそれを妨げていた。そのせいで南ティロールは失われた。

六、戦争中にドイツの軍備力と攻撃力の強化に微塵も力を割かなかった連中によって南ティロールは裏切られた。ドイツの軍備力を意図的に麻痺させた政党によっても、その麻痺を容認した政党によっても裏切られた。

七、南ティロールが失われたのは、戦争中でさえドイツ外交の新方針を作成できず、ハープスブルク強国保持策を放棄したうえでオーストリア国家のドイツ人を救済する政策を採用できなかったせいである。

八、南ティロールが失われ、裏切られたのは、戦時中に勝利しなくても平和が得られるという希望を偽造し[2]、ドイツ民族の道徳的抵抗力を破壊し、戦う意志を表明せず、ドイツにとって

は不幸としかいいようのない和平策を主導した連中の活動によってであった。

九、南ティロールが失われたのは、協商には帝国主義的目的は認められないと戦争中もドイツ民族をたぶらかし、それによってわが民族を有頂天にさせ、抵抗の絶対的必要性を遠ざけ、最終的には自国の警告者よりは協商の方を信頼してしまった政党と個人の裏切り行為のせいである。

十、さらに南ティロールは、故国からの調達に頼っていた戦線の疲弊と、嘘で固めたウッドロウ・ウィルソンの説明に汚染されたドイツ思想によって失われた。

十一、南ティロールが裏切られ、失われたのは、兵役拒否に始まり軍需産業ストライキ(3)に至るまでの手段を悪用し、勇敢に戦えば勝利が得られるという思いを軍隊からことごとく奪い続けてきた政党と個人の活動のせいであった。

十二、南ティロールが裏切られ、失われたのは、十一月犯罪の組織としての実施によってであり、この破廉恥な事態をいわゆる国家保持的国民勢力が卑劣にして怯懦(きょうだ)にも容認してきたからである。

十三、南ティロールが裏切られ、失われたのは、崩壊後にドイツの名誉を汚し、わが民族の名声を世界の前で破棄し、それによりわれわれの敵に要求拡大の機運を提供した政党と個人の破廉恥な行為のせいである。さらに、至るところで低俗さと卑劣さのテロの前に一片の誇りも

なく白旗を掲げた愛国同盟や国家的・市民的政党の惨めな怯懦のせいである。
十四、南ティロールが裏切られ、失われたのは最終的には、講和条約調印[4]と、同時に当該地域喪失を法的に認知したせいである。
ドイツの全政党がこれら全ての事態に責任を有している。ある政党ははっきりと意識し、かつ望んでドイツを破滅させ、他の政党は絵に描いたような無能力と天下に知られた怯懦のゆえに、ドイツの将来を破滅させている連中の邪魔をしなかっただけでなく、逆に内政、外交にわたる主導力不足のせいでわが民族の敵対者たちに利益をもたらす役割を果たしたのである。卑劣、低俗、怯懦、愚昧(ぐまい)、この四要素を全て揃えて没落していった民族はドイツ以外にない。
最近アメリカの諜報(ちょうほう)機関の責任者フリン氏[5]が戦時中の回想録を出版した。それにより旧ドイツの外交分野における活動と作業がよく分かる。[6]
それらについてより広く知ってもらうために、私はここでは市民的・民主的機関の一端に語ってもらおう。[7]
これが本日[8]のミュンヘン最新報知(ノイエステ・ナハリヒテン)の記事である。この人物が戦前のドイツ外交の典型的な代表者であった。そして、それがなお共和国におけるドイツ外交の典型的代表者でもある。他の国であれば憲法裁判所によって絞首刑に処されているであろう人物がジュネーヴの国際連

盟のドイツ代表[9]である。

このような人間たちがドイツの破滅に、同時に南ティロールの失地に、責任と罪を有しているのである。彼らだけではない。そのような状態をひきおこしたり、それを隠蔽したり、黙って受け入れたり、それと激しく戦わなかった政党や個人も共犯である。

今になって厚かましくもあらためて世の中をたぶらかそうとし、他人を南ティロール失地の責任者に仕立て上げようとしている連中は、まず自分が南ティロール保持のために何をしたのかについて自己弁明書を提出しなければならない。

いずれにしても私としては誇りをもって自慢できる。私は一人前の男子となって以来わが民族の強化に参加していたし、戦争が勃発したときにはドイツ西部戦線において四年半にわたって戦い、戦争後にはドイツに不幸をもたらした腐敗分子との戦いに日を送った。私はこのとき以来、祖国ドイツへの裏切り者とは内政においてであろうと、外交に関してであろうと妥協していない。彼らが近いうちに消滅するのが、私のライフワークの目的であり、国家社会主義運動の課題である。これを毅然として宣言しておく。

私は怯懦な市民主義者の野良犬どもや愛国同盟者たちの罵声も遠吠えも平気で聞き流せる。私にとっては言語に絶する軽蔑すべき対象でしかないこれらの木偶の坊たちが持っている低レベルの臆病さというものを、私はあまりにもよく知っているからである。彼らもまた私という

者を知っている。だから彼らは私に向かって叫びたてるのだ。

# 第十五章　イタリアとの同盟

国家社会主義者としての私の見るところ、今日、かつての敵国同盟から脱してドイツの同盟国になる可能性を持っているのはまずはイタリアである。とはいえ、この同盟関係はドイツにとって戦争と直結しているわけではない。われわれにはすぐに戦争をする軍備はない。

この同盟関係はドイツにとってもイタリアにとっても同じくらい有益であると、私は確信している。目に見える直接的な有益性がこの同盟からすぐには得られなかったにしても、両国家が言葉の最高の意味において最も自国らしい国家利益を代表している限り、この同盟関係が害を及ぼす事態はあり得ない。ドイツがその外交政策の最高目標をわが民族の独立と自由の保持に見て、日々の生活を送る諸前提をこの民族に確保しようとする限り、その外交思想はわが民族の領土不足に規定されるであろう。そうである限り、われわれはわれわれの進路に障害物として立ちはだかる可能性のない国と敵対する内的、外的理由を持たない。

イタリアが真なる国民国家としてその現実的生存利益に奉仕しようとする限り、同じようにイタリアも領土不足のゆえに政治の思想と行動を自国の領土拡大に求めざるを得ない。イタリア民族がより国家的で、より誇らしく、より独立的であろうと望むなら、その発展によってドイツと対立する可能性はますます少なくなるであろう。

両国が利益を持っている地域は好都合にも遠く隔たっているので、両国間で摩擦の生じる区域はない。(1)

国家を意識しているドイツと同じく誇り高いイタリアとは利益共同体に立脚した誠実で相互的な友好関係を築いて、世界大戦が残した傷口を修復できる。

それによって南ティロールはいずれは両民族の役に立つ高い使命を満たさなければならない位置となる。この地域のイタリア人とドイツ人が、自分の民族に与えられた責任を満腔(まんこう)の意をもって迎え、イタリアとドイツが解決しなければならない偉大なる課題を認識し理解するのであれば、いずれの日かイタリアとドイツの国境に誠実なる相互理解の橋を架けるという高次元の使命の前に日々の些細(ささい)ないさかいは霧消する。

もちろん私は、これが現下のドイツ政権下で可能とは考えていない。同様にイタリアが非ファシズム政権であれば不可能である。というのも、今日のドイツ政治を規定している勢力はドイツの再興を望んでいない。彼らが望んでいるのはわれわれの破滅であるからだ。同じく今日

のイタリアのファシズム国家は滅べばよいと思っているので、あらゆる手段を講じて両民族間を憎悪と敵意に落とし込もうとしている。フランスはそれに類する発言であれば、どんな口からでまかせの発言であっても取り上げ、自分が有利になるように利用するだろう。

ドイツが国家社会主義国となって初めてファシズム政権のイタリアと最終的な同意に至る道筋を見つけ、両民族が互に剣を手にする危険性を最終的に排除する。というのは、この古いヨーロッパは政治システムに支配された地域であって、われわれの見通せる時代にあってはこれは変わらず、続いていくだろう。ヨーロッパの一般的な民主制はいずれは解体に向かう。その契機を有しているのは、諸国を次々と巻き込んでいるユダヤ的・マルクシズム的ボルシェヴィズムのシステムか、諸勢力の自由な変化の中でそれぞれの民族の人口数と重要さに応じてヨーロッパに自国の刻印を刻みつける自由で束縛のない国民国家のシステムかのどちらかである。ヨーロッパ内でファシズムが理念として孤立してるのは、ファシズムにとっても好ましくはない。これが生まれてきた思想世界がより普通的なるか、イタリアがいずれは再びヨーロッパの他の一般的な思想に呑み込まれていくかのどちらかである。

# 第十六章　民族の健康な血と肉

ドイツの外交上の可能性を詳細に検討してみると、ヨーロッパで将来にわたって可能な価値の高い同盟関係を結べる国は事実上二か国しかない。イタリアとイギリスである。イギリス自体に対するイタリアの関係はすでに今日において良好であり、私がすでに他の箇所で述べた理由により、近い将来においてそこに影はさしてこないだろう。両国間に暗雲が漂う気配はない。これは両国間の相互共感から得られた関係ではない。何よりもイタリア側からの現実的力関係に対する理性的評価に基づいている。貪欲に止めどなくヨーロッパでの主導権を求めるフランスへの反感は両国に共通している。イタリアとしてはそれによってヨーロッパでの生死にかかわる利益が損なわれるからであり、イギリスとしては、ヨーロッパでフランスが力を持てば、今日ではもはやそれ自体で完全とはいえないイギリス人の海上支配と世界支配に新たなる脅威が加わるからである。

暗黙のうちにおいてではあるが、この利益共同体にすでに今日スペインとハンガリーも加わっている。スペインは北アフリカにおけるフランスの植民地活動に不信の目を向けており、(1) ハンガリーは、フランスからの支援を受けているユーゴスラヴィアを敵視しているからである。

国際連盟自体内での力関係の変化をもたらさざるを得ないか、それとも国際連盟外において特定の力要因を発展させるかのどちらかによっておこってくるヨーロッパにおける新たな国家連合に、もしドイツが参加できたら、将来の活発な外交活動のための内政条件の第一歩が可能となるのだ。そのときにヴェルサイユ条約がわれわれに課している非武装状態、したがって実際上の無防備状態は、ゆっくりとではあるが、終幕を迎える。これは、今までの戦勝国連合がこの問題で分裂でもするような事態がおこった場合にのみ、可能である。ロシアと同盟しても、他のいわゆる非抑圧諸国との連携によっても、かつての戦勝国連合によってわれわれを締め付けている共同戦線に対抗するのは不可能である。

遠い将来においては、高い国家価値を持つ個別国家から構成される新たなる民族連合も想定される。そうなればアメリカ合衆国による世界制圧の脅威も排除できる。というのは私の見るところ、今日の諸国民にとって頭の痛いのはイギリスの世界支配継続ではなく、アメリカの世界支配の出現である。

汎(はん)ヨーロッパ主義はこの問題を解決できない。利益地域が重ならず、かつその境界を明確に

している自由で束縛のない国民国家群からなるヨーロッパのみが解決できる。

そのときに初めてドイツとしては、フランスが自国から一歩も出ない旨の保証を得られるとともに、新たな防衛力に支えられてドイツの領土不足解決の道を進む機が熟したといえる。わが民族が東部へのこの大いなる領土政策目標を採用するならば、ドイツの外交政策の明確さのみならず、その安定性が直ちに得られる。その外交により、少なくとも近い将来においては、わが民族を最終的に世界大戦に巻き込んでしまったような政治的誤謬を避けることができる。そのときには、毎日のちまちました叫び声とまったく不毛な経済政策、国境線政策に支配された時代は最終的に克服されているだろう。

しかしそうなればドイツは内政においてはその手段を極めて集中化せざるを得ない。陸軍と艦隊をロマンティックな要請にではなく、実践的要求に従って整備し、組織すると認識しておかなければならない。自明ではあるが、ドイツが再び卓越した強力な陸軍を形成することがわれわれの主要課題となるだろう。なぜなら、われわれの将来は海上にではなく、ヨーロッパ大陸にあるからである。

この原則の重要性が完全に認識され、その認識に従ってわが民族の領土不足が東部において大規模に解消されるときになって初めて、ドイツ経済は、われわれの頭上に幾千もの危機を呼び込んでいる世界不安要素ではなくなる。この認識は少なくとも、われわれの国内問題解決に

とりわけ有効である。自分の後継者を工場労働者として大都市に送り出す必要がなく、自由な農民としてその土地に定着させることのできる民族であれば、ドイツの産業に国内需要地を確保できる。この国内販売地域があればドイツ産業はいわゆる日当たりのいい場所を求めて他の世界で繰り広げられている摑み合いや闘いから次第に手を引き、それから解放されるであろう。その進展を準備し、いずれそれを実行するのが国家社会主義運動の外交課題である。この運動はその世界観に基づく思想圏からしても外交政策をわが民族の再組織化に役立てなければならない。ここにおいてもまた、闘いは諸システムを求めてではなく、生活している民族のために、肉体と血の保持のために行われるのだという原則が確認されなければならない。そして、身体の健康の結果として、精神的にも健康であり得るために日々のパンが欠けてはならないのだ。

この運動は内政改革闘争においては幾千もの障害と無理解と悪意を踏み越えて進まなければならないように、外交政策においてはマルクシズムによる祖国への意図的な裏切りを、そしてわれわれの国民的、市民的世界の無価値にして有害な観念とスローガンを取り除かなければならない。この運動が採用する闘いの意義に対する理解が一時的に小さければ小さいほど、いずれ得られるその成果はますます巨大である。

# 第十七章　ユダヤ人との闘争

今日のドイツにとっての同盟国としてイタリアがまず第一に考えられる理由は、この国においてのみ内政と外交政策とが純粋にイタリアの国家利益によって規定されているという事実と結びついている。しかしイタリアの国家利益とは、ドイツの利益とは矛盾しないし、逆にドイツの利益もそれとは背反しないような利益である。

それが重要なのは事実上の理由からだけではない。以下の理由からも重要なのである。ドイツに対して戦争を行ったのは、その一部の国がドイツ崩壊に直接の利益を有しているような強力な世界連合であった。少なからざる国では、その民族の真に内的なる利害から生じたのではないが幾分かは役に立つかもしれない諸影響のゆえに戦争参加の態度が決定されていた。巨大な戦争プロパガンダが始まり、それらの民族の世論を曇らせてしまい、それらの民族自身には部分的にしても何の獲物ももたらし得ないような、いやそれどころかときにはまさに真の

利益に反しさえするような戦争に熱狂させたのである。
この巨大な戦争プロパガンダをひきおこした力が国際的世界ユダヤ人であった。[1] というのも、これらの国の多くにとって、自国の利益という観点から見れば、戦争参加が無意味であればあるだけ、世界ユダヤ人の利益という観点から考察すると、戦争参加は有意義、かつ論理的に正当でもあった。[2]

ユダヤ人問題自体について論じるのはここでの私の課題ではない。それは、こんなに短く、かつ凝縮せざるを得ない論述の枠内では無理である。ただより深く理解してもらうために、以下の点はここで指摘しておきたい。

ユダヤ人は人種的に完全に統一的ではない核からできあがっている民族である。しかし特別な本質特性を有しており、それが地球上の他の民族とユダヤ人を分かつのである。ユダヤは宗教共同体ではない。ユダヤ人相互の宗教的な結びつきが実際はユダヤ民族のそのときの国家構造である。ユダヤ人は、アーリア人諸国家のような、民族独特の空間的に区切られている国家というものを持っていなかった。にもかかわらずユダヤ人の宗教共同体は実際上の国家である。すなわちそれが、国家のみが任務として果たすことができる、ユダヤ民族の保持と増加と将来を保証しているのである。ユダヤ人国家は、アーリア人諸国家と違って、空間的領土という境界に縛られていない。これは、独自の領土国家を建設し保持する生産力を有していなかったユ

ダヤ民族の本質に起因している。

どの民族も、地上での全行為の基本方向においては、自分自身を保持する願望を活動力としている。ユダヤ人においても同じである。アーリア系諸民族とユダヤ民族は根本的に異なる素質を持っており、それに対応して生存闘争の形式も異なっている。アーリア人の生存闘争の基盤は土地である。アーリア人は土地を耕し、まずは自民族の生産力によって、土地を国内での循環の中で自分たちの要求を満足させる経済の一般的な基盤としている。

ユダヤ民族は独自で生産する能力を欠いているので、空間的に理解されている種類の国家形成を実現できない。自分の生存基盤として他国民の創造的活動と労働を必要とする。それゆえにユダヤ人自身の存在が他民族の生存内での寄生虫的存在となる。すなわちユダヤ人の生存闘争の最終目的は、生産的活動を行っている諸民族を奴隷とするところにある。この目標は実際はいつの時代にあってもユダヤ人の生存闘争に見られたのであるが、それを達成するためにユダヤ人はその本質の集合体全体に見あうあらゆる武器を使用する。

内政においてはユダヤ人は個別民族の内部でまず権利の平等を求めて闘い、それが終わると優越的権利を求める。その際に使用する武器はこの民族の本質に根ざしている狡猾（こうかつ）、狡知、擬態、策略、奸計（かんけい）などの諸特性である。その特性は他の民族の軍略にあっては剣の闘いにおいて発揮されるが、ユダヤ人にあっては生存保持闘争の軍略に現れる。

外交においてはユダヤ人は諸民族を不安に陥れ、諸民族をその真なる利益とは別な方向に導き、民族を相戦わせ、そのようにしてカネの力とプロパガンダの助けでゆっくりと支配者に成り上がろうとする。

その最終目標は脱国民化であり、他民族との交雑であり、最高民族の人種水準を低下させるところにある。民族的知識階級を根絶し、人種混淆を導き、自分の民族所属者をもってその知識階級の代わりをつとめさせようとするのである。

ユダヤ人の世界闘争はそれゆえに常に血なまぐさいボルシェヴィズム化で終わるであろう。すなわち内実は、民族と結びついている当該民族独自の精神的指導層の破壊である。それにより、指導者をなくした人間たちの支配者にユダヤ人自身が昇ることができるのである。

その際にユダヤ人の手助けをしているのが怯懦、愚昧、劣悪さである。交雑によってユダヤ人は他の民族体に侵入する第一歩を確実に獲得している。

ユダヤ人支配の最後は常に個別文化の衰退であり、最終的にはユダヤ人自身の狂気である。なぜなら、ユダヤ人は民族の寄生虫であり、彼らの勝利が意味しているのはその犠牲民族の死滅であり、彼ら自身の終焉であるからだ。

古代世界の没落によって若い、部分的にはまったく堕落を知らない、人種的本能を確実に有している民族がユダヤ人と対立するに至った。彼らはユダヤ人の侵入を拒み続けた。ユダヤ人

は外来者であり、全ての虚言も擬態もほとんど千五百年間にわたってその効果をあげなかった。

まず封建支配と領主統治がユダヤ人を、抑圧されている社会層の戦闘に参加させ、瞬く間にこの戦闘をユダヤ人の戦闘に変えさせてしまうような一般的状態を作った。フランス革命によってユダヤ人は市民的平等権を得た。それによって、ユダヤ人が諸民族の内部にあって政治的権力に向かって進める足がかりが出来上がったわけである。

十九世紀が、利息思想に立脚した金貸し資本の拡大によって、ユダヤ人に諸民族の経済内での支配的位置を与えている。株を経由してユダヤ人は最終的には生産現場の大部分を所有するに至り、株式取引所の支援を得て次第に公的な経済的生存の君主にだけではなく、最終的には政治的生存の支配者にまでなるのである。これは、フリーメーソンの支援を得ている諸民族の精神的堕落と、ユダヤ人への依存を強める新聞の働きに支えられている。かつて市民階級が封建支配を破壊する要素であったのに似て、ユダヤ人は、市民的な精神支配を破壊する潜在力を、新興の肉体労働者の第四階級に見出すのである。その際、市民階級の愚鈍、無作法な厚顔さ、貪欲な金銭欲、怯懦、これらがユダヤ人に手を貸している。彼らは肉体労働の階級を特別階級に仕立て上げ、国民的知識階級に対して闘わせるのである。マルクシズムがボルシェヴィズム革命の精神的父親となる。それがテロの武器である。ユダヤ人はその武器を今や情容赦なく冷酷に使用している。

世紀が変わる頃にはヨーロッパにおけるユダヤ人の経済制圧はほぼ完了していた。彼らは今や政治上の保証を求め始める。すなわち、国民的知識階級を根絶しようとする最初の試みは革命の形式で現れている。ヨーロッパ諸民族の緊張関係は、ほとんどの場合、領土不足の結果として表れているのであるが、ユダヤ人は計画的に世界大戦をけしかけ、この緊張を自分に有利に利用し尽くしているのである。

その目的は、国内では反ユダヤ的であるロシアの破滅であり、行政と軍隊においてなおユダヤ人への抵抗を続けているドイツ帝国の破壊である。さらなる目標は、ユダヤ人への依存、ユダヤ人主導を旨とする民主制が未だ下位に甘んじている王政の転覆である。

これらのユダヤの闘争目標は部分的には少なくとも余すところなく達成された。ツァーリズムとドイツの皇帝制度は打ち倒された。ボルシェヴィズム革命の支援を得て、非人間的な迫害と殺戮によってロシアの上層階級およびロシアの国民的知識階級は殺され、余すところなく根絶された。ロシアでの主導権を求めるユダヤ人の闘争はロシア民族に二千八百万人から三千万人にのぼる死者を強いた。(3) ドイツが世界大戦で支払った犠牲者の十五倍に当たる死者である。(4) 革命が成功した後、ユダヤ人は規律、道徳、風紀などの全体的な繋がりをぶった切り、上位の社会的慣習としての婚姻を破棄し、それに代えて一般的な結合を宣言した。(5) その目標は、規律

を無視した交雑を進めて、自分自身の手で主導権を握るには無能な、それゆえに最終的には唯一の精神的要因としてのユダヤ人を欠いては存続できないような全般的に価値の低い人間混淆を増殖するところにある。

これがどの程度まで成功しているのか、またどの時代にも見られなかったこの非常に恐ろしい人間の犯罪を自然の反応力がどの程度まで変更させることができるのだろうか。この問いの答えは将来が教えてくれるであろう。

ユダヤ人は現在のところ、残った国家に同じ状態をもたらそうとしている。これに関しては、いわゆる国民的愛国同盟という市民的国民的諸政党はユダヤ人のそのような試みと行動を支持し隠蔽（いんぺい）しており、他方ではマルクシズム、民主主義、いわゆるキリスト教中央党は攻撃的戦闘部隊としての役割を果たしている。

ユダヤ人の勝利をめぐる激しい闘争は現在ドイツで繰り広げられている。人間性へのこの呪わしい犯罪に対する闘争を一人で引き受けているのが国家社会主義運動である。

今は全ヨーロッパの諸国内で一時的に政治権力を握る闘いが、表面には現れていないが、部分的には静かに、かつ激しく闘われている。

この闘いの結果はまずはロシアやフランス以外では明らかである。フランスでは諸事情からユダヤ人が有利であったし、フランスの国民的国粋主義とは利益共同体を結んでいる。以来、

ユダヤの株式取引所とフランスの軍部とは同盟関係にある。

この戦いはイギリスではまだ決着がついていない。この国ではユダヤの侵入はいつも古きブリテンの伝統と相容(あいい)れない。アングロサクソンの本能は鋭く活発なので、ユダヤ人の完全勝利はあり得ない。ある部分ユダヤ人はその利益をイギリスの利益に順応させざるを得ない。

イギリスでユダヤ人が勝てば、イギリス人の利益は後退するだろう。その事情は、ドイツの利益によってではなく、ユダヤの利益によって決定されている現在のドイツを見ればよく分かる。それに対してブリテンが勝てば、ドイツに対するイギリスの態度が変わるかもしれない。

ユダヤ人が優位に立とうとする闘いの結果はイタリアにおいても明白である。イタリアにおいてはファシズムの勝利によってイタリア民族が勝ちをおさめた。今日、イタリアではユダヤ人がファシズムに順応しようとするだろうが、イタリア以外の国での対ファシズム方針がファシズムに対するユダヤ人の内的理解を露見させている。ファシズム部隊がローマ進軍を開始したあの記念すべき日以来、イタリアの運命にとってはイタリア独自の国家利益が規準であり、決定的である。(6)

この理由により、今日のイタリアほどドイツの同盟国にふさわしい国はない。われわれのいわゆる民族的諸団体が、今日の時点で国民的に統治されている唯一の国家を拒否し、純粋ドイツ民族派(7)と称しながらユダヤ人と組んで世界同盟に加わろうとしているのは、ただ彼らの底知

れない愚昧さと陰険きわまる卑劣さを示しているだけだ。幸運にも、これらの愚かな連中の時代はドイツで出番を失った。[8] それに伴って、ドイツ民族という概念は卑小で哀れなクズどもと結び付けられて論じられる事態から解放された。これによってこの概念は永遠の勝利を手にするだろう。[9]

# 訳注

## 序言

（1）十四頁の「一九二六年、その当時の南ティロール問題のパンフレットを印刷」と、十五頁の「ここ二年の間」という文章から、W版では「この書類が成立した年が一九二八年であるとの証拠」だという。これは正しい。

## 第一章

（1）ヴァインベルクは、ヒトラーが戦争中もこの「損失の数学」を擁護していたと述べ、「ロシア攻撃のさいに自給自足がもはやできないので、別の道をとらざるを得ない。持っていないものは略奪しなければならない。そのために必要な人数は、その物質を作るための合成工場の運営に必要な人数ほどはかからないだろう」と言ったと、ニュルンベルク調書を引用している。

（2）ヴァインベルクは、この典型的なヒトラー流の文章を読まされたおかげで、誰一人この

文章の信憑性を疑うことはなかった、と述べている。

（3）「死なせてもかまわない（man darf nur manchesmal Menschen sterben lassen）」は最初は darf が mus と記されていた。この訂正は本原稿でヒトラーが自ら手書きで修正した唯一の箇所である。筆記体のドイツ文字はあまりうまくない。

第二章

（1）この民族扶養（Volksernährung）という単語が民族人口増加（Volksvermehrung）の誤りであると、ヴァインベルクはW版で述べている。訳者も同様の見解である。

（2）草稿では〝einem unterlaufenden Wandel〟とあるのをヴァインベルクは〝einem laufenden Wandel〟としている。訳者はここではW版に従った。

（3）角川文庫版『わが闘争　上（改版）』（平成十三年、平野一郎・将積茂訳）の百七十八―百八十頁を参照されたい。

（4）前掲、角川文庫版『わが闘争　上』百八十頁以降を参照されたい。

第三章

（1）ヒトラーのいう「十一月革命」、「匕首伝説」。軍事的にでなく、銃後の裏切りによって第

一次大戦でドイツが敗れた、という伝説。
（2）「民族の持つ内的な力の第三の要素としては、民族を自己主張できるように教育することが挙げられよう」という文章が草稿版では一度タイプされた後、消されている。

第四章

（1）ヴァイマル共和制以前のドイツ帝国時代のこと。
（2）草稿では〝auch deckte〟となっているが、ここではW版の〝aufdeckte〟という単語に従った。
（3）草稿では「悪魔に魂を売ってしまった者はもう仲間を選ぶことができなくなる」という文章が消されている。
（4）七年戦争の初期、一七五七年十二月五日にプロイセン国王フリードリヒ大王が三万五千人の兵力で、シュレージエンの奪回をはかったオーストリア女帝マリーア・テレージアの六万五千人の兵力に圧勝した戦争。
（5）一七一二―八六。在位一七四〇―八六。プロイセンの開明的な君主。専制的侵略戦争をおしすすめ、プロイセン領を七割増加させた。

第五章

（1）草稿では消してあるが〝国家社会主義運動のため〟という言葉が記されている。

第六章

（1）一八七〇年七月フランスがプロイセンに宣戦布告。ナポレオン三世が捕虜となりフランスが完敗。プロイセン国王がドイツ皇帝となり、ドイツ帝国が成立する。いわゆる「普仏戦争」。

（2）オットー・エデゥアルト・レオポールト・フォン。一八一五―一八九八。プロイセン貴族の出身。一八六二年プロイセンの宰相。対オーストリア、対フランス戦争を経て、一八七一年プロイセン王を皇帝とするドイツ統一に成功。以降一八九〇年までドイツ帝国の宰相。

（3）十世紀以来仏独の争奪戦の対象となったエルザス・ロートリンゲンは一六九七年にエルザスが、一七七六年にロートリンゲンがフランス領となったが、一八七一年普仏戦争の結果エルザスの大部分とロートリンゲンの半分が、ドイツ領になったことをいう。

（4）ヴァインベルクによれば、口述筆記をさせる際、ヒトラーの頭には必要な数字が入っていなかったと思われ、この手の数字は後になってからつぎたされており、第一次世界大戦以前のドイツには三百万人をこえるポーランド人が住んでいたし、また「フランス人となっていた

エルザス・ロートリンゲン地方の人々」をヒトラーが何人と数えようとしていたのかは、想像するすべもない、と言っている。

（5）ヴァインベルクは、ここでヒトラーは後にヒムラー（Heinrich Himmler, [1900-1945] 一九四三年内相）が「ドイツ民族性確立帝国委員（Reichskommissar für die Festigung deutschen Volkstums）」として実行した政策路線をまったく明確に打ち出していると述べている。

（6）草稿では〝教授〟という言葉が一度タイプされた後、消されている。

（7）ヒトラーは、イタリアが、一八七〇年以降、イタリア人の人口が公称値で少なくとも過半数を占めているオーストリア地域の獲得を要求していた失地回復主義を指していると、ヴァインベルクは指摘している。

（8）「湿地の三角地帯」という地名はドイツ各地にあるが、ここではハンブルク、クックスハーフェンおよび芸術家村ヴォルプスヴェーデを結ぶ北海沿岸の湿地帯、つまりエルベ川とヴェーザー川河口のニーダーザクセン州東北地帯の、特に港を考えているようである。

（9）六四年はプロイセンとオーストリアがシュレスヴィッヒ＝ホルシュタインをめぐってデンマークと、六六年はプロイセンが七週間でオーストリアを降伏させた。七〇―七一年の普仏戦争は第六章訳注（1）を参照されたい。

(10) ヴァインベルクは「実際には一八九一年から一八九五年までの間に、国外移住したドイツ人の数は、四十万二千五百六十七人であった(一八七一年から一九〇〇年までには二百五十万人)」と言っている。

第七章

(1) グスタフ。一八七八―一九二九。ドイツの政治家。ヴァイマル共和国で外務大臣や宰相を歴任した。一九二六年ノーベル平和賞受賞。

(2) ビスマルクは一八六二年九月三十日のプロイセン下院直後の予算委員会で「今日の重大な問題を解決するのは演説や多数決ではなく、(……) 鉄と血によってである」と述べた。

(3) 十世紀に興ったドイツの王家。十三世紀にドイツ王、十五世紀中葉以降に神聖ローマ皇帝位を独占、十六世紀初頭にはスペイン王家をも兼ねる。十八世紀には衰退する。一八〇六年以降はオーストリアのみを支配。第一次世界大戦に敗れて退位した。

(4) ブランデンブルグ選帝侯であったが、一七〇一年プロイセン国王位、一八七一年ドイツ皇帝位を得る。第一次世界大戦に敗れて退位した。

(5) 一八六一―六六年の自由主義者との憲法闘争、一八七一―八七年のカトリック教会および中央党との文化闘争、一八七八―九〇年の社会民主党との社会主義者鎮圧法をめぐる闘争を

示す。
(6) 第六章訳注(9)を参照。ビスマルクを指す。
(7) 訳注(2)を参照。
(8) アルプス山中の峠。オーストリアとイタリアとの国境をなす。
(9) 中央党はカトリック的心情から大ドイツを主張するオーストリアに親近感を持っていた。
(10) 中央党は一八八九年ビスマルクが提案した社会主義者鎮圧法延長に反対票を投じていた。
(11) 社会民主党は全体としてみれば大ドイツ主義的であって、ドイツ・オーストリア同盟を妥当と見ていた。しかし同党の左派はその同盟への無条件的支持は保留していた。
(12) ドイツ、オーストリア、イタリア間での一八八二―一九一五年の秘密軍事同盟。三国協商(第八章訳注4を参照)と植民地をめぐり国際的対立関係にあった。しかしイタリアは一九一五年に協商側に寝返った。
(13) 一八八七年ドイツとロシアの間で結ばれた秘密の相互中立条約。バルカン半島とトルコの間の海峡に対するロシアの要求を認めてもいた。
(14) ビスマルクは一八九〇年三月十八日に退陣した。国王ヴィルヘルム二世による外交政策変更がロシアとの友好関係を阻害すると判断したのが理由である。
(15) ここにはヒトラーの浅薄な歴史知識が表れている、正確な数値はヒトラーの主張とは逆

スニア占領についてはビスマルクも了解していた。ロシアとの再保障条約締結は一八八七年である。

(16) ドイツ社会民主党はもともと反ロシア的心情に支配されていた。

(17) ボヘミア地方の地名。ドイツ名はケーニヒグレーツ。一八六六年七月オーストリア・ザクセン軍とプロイセン軍が対峙。七月三日早朝の会戦でプロイセン軍が勝利。これがプロイセン・オーストリア戦の行方を決した。

(18) 九月一日会戦が行われた。フランス皇帝ナポレオン三世が捕虜となり、フランス軍は降伏した。

(19) 一九一七年春皇帝カール一世(オーストリア皇帝・ハンガリー国王。在位一九一六―一九一八)はフランス政府に和平交渉を求め、エルザス・ロートリンゲンに対するフランスの要求を支持する用意があると表明している。

(20) 一八六七―一九一八年に存在した地域。一八六七年のオーストリア・ハンガリーの二重君主国成立後、ドナウ川の東側の小さな支流ライタ川がオーストリア領土とハンガリーの領土の境界を形成。その西側、すなわちオーストリア側の部分を非公式にツィスライタニエン(「ライタのこちら側」の意味)と呼称した。本文で「ドイツ系オーストリア」としても現れて

いる。この地域の住民は一九一八年にドイツ共和国との合併を決議した。一九一九年のサン・ジェルマン条約はこの決定を認めず、同地域内からドイツ・ベーメン、南ティロール、ケルンテンの一部、南シュタイナーマルクの一部を除いた地域でのオーストリア共和国の成立を認めた。

(21) 一八六六年四月八日プロイセンとイタリアとは反オーストリア秘密同盟を結んでいる。

(22) 一八六六年六月二十三日イタリア陸軍はクストッァで、海軍は七月二十日にリサでオーストリア軍に敗れている。

(23) 一八六六年七月二日オーストリアはイタリアとの休戦の仲介をフランスに依頼している。七月三日にケーニヒグレーツでプロイセン軍に大敗したのに伴い、この仲介は日の目を見なかった。

(24) 一八六六年の開戦前にオーストリアとフランスの間に秘密協議があり、オーストリアが勝った場合にはプロイセンのライン地方を独立国とする合意が成立していた。

(25) 訳注(17)参照。

(26) ヒトラーはこのように書いているが、正しくは「保護的武器」。一九〇八年五月七日ヴィルヘルム二世がヴィーンの会談で述べている。

(27) 一八〇九年ドイツとオーストリア・ハンガリー帝国間に締結された盟約は、その時代遅

れの心情的約束のゆえに、このように呼ばれた。英訳の注によれば、帝国宰相ベルンハルト・フォン・ビュローの一九〇九年三月二十九日の帝国議会での演説に由来する。
(28) イタリアはオスマン・トルコの弱みに乗じて、「若きトルコ」の革命に応える形で一九一一年トリポリなどを占領。翌一二年のローザンヌ和平により、この占領は了承された。
(29) フランスの出生率が低いことをいっている。
(30) ヒトラーはイタリア・トルコ戦争時ヴィーンにいた。彼が、召集に応じなかったかどで警察に追われてミュンヘンに移ったのは一九一三年五月である。『わが闘争』でのヒトラーの主張は誤っている。平野、将積訳『わが闘争　上』四百九十頁の注1を参照。
(31) 一九一三年にドイツの植民地や保護地に住んでいたドイツ人は約二十二万人といわれている。
(32) ドイツは第一次世界大戦によって（ヨーロッパ内で）約七万平方キロメートルを失っている。ヒトラーが一九一四年時の国境回復を求めていないのは、これを見てもうなずける。ヒトラーは一九二八年五月二日の演説では、一九一四年の国境はドイツの生存要求には十分ではなく、土地と領土を拡張しなければならないが、それは六万平方キロメートルの広さではない、三十万、四十万平方キロメートルの土地である、と述べている。
(33) ヒトラーが「入植者の少ない」と言うのは、「入植に合致した」、「入植後にそれまでの

居住者を追放すれば」と解するべきである。ヨーロッパ東部の農村地帯は第一次世界大戦前にすでに人口過剰であった。これは周知の事実であった。

(34) ゲオルク・フリードリヒ・フォン・ハートリンク男爵(一九一四年以降は伯爵。一八四三—一九一九)を指していると思われる。彼は一八八〇年から九〇年まではボンやミュンヘンで哲学の教授であった。中央党党首やバイエルン州首相や外務大臣を歴任し、一九一七年十一月から一八年九月まではプロイセン首相、帝国宰相を務めた。

第八章

(1) コンピエーニュはパリ近郊の古くからの町。保養地として知られている。

(2) この噂は政敵によって意図的にたびたび流されたが事実ではない。

(3) 一八七五—一九二一。中央党左派の政治家。第一次世界大戦中、休戦案を提案する。一九年から二〇年にかけて副首相や財務大臣に選任された。二一年に暗殺。

(4) 第一次世界大戦前に英、仏、露の三国間で相互に結ばれた友好関係。一八九一年成立の露仏同盟、一九〇四年の英仏協商、一九〇七年の英露協商による結合関係を総称。三国が一つの条約を結んでいたわけではない。一二年からは軍事的性格をも含んでいる。事実上は独、墺、伊の三国同盟と対決する英、露、仏の陣営構成を指す。ヒトラーはこれをドイツ封じ込め政策

と解していた。W版の注によれば、三国協商に対するこのような見解は第一次世界大戦後のドイツでは決して珍しくはなかった。

（5）一九一四年秋から約二年間、帝国政府は戦争目的について公衆の前で話題にするのを禁じた。

（6）一九一六年十一月五日オーストリア・ハンガリー帝国とドイツ帝国は、戦後ポーランドに独立王国を創設すると発表している。国王にはバイエルン、ザクセン、ヴュルテンベルクの公子たちが擬されていた。

（7）第一次世界大戦時ドイツに宣戦布告した国。

（8）オイペンとアーヘン間のドイツとベルギーの国境の村。

（9）英訳の注によれば、第一次世界大戦開始時の主要国の動員数は以下のようである。

| | 人口（単位：百万） | 軍人数 | 予備兵数 |
|---|---|---|---|
| ドイツ | 67.0 | 3,823,000 | 4,900,000 |
| オーストリア・ハンガリー | 51.3 | 2,500,000 | 3,034,000 |
| 中央諸国　計 | 118.3 | 6,323,000 | 7,934,000 |
| フランス | 39.6 | 3,580,000 | 4,980,000 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ロシア | 173.3 | 4,800,000 | 6,300,000 |
| イギリス | 45.3 | 350,000 | 1,000,000 |
| セルビア | 4.0 | 300,000 | 400,000 |
| モンテネグロ | 0.3 | 40,000 | 60,000 |
| 協商諸国　計 | 262.5 | 9,070,000 | 12,740,000 |

(10) ヴェルサイユ条約では、ドイツに徴兵制を禁止し志願制兵役を許可していた。

(11) ヴェルサイユ条約百六十条では、軍隊の役割を領土内の秩序保持、国境のとりしまりに制限していた。

(12) 一九一六年一月にイギリスは十八歳から四十一歳までの独身男性に徴兵制を導入していた。

(13) これはフランス海軍とロシア海軍を対象としていた。

(14) ヴァンサン。一八一七―一九〇〇。フランスの外交官。一八六四年から六年間駐ドイツ大使。七〇年七月のある日、スペイン王位継承に関するフランスの要求を就寝しているヴィルヘルム一世に伝えた。

(15) 第七章の訳注（17）を参照。一八六六年のプロイセンの対オーストリア戦に関する指摘。

(16) アドルフ。一八〇二―六九。フランス軍の改革を進めた。六七年軍事相。
(17) 一八六六年三月十六日オーストリア使節アリオス・フォン・カロリー伯爵に対して語っている。
(18) 日露戦争時のこと。
(19) Reichswehr ヴァイマル共和国時代に一九一九年から三五年までの間は十万人の陸軍と一万五千人の海軍がヴェルサイユ条約で定められていた。
(20) 一九二〇年のカップ一揆(いっき)や二三年十一月のミュンヘン一揆には軍人も参加していた。その理由で軍から追放された軍人もいた。ここの表現は、彼らを指している。
(21) 一八六六―一九三六。元帥。一九一九年ヴェルサイユでドイツ全権委員の軍事代表を務める。二〇―二六年ドイツ国防軍司令官。三三―三五年は蔣介石の軍事顧問を務めた。
(22) 一九二六年九月上旬プロイセンのヴィルヘルム公の軍事訓練参加を認めた。それが理由で同年十月司令官を退いた。
(23) Volksheer（国民皆兵義務による）国民軍。
(24) ここの記述をこの草稿が一九二八年に成立した一つの証明とヴァインベルクは考えている。
(25) 一八〇六年十月十四日イエナとアウエルシュテットでプロイセン軍はフランス軍に敗れ、

一八一三年二月二十六日ドイツとロシアの連合軍はライプツィヒでフランス占領軍を破った。

(26) 一九二五年十月十六日、英、仏、独など七か国がスイスのロカルノで欧州安全保障条約に仮調印した。その中にドイツの対仏、対ベルギー国境保持が含まれている。

(27) シュトレーゼマンはビスマルクの現実政治（レアル・ポリティーク）を賞賛し、自分もその政策を推進していると自分の政策を正当化していた。

(28) 草稿には「一九一一四」と書かれている。もちろん「一九一四」のタイプミスである。

(29) シュレージエンは現在のポーランド南部のオーデル川上流の地方を指す。第一次世界大戦敗北まではドイツ領であった。オーバーシュレージエンはその地方の南部を指す。

(30) 一九一九年九月十日のサン・ジェルマン条約によりブレンナー峠以南の南ティロールはイタリア所属が決められた。

(31) 一九一八年十一月のドイツ帝政崩壊、ドイツ共和国成立宣言等を指している。角川文庫版『わが闘争 上』二百九十三頁以降を参照されたい。

(32) ヴァイマル共和国への移行をもたらした社会民主党を中心とする勢力を指す。

(33) 「……」部分は草稿でも空欄である。ヒトラーは数値を入れるつもりであったと推測されている。以下同。

(34) 草稿では、ここは百二十四頁九行目である。この頁は、この行以下は空白である。W版

は、ヒトラーは前記「……」の部分に正確な数値を入れようとし、資料でその数値を確認しようと口述を一時打ち切った、と推測している。この理由に基づいてW版ではここまでを第八章とし、以下を第九章としている。本訳書では草稿で一行全体がハイフンで埋められている箇所を章の区切りと解している。百二十四頁にはそれがないので、本訳書では、ここで章は分けない。

(35) 約六六パーセントにあたる。

(36) 草稿百二十五頁の七行目はこれで中断されている。以降九行の中断がある。本訳書では一行だけ空けた。

(37) ヒトラーはここでカナダ、アメリカ合衆国、オーストラリア、南アメリカに住んでいたドイツ人を指していたようである。

(38) ヴェルサイユ条約によってドイツが放棄した土地の住民数は六百三十七万二千百七十七人、そのうちドイツ人は二百七十九万七千二十四人であった。

(39) 前注の数値によれば、約六六パーセントから約六九パーセントに高まる。

(40) ドイツ国内には外国に在住するドイツ人を文化的、政治的、経済的に支援する公的、私的団体が数多くあった。

(41) 南ティロールを指している。一九二一年の調査によれば、南ティロールには当時十九万

五千六百五十人のドイツ人が住んでいた。

(42) 一九一四年以前を指す。第一次世界大戦後約十年の間、第一次世界大戦前の時期はしばしば「平和な時期」と呼ばれた。

(43) この日にイギリスはドイツに対して宣戦布告した。

(44) 英訳の注によれば一九二七年ドイツが輸入したアメリカ合衆国製自動車の総額は約三千五百万ライヒスマルク、同時期ドイツから合衆国への自動車輸出は六十九万ライヒスマルクである。

(45) アメリカ合衆国においては一九二一年にはヨーロッパ系以外からの移住には数的制限が決められ、二四年には外国全般からの移住が制限された。

(46) 一九二〇年アメリカ合衆国の人口は一億五百七十六万五千六百五十六人、国土は九百三十三万一千七百四十九平方キロメートル。

(47) 一九二六年ロシアの人口は一億四千六百九十八万九千四百六十人、国土は二千百三十四万二千八百七十二平方キロメートル。

(48) 一九二〇年中国の人口は四億三千三百万人、国土は一千百八万一千百十一平方キロメートル。

(49) W版の注によれば、ヒトラーが考えていたのはヨーロッパの主導権獲得ではなく、他民

族の駆逐、絶滅、少なくとも奴隷化である、という。
(50) ヒトラーはここでナチに、アメリカ合衆国に対して立ち向かえる準備を課題として立てている。W版の注によれば、本書には目新しい視点はほとんど見られないのではあるが、この表明はその目新しい視点の一つである。
(51) リヒァルト・ニコラウス・フォン・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵。一八九四―一九七二。平和主義の政治家。一九二三年に汎ヨーロッパ運動を創始。二九年には汎ヨーロッパ連合代表。三八年亡命。四一年以来ニューヨーク大学で教える。四四年ヨーロッパ合衆国憲法案を発表。
(52) 英訳の注によれば、一九二一―三〇年にアメリカ合衆国への移住者は四百十万七千二百九人。五八パーセントは南欧または東欧から、二三パーセントは北欧または西欧から、一一パーセントがカナダから、ラテンアメリカからは五パーセントで、残りの三パーセントがアジアからである。英訳はこの数値を示した後に、ヒトラーの合衆国分析は信憑性に欠けるとしている。W版も、ヒトラーの人種論は恣意的であるが、特に合衆国における人種論は実態に立脚していないと注を付している。
(53) W版によれば、口述当時クーデンホーフ＝カレルギーはヴィーンに住んでいた。
(54) この文は草稿では訳のように読める。W版はここを「これは当然であり、理解できる」

と読むべきと解している。
(55) ドイツは一九二六年九月には国際連盟に参加し、常任理事国の一つとなった。
(56) 一八四八年五月、三月革命に対応するためにフランクフルト・アム・マインでドイツ統一を議題とする国民議会が開かれた。そこでは議論がまとまらず、翌年五月解散した。
(57) 一八二一年にギリシャでトルコからの独立戦争が始まり、二九年にギリシャは独立した。ドイツは独立戦争を支持していた。
(58) 一八五三—五六年にはロシアとトルコ間でのクリミヤ戦争があり、七七—七八年にも露土戦争があった。
(59) 一九一一—一二年にはイタリアがトルコのトリポリなどを侵略した(イタリア・トルコ戦争)。第七章訳注(28)を参照。
(60) ポーランドでは一八三〇—三一年および六三年にロシア支配に反対する騒動があった。その際ドイツの自由主義者のほとんどがポーランドを支持した。
(61) 十七世紀中頃から南アフリカに移住したオランダ人の子孫。オレンジ自由国、南アフリカ共和国を建国した。イギリスの植民地拡大によってそれらの国とイギリスとの間で衝突が起こった。一九〇二年イギリスがそれらの国の支配権を得た(ボーア戦争)。
(62) プロイセンのフリードリヒ大王はオーストリア、ハープスブルク家のマリーア・テレー

ジアによる王位継承を契機に一七四〇年オーストリア領シュレージエンに侵攻。そのときはシュレージエンはドイツ領となったが、以後両国はシュレージエンをめぐってたびたび戦った。
(63) アメリカ大陸ではイギリスとフランスとの間で衝突がおこっていた。それが一七五六―六三年のフレンチ・インディアン戦争となる。最終的にはイギリスが勝ち、フランスは北アメリカの植民地を失った。その中でプロイセンはイギリスと、フランスはオーストリアと同盟関係を結んだ。
(64) 一八七一年フランスに勝利したプロイセンのヴィルヘルム国王はパリ近郊のヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝の戴冠式(たいかんしき)を行った。
(65) 一八〇六年十月十四日プロイセンはイエーナとアウエルシュテットでナポレオン軍に敗れた。翌七年六月のティルジット条約でプロイセンの領土は約半分になり、さまざまな賠償を課された。
(66) カール・フォン・ウント・ツーム。一七五七―一八三一。一八〇七―〇八年は主席大臣。反フランス運動を企てたかどでドイツ追放。ロシア皇帝アレクサンドルの軍事顧問として対仏作戦を練る。一八一三年の独露同盟締結、ナポレオン敗退にも重要な役割を果たした。プロイセンの近代化に大きな役割を果たした。
(67) 一九一七年二月ドイツは無制限潜水艦戦を宣言。アメリカ合衆国は四月六日ドイツへ、

十二月七日オーストリア・ハンガリー帝国へ宣戦を布告した。

(68) W版は、ここにヒトラーの歴史解釈の恣意性を指摘している。一七六二年フリードリヒ大王を大きな窮地から救ったのはロシアのエリザヴェータ女帝の死とそれに続くプロイセンびいきのピョートル三世の継承であった。いわば、偶然の賜物(たまもの)である。一方、一九四五年四月のアメリカ大統領ルーズヴェルト死亡時にはヒトラーは、この偶然によって事態は自分に好転すると喜んだ。

(69) W版は、ヒトラーは後にはこのような考えを捨てていると注記している。ヒトラーは何年間もドイツを自分の意志に従った戦争に駆り立てていながら、自分が死ねばドイツは生き残れないだろうと考えていた。

(70) カール・フォン。一七八〇―一八三一。プロイセンの将軍。その著『戦争論』はよく知られている。『告白』は一八一二年の著作。

(71) W版では、『わが闘争』(角川文庫版『わが闘争　上』百三十三頁)の「もし政治権力のたすけによって、ある民族が滅亡に導かれるならば、そうした民族に属するものがみんな反逆することは、その時には権利であるばかりでなく義務でもある」を引用し、「ドイツにおける抵抗の動機を説明するのにヒトラーの言葉を利用する必要はないのではあるが、この主張こそヒトラー自身に向けられるべきである」と注記している。

第九章

（1）W版では、この記述を本書の口述時期を推定する材料としている。

（2）アウグスト・ヴィルヘルム・アントン・ニートハルト・フォン。一七六〇―一八三一。フォン・シュタインやシャルンホルストのもとでプロイセン軍制の近代化、国民的軍隊の創設に努力する。ワーテルローの戦いで戦功あり。

（3）ゲアハルト・ヨーハン・ダーフィト・フォン。一七五五―一八一三。プロイセンの将軍。軍内での貴族特権廃止を主張。彼の遺志で徴兵制が実現した。

（4）ゲープハルト・レーベレヒト・ブリュヒャー・フォン・ヴァールシュタット。一七四二―一八一九。プロイセンの軍人。元帥。一八一五年のワーテルローの戦いでも武勲を立てた。

（5）一八〇六年十月十四日プロイセン軍はイエーナ近郊の戦いでナポレオン率いるフランス軍に大敗した。プロイセン国王はベルリンも明け渡し、メーメルまで逃げのびた。

（6）一九二一年二月ポーランドとフランスの間で経済、軍事にわたる協定が締結された。

（7）一九二〇年にはフランスの支援のもとにチェコスロヴァキア、ルーマニア、セルビア王国、クロアチア、ユーゴスラヴィア間に「小協商」が締結されている。

（8）ヴェルサイユ条約でライン河東側五十キロメートル以内のドイツ領内は非武装地帯とさ

れていた。

（9）草稿では、ここに前置詞 auf と書かれている。この単語の使用では文意が通じない。W版は副詞 auch の聞き違いと解している。訳文はW版に従った。第四章の訳注（2）参照。

（10）ヴェルサイユ条約でドイツ軍艦の排水量や速度、ドイツ軍装備のタイプや数量を細かに決めていた。

（11）これにより口述はフランス軍のラインラント撤兵以前になされたと解される。一九三〇年三月帝国議会はヤング案を受け入れている。

（12）航空母艦はアメリカ海軍が一九一〇年に初めて実戦配備した。一九二八年にはイギリスが六隻、合衆国が四隻、フランスが三隻、日本が四隻所有していた。

（13）英訳の注によれば口述が行われた時期にドイツとソ連との協力を進める意見は産業界、軍部、外交関係者からも出されていた。

（14）アルトゥール。一七八八―一八六〇。ドイツの哲学者。

（15）W版の注では、ここにはヒトラーの歴史解釈の偏狭さが端的に表れていると指摘されている。英訳では、ソ連が第一次世界大戦や内戦の損害を回復するために外国からの投資を導入した点を注に述べている。

（16）一八七二年ベルリンで発刊。リベラルな論調でドイツを代表する新聞となる。ヴァイマ

ル共和国時代には民主党支持で知られていた。一九三九年に廃刊。

(17) フランクフルト・アム・マインで一八五六年に発刊されたリベラルな新聞。政治的には中立的な立場で知られていた。第二次世界大戦開始後廃刊。

(18) 前記新聞社二社とも絵入り新聞を発行していた。

(19) マンチェスター・ガーディアンは一九二六年十二月三日号と六日号でドイツ軍とソ連軍とが一九二一年以来有毒ガスや戦闘事態に関して秘密協力関係にあると報じた。秘密武器学校やソ連での軍需工場の存在も報じた。十二月十六日の帝国議会で取り上げられている。

(20) ここでの「白ロシア」は地名の「白ロシア（ベロロシア）」を意味しているのではない。ボルシェヴィズム（赤）と対立した勢力を指している。

(21) ここで使用されている括弧は草稿の通り。

(22) ロシアの作家ツルゲーネフが一八六一年発表の小説『父と子』で秩序や価値を否定する主人公を「ニヒリスト」と呼んで以来、この単語は広く流布した。

(23) 日露戦争の頃、独露間では何度か同盟交渉が行われた。

(24) ドイツの歴史家テオドーア・モムゼンは『ローマ史』で「ユダヤ人は世界主義と国民分解の効果的な酵母である」と述べている。

第十章

（1）草稿では、ここは bestehen「に存する」となっている。W版もそれに従っている。英訳では、ここは sehen「見る」の聞き違い、またはミスタイプと解釈している。本訳文は英訳の解釈に従った。むしろ、besehen（意味は sehen に準ずる）のミスタイプと考えた方が妥当かもしれない。

第十二章

（1）ヘルムート・フォン。一八〇〇―一八九一。プロイセンの軍人。七一年には元帥として対仏戦争を戦った。引用されている箴言（しんげん）は一八七一年の『作戦論』に見える。

（2）イギリスは二十世紀初頭エジプトやスーダンに幾つものダムを計画していた。二五年にはそのうちの一つが完成した。

（3）W版は「考えようとした」には否定詞を加えて、「考えようとしなかった」と解釈した方が妥当であると判断している。

（4）イギリスはスペインとは一五八七―一六〇四年および一六五四―五九年にわたって、オランダとは一六五二年から二十年間に三度、フランスとは一七〇二年から百年以上にわたってたびたび戦っている。そのたびに海洋国家、世界大国としての位置を確実にしていった。

（5）このスローガンは第一次世界大戦中のドイツでは封筒、ポスター、家のドア、新聞や雑誌の表紙などにあふれていた。

（6）一七四〇―四八年のオーストリア継承戦争ではイギリスとドイツは敵対同盟にいた。一七五六年のウエストミンスター条約ではドイツとイギリスは同盟関係になり、五六―六三年の七年戦争ではイギリスはドイツを支援した。

（7）ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム。一六二〇―八八。在位一六四〇―一八八。ホーエンツォレルン家の領土を拡大し、プロイセンに対するポーランドの宗主権を排除。農場領主制を採用して官僚行政を整備し、税制、軍制を整備拡充。プロイセン絶対主義の基礎を築く。

（8）ブランデンブルク侯は一六七五年艦隊を所有し、一六八三年には海外領土を得た。その後、ブランデンブルク侯の植民地貿易は減少し、十八世紀初めには艦隊も役割を果たせなくなった。

（9）一六八八―一七四〇。在位一七一三―四〇。第二代プロイセン国王。フリードリヒ大王の父。軍人王と称される。プロイセンの国家財政を健全にし、貴族の政治的関与を減らし、軍国的絶対主義国家の確立を図る。軍人王という渾名がある。

（10）十四世紀から十七世紀までリューベックを中心とする北ドイツ諸都市が結んだ同盟。北

海、バルト海における通商に大きな権益を持っていた。
(11) ヴィルヘルム二世が一八九八年九月二十三日シュテッティーンで述べた言葉。
(12) スマルクは、モルトケとビスマルクとはパリ攻撃に関して意見を異にする、と世間に広めた。それは一種の伝説として語られていた。ビスマルクとモルトケは内政上の見解を異にしていた。
(13) 一八七八年露土戦争の和平条約がトルコのサン・ステファーノで締結された。諸国はそれによるバルカンへのロシアの影響力強化を恐れた。同年のベルリン会議においてこの条約は改定された。
(14) 一九一三年の予算では、陸軍には平常用に七億七千五百万ライヒスマルク、臨時予算として五億八千万ライヒスマルク、海軍にはそれぞれ一億九千七百万ライヒスマルク、二億三千三百万ライヒスマルクが組まれている。
(15) ドイツの艦隊は一九一八年十一月の休戦合意からヴェルサイユ条約締結まで約半年の間、イギリスの海軍基地に抑留されていた。
(16) 一八九八年から一九〇一年にかけてイギリスはドイツに同盟の提案を何度かしている。
(17) 一九〇二年一月、日英同盟締結。
(18) W版は、ここを、民主主義という政治システムに関する評価と民主国家の個々の政治家

への評価をヒトラーが異にしていた特例として挙げている。
(19) 匕首伝説。第一次世界大戦でドイツが敗北したのは国内の革命騒動に原因があるとする主張。ナチがしばしば宣伝に使用した。
(20) ドイツ軍は一九一八年九十キロメートル離れた場所からパリを砲撃した。これは軍事的な効果よりも宣伝効果が大きかった。ドイツ軍は三十八センチ口径、射程百三十二キロメートルの鉄道砲を持っていた。第二次世界大戦時にドイツのロケット砲V1、V2の攻撃を受けたロンドンでは、ドイツがロケット砲V3でロンドンを攻撃するという噂が絶えなかった。
(21) W版は、ここをイギリスに対するヒトラーの政治的誤解の例としている。
(22) 第一次大戦後のドイツの賠償問題に関してアメリカのドーズを長とする国際専門家委員会が立案した賠償支払い計画。一九二四年八月に採択され、九月から実行にうつされた。三〇年一月ドーズ案に代わってヤング案が制定された。
(23) W版は、ここを口述時期がヤング案以前である根拠の一つとしている。
(24) W版はここで、第十七章を参照してもらいたい旨の注を付している。

第十三章

(1) ムッソリーニは政権をとってからドイツに外交政策での共同歩調を呼びかけたが、一九

二九年十月のシュトレーゼマンの死までは効果がなかった。シュトレーゼマンの反ファシズムの政策が対南ティロール政策にも反映している。

(2) 一八五九年にイタリア統一戦争が始まり、六一年に統一。六六年にはヴェネツィアを併合し、七〇年に法王領を領有した。

(3) 伯爵。一八一〇—六一。一八五八年ナポレオン三世と同盟し、五九年ロンバルディアをめぐるオーストリアとの戦いに勝ち、六〇—六一年にイタリア統一を達成。

(4) セルビア王国、クロアチア、スロヴェニアを意味している。

(5) 十九世紀末にはイタリアからアメリカ合衆国、アルゼンチン、ブラジルに大量の移住が行われた。一八七六—一九一四年には合衆国に八十七万人、アルゼンチンに三十七万人、ブラジルに二十五万人、中南米に九万人、総計で百五十八万人が移住している。

(6) ムッソリーニの強国政策、国家主義的拡張政策のゆえにイタリアは周辺国との外交問題をおこしている。一九二三年にはギリシャと、二四年にはセルビア王国などと、南ティロールのイタリア化ではオーストリアやドイツと、北アフリカ植民地に関してはフランスと、という具合であった。

(7) 第一次世界大戦への参加と勝利によってイタリアはアフリカや地中海に影響力を強めた。一九二八年にはソマリア、リビアなどを勢力下に置いている。

（8）ここが草稿二百三十九頁最終行である。W版によれば、ここまではオリジナルタイプ紙であり、次頁からは草稿自体が写しである。口述タイプはカーボン紙を挟んで二通（またはそれ以上）作成されていた。二百三十九頁までは一番上の原稿であり、二百四十頁以降はカーボン紙の下の写しである。本章訳注（17）、（39）を参照。

（9）資料を見る限り、ビスマルクはイタリアを同盟国として評価していない。

（10）テオバルト・フォン。一八五六—一九二一。一九〇九年プロイセン内相。一九〇九—一七年七月プロイセン首相、ドイツ帝国宰相。

（11）小協商諸国は一九二八年六月二十日にブカレストで会談を行い、オーストリアとの友好関係と経済関係の進展を求める声明を出している。オーストリア政府はドイツとの関係改善を保持する方針を強調したが、小協商の提案はオーストリア内でも大きな議論となっていた。

（12）名誉欲のゆえに罪を犯す者を指す。紀元前三五六年、有名になりたいがためにエペソスのアルテミス神殿に放火したヘロストラートスに由来する。

（13）一八八三—一九四五。イタリアの政治家。一九一九年ミラノでファシスト党を結成。「ローマ進軍」により、一九二二年首相。一九三八年軍総司令官。ファシスト独裁政権を樹立。エチオピア戦争、国際連盟脱退、日独伊三国同盟などを行う。第二次世界大戦末期四五年四月二十八日処刑された。

(14) 十八世紀初めイギリスで結成された国際主義的で自由主義的な結社。人間主義的、寛容、博愛をモットーにしている。開明的な君主として知られるフリードリヒ大王も大きな関心を寄せ、ドイツ内にも支部が作られた。ファシズムはこのような思想を持つ団体を執拗(しつよう)に批判した。

(15) 南ティロールでのイタリア化が注目され出したのは一九二二年のムッソリーニの政権奪取以降である。

(16) 一九一五年四月二十六日イタリアはイギリスと秘密条約締結。これでイタリアの権益が大きく認められた。イタリアは五月三日に三国同盟を破棄、五月二十三日にオーストリアへ宣戦を布告している。

(17) 草稿では、この辺りから二行後ろの「巧妙な管理」まで判読しがたい箇所がある。タイプするときにカーボン紙の下の紙(二枚目の紙)が折れ曲がっていて、一つの文章が二回タイプされている。タイピストは、「巧妙な管理」をタイプしたときに下の紙が折れているのに気づいて、紙を伸ばして、以降タイプを続けたと推測される。草稿で判読しがたい部分はW版に従って訳した。

(18) 一八四一―一九二九。一九〇六―〇九年フランス首相。第一次世界大戦中再び首相になる(一九一七―二〇)。一九一九年のヴェルサイユ会議では議長を務め、対ドイツ強硬策を唱えた。

(19) クレマンソーは一九一九年軍学校での演説で「われわれが手にした平和は諸君らに中欧における十年間の対立を保証しているものでもある」と述べている。

(20) 面子(メンツ)や原則に、たとえそれらに客観的正当性は見られなくても、固執する自分勝手な見解。英訳は、端的に「絶対的正義」と訳している。

(21) 一九一五年五月の段階でイタリアは八十五万の軍隊を擁していた。

(22) オーストリア・ハンガリー軍内では国籍の問題は極めて深刻であった。比較的寛容な国籍政策で、それぞれの民族からなる連隊編成も計画された。それでも軍隊からの逃亡は多かった。諸民族混交の部隊も編成されたが、逃亡は続いていた。

(23) 同盟側は民族独立の希望を与えて、軍隊を編成した。外国に住んでいるポーランド国籍の人やポーランド国籍の囚人二万五千人からなる部隊もあったし、三分の一はロシア人、三分の二は捕虜から編成されたチェコスロヴァキア部隊もあった。これらはロシア、フランス、イタリアの戦線で戦った。

(24) オーストリア・ハンガリー帝国西側（第七章訳注20のツィスライターニエン参照）の人口は一九〇〇年現在で約九百十七万人、一九一〇年には九百九十五万人であった。

(25) 第八章冒頭で言及されているロンウィーやブリエーの鉱山を指している。

(26) ケルンテンはクラーゲンフルトを州都とするオーストリア南部の州。一九一八年にケル

ンテン地域のスロヴェニア住民地区をめぐって、スロヴェニア・南スラヴ軍とオーストリア軍との間で衝突がおこった。一九一九年六月イタリア軍監督下での休戦が成立。二〇年十月に住民投票。この問題ではイタリアは終始オーストリア側に立っていた。

(27) 第八章訳注(29)および本章の訳注(62)を参照。オーバーシュレージエンでポーランド人が暴動をおこしたとき、ドイツ政府はイタリアは反暴動派であり、フランスは暴動派であると判断していた。

(28) ファスケス。古代ローマの執政官などの権威標章。一本の斧柄の周りに棒を束ねて縛り、「団結」を象徴する。ファシズムの語源。一九二六年十二月十二日のイタリア政府布告によりイタリアの国標とされた。

(29) 「唯一」はここでは理解し難い表現であるが、草稿に従った。

(30) チェコスロヴァキアには四百万のドイツ人、としているのは誇張である。誇張した数値を宣伝材料として利用している例としては本章訳注(50)を参照。英訳によれば、一九二一年にチェコスロヴァキアに住んでいたドイツ語話者は約三百二十一万人、人口の二三パーセント。ルーマニアには約七十一万人、四・六パーセント。セルビア王国、クロアチア、スロヴェニアには約五十一万人、四・三パーセントであった。

(31) 一つの州が外交権を持つのは奇妙に聞こえるし、ヴァイマル共和国ではその憲法によっ

て外交に関してはベルリン政府が全権を有していた。しかしバイエルン政府は外務省を有していて、ベルリンとシュトゥットガルトに外交代表部を開いていた。一九二〇年以降フランスはミュンヘンに全権代表を置いていた。

(32) 一七六七―一八一〇。ティロール解放を唱えた。当時の戒厳令違反を問われ、射殺された。

(33) 草稿では、「八」の次の数字が判読しがたい。二度打ちしているのである。本訳文ではW版に従って「五」とした。

(34) 草稿では数値を入れるべき箇所に(ここの数行のように、「……」として)数値を入れていない箇所がある。W版は、ここでヒトラーは口述を中断して、資料によって数値を確認した後に、次のパラグラフの口述を開始したと推測している。英訳の注によれば、一九二一年十二月の調査では、南ティロールでのドイツ語話者は十九万三千二百七十一人、イタリア語話者は二万七千四十八人であった。

(35) 主として南ティロール(ラエティア)で用いられるロマン系民族のレト・ロマンス語の方言。

(36) ヒトラーは一九四三年には南ティロールと北イタリアをドイツに併合しようとした。そのときの理屈は、ここで述べている論理とは別である。状況も異なっていたが、口述の時期に

は隠されていた目標が暴露されたというべきであろう。

(37) 英訳の注によれば、八千六百九十一平方キロメートルである。

(38) ラディン語を母語とする人。本章の訳注(35)を参照。

(39) 草稿の二百六十八頁二十八行目は「現在の」で終わっている。二十九行目は「現在の」の次に来ているはずの名詞を説明する文章である。カーボン紙が折れ曲がっていて、カーボン紙の下の紙には二十八行目最後の名詞がタイプされていないのである。W版は、その名詞を「国境」と推測している。訳文はW版に従った。

(40) 英訳の注によれば、ドイツ以外でヨーロッパ内諸国に住んでいるドイツ語話者は約二千万人。そのうちオーストリアとスイスに約九百十六万人である。

(41) この比較はヒトラーのいい加減な思い付きではない。後にナチは、一九三九年に占領したポーランドには「編入東地域での民族所属問題上級検証法廷」を設置している。

(42) ヒトラーの考えは、ドイツはイタリアと手を組んでフランスに勝ち、背後からの攻撃の可能性をなくし、安心して東方への攻撃に移りたいというところにある。

(43) ヒトラーの対南ティロール対応に関しては社会民主党からも保守系右派の一部からも批判がなされていた。特に、ナチにはイタリアから金が流れている、という批判が強かった。

(44) 一九一四年八月一日に第一次世界大戦が始まる。ヒトラーは八月十六日にバイエルン歩

兵連隊に入隊し、一四年十月から一八年十月まで西部戦線にいた。一八年十一月第一次世界大戦終結。なおヒトラーは二〇年三月まで軍隊にいた。

(45) 草稿には、本来であれば大文字で書き始めなければならない単語を小文字で書き始めている場合がしばしばある。草稿では、この単語は「彼らの（沈黙ゆえに）」と解される。W版でも「彼らの（沈黙ゆえに）」と書いてある。これはW版の誤植かもしれない。英訳は「あなたたちの（沈黙ゆえに）」と解している。訳文は英訳に従った。

(46) パリ西部の町サン・ジェルマン・アン・レで一九一九年九月三国協商諸国とオーストリアが参加した和平会議が行われた。この会議はヴェルサイユ条約と密接に関係している。この会議でオーストリアとハンガリーの分離が決定され、オーストリアとドイツの合併が否定され、チェコ、ポーランド、ユーゴスラヴィアなどの独立が認められた。

(47) パリ近郊の町ヴェルサイユで一九一九年六月第一次世界大戦敗戦国ドイツと連合国の間で講和条約が締結された。

(48) ムッソリーニを指している。

(49) 「ジョニーが演奏する」はエルンスト・クレネーク（一九〇〇―九一。ヴィーンで作曲活動をした。三八年にはアメリカ合衆国に亡命）のオペラ。一九二七年に初演。それから数年の間によく上演された。「主人公が黒人であり、音楽がジャズの要素を含んでいる」として国

家社会主義者や他の民族グループが抗議を繰り返した。ナチ党はヴィーン、ミュンヘン、ブレスラウでの公演に対して、繰り返しデモをしている。

(50) ヒトラーは一九二八年七月十三日の演説で本文と同じ表現で、同じ内容を述べている。これらを考慮して口述の時期は二八年六月の末から七月の初めと推定されている。なお、死者のうち少なくとも五名は同年十一月までに生き返っている。一九二八年十一月九日のフェルキッシャー・ベオバハターでは自称政敵に殺された国家社会主義者のリストが公表されているが、一九二八年に関しては四名の氏名のみ記載されている。扇動家はいい加減な数値を述べ、宣伝に利用するのである。

(51) 一九一八年六月二十七日ドイツのUボートがイギリスの救護艇を沈没させ、その証言者を残さないために救命艇をも沈めた。連合軍は、これを戦争犯罪として告発し、一九二一年に判決が出ている。

(52) 一九二〇—二一年にかけて、オーバーシュレージエン自衛軍メンバーによる政治暗殺事件があった。二〇年ミュンヘンのナチ突撃隊員がポンメルンの政治暗殺に連座して告訴されている。

(53) ヒトラーがここで称賛している仲間の中には、ルドルフ・ヘスも含まれている。

(54) ヴァイマル憲法では、民主憲法を侵害しない限り、個人の政治的諸権利を保障していた。

共和国防衛に関する法規も憲法の趣旨を守っていた。しかし、二〇年代後半になると、責任ある国家組織から、憲法をすすんで守る意志が次第に消えていった。

(55) 一八六八―一九二三。急進的反ユダヤ主義的政治著作家。二一―二三年はフェルキッシャー・ベオバハターの編集長を務めた。二三年十一月八日ヒトラーがミュンヘンで一揆を起こし、失敗している。これに関係したとしてエッカルトは十一月十五日に逮捕される。二十二日に心臓病治療のための釈放請求。病気の原因はアルコール中毒とされている。十二月二十日に釈放。二十六日死亡。『わが闘争　下』の本文の最後にくわしくヒトラーが書いている。

(56) ここの訳は草稿の通りである。英訳の注にある日付けを考えると、「二日前」は誤りである。ヒトラーが自分の主張に緊迫性を持たせるために行った意識的、または無意識的数値操作かもしれない。

(57) バイエルン政府はヒトラーを一九二四年に、好ましからざる外国人としてバイエルンからオーストリアへ追放しようとした。オーストリア政府は、ヒトラーはドイツ軍従軍によりオーストリア国籍を失っていると主張。二五年四月ヒトラーはオーストリア政府に国籍放棄を申請。オーストリア政府はそれを認め、オーストリアへの入国禁止を通告した。ヒトラーは第一次大戦中の一九一四年十二月、一八年五月および八月に鉄十字章などの勲章を受けている。

(58) 国家社会主義者は刑法百六十六条、百八十五条などにより名誉毀損、冒瀆、宗教侮辱な

どの罪に問われていた。

(59) ポーランド語でビドゴシュチ。

(60) 一九二八年五月上旬に行われている。これは一般紙でも報じられていた。ヒトラーは、ドイツの新聞は無視していると言って、この問題を宣伝材料にしたのである。

(61) 第一次世界大戦後エルザス・ロートリンゲンから約十五万人のドイツ人がドイツに追放されたり、移住した。

(62) ポーランドにおける当時のドイツ系住民の状況については不明な点が多い。英訳の注によれば当時の事件での犠牲者がここでいわれているほど多くはない点は確認されている。一九一八年十二月以来ポズナニおよびオーバーシュレージエンでポーランド人の騒動があった。ドイツ人側とポーランド人側の双方合わせて数百名の戦闘員が死亡したといわれている。二七年五月までドイツ系住民に対する小規模な、個人的な攻撃が見られた。

(63) ドイツ語は Konzentrationslager。字義は「集中、または集約収容所」。ヒトラーはすでに一九二〇年九月にボーア戦争中のイギリス軍の concentration camp について述べており、二一年三月には、ドイツにいるユダヤ人はここに「収容」すべきであると要求している。ナチが政権を奪取する一九三三年以前でも、ナチは強制収容所の設置を公言していた。

(64) 英訳の注によれば、一九二七年の自殺者は一万五千九百七十四人という。

(65) 統計資料によれば、以前からドイツでの自殺率は世界でも高い方であり、一九二〇年代には一年に一万三千人から一万六千人の間であるが、一九三三年には率はさらに高くなっているという。W版はこれらを示しながら、人々がヒトラーの時代を信頼していたとはいえない、と注を付している。

(66) 黒と黄色はオーストリア王家のシンボルである。軍服には黄色の地に浮かんだ黒色の鷲があしらわれている。

(67) ポズナニ地方の州都。一九二〇年まではドイツ領であった。

(68) 草稿の通り訳した。W版は、ここの否定詞に［ママ］を付している。草稿における否定詞は前後の文脈とは平仄（ひょうそく）が合わないのである。

(69) 英訳の注によれば、一九二一年十二月イタリアの人口は三千八百七十一万五百七十六人であるという。

(70) 一九一九年に祖国同盟から分かれて、二八年頃は外国在住ドイツ人協会のバイエルン支部をかねていた。ブレンナー峠国境の見直し、南ティロールのドイツ所属を主張し、南ティロールに関しては最も急進的な運動をしていた。

(71) ヒトラーはムッソリーニに対して自己宣伝を行っているのである。

(72) 英訳の注によれば第一次世界大戦後、イタリアはドイツによるドイツ系オーストリア併

合を絶対的に拒否していたわけではない。イタリアにとって重要だったのはブレンナー峠を国境として決定できるかどうかであった。イタリアはパリにおける和平交渉では最終的には連合軍の意見を認めてドイツのドイツ系オーストリア併合を認めなかった。
(73) この計画は一九二八年に明らかにされている。
(74) 一九二三年オーストリアの領土は八万三千八百三十八平方キロメートル、人口は六百五十三万四千四百八十一人であった。
(75) 草稿は訳の通りであるが、W版は、ここに「非」と否定詞を入れた方が妥当であると解釈している。
(76) W版の注によれば、ここにはイタリアの態度に対するヒトラーの読み違えが明らかであるという。一九三四年の併合問題ではオーストリア内でのナチのテロが原因でドイツとイタリアは対立関係に入る。

第十四章
(1) ここでヒトラーは「序言」と書いているが、ヒトラーの思い違いである。内容から見ると、第八章の一部を指している。
(2) ウィルソン第二十八代アメリカ合衆国大統領は一九一七年一月二十二日に上院での演説

で「彼らがまず求めているのは、勝利なき平和であるに違いない」と述べている。
（3）一九一八年一月二十八日から二月四日にかけてベルリンなどの都市でストライキがあった。
（4）一九一九年六月にヴェルサイユで対独講和条約、九月にサン・ジェルマン・アン・レで対オーストリア講和条約が締結されている。
（5）ウィリアム・ジェイムス。一八六七—一九二八。一九一七年アメリカ合衆国秘密検察部部長。一九—二一年法務省調査局局長。
（6）W版によればフリンの「盗聴電話を暴露する」が一九二八年六月二日のリバティー誌十九—二十二頁に掲載されている。第一次世界大戦中ワシントンのドイツ大使館をアメリカのシークレット・サーヴィス（大統領警護を任務とする警察の小さな部署であり、諜報機関ではない）が盗聴した様子を報告している。会話の多くはドイツ外交官の過誤よりも多数のアメリカ人女性の愚かさに関する報告である。ドイツの外交官は政治問題に関しては極めて控えめな発言しかしていない。
（7）草稿三百六頁は十一行目のこの文で終わっている。十二行以降は空白である。本訳書では一行だけ空けてある。W版は、ヒトラーがここに挿入予定であったと推測される記事を載せている。それを以下に訳出する。

この記事および言及されている人物について、ここでまとめて簡単に説明しておく。一部に英訳の注を参照した。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・エルフェン：一九一九―四一年にシンシナティ自由新聞（フライエ・プレッセ）を創刊。二三年以降ミュンヘン報知の特約記者でもあった。

ヨーハン・ハインリヒ・フォン・ベルンシュトルフ伯爵：一八六二―一九三九。一九〇八―一七年駐米大使。ドイツによる無制限Uボート作戦に反対した。一七―一八年トルコ大使。二一―二八年民主党選出国会議員。二二年国際連盟ドイツ代表。二二―三一年国際連盟軍縮委員会ドイツ代表。三三年スイスに亡命。

バーナード・バルーク：一八七〇―一九六五。一九一六年国家防衛委員会委員。一七年資源委員会委員長。一八年軍需産業委員会委員長。一九年ヴェルサイユ会議アメリカ代表団参加。

ハリー・エルマー・バーンズ：一八八九―一九六八。歴史学者。大学教授。

ロバート・ランシング：一八六四―一九二八。一九一五年国務長官ブライアンが対独方針で大統領ウィルソンと衝突して退職した後国務長官に就任。二〇年まで務めた。

ペルシア号沈没事件　一九一五年十二月三十日にギリシャのクレータ島南方で軽武装のイギリス郵便船ペルシア号がドイツのUボートに攻撃され、沈没。三百三十四名が死亡した。うち二名がアメリカ市民であった。この年の五月にUボートがイギリス船ルシタニア号を沈没させ

百名以上のアメリカ市民が犠牲になっていた。ペルシア号沈没によってドイツとアメリカ合衆国の関係は一層緊張の度を高めた。

トーマス・プライオア・ゴア：一八七〇—一九四九。長期にわたって上院議員であった。ドイツのUボートによる中立国船への攻撃を回避するために、一九一六年二月アメリカ市民に対して武装船での旅行を禁止する法案を提出した。

エドワード・マンデル・ハウス：一八五八—一九三八。一九一四年以来ウィルソン大統領の外交顧問。ヨーロッパ特使、ヴェルサイユ会議での代表などを務めた。

ボリス・バクマテフ：一八八〇—一九五一。ロシアで工学教授であったが、対アメリカ貿易委員会議長、駐米大使などを務めた。

一九二八年六月二十六日

アメリカ参戦の事情——フリンが外交機密を公表

ミュンヘン最新報知（ノイエステ・ナハリヒテン）特約者　F・W・エルフェン執筆　アメリカ、シンシナティ、六月中旬。

こちらでよく読まれている週刊誌「リバティー」でウィリアム・J・フリンがその戦争回想録の一部を公表した。フリンは戦争中合衆国の秘密機関長官を務めていた。この機関はアメリ

カ全土を対象とし、巧妙に組織化されている。平時には大統領の個人的警護が主任務であるが、首都での警護が必要となれば、または警護が必要と思われる事態となれば、それに必要な任務も行う。この機関は、国家および国家の要路者に敵対する政治行動に参加した疑いのある全ての人物を監視する。戦時中の主要任務は、多少とも公に戦争反対者として知られた者、またはウィルソンの戦争政策に同意していないと疑われた者に対する監視であった。ドイツ人もその特別任務の対象であった。この秘密機関は至るところにワナを仕掛けており、当時は多くの人がそれにかかった。

しかしフリンの回想録によれば、この秘密機関にはすでに参戦前から重要な任務が課せられていた。宣戦布告の二年前、一九一五年に有能な電話専門家がワシントンに呼ばれた。彼は、ドイツ大使館とオーストリア大使館に引かれている電話線に細工をして、秘密機関の係員が大使館員および使用人の公的通知や会話を盗聴できるようにする任務を与えられた。一つの部屋があてがわれ、そこでは会話を一つも逃さないように全ての電話線をうまく連結させてある。そこには秘密機関員が二十四時間つめていて、盗聴した会話を横にいる速記者に口述した。週刊誌「リバティー」所載論文の筆者である秘密機関長官は二十四時間以内に交わされた会話の速記録を毎夕受け取っていた。重要事項は全てその日のうちに国務省およびウィルソン大統領に伝えられた。

時期に注意していただきたい。この設備が設置されたのは一九一五年初頭、当時合衆国はドイツともオーストリア・ハンガリー帝国とも友好関係を保ち、ウィルソンはドイツに対して敵意は抱いていないと飽きるほど表明していた。当時のワシントンのドイツ大使館で駐米ドイツ大使ベルンシュトルフ伯爵は機会をとらえてはウィルソンのドイツおよびドイツ民族に対する友情と友誼（ゆうぎ）に敬意を払い続けていたのである。ところがその頃ウィルソンは親しいバルークに、戦争に向けて産業界を動員する手はずをそろそろ開始するよう指示していた。アメリカの歴史家ハリー・エルマー・バーンズが大戦開始に関する著作で詳論しているように、ほぼ同じ頃ウィルソンは参戦をほとんど決断していたが、戦争計画賛成への世論誘導を図って詳細は発表していなかった。

ウィルソンはドイツのUボート攻撃に対抗していやいやながら参戦せざるを得なかった、とまことしやかな噂が流れているが、フリンの報告はそれを根底から覆している。ドイツ大使館に引かれている電話線への盗聴装置接続もウィルソンの承認のもとに行われた。それもフリンの報告書に記されている。さらに彼は、このようにして収集したドイツ資料は最終的な決裂に本質的な役割を果たしたし、この資料はウィルソンが長年計画していた戦争への世論誘導の手段として極めて有効に働いたと証明できる、と言う。実際この資料を読めば、まったくその通りである。ドイツは当時信じられないくらい無能で、信じられないくらい面汚しの代表をワシ

ントンに送っている、と常々言われていたのであるが、報告書は、それを全面的に裏付けている。ある箇所でフリンが、彼に毎日届けられた速記録には離婚弁護士を数か月間雇うに足りる十分な材料が含まれていた、と書いていると知れば、報告の内容は大まかには理解されるであろう。

秘密機関はワシントンとニューヨークに女性要員を抱えており、彼女たちは重要事態になるとベルンシュトルフ大使を含むドイツ大使館員を探る任務を持っていた。そのうちの一人がワシントンに男性と女性が会える高級あいまい宿を持っており、そこにはランシング国務長官も、何かニュースはないかねと、時々現れていた。一九一六年一月、「ペルシア」号沈没が首都でも知られていて、国務省にもホワイトハウスにも影を落としていた。まことに冷静な対応が求められていたにもかかわらず、その時期にベルンシュトルフはそこに順々に五名の女性を呼び、お互いに甘い挨拶(あいさつ)を交わしていた。

一人の女性は、ベルンシュトルフは愛の達人(グレイト・ラヴァー)で、百歳になっても変わらないと思うわ、などとベルンシュトルフをもちあげている。他の大使館員も似たり寄ったりであった。フリンが大使館内では最良のスタッフと評価している一人の外交官はニューヨークに女友達がいた。彼女はすでに結婚していた。彼は彼女を時折訪問していた。しかし電話は毎日しており、ドイツ帝国に毎日二十ドルの損失を与え続けた。彼は彼女に出来事を全てしゃべり、彼女はことがうま

く運ぶように手をうっている。電話ではウィルソン夫妻に関する下品な話題も交わされていた。これではドイツに対するホワイトハウスの雰囲気は友好的にはならない。それは容易に推測される。

一九一六年三月初旬の会話から、ドイツ大使館はどれほどまでに世情に疎くて、子どもじみた計画を立てていたのかが分かる。当時の議会ではゴア上院議員が、アメリカ国民に武装商船使用を警告する決議案を提出していた。ウィルソン大統領はその決議案に強く反対していた。彼にとっては、反ドイツ感情を煽るためにアメリカ人の命が失われる必要があった。ドイツ大使館では、決議案の見通しはよくないと知っていたので、議会を買収する計画を本気で考えた。だが、そのための金を集める算段がなかなか立てられなかった。三月三日に上院はゴア提案を一時的に棚上げする旨の決定をした。しかし、議会での議決は数日後に行われる。まず議会を買収する計画が続行された。しかし少なくともこの場合にはベルンシュトルフは理性的な判断をした。計画から手を引いたのである。

健全なドイツ人の血を持っている人間がフリンの報告を読めば、激しい怒りの感情で血が騒ぐに違いない。しかしウィルソンの狡猾な政治に関してばかりではなく、特にドイツ大使館がその政策に手を貸している信じがたい愚かさにである。ウィルソンは日に日にベルンシュトルフを丸め込んでいくのである。一九一六年五月、ウィルソンの腹心ハウス陸軍大佐がヨーロッ

パ歴訪から帰国したとき、ベルンシュトルフは彼を訪問するためにニューヨークに赴いた。ウィルソンはベルンシュトルフに対してはこの会見に同意しながら、ハウスには伯爵とは会わないように、どんなことがあっても彼を避けるように指示していた。彼はそれに忠実に従った。ベルンシュトルフはいたずらにニューヨークでハウスに会える日を待った。その際に彼は近くの海水浴場に行き、そこで海水着のまま二人の女性と極めて親密な様子の写真を撮らせた。この写真はフリンの報告に載っている。当時この写真はロシア大使バクマテフの手に入れるところとなり、拡大されてロンドンに送られた。「堂々たる大使」のタイトルで新聞に掲載され、連合軍のプロパガンダに格好の材料を与えた。

（8）前注に訳出したのは一九二八年六月二十六日の記事である。草稿には「本日」とあるので、この口述は六月二十六日か二十七日に行われたように見える。しかし実際は六月末から七月初めにかけて行われている。この「本日」は言葉通りには解されない。

（9）当時の国際連盟ドイツ代表はベルンシュトルフであった。

第十五章

（1）ヒトラーはここに示されている立場と自分の領土政策に基づいて、第二次世界大戦の地中海周辺戦闘を当初はまったくムッソリーニの手にまかせていた。

第十六章

（1）英訳の注によれば、二〇年代のフランスとスペインはむしろ協力関係にあった。

第十七章

（1）W版は、以下のユダヤ人論を本書の重要なる部分と位置づけている。

（2）W版によれば、ここの記述は周知の事実に反している。さらに第一次世界大戦ではユダヤ人は、ロシアにおけるユダヤ人迫害への反感ゆえに、むしろ親ドイツ的であったという。

（3）ロシアが第一次世界大戦、内戦、反乱、食料不足、病気でどれくらいの人数を失ったかは正確には不明であるが、九百万人くらいであるといわれている。第一次世界大戦で約二百万人、内戦で三十万人から百万人、亡命者も百万人に上ると推測されている。

（4）第一次世界大戦でドイツ人の戦死者は約百八十八万人、負傷者は四百二十四万人であった。

（5）一九一七年十二月ロシア政府は結婚（式）は宗教によらないで行う決定を出し、一八年四月には婚姻法を定めた。これは婚姻上の両性の平等を定めている。二七年一月には内縁関係を認め、離婚条件も緩和した。

(6) イタリアのファシズムは反ユダヤ主義ではなかった。そのように振る舞う場合もあったが、それは人種的観点からではなく、政治的な判断であった。この点ではドイツの国家社会主義とは異なっていた。ムッソリーニはイタリアのユダヤ人とは良好な関係にあり、ナチの反ユダヤ主義を非科学的で非合理的であると主張していた。

(7) 南ティロール問題でのヒトラーの発言は侮辱罪にあたるとしてヒトラーを告訴していたグループの一人フォン・グレーフェはドイツ民族党の国会議員であった。

(8) 前注のドイツ民族党は一九二八年五月の総選挙では一人も当選しなかった。

(9) これで草稿の三百二十四頁は終わっている。最終行にハイフン列がある。本文の記述から見ても、これで口述は終了していると推測される。

# あとがき

## 一　ヒトラーの著書、ヒトラーに関する研究書について

ヒトラーに関する図書は、全世界で三千点以上出版されているといわれているが、その中でヒトラー自身が語り、また書いた書物は（ミュンヘンで発行されていたナチの機関紙フェルキッシャー・ベオバハターに書いたものを除けば）言うまでもなくあの二巻本の『わが闘争　一九二五～二七年』（平野一郎・将積茂訳、角川文庫）が中心をなし、演説等に関しては戦後に出版されたドマルス編『ヒトラー　演説と布告』（Domarus,M.［Hg.］:Hitler, Reden und Proklamationen,1923-1945. 4 Bde.München 1965. Neuausgabe 1988.）、フォルンハルス編『ヒトラー　演説・文書・指令』（Vollnhals,C.［Hg.］:Reden Schriften Anordnungen, Februar 1925 bis 1933.6 Bde. München・London・New York 1992-1996.）がその代表的なものである。これらの書物以外にも邦訳されている数点をあげればH・ラウシュニング編『ヒトラーとの対話』（一九七二年、学芸書林）、I・ブレダウ編『ヒットラーはこう語った』（一九七

六年、原書房)、E・カリック編『ヒトラーは語る――一九三一年の秘密会談の記録』(一九七七年、中央公論社)、M・ボアマン(記録者)『ヒトラーの遺言』(一九九一年、原書房)、H・R・トレヴァー=ローパー(解説者)『ヒトラーのテーブル・トーク一九四一―一九四四年上下』(一九九四年、三交社)等がある。

ところがここに一つ問題がある。『わが闘争』や前記の演説・布告・指令等を除いた他のヒトラーの対話や演説などが、真にヒトラーのものであるかどうか、という点である。かつて当時の西ドイツの雑誌に掲載された『ヒトラーの日記』が偽物であることが分かり、首謀者が有罪判決を受けたことがある。一九八五年九月十日の朝日新聞の夕刊は、前記のラウシュニング編の『ヒトラーとの対話』が一スイス人教師によって、当の本人の手紙など多くの証拠をもとに、贋作(がんさく)だったことを詳細に立証した、とツァイト紙が一頁全部をあてて紹介している、との記事を載せている。フランクフルター・アルゲマイネ紙の記者J・C・フェストが書いた『ヒトラー　上下』(J.C.Fest:Hitler,1973, 河出書房新社)は十七か国で翻訳され西ドイツで驚異的ベストセラーになったが、フェストはこの『ヒトラーとの対話』を重要な資料として五十箇所以上も引用している。このようにヒトラーに関する文書は、それが本物であるか贋物であるか、十二分に注意する必要がある。しからばこのアメリカの国立公文書館に所蔵されている「ヒトラー」の「草稿」の信憑性(しんぴょうせい)はどうであろうか。

わが国ではナチ研究書は多く出されているが、ヒトラー研究書としては、ドイツ現代史、特にヒトラー、ナチ研究の第一人者である村瀬興雄氏が、一九六二年七月末に出版した『ヒトラー　ナチズムの誕生』（誠文堂新光社）でヴァインベルクの『第二の書』の内容を紹介、批判しているに過ぎない。他のナチ研究者はほとんどヒトラーの草稿はもちろん『第二の書』にも触れていない。しかし外国、とりわけドイツでは一九七〇年代に多くのヒトラー研究書が出され、そこで「ヒトラーの草稿」でなく『第二の書』に触れている。いくつかの例を挙げておこう。

1. Langer,Walter C.:The Mind of Adolf Hitler : The Secret Wartime Report,1972（ランガー著・ガース暢子訳『ヒトラーの心――米国戦時秘密報告』平凡社、一九七四年）。この書では「あとがき」の注23番に"G.L.Weinberg 編 Hitlers Zweites Buch:Ein Dokument aus dem Jahr 1928, 英訳 Hitler's Secret Book（New York,1962）とあるが、この英訳本については訳者序を参考にしていただきたい。

2. Toland,John:Adolf Hitler,1976（トーランド著・永井淳訳『アドルフ・ヒトラー』集英社、一九七九年）。トーランドは二頁半にわたって『第二の書』の内容を説明し次のように出版禁止理由を推測している。「ヒトラー自身が『ヒトラーの秘密の書』として知られるようになり、三十二年後にはじめて世に現れたこの本の出版を禁じた。おそらく支持者たちにはそこに盛りこまれた思想があまりにも深遠すぎることを、そしてより知的な人々にはその真意が

あまりにも見え透いていることを恐れたのかもしれない。あるいはその用語の裏に隠された最終的な大量殺戮計画が暴露されることを望まなかったのかもしれない」と（訳書：上巻二百六十四頁）。

3．Trevor-Roper,H.R.:Hitler's Table Talk 1941-1944.London, 1953（トレヴァー＝ローパー著・吉田八岑監訳『ヒトラーのテーブル・トーク』一九四一—一九四四 上巻）ではユダヤ人と日本人を比較した箇所について「一九二五年『わが闘争』（それに他の未発表の論文に書いたのだが」という一節があるに過ぎない。

4．Maser,W.:Die Frühgeschichte der NSDAP,Hitlers Weg bis 1924,Frankfurt am Main 1965（マーザー著・村瀬興雄、栗原優訳『ヒトラー』紀伊國屋書店、一九六九年）とFest,J.C.:Hitler 2 Bde.1973（フェスト著・赤羽龍夫他訳『ヒトラー 上下』河出書房新社、一九七五年）でも『第二の書』からの引用または文献名を挙げているに過ぎない。

二　ヴァインベルクと『第二の書』出版関係

アメリカへ運ばれたヒトラーの草稿がワシントンの国立公文書館にあることが明確になった経過は、前記のヴァインベルクの『第二の書』の中で、この書の発行当時ドイツのテュービン

ゲンにいたロートフェルス（Hans Rothfels）とシカゴ大学で彼の教え子だったヴァインベルクが、詳しく述べているので、二人の説を簡明にまとめて述べよう。

## ー ヴァインベルクの作業

ロートフェルスによれば『わが闘争』の補遺で、外交問題をヒトラーが書いていたことは、まず一九五一年五月に作家のエーリヒ・ラウアー（Erich Lauer）によって現代史研究所に通知されたので、同年六月合衆国にいたヘルマン・マウ博士（Dr.Hermann Mau）が調査したが成果はなく、その後の調査でも見るべき結果は出なかった。その後、ナチの中央出版局の前身たるフランツ・エーア出版社で社主であったマックス・アマン（Max Amann）の協力者であったベルク（訳者序で前述）が、一九五八年十二月十二日の書簡で、多くのことを述べたが、その中に「ヒトラーが、出版社主たるマックス・アマンに直接原稿を口述し、タイプさせたのを正当と思わせるに足る主張」が述べられていた。同年秋、ワシントンでドイツ資料の跡を詳しく調べてほしいとの現代史研究所からの依頼を、彼はヴァインベルク博士と相談し、ヴァインベルクに委ねた。というのはヴァインベルクは国家社会主義の外交政策に関する重要な著作を発表しており、「押収されたドイツ文書ガイド」を作成した実績があり、またヴァージニア州アレクサンドリアの記録センターにあるドイツの書類をアメリカ歴史協会の委託でマイクロ

フィルム化する作業の責任者で、したがって国家社会主義時代の歴史に関するドイツの書類の尋常ならざる詳細な知識を獲得し得ていたからである。ヴァインベルクは未知の、失われたと思われていた原稿を調査し、発見し、さらに多くの指標からその草稿の信憑性を明らかにし、文献学的に確信がもてる結論に到達したので、草稿を編集して『現代史資料と報告（Quellen und Darstellungen zur Zeitgeschichte,Bd.7)』として出版した。

2　ヨーゼフ・ベルクの書簡内容

ヴァインベルクは、ヨーゼフ・ベルクの書簡の中でヒトラーがこの草稿をマックス・アマンに口述し、アマンがタイプした、と記している。ロートフェルスによれば、アマンは熟練した速記者でまたタイピストであるが、草稿を見る限り、聞き間違いによるタイプミス、綴りミスが頻出しており、句点の誤用、正書法に関する誤りなどは、これが草稿そのままで、『わが闘争』発行時や発行後のように修正がなされていないことを示している。さらに変母音（ウムラウト）とエスツェット（$\beta$）が大変読みにくい点は、タイプライティングの技術よりも、使用したタイプライター機器そのものに弱点があったように思われる。アマンが気づいた単語や文章の誤りは、訳者序に記したように、はっきりとタイプで単語や文章の横線上打ちによって消され、正しい単語や文章に訂正されている。

ベルクは一九三五年一月にエーア出版社で書籍出版部を任され、それとともに防空壕に保管されていたこの草稿をも引き継いだ。またこの文書には出版社での草稿以外にコピーが一部あって、それはオーバーザルツベルクの別荘にあったといわれているが、その行方は今日まで分からない、とヴァインベルクは述べている。さらにヴァインベルクは『テーブル・トーク』の一九四二年二月十七日のヒトラーの発言、一九二六年に『わが闘争　下巻』の第十三章の別刷りとして公刊した『南ティロール問題とドイツの同盟問題（Die Sudtiroler Frage und das deutsche Bundnisproblem, München.）』、一九二七年出版の『わが闘争　下巻』等で外交問題を論じている点をとりあげ、特に一九三三年にヒトラーのもとで働き始めたアルベルト・ツォラー（Albert Zoller）の『私生活でのヒトラー（Hitler privat, Erlebnisbericht seiner Geheimsekretarin, Düsseldorf 1949）』という書の問題点を指摘しながらも、「一九二五年に口述した『わが闘争』下巻に関連した未刊原稿については」喋っていた、という結論を出している。

3　ヒトラーの草稿口述の時期

本稿は草稿であるので、書名も章名もなく、口述年も記されていない。しかし本稿の内容からヴァインベルクは、かなり正確に口述の時期を絞っている。まず彼は、シュトレーゼマンへの批判（第七、八章）、占領されていたライン河左岸へのコメント（第九章）、それにヤング案

［一九二九―三〇年］への言及がない点（第十二章）の三点から、まず、その時期を一九二七―二九年に絞り、さらにヒトラーが『わが闘争　下巻』での南ティロール問題に関する章の前述した公刊を一九二六年に行い、その序言でそれ以降の二年間について述べている点、また一九二八年五月上旬のブローンベルク（ビドゴシュチ）でのビスマルク塔の破壊を「ここ数か月内」の出来事としている点、一九二八年六月ミュンヘンで上演されたオペラ「ジョニーが演奏する」に何度も論及していること、一九二八年の最初の五か月間に党が受けた損害について述べていること、最後にフェルキッシャー・ベオバハター紙などのジャーナリズムの日付から、「口述の正確な時期決定が可能である」と述べ、その時期を一九二八年夏と考えている。

さらに限定した時期をヴァインベルクは、フェルキッシャー・ベオバハターの詳細な検討、特に選挙戦との関係から五月二十日の選挙終了後で、六月か七月、おそらく七月十三日の演説（後述）直前に口述が行われた、と述べている。

一九二五年から大恐慌がくる頃までナチはしばらく、党員数は徐々に増えてはいたが、雌伏期であり、ヴァインベルクによれば、『わが闘争』執筆の時期から一九三三年の権力掌握の時期までの期間における「ヒトラーの思想発展、あるいはむしろ実際上の発展の欠如」が明らかになり、従来あまり注目されていなかった一九二〇年代後半の国家社会主義の史的研究に重要な資料を与えることになる。

4　一九二八年頃の政治状況と当時のヒトラーの政治的見解

では本草稿を口述筆記した一九二八年とはどういう年であったろうか。『第二の書』のヴァインベルクの序論「三、一九二八年の状況」と同年七月十三日に演説し、十八日のフェルキッシャー・ベオバハター紙に掲載されたヒトラーの所見から、当時の特に政治状況を要約しておこう。

まずヴァインベルクは、一九三三年以前の国家社会主義ドイツ労働者党の歴史を三期に分けている。一九二三年十一月までの発足時、一九二五年から二六年にかけての党の再建時、ヤング案反対国民請願に際してのフーゲンベルク（Alfred Hugenberg クルップ社の社長を務め、一九二八年国家国民党党首としてヒトラーに協力し、ヒトラー内閣に経済相、農相として入閣する。一八六五―一九五一）と手を結んだ一九二九年夏から権力掌握までの時期がそれで、これに対し一九二七年と二八年は文献で簡単に触れるだけで、党の歴史を詳細に追跡するのは困難である。しかし南ティロール問題をめぐるイタリアとの関係は重要である。

ヒトラーは早くからイタリアとの同盟を決意し、そのために南ティロールを犠牲にせざるを得ないと考えていた。彼は『わが闘争　下』の第十三章「戦後のドイツ同盟政策」に一九二六年二月十二日に口述した序文を付けて「南ティロール問題とドイツの同盟問題」と題し、一万部別刷りを出したことは前述した。その序文で、彼は新聞がロカルノ条約（一九二五年十月十

六日スイスのロカルノで英仏独等七か国が結んだ安保条約）以外には南ティロールについてしか書いていないと嘆き、この新聞の関心はムッソリーニに喧嘩を仕掛けるための口実に過ぎないと主張し、ムッソリーニに対する名誉毀損を回復するために別刷りとして公刊すると述べている。

一九二八年五月二十日総選挙が始まり、シュトレーゼマン（Gustav Stresemann 一八七八ー一九二九年。革命後ドイツ人民党を創設し、党首となり、ドーズ案、ロカルノ条約、ヤング案の締結を推進し、ソ連との友好関係維持をはかる）がバイエルンで出馬するやヒトラーは「フランスに庇護された候補者シュトレーゼマン」というタイトルで彼を攻撃した。また社会民主党はプラカード「暴露されたアドルフ・ヒトラー」でヒトラーとエップ（Ritter von Epp 国家社会主義ドイツ労働者党最上位候補者）が南ティロールを諦めるかわりにムッソリーニから経済的支援を受けていると主張した。これに対抗してヒトラーとエップは告訴した。

ヒトラーは南ティロールを裏切ったのは国家社会主義者ではなく、ユダヤ人とマルクス主義者であり、イタリアとドイツは共同歩調をとらねばならないし、一九一四年の国境は合理性を持たないと述べている。社会民主主義者は南ティロールのドイツ人のことだけ騒ぎたてるが、エルザスやズデーテンラントのドイツ人には何の好意も持っていないと。

こうした考え方で、一九二八年七月十八日にフェルキッシャー・ベオバハター紙に掲載された同月十三日の演説の内容は、本草稿の内容を煮詰めた様相を見せている。それを要約してみよう。

ドイツは食糧基盤を欠き、したがって領土を人口数に合わせせなければならないという極めて健全な思想を忘れた結果、民族の工業化、民族同胞の世界のクーリー化を招いた。経済振興で民族を養い輸出製品で得た金で食糧と原料資源を輸入する考えは市民的思考の典型である。それで戦争を回避しようと望むのは、怯懦な平和思想である。また国外移住は国家から最も行動力に富む人たちを奪う。民族は次第に血を失っていく。さらに産児制限は民族の最高性能を害する。

われわれには武器はない。しかし民族の力は武器にはなく、意志にある。したがって最良の武器は指導で、大衆に伝えられた精神の中にある。われわれは戦い得ない。なぜならわれわれはまずわれわれ自身と戦わなくてはならない、われわれはまずドイツ人の中の奴隷を片付けなくてはならないからだ。

「自由を獲得する。土地と領土を獲得する。これがわれわれの目標である」と言い、「われわれは国境修正を欲しない。十キロメートルか二十キロメートルでわれわれの国民の将来は改善されない。それは決して健全な外交政策の目標ではない」と主張している。さらに具体的に国名を挙げ、イギリス、フランス、ロシアとドイツの外交関係を述べ、最後に「可能な同盟対象国はイタリアである」と、イタリアとドイツの利益が交錯しないこと、ドイツとイタリアの共通利益はフランスとの敵対関係に求められ、対立を共有していることを明確に述べている。南ティロールについては、抗議の声をあげても何の役にも立たない。われわれはむしろドイツと

イタリアの間に橋をかける方を選ぶ、と南ティロール問題についての結論を提出しており、この考えは本草稿の中での論と同じである。このようにヒトラーは一九二八年当時のヨーロッパにおけるドイツの政治的立場をまとめている。

## 三　本草稿未刊の理由

本草稿が、ヴァインベルクも言うように、文面から見て秘密文書ではなく、書籍として想定されていたにもかかわらず、口述後『わが闘争』の場合のように加筆、修正が行われていない点も疑いない。草稿のまま保管されていたのである。その原因は何か。

これに対するトーランドの見解はすでに紹介した。しかし彼のような思想的解釈では未刊理由は説明不十分だと言わねばならない。これに対してもやはりヴァインベルクがかなり納得できる理由を挙げている。彼は次のような理由にまとめている。

a．エーア出版社主であったアマンが、一九二八年夏の『わが闘争』の売れ行きが第一巻出版以来最悪で、ヒトラーの新著が出ると『わが闘争』と競争になるだろう。この年は党は年次大会開催を見送らざるを得ないほど財政的に悪化していたこともあって、出版の一時的中止を忠告した。

b. 草稿完成直後のドイツの政治・経済的状況の激変によって、内容にかなりの修正を要するに至ったこと。すなわち一九二九年夏から国家社会主義ドイツ労働者党はヤング案への反対闘争を行い始めており、敵方の主要人物たるシュトレーゼマンが一九二九年十月三日に死亡し、さらにフーゲンベルクがドイツ国家国民党党首となってヒトラーと手を結び「ヤング案反対国民請願」でナチの躍進を財政的に支えた。この時点で本草稿に見られる市民的政治家への意見が妥当性を欠くに至った。

私は本書の未刊理由をその内容から見て特に前記 b の説、つまりヒトラーが国家的市民的政治家に対し強い批判を行っていることと、「ヤング案反対国民請願」でドイツ国家国民党党首フーゲンベルクと手を結んでナチに財政的支援を得たこととの間の問題点から、市民的政治家批判を書き改める必要性を強く自認していたことともに、シュトレーゼマンの死による本書の内容の変更が、総選挙を始めとするヒトラーの政治的活動によって、草稿を修正するに足る余暇を見出すだけの余裕がなかったから、と見ている。

四　本草稿の特徴

この草稿には『わが闘争』で述べられている事柄以上のセンセーショナルな見解は含まれて

いない。これはこの草稿が『わが闘争』の続編であることの証左でもある。しかし『わが闘争』より粗野な、激しい言葉が使用されている。これは出版するための手入れがなされていない証拠であろう。だがそのことには内容的に若干の資料的価値がある。それは第一に『わが闘争』で述べられていることがより率直に叙述されているため、ヒトラーの政治的見解がはるかに明確に分かるとともに、彼の思想の特殊性がはっきりと分かることである。『わが闘争』の下巻、特にその後半で述べられている外交政策がここではより強く表現されている。その中の主なものを二、三挙げておこう。

第一は『わが闘争』の中でのアメリカ合衆国との関係である。ドイツと合衆国との関係だけでなく、イギリスとアメリカとの関係、特に経済問題をめぐっての両国の対立を明確に述べている点とユダヤ人問題がより詳細に述べられている点である。

第二は、一般の市民的・国民的政治家の国境を第一次世界大戦以前の状態に戻すための列強諸国との柔軟な交渉、とりわけヴェルサイユ条約の更改という卑小な外交目標を嘲笑するだけに留まらず、ドイツの過剰人口をロシアでの領土獲得によって解消する方針の展開を明確に述べている点である。この点ではドイツの市民的政治家の独露同盟という政治的幻想を非難し、ロシアがボルシェヴィズム化したことによる独露同盟の非実現性を幸運だと述べている。ドイツの唯一の進路は東方での「生存圏」の獲得だと主張している。

こうしたヒトラーの思想をロートフェルスは「狂信的なまでに強固な新ダーウィニズム」だと主張しているが、ヒトラーのその後の「現実の政治」とこの草稿の中の「対外政策」の関係をおおまかに見ると、両者の間のあまりにも大きな一致が感じられよう。通常、政治家が実現を予想している自己の政策に関しては、かなり幅のある逆の政策を公表することを考えるとき、(戦争を含めて)ヒトラーがその後に実行した政治をこの草稿で正直に述べたことは、彼が言うように、政敵の説得のためでなく支持者の啓蒙のためであったとしても、国家社会主義政権成立後のドイツの対外政策の解釈についてヨーロッパ諸国を大いに迷わせたことであろう。要はヒトラーは自己の経歴についてはかなりの粉飾を行ったが、将来政策に関してはむしろ予言を正しく実行したと言うべきであろう。再度述べれば、ヒトラーはイギリス、イタリアと組んでフランスを閉じ込め、西方の安全を確保したうえで、ロシアを攻撃することを考えていたのである。北方の海をイギリスにまかせるため海軍力を充実することなくイギリスのご機嫌をとり、南ティロールをイタリアに委ね、地中海でのイタリア海軍力の充実を考えてイタリアとの同盟をはかっていた。もっとも彼の構想はイギリスの動向に関しては当たらなかったが。

一般によく知られているアウシュヴィッツでのあのユダヤ人殺害、ヒトラーの残酷な性格があちらこちらで述べられている。そうした事件との関連で、彼の性格の残忍さが人間関係とりわけ女性

関係にもあてはまると一般には考えられているようである。しかし女性関係についていえば異母妹フラウ・ラバウルの娘、つまり姪ゲリとの近親相姦、エヴァ・ブラウンとの恋愛・結婚についてで語れるのみで、他の女性との関係はほとんどないと考えられる。ゲーリングが非常に派手な女性関係を持ち、明らかにしたのとはまったく正反対である。ゲーリング以上に派手な女性関係をつくり得る立場にあったヒトラーが、なぜそうしなかったのかということについては、彼の病気警戒説と、女性関係を持つことによる非難からくる政治的評価の低下警戒説が語られているが、片岡啓治（元独協大教授）は彼の著書『天下をとる技術――新ヒトラー物語』（てらこや出版、一九八三年）でヒトラーを「古風な禁欲主義者」「騎士的女性観の所有者」と記しており（同書二百三―二百八頁）、また加瀬俊一（元外交官）は『独裁者の金髪戦線』（『現代のエスプリ』一〇九号、一九七六年、百四十三頁）で彼を「稀に見るロマンティスト」だと指摘している。

こうしたヒトラーの性格分析は、おそらく当たっているだろう。ロマンティシストであったがゆえに、派手な女性関係を持たなかったし、第一次世界大戦後わずか十年で軍備の充実を説き、バルト海沿岸中心ではあったがウラル山脈以西の占領とそのドイツ化という夢を現実化し得ると考え、この草稿を口述したのであろう。

彼がチャーチルのような「真にリアリスティックな政治家」であったならば、実現可能性が

極度に少ないヨーロッパ・ロシアの占領というような妄想に近い対外政策は、決して述べなかったし、行わなかったであろう。『わが闘争』、『続・わが闘争』その他ヒトラー自身の発言と、彼の性格との詳細な関連の分析が望まれる。

かねてから私は『わが闘争』での各国に対するヒトラーの外交政策の論旨と本書のそれとを比較検討して、正確なヒトラー像を描きたいと考えていたが、多忙な雑用とこの草稿のマイクロフィルム版の入手難のため、作業が進まなかった。今回、旧友栗山次郎氏の協力・援助を期待し得ることが分かり、私自身も定年で時間的余裕ができたので、翻訳作業をすすめることにした。栗山氏は正確に作業を行って下さった。

本書を角川版『わが闘争　上下』と合わせ読み、より正確なヒトラー像、彼の思想の明確な理解を得、ネオ・ファシズムの問題点の把握を望むものである。

二〇〇四年七月

平野一郎

# 続・わが闘争
## 生存圏と領土問題

アドルフ・ヒトラー
平野一郎＝訳

角川文庫 13433

平成十六年七月二十五日　初版発行

発行者――田口惠司
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　編集（〇三）三二三八―八五五五
　　　営業（〇三）三二三八―八五二一
〒一〇二―八一七七
振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八
印刷所――旭印刷　製本所――コオトブックライン
装幀者――杉浦康平



ヒ 3-3　ISBN4-04-322403-6　C0131

# 角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

アドルフ・ヒトラー

# わが闘争

（上）Ｉ民族主義的世界観
（下）II国家社会主義運動

平野一郎／将積茂　訳

独裁者ヒトラーの出現を許した、混迷の政治風土と酷似した現代。ヒトラーが本書で語る、その恐るべき政治哲学、魔術に近い巧妙な人心掌握術は、政治の虚構を見抜く有力な手掛りとして、多くの示唆を放っている。戦争という言葉が、これほど身近に迫りつつも、リアルな実体をもって迫ってこない日本においては批判的必読の書である。

# 角川文庫海外作品

## 笑う警官

P M・シューヴァル
・ヴァールー
高見浩＝訳

バスの中には軽機関銃で射殺された八人の死体が……。アメリカ推理作家クラブ最優秀長編賞を受けた、謎解きの魅力に溢れる傑作。

## 消えた消防車

P M・シューヴァル
・ヴァールー
高見浩＝訳

ベックの僚友ラーソンの眼前で監視中のアパートが爆発炎上。なぜ消防車は現れなかったのか。やがて浮かび上がる戦慄すべき陰謀。

## ロゼアンナ

P M・シューヴァル
・ヴァールー
高見浩＝訳

運河に全裸死体が……。ストックホルムを舞台に描かれる警察小説の金字塔〝マルティン・ベック〟シリーズの記念すべき第一作。

## 蒸発した男

P M・シューヴァル
・ヴァールー
高見浩＝訳

取材でハンガリーを訪れたルポ・ライターが消息を絶った。真相を探るため単身ブタペストへ飛んだベックを尾行者が待っていた。

## サボイ・ホテルの殺人

P M・シューヴァル
・ヴァールー
高見浩＝訳

スウェーデン南端の町のホテルで晩餐中の大物財界人が狙撃された。犯人を追うベックの前に立ち現れるこの大資本家の冷酷な面貌。

## 唾棄すべき男

P M・シューヴァル
・ヴァールー
高見浩＝訳

凄惨な殺人現場。ベックの前に横たわる死体はニーマン主任警部だった。敏腕警察官で鳴る男の知られざる一面に解決の鍵が……。

## 密室

P M・シューヴァル
・ヴァールー
高見浩＝訳

銃創も癒え十五か月ぶりに登庁したベックが受け持った孤独な老人の変死事件……。真の悪とは何か。痛烈な問いかけに満ちた一作。

# 角川文庫海外作品

**警官殺し**
M・シューヴァル　P・ヴァールー
高見浩＝訳
出張捜査でベックとコルベリの前に容疑者として現れたのはかつて逮捕した男だった。アイロニーとシリーズ独自の興趣に溢れる。

**テロリスト**
M・シューヴァル　P・ヴァールー
高見浩＝訳
タカ派米国上院議員の来訪に際してベックは特別警護班の責任者に任命された。十年にわたる警察大河小説の掉尾を飾る白熱の巨編。

**ダーク・ブルー**
この空に君を想う
ズディニェク・スヴィエラーク
山田清機＝編訳
第二次世界大戦を象徴するバトル・オブ・ブリテンを戦った無名のチェコ人パイロット達がいた。過酷な状況下での人間の愛と勇気を描く感動の記録。

**スロウ・ハンド**
ミシェル・スラング＝編
中谷ハルナ＝訳
優しい恋人に愛撫されるように、愛しく、ゆっくりと、女たちの心を溶かしてゆく――。8人の女性が描く、女性のためのポルノグラフィー。

**気象予報士**(上)(下)
スティーヴ・セイヤー
浅羽莢子＝訳
異常気象の日に発生する連続殺人。犯行は天候の変化を知るものの仕業か？　スティーブン・キング絶賛の異色サイコ・サスペンス。

**ジョイ・ラック・クラブ**
エィミ・タン
小沢瑞穂＝訳
中国からアメリカに移住した四人の女性の希いと悲劇を描く、永遠の母娘の絆の物語。処女作にして感動の作品と絶賛された米文学の収穫。

**カシミールから来た暗殺者**
ヴィクラム・A・チャンドラ
伏見威蕃＝訳
訓練された暗殺者が、大統領暗殺の刺客として放たれた！　宗教と政治と戦争の嵐に巻き込まれる男たちの姿を描いた、出色の諜報小説。

# 角川文庫海外作品

**リベラ・メ**
ヒョン・チョンヨル
ヨ・ジナ＝脚本
小林弘利＝編訳
火を知り尽くした知能犯が仕掛ける罠、連続都市火災。死に場所を求めるように火災に突入する消防士。極限状態の中で男たちの最後の闘いが始まる。

**スパイダーマン**
ピーター・デイヴィッド＝著
デビッド・コープ＝脚本
S・リー＆S・ディッコ＝原案
富永和子＝訳
ピーター青年は、遺伝子操作された蜘蛛に嚙まれスパイダーマンとしての能力を獲得する。彼は殺人鬼グリーン・ゴブリンとの対決を決意する。

**彼が彼女になったわけ**
デイヴィッド・トーマス
法村里絵＝訳
二十五歳の平凡な男が患者取り違えで性転換手術をされた！　次々降りかかる事件を乗り越え、彼はプライドと愛を取り戻すことができるのか？

**ポネット**
ジャック・ドワイヨン
青林霞
寺尾次郎＝編訳
天国のママにもう一度会いたい――交通事故で母を失った四歳の少女ポネット。その無垢な魂が起こす奇跡とは？　静謐な思索に満ちた珠玉の物語。

**殺人症候群**
リチャード・ニーリィ
中村能三・森慎一＝訳
凄まじいまでの女性への憎悪が、内気なランバートと自信家のチャールズを結びつけた。そしてNYに〃死刑執行人〃が登場した――。

**心ひき裂かれて**
リチャード・ニーリィ
佐和誠＝訳
妻がレイプされた。夫は警察の捜査に協力するが、一方でかつての恋人との間に知られてはならない秘密をつくろうとしていた――。

**燃える天使**
ジェイムズ・リー・バーク
鈴木恵＝訳
刑事ロビショーは、一匹狼の犯罪者ソニーから謎の手帳を託される。マフィアに雇われた男たちがつきまとい始めたのはその直後のことだった――。

# 角川文庫海外作品

ふりだしに戻る(上)(下)
ジャック・フィニイ
福島正実＝訳
サイモンは、九十年前に投函された青い手紙に秘められた謎を解くために過去に旅立つ。奇才の幻のファンタジー・ロマン。

ジャッカルの日
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
ジャッカル――プロの暗殺屋であること以外、本名も年齢も不明。標的はドゴール大統領。計画実行日〝ジャッカルの日〟は刻々と迫る！

オデッサ・ファイル
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
オデッサ――元ナチス隊員の救済を目的とする秘密地下組織――の存在を知った一記者がこの悪魔の組織に単身挑む！ 戦慄の追跡行。

戦争の犬たち(上)(下)
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
プラチナ採掘権独占を企む企業が新興国ザンガロの独裁大統領を廃すべく、五人の「戦争のプロ」を送り込む！ 外人部隊を描く、雄渾の巨編。

シェパード
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
事故は北海上空、高度一万フィートで発生！ すべての計器が止まったその時、霧の中から一機の古いモスキートが！ 傑作中編集。

悪魔の選択(上)(下)
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
ソ連の凶作情報を得た西側は、食料輸出の見返りに軍縮を迫ろうとした。が、KGB議長暗殺を機に、世界は一大危機に突入した！

帝王
F・フォーサイス
篠原慎＝訳
冒険、復讐、コンゲーム……。短編の名手としても定評のある著者が男の世界を描き切った、魅力の傑作集。表題作ほか七編収録。

アドルフ・ヒトラー
Adolf Hitler（1889-1945）

オーストリアに生まれる。1914年第一次世界大戦に従軍、復員後にドイツ労働者党に入党。国家社会主義ドイツ労働者党（ナチ党）に改名し、1921年に党首となる。1933年に首相となり第三帝国を建設。1934年以来大統領を兼ね総統と称した。独裁的権力を握り、侵略政策を進めた結果、第二次世界大戦を引き起こす。1945年愛人エヴァ・ブラウンと結婚後、総統官邸地下壕にて共に自殺した。

平野一郎／ひらの いちろう

1929年1月生まれ。旧制東京文理科大学（現筑波大学）教育学科卒業。愛知教育大学教授、名古屋外国語大学教授をへて、現在愛知教育大学・名古屋外国語大学名誉教授。訳書にヒトラー『わが闘争』（角川文庫）、著書に『中世末期ドイツ大学成立史研究』（名古屋外国語大学）など。

カバー　泉文社

ISBN4-04-322403-6

C0131 ¥667E

定価：本体667円（税別）

一九五一年頃からその存在が噂されていたヒトラーの秘密文書。アメリカ合衆国の国立公文書館から発見された口述タイプ原稿には『わが闘争』に続くヒトラーの特殊な思想が生々しく綴られていた。激しく粗野な言葉で語られた、その外交政策から垣間見られる狂信性や残虐性は、いまだ戦争の絶えない現代の闇を照射し、ネオ・ファシズムの問題をあぶりだす。今こそ読まれるべき衝撃の書。